IS　インフィニットストラトス　現をいくもの

U→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニットストラトス　現をいくもの

【Ｎコード】
Ｎ９９９７Ｔ

【作者名】
Ｕ↓

【あらすじ】
普通の少年がいくつもの偶然からＩＳを起動させ、それがきっかけで狂い出す人生。
翻弄され、人との関わりを拒み、人生に諦めていた少年が、ある少女の一言がきっかけで再び人に関わることを考え、そして新たな道に向かって歩いていく物語

転機（前書き）

ＩＳのある世界でどこにでもいる学生にある人生の転機がおとずれ、
その転機から理想と現実の差を知り、大人の汚さ、暗さに失望し、
他者とのかかわりを求めなくなった少年が、人とのふれあいでもう
一度人とかかわっていく物語

本作品が初執筆作品につき誤字脱字他もろもろたくさん出てくると
思いますが生暖かい目で読んでもらえたら幸いです。

タイトルは適当ですので内容とあってなくても無視してください。
それではよろしくお願いします

転機

人生は残酷である

多くの人は自分が主人公ではなく、他人が主人公の世界を彩る小さなピースでしかない。

だが人生において分岐点は突然やってくる。
それが小さな分岐ではさほど変わらないだろう。
今日の朝たべたのは、パン?ご飯?そんなことで行き着き先に大差はない。

しかし、そんな些細な分岐点でも複数重なれば?その中の一つが大きなものだったら?
行き着く先は変わるかもしれない。
だが、その分岐が変わる音は世界の誰も聞くことができない。

『カチャ・・・・』

分岐点を迎えた先がいい方向に向かうのか悪い方向に向かうのかなんて、誰にもわかりはしない。
ましてや、選ぶことなどできないのだから・・・

～ある学校の社会見学～

今俺たちはバスに揺られてある場所に向かっている。
その場所は日本で数少ないＩＳの開発企業、旭日重工である。
毎年さまざまな武装兵器を世に進出させ、世界でもなかなかのＩＳ

開発企業だろう、とのこと。
なんでも進路を選ぶ一つにでもなればと駄目元で申請したら通ったらしい。
そんなところによく社会見学の許可が下りたものだと思ったが、貴重な体験には違いないだろう。
女子たちにとっては・・・
この世界は現在男尊女卑の世界とさよならして、今は女尊男卑な世界と仲良くやっているそうだ。
俺たちの子供のころに変わったルールに大人たちはなかなか適応し切れてないが、まだ頭でなく腹で物事を考えていたころの俺たちにそれほど抵抗はなくすんなり受け入れられた。
女子たちの横柄な態度に腹もたてば、うんざりすることもある。
だがそれが通る世界なのだから仕方がないのだろう。
せめてもう少しましにならないかとは思うがな。
自分の世界に入っていると目的地に着いたようだ。

「はーい、到着です。
各班、整列と点呼をしてくださいよー」

駐車場に整列させられ点呼、女子たちはすでに軽く浮かれているようだが、男子にしたらこれほどつまらなくなるであろう一日の始まりだ。
テンションはすでに地面すれすれだ。

「今日は各クラス男女に分かれてこちら旭日重工さんで社会見学をさせていただきます。皆さん失礼のないようにしてくださいね。」

「「「はーい」」」

聞こえてくる返事は女子だけだろう。

男子はもう帰らせてくれといった感じだ。
そこから俺たちはロビーに入り、各クラスごとに見学をすることに。
広く吹き抜けのロビーが大企業という感じがしていた。どうやらそれぞれに案内係がつくそうだ。
こんなことのために一日をつぶされるとは、社会人は大変だ。
これも給料のうちだからと納得してやっているのだろう。
と、また自分の世界に入っていると二人の男性が俺たちの前にやってきた。

『カッチ・・・』

「どうも、はじめまして。
今日一日あなたたちの案内係をさせていただきます、景山と申します。
あちらは藤原。
どうかよろしくお願いしますね。
今日はみなさんにわが社のことをいろいろ知っていただいて、ぜひ大人になったらうちの会社で働いてもらいたいものです。」

笑顔でそう言って自己紹介をした景山という人は細身で仕事ができそうな男の人、藤原という人は少し太った気の弱そうな男の人。
男子は藤原って人だろうな。
あの藤原って人に女子の相手は無理そうだ。
それにしても、あの景山って人無意識だとしてもなかなかイラッとさせてくれるぜ。
世界規模の会社にそう簡単に就職できたら世の中に就職氷河期なん

てものは生まれなかっただろう。
そんなことを考えていると移動が始まり、施設を見て回るようだ。
さぁ腹をくくれ。これからが退屈な一日のスタートだ。

・・・参った。
もう勘弁してくれ。
帰らせてください。
見学が始まり二時間、俺たちは男女とも参っていた。
旭日重工の設立から企業理念、経営方針など、新入社員に聞かせるであろう内容を聞かされ１３、１４歳の子供の頭は放熱状態だ。
それを察してか、藤原さんが、

「景山部長、そろそろ・・・」

「ん？・・・あぁもうこんな時間かね。
ではここからは男女に分かれてもらいましょうか。
女性は私についてきてください。
実際のＩＳに触れていただきましょう。
動かすことはできないでしょうが、起動ならできると思いますから。
男性の方々は藤原についていってください。
わが社が開発した武装を紹介させますので。ではいきましょうか。」

そういうと女子たちは景山と一緒に別室に向かった。

「で、では男子の皆さんは、私についてきてください。」

藤原さんの案内で俺たちも別室に向かう。
男子だけでも４、５０人はいる。
それだけの人が容易に入る部屋があることが驚きだ。

「あぁ～、やっと開放されたぜ。
俺もう帰って部活したいんだけど。」

そう言って話しかけてきたのは佐々原宗平。
あだ名はササヤンだ。
明るくて、親しみやすく、男子の中心だ。
少女漫画なら、主人公に好きになってもらっていてもおかしくないやつだろう。

「俺も帰りたいぞ。
もううんざりだ。」

「これから武装見せられるんだろ？
っんな物見ても何もすることないじゃんか。
何しろってのよ？」

「そんなの決まってるだろ。
俺たち男はこういうものを作って女の人に尽くしてます、っていうのを教えるためだよ。
そしてこう言われるんだ。
『男なんてＩＳ動かせないんだからせいぜい武器や機体でも作ってなさいな。
いいものができたら使ってあげてもよっくってよ。
おわかり？
わかったらさっつさと馬車馬のように働きなさい。』
とな。」

「なんだよそれ、よっくってよって、どこの国のお嬢だよ。」

「まったくだ。
髪型は絶対縦ロールで手にはモコモコのうちわ持ってんだろうな。」

やっと談笑ができた。
こんなことを女子の前で言えばそれだけで問題になり保護者呼び出しの説教だろう。
だからこういう女子のいないところでしかできない会話が有一の息抜きになるのだ。

「ここに入ってくださーい。」

藤原さんの案内で通された部屋で俺たちを待っていたのは武器の数々。
それもＩＳサイズならそのインパクトも大きく、中学生の俺たちの心を捕らえた。

「やっべ、超カッコいいんですけどこれ。やばいって。」

「何これ、こんなん振り回せるの？ありえなくないか？」

興奮する男子たちを見て安心したのか一息入れる藤原さん。
それからしばらく俺たちは武器を見ていたが、ある男子が思った。
こんなでかい武器がある。
それを扱えるのは女だけ。
俺たちはそれを扱えないが見ることさえもできないのか？と。

「ねぇー、藤原さーん。」

「ん?何でしょう?トイレですか?」

「いや違うんですよー。
ほら、やっぱこんなん見せられたら、本物が見たいじゃないですかー。」

「?

本物?銃や剣のですか?
それは危ないですから・・・」

と言葉を続けようとした次の瞬間藤原さんの耳には頭に想像していなかった単語が入ってきた。

「ア、イ、エ、ス、ＩＳですよ、藤原さーんいいでしょー。
見せてくださいよー。」

「あ、それいいじゃん。
俺も見てー。」

「俺も、俺も。」

一人の発言がきっかけでテンションの上がった男子たち。
さすがに動揺して藤原さんの言葉の高さももおかしくなる。

「あ、アイえスだって?チョ、チョット、それはデきなイよ。そんナことデキルわｋ・・・」

「いいじゃないですかー。
俺たちは動かせないんだから危なくないでしょ?それに今日一日でだいぶストレス溜まったんだしチョット位、サービスしてくれても

いいんじゃないっすか？」

「い、いや。
さすがにそれは・・・」

藤原さんの意見が消極的だと判断すると、藤原さんを攻め始める。

「おい、ちょっと、やめろって。」

ササヤンの声もこのテンション、この数の男子相手だと効果がない。

『カッチン・・・』

「わ、わかったよ。
わかったから。もう、やめてくれ。」

「やった。さすが藤原さん。
話がわかる。」

それまで藤原さんを攻めていたのが嘘の様に今度は藤原さんを持ち上げる。
手のひらを返すってのはこう言うときに言うのだろう。

今ここの男子は９：１で区別される。
９はテンションの上がり空も飛びそうな男子たち。
１は彼らに比べればまだテンションの低い男子たちだ。

俺やササヤンも1の側に分類される。
そこにササヤンが声を漏らす。

「あぁ～ぁ。俺知らねーぞ。」

「どうした?確かにやりすぎだとは思うけど、ＩＳ見れるってのは
儲けもんじゃないか?
まぁ動かせないからでかい鉄屑だけどよ。ｊ

「鉄屑って・・・まぁ今はよくてもその後がな・・・。」

「その後?」

「もうこの後の展開が読めたからな。
あんなんが素直に見て終わるわけがないだろ?
時間が押して、ばれるに決まってる。
そんで説教くらって、女子たちからは冷たい目で見られるんだぜ。
今から抜けれねぇーかな・・・」

「・・・そのイメージが鮮明に想像できるな・・・
でも興味はあるだろ?」

「そりゃ、まぁな。パワードスーツってもロボット・・・だからな。」

そう男なら子供のころに一度はあこがれるロボット。
それがたとえ自分たちには動かせなくても見ることができるというだけで、テンションは上がるに決まっている。
俺たちも軽く舞い上がっている。

俺たちは調整中だという機体の格納庫に案内された。
ここにくるまでにいろんな人に見られているから説教は確定だろうな。
そんなことを思っていると格納庫の扉が開く。
そこには武器とは比べ物にならない存在感を放つ機体があった。
それを目にしてしまった男子たちはもう止まらない。

一斉に機体に駆け寄り、機体に触るもの。
よじ登るもの。
記念撮影をするもの・・・
それぞれが思い思いにその機体の存在を感じた。

「すげぇな。」

「あぁ」

俺たちもどちらがどうというわけではない。
ただその存在に圧倒された。
これはでかい鉄屑じゃない。
超スゴイ鉄屑だ。

しばらく眺めていたが、藤原さんの様子が徐々におかしくなる。
いや、ここに来るまでのことを思えばおかしくなるのも当然なのだが、そのレベルが明らかに変わった。

「さぁ、もういいだろ。
これ以上はもうさすがに・・・」

時間が来たようだ。
名残惜しいが仕方ないだろう。

俺たちは格納庫を出ようとしたがどうやらササヤンの言うとおりになりそうだ。

「まぁーだ、大丈夫だって。」

「そうだって。
あ、次俺も写真撮って。」

どうやらあいつらには危機感はないらしい。

「もう限界なんだよ。
ここに来るまでにもたくさんの人に見られてる。
僕も君たちもただじゃすまいんだぞ！！！」

ＩＳは各国に割り振られ、その国が所有していることになっている。
つまりこのＩＳも国が所有しているもので、あいつらはそれによじ登っているようだ。
・・・大問題だ。

「おいやばいって。
さっさと戻るぞ。
センコーや女子に文句言われたくないだろ。」

ササヤンの一言は的確にあいつらの心を掴んだ。
国となるとスケールがでかく想像しにくいが、教師や女子は想像しやすい身近な脅威だ。
その言葉にほとんどの男子がＩＳから離れていく。
そう、ほとんどが・・・

『カチャカチャ・・・』

パシャ
まだ機体から離れない馬鹿もいるようだ。
のんきに撮影している。

「おい、やばいって言われたろ。
さっさと戻るぞ。」

ササヤンの言葉に耳を貸さないグループのリーダー風の男が動く。

「まだ大丈夫だって。
こんなのもうないんだからよ。
楽しまねぇーと損だろうが。」

「大丈夫じゃないから、こうして藤原さんが言ってんだろうが。
馬鹿やってんじゃねぇーよ。
お前らのせいで全員が説教伸びたらどうすんだよ、馬鹿」

ササヤンもイライラしてきたのか言葉が鋭くなる。
言葉は悪くても正論を言われ、悪いことをしているという自覚のある奴の行動は限られてくる。

『カチン・・・』

「っせーな。
何しっきってんだよ！！！」

逆ギレだ。
ササヤンが殴られた瞬間、俺も飛び出してそいつに殴りかかる。
そこからはもうただの乱闘騒ぎ。
おそらく藤原さんはこの世の終わりのような顔をしていたに違いない。
乱闘開始から5分とかからないうちに旭日重工の職員や教師たちによってその場は納められることになる。
その後はもちろん予想道理、説教のお時間だ。
特に乱闘をしていた俺たちは特別な説教を食らうことになり、きれいに整列させられ、熱血教師の特別授業中だ。
「まったく、何をしてるんだお前たちは・・・そもそも～～～」

暑苦しくて聞いてられない。
帰ってからにしてほしい。
そんなことを考えていたら横目にあるものが見えてしまった。

『カキン・・・』

それは景山さんに怒られる藤原さんの姿。
額からはものすごい汗を出し、目には涙、鼻からは鼻水と、置かれている状況を察するには十分な容姿になっていた。

その姿に目を奪われているとあることを忘れていたようだ。

『ガキッ・・・』

「こらっ！！！
話を聞いてるのか！！！」

しまった。説教の真っ最中だった。
忘れていた俺が悪かったと諦めていると、

「何だその目は、それが人の話を効く態度か！！！」

教師に弾き飛ばされ尻餅をつく。

「さっさと立て。
お前はこいつらとは別でさらに話し合う必要があるな。」

もう勘弁してくれ。
何だこの扱い。
その目はって、元々こういう目つきなんだよ。
もうどうでもいいから早く帰らせてくれ。
不満しか頭に浮かばないがそれでも立ち上がるために何気なくとなりの塊に手を伸ばす・・・そう、超スゴイ鉄屑に。

『ガッチャン！！！！』
このとき確実に、分岐点は切り替わった

ピッ、ッピィピピピ！！！

何だ人の機嫌が悪いときに携帯なんか触りやがって。
保護者に電話か？
上等だよ！
何でも来いよ！！
イライラが最高潮だった俺には非常に不愉快な音だ。
そいつを見たら殴りかかってしまいそうなほどに。
だが誰も携帯を触ってはいない。
それどころか格納庫にいた全員が黙り一点を見つめている。
俺の方をそれもお化けでも見るような信じられないといった表情で。
なんだ、失礼な奴らだな確かに顔は殴られて腫れてるだろうが、そんなに驚くようなことでもないだろうに。
立ち上がってよくみると全員が俺の方を見ているが、見ているがそれは俺ではない。
俺のとなりのスゴイ鉄屑だ。
・・・ちょっとまて。

何かの間違いだ。

ありえない。

俺は、

女じゃないのだから・・・

その瞬間、俺は世界を彩る小さなピースの一つから、世界を変えうる大きな要因の一つへと大躍進を遂げる。

ただの男子生徒Ａから、世界で始めて、ＩＳを動かした男≪吉田春≫へと

転機（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
更新は不定期だと思いますが読んでみたいと思えたらまた次回お会いしましょう

プロフィール（前書き）

いや～この子、本当に普通の少年ですので、武道をやっていたとか、何か特殊能力があるとか、そういうものに期待してこの話を読もうと思った人、そういうものは一切登場予定にございませんのであしからず。

プロフィール

吉田春
十五歳
ＩＳを動かす前までは本当にただの男子中学生。
特別何かが出来るわけでも、何かが出来ないわけでもなく、両親と兄と生活していた少年。
ＩＳを起動させたことがきっかけで、中学校の残りの一年半、すべて旭日重工の研究室で過ごすことになり、学校に行ったのは卒業式のみ。
その間周りはすべて大人に囲まれて生活することになる。
そのせいか、言動、態度が大人鑑感じがすることもある。
ある人物が身近に居たせいでその人の影響を受けたんですが、その人物についてはまた後日触れたいと思います。
一年半の間におこった、二つのことがきっかけで、じょじょに性格に変化が訪れ、ごく限られたもの意外とのかかわりを拒み始める。
そのせいで、他者の行動に興味を持てず、自分に影響がなければ周りの人間が何をしていてもそれほど気にしない。
若干、篠ノ之束に近い感じがしています。
容姿は、短めの少しクセ毛でつり目で整った顔立ちの少年
詳細な姿は、ろびこ様原作の「となりの怪物くん」を参照のこと

ＩＳについては登場の際に記載させていただきます

プロフィール（後書き）

。

異物（前書き）

二度目の更新です。
早くもお気に入りに登録してくださった方がいらっしゃって大変うれしく思います。
期待に応えられるかわかりませんが一生懸命執筆していきたいと思いますのでよろしくお願いします

異物

三つ子の魂百までという言葉がある。
小さいころの性格や性質は、年をとっても変わらないというものだ。
小さいころとはいつまでだろうか？
保育園？幼稚園？
確かに小さい。
だが、人間の性格を形作るには幼すぎないだろうか？
自分という存在をしっかり認識した上で周りの人間に触れる。
これがしっかりできるようになるのは、小学校、中学校ぐらいではないだろうか？
そしてその間に学び、様々な事を吸収して、初めてその人物の根底となるものができるのではないだろうか
その時期に受ける影響とは、いいこともあれば悪いこともある。
だが、そのどちらの影響を受けるか、それもまた選ぶことは出来ない。
そしてそれはどのように影響するにしても、どんな出来事も確実にその人物の中に蓄積されるのだから。

～春～

俺が始めてＩＳを動かしてから一年半が過ぎ、俺はＩＳ学園に入学することになった。
この間に、世界に俺以外にもＩＳ操縦者が誕生していた。
イレギュラーは一つではないということらしい。
俺にとってはどうでもいいことだ。
入学式も終わり、今は教室で待機の状態だが、クラスはざわついて

いた。
原因は簡単だ。
一人は世界で初のＩＳ操縦者として発表された織斑一夏。
そして、何故かもう一人男が居るのだから。
つまり、女子高になぜか男子が居る。
それも二人。
一人は世界に発表された少年。
では俺という存在はなぜ知られていないのか？

あの後俺は旭日重工によってＩＳを動かしたということを隠蔽され、秘密裏にそのまま旭日重工に籍を置くこととなった。
一流企業だけあって給料は十分もらっている。
俺が今旭日重工に従っているのはそれだけが理由だろう・・・

本当ならば俺のＩＳ操縦技術が十分だと判断された段階で、世界に発表し、男が起動させることのできたＩＳを生産した企業という看板をかかげ、自社をさらに大きくしていくつもりだったそうだ。
だが、俺の適性が低く、操縦技術の向上がなかなかみられなかった為そこまでこぎつけることが出来ず、なかなか発表にいたることが出来なかった。

そんな時、俺以外のイレギュラーが発生し、そのプランがだめになったために、急遽ＩＳ学園に入学。
同じ男の操縦者のデータの記録。
さらに第三世代ＩＳのデータの記録。
そのデータ量に応じて給料を上乗せするからスパイしろ。
ということらしい。

俺の存在は大人にとってはただの広告塔でしかない。
《吉田　春》という存在が必要ではなく、

男でＩＳを起動させた。
そこだけが、旭日重工には必要だったそうだ。
つくづく嫌になる。

もう一人ＩＳを動かすことの出来る男が居た。
と発表はするのは今日の正午。
つまり、この段階で、俺がここに居ることは異常な光景でしかないのだ。
そんなこと知るはずもない学生からしたら、居るはずのない人物が居るんだ、ざわつくのも当然だろう。

「はい、全員そろってますね。
それではこれからＳＨＲをはじめます。」

ざわつきがおさまり、気がつくと教卓には女子が立っている。
めがねをかけ、私服で、さらに胸がミサイルの。
どうやらこの学校は私服でもいいらしい。
よく見ると基本は同じものなのだろうが、制服も人によって形が異なっている。
明日からはジャージで登校しよう。

「私はあなたたちを担当することになる山田真耶と言います。
これから一年、よろしくおねがいしますね。」

・・・担当？
担任ということだろうか？
教師にはとても見えないんだが。

「じゃあ自己紹介からはじめましょうか。
え～、出席番号順で行きましょう。

ではア行の人から・・・」

そういうとクラスでは自己紹介が始まる。
だが空気は緊張しているようだ。

「織斑くん?織斑一夏くん?」

どうやら俺と同じくこの世界にとっての異物の順番になったようだ。

〜一夏〜
どうしろって言うんだよ。
何を話せばいいんだよ。
ほうき〜、と幼馴染に視線を向けても目線は合わせてもらえない。
もう一人男も居るが、初対面の奴に何を期待していいのかわからない。
ここは一人で乗り切るしかない。

「お、織斑一夏です。
よろしくお願いします。」

よし、終わりだ。
もう座ろう・・・と思ったが、視線を感じる。
それも気のせいでは済まされないであろう量の視線を。
これ以上何をしゃべれと?
趣味?
好きな食べ物?
特技?
お見合いでもないのにどうすればいいんだ?
と沈黙が続いていたこの現状を破る音が響く。

バァーン

～春～

「自己紹介がすんだならとっとと座れ。
時間の無駄だ。」

そこに立っていたのは黒のスーツの長髪の女性。
その外見は綺麗や美しいといった言葉で表現するのが正しいであろう美女がそこに居た。

「あっ、織斑先生。もう・・・」

山田先生の言葉を途中でさえぎり話し出す。

「私が君たちの担任の織斑千冬だ。
私の言葉をよく聴き、よく理解しろ。
わからなければ何度でも説明してやる。
私の仕事は君たちを一年で使い物になるようにすること。
逆らってもいいが、私の言うことは聞け。
以上だ。いいな。」

・・・雲の高みから意見を発しているような高圧的な態度。
理不尽が服を着て歩いているかのような存在だ・・・目をつけられるようなことは無いようにしよう。
そうすればかかわらなくてすむ。

「「「キャーーーーーーー!!!」」」

騒音が教室を支配する。
どうやら女子はあの暴君のファンらしい。

歓声が飛び交っている。
正直ウザイ。
もう帰っていいか？

「うるさいぞ馬鹿どもが、さっさとしずかにしろ！」

その一言で教室に静寂がうまれる。
調教された動物たちも、こんな感じだろうな。

「自己紹介の続きだったな。そこの馬鹿はもういい。次のもの、自己紹介をしろ。」

「ば、馬鹿って、ちょっと千冬ねぇ・・・」

バァーン！！！

「織斑先生だ。馬鹿者。」

何だ？
このどつき漫才。
俺はこんなものを見にここに来たわけじゃないぞ。
この二人が場を乱してるんじゃないのか？
そんなことを考えていると次の生徒が自己紹介を始める・・・

「次は・・・お前だな。自己紹介を。」

暴君に指され俺は席を立つ。

「吉田春です。
俺がこのクラスに望むことはひとつだけです。」

その一言にクラス全員の視線が集まる。
何を言うのか?。
それを期待しているのだろう。
好奇の目でクラス中が異物を見る。
だが俺の言葉はこの教室に居る全員の頭には無い言葉だったに違いない。

「俺にかまうな。」

そう。俺はクラスで最初に口にした言葉で、クラス全てを拒絶した。

異物（後書き）

最初の三つ子の魂関係なくない？思った方申し訳ありません。主人公である　吉田春　のプロフィールを読んでいただけたらほんのちょっぴり納得してもらえるんじゃないかなーと思っています。ほんと、駄文ですいません。次も読んで貰えたらうれしいです。

衝突（前書き）

タイトルである程度予想はつくと思いますが、どうかお付き合いください。

衝突

～春～

ＳＨＲが終わり、休憩の時間だがあの一言が効いたのだろう。
誰も俺の近くにはいない。
それどころか、目を合わせることすら避けているような状態だ。
これで面倒ごとにかかわらずに済む。
そう考えていると、俺の言葉が通じなかった奴がやってきた。

「なぁ、さっきの自己紹介ってどういうことなんだ？」

織斑一夏、どうやらこいつは人の言葉を理解するという機能が欠如しているようだな。
どうでもいいが、かかわられても面倒だ。
俺にとってこいつはただの給料の足しでしかないのだから。

「言葉どおりの意味だ。
俺にかかわるな。
話しかけるなってことだ。
それはお前も同じだ。
世界で始めてＩＳを動かした男、織斑一夏。」

そういうと俺は席を立つ。
どこにいくか？
人間の生理現象を解消する場所へ。

「ちょ、ちょっと待てよ。
男が二人しかいないんだぜ？
なかよくやろうぜ。

一人でこの環境、三年間続くのはきついだろ？」

周りを大人に囲まれて過ごしてきた俺に、今更こんな状況できついも何もない。
ただ環境には慣れるしかない。
なれることができなければ自分に負担がかかり、いずれ破裂する。
ただそれだけのことだ。

「別に、俺はなんともない。
もういいか？
俺はトイレに行きたいんだが・・・」

そういうと俺は振り返らず教室を後にする。

～一夏～
何だ、あいつ。
この状況がきつくないのかよ。
何をするにも視線にさらされて、常に緊張状態でいなきゃならない三年間だぞ？
そんなの耐えられるはずがない。
いったいどういう頭してんだよ。
吉田春の言動が気に入らなかったのだろう。
面白くない、そんなことを考えていると後ろから声をかけられる。

「ちょっといいか？」

～春～
めんどくさい奴だな。
そんなことを考えながらトイレに向かう。
だが廊下を歩けば女子、女子、女子。

九割九分九厘が女で構成されたこの学園。
いやでも男子は目に付く。
それも、まだ発表されてない男子。
不審者以外の何者でもない。
・・・しまった。
トイレ、どうするんだ？
そう、女子しかいないこの学園で、トイレを使うということ。
それは女子トイレに入るということと同じ意味を持つに近い。
それでは本当にただの変質者。
急いで男子トイレを探さないと。
自然とその足は速くなった。

トイレを済ませ、教室に戻る。
当然探すのに手惑えば時間もかかる。
そうなれば短い休み時間では足りるはずもなく・・・

「ほう、初日の授業でいきなり遅刻するとは、ずいぶんな大物だな。」

右手に黒い出席簿。
それを左手に打ちつけながら俺に迫ってくる。
目をつけられるような行動は避けようと思った矢先にこれか・・・
運が無い。
いや、俺の運など、ＩＳを動かしてしまったあのときに、全て無くなったのだろう。

「すいません。ただトイレが見つかりませんでした。次からは気を

つけます。」

そう言うと、相手は驚いたような顔をして、

「そ、そうか、場所はわかっただろ？
次は気をつけるように。」

出席簿は力なく織斑千冬の腰に添えられた。
自己紹介の開口一番にあんな一言を言った者から、謝罪の言葉が出るなどと思っていなかったためだ。
こういうときは下手な言い訳はせず、正直に謝罪すること。
大人に囲まれている間に覚えた、上手く世界を廻る為の術のひとつだ。

「よし、全員そろったな。
ではこの時間でクラス代表を決めてもらう。
自薦他薦は問わない。
誰でもいいからあげてみろ。」

クラス代表・・・学級委員みたいなものか。
そんな厄介な仕事誰も自分からやりたがる奴はいない。
いるとしたら自分の働きを他者にみせつけたい奴だけだろう。
と、さらさらやる気のない俺には関係ない。
そんな中女子が手を上げる。

「はい、私は織斑君がいいと思います。」

「わたしも。」

「私も。」

どうやら、大人気のようだ。
よかったじゃないか、これですんなり終わってさっさと次の授業を・・・

「私は、吉田君が・・・いいと思います。」

「「「えっ？！」」」

クラスから驚きの声が上がる。
もちろん俺も声には出さないが十分驚いている。
どうやら俺は自分という存在の貴重さを織斑よりも下だと勝手に決め付けていたようだが、女子にしてみたら、同じ男。
どちらも貴重なのだろう。
まさかそんな意見が出るとは。

「よし、推薦されたからには候補の一人だ。
他の者はもういいか？」

織斑千冬が候補者をこれで絞ろうとする。
大人数の方が一人に当たる確立はずっと少ない。
だが、二人。
この状況では、確実に回避できるとはいえない危機的な状況。
誰か他にいないか？
俺から推薦するか？だがそんなことをして視線を集めるのはごめんだ。
それに、名前なんて覚えちゃいない。

バァン！
他のものにとっては騒音でも、俺にとっては祝福の鐘、女神の訪れ

になるかもしれない音が教室に響いた。

衝突（後書き）

いやー、話はぜんぜん進みませんが書きたいことはいっぱいです。原作どおりの絡みもちょっと減っていくことになると思います。現にまだあのお嬢様が未登場ですから・・・
パソコンで打ってますが、携帯ならどれだけ時間のかかることやら・・・
キャラが違うんじゃ?といった声、参考にさせてもらいますので今後よかったらどんどん書き込んでください。
逆に読んでて、あの描写は?という声がありましたら、申し訳ありません。これ、主人公の周りの描写しかかけないんですよね。著者に文才がないので。だから、一夏とあの人の体がぬれた状況での会話のシーンなんかもきっと登場しません。あと地の文が多いのは大変申し訳ありませんがこのままお付き合いください。
このまま春には一夏と平行線を辿らせたいと思います。
他の小説のように意気投合したりしないで、変化があるまで、彼には彼の道を行ってもらいたいと思っています。
では、また次の更新でお会いしましょう。

典型（前書き）

この時代の女性の典型というお方の登場です。
なかなか話が進みませんがゆる～くお付き合いください。

典型

音を響かせた人物に教室の視線が集まる。

「納得できませんわ。
なぜ代表候補生の私ではなく、そのような男たちがクラス代表なのですか？
そもそも、そこの男はなぜここにいるのかも説明がないままじゃないですか。
こんな男と同じ教室にいるなんて、私耐えられませんわ。
さっさと追い出してください。」

・・・どうやら女神ではないようだ。
しかし、納得できないか。
そりゃそうだろうな。
織斑はともかく、俺についての発表がない状態で、俺をクラス代表に推薦する方がどうかしている。

「うるさいぞ、やりたいなら立候補しろ。
自薦他薦は問わないと言ったはずだ。
それにその男については昼に発表があるそうだ。
それを見れば理解は出来るだろう。
納得するかはお前しだいだがな。」

織斑先生が言葉を発すると教室の空気が変わる。
さっきまでのどつき漫才をしていた人物と同じとは思えない眼光でにらみつける。

「し、仕方ありませんわね・・・

この学園にいることについては了承しましょう。
しかし、クラス代表に推薦されるのは別ですわ。
クラス代表はクラスで一番実力を持った人間がやるべきです。
そう、この私イギリス代表のセシリア・オルコットが。
こんな極東の小さな島国の敗戦国に住む有色人種という劣った種族の男達になんて任せて置けるものですか。
そもそも・・・」

まだしゃべり続けるオルコット。
なるほど、学園にいるには貴様の許可がいるのか、菓子折りでも郵送しておいてやろう。
そこに有色人種ときたか、このクラスだけでなく、世界の半数以上を敵に回す発言をするその勇気だけは大した物だろ。
それにしてもよく回る舌だ。
将来は政治家にでもなるといい。
きっと不正の言い訳には苦労しないですむだろう。
だが、場の空気を読むができていない。
そんなことを言ってしまえば奴に向けられるのは周りの敵意のみだろう。

バァーーーン!!!

そう、

「ふざけんな!!!」

こんな風に。

～一夏～

なんだ、やってくれるのか。
じゃあもうあの人でいいじゃないか。
そう思っていると彼女は次々と言葉を並べる。

「～こんな極東の小さな島国の敗戦国に住む有色人種という劣った種族～～～」

その言葉が聞こえた瞬間頭に血が上る。
何を言ってんだこいつは？
いきなり人の国を馬鹿にしやがったのか？
しかも俺だけじゃなくこの国に住む人たちまで？
こいつがこの国の何を知ってるっていうんだよ！
お前にそんな風に言われる筋合いなんかないぞ！
一気に頭に血が上り机を思い切り叩く。

バァーーーン！！！

手が痛かろうが関係ない。こいつは今俺に、この国に住む人たちに喧嘩を売ったんだ。

「ふざけんな！！！」

～春～
二人の国のプライドをかけた戦いがおこなわれているのを他人事のように外を飛ぶ鳥たちを見る。
他人のために怒りを覚えること、その行動が春には理解できない。
なぜ自分に関係の無い人のために自分の労力と時間を割けるのだろうか？
春にとっては、この国が敗戦国とさげすまれようが、有色人種と差別されようと、そんなことはどうでもいい。

今彼には教室でおこなわれている論争よりも、外を飛ぶ鳥の数が何羽なのか、そちらの方を知ることのほうがよほど面白い。

「決闘ですわ。
私がクラス代表にふさわしいことを証明して差し上げますわ！！！」

「上等だ！！！」

売り言葉に買い言葉。
どうやら商談は成立したらしい。
さぁ、どちらがやってくれるんだ？

「そろそろいいか、馬鹿者ども！
そんなに元気が有り余っているならいくらでも使わせてやろう。
最初はくじで決めさせるつもりだったが、今ちょうど決闘という言葉が出たからそれで決めさせてやる。
ＩＳで勝負をして、勝ち星の数の多いものがクラス代表だ。
同じ数だった場合はシールドエネルギーの総残量の多かったものが勝者とする。いいな？」

そういいきると織斑先生は俺に向かって出席簿を投げつける。

ガンッ！！！

「貴様も入っているからな。
関係ないなんて顔をしているんじゃないぞ！」

投げた出席簿を回収し、こちらから離れていく。
痛い。やっぱりあれは暴君だな。
しかし、この流れで俺のことを忘れてないなんて、あの人の前で無

かったことのように流すのは無理のようだ。

「では、クラス代表は後日決めるとして、これからはほかの委員を決めていくことにする。
え～まずは・・・。」

窓の外を眺めて思う。
給料のためとはいえ、これから毎日この生活か・・・うんざりだな。
そう思いながら再び外を見て鳥たちの数を数えるのであった。

典型（後書き）

女性陣は多少性格がきつくなっている人が出てくるかもしれません。
今回のお嬢様も、当社費1．5倍のお嬢様ッぷりでしたので、ドイツのあのお方はユダヤ系の大敵、ファッキン・ナチとなってしまうかもしれません。
そのときはご了承ください（笑）

個室（前書き）

やっと放課後です・・・ほんと、進行速度が亀で申し訳ない。
それでは、どうぞ

個室

放課後になり、やっと長かった初日が終わる。

「こんな調子で三年間か・・・
時間の無駄だな・・・」

と、この三年間の間にどうやって給料の上乗せ分の情報を集めてるかを考えていると織斑先生に声をかけられる。

「教室にいたのか、探したぞ。
お前の部屋に案内してやるから私について来い。」

「いや、部屋なら部屋の番号を探しますから別に案内は必要・・・」

「いいから、ついて来い、と言っているんだ。」

「・・・はい。」

どうにもあの眼光には逆らえる気がしない。
おそらくこの地球上の誰もが傳く、それだけの力を持った瞳だろう。
織斑先生の後ろを寮に向かいながら歩いていると、何人かの女子とすれ違い、ひそひそと話をされる。
どうやら昼の発表で俺がＩＳを動かせる男ということは証明されたらしい。
しかし、最初の発言で完全にアンタッチャブル≪触れてはいけない者≫として認識されたようだ。
まぁ、どうでもいい。
このまま俺のことはほっといてくれ。

そう考えていると、織斑先生が話し始める。

「お前の第一声、あれは本気で言っていたのか？」

ん？

なぜそんなことを気にされなければならないのだろう。

俺がどうしようが俺の勝手なのに。

「はい。

この三年間、授業を受けて卒業するだけ。

それが俺のここにいる理由です。

ここにはそれをしに着ただけです。」

「三年間一人で耐えられると？」

「耐えるも何も、俺は別に苦に思ってませんから。」

「・・・それでいいのか？

人生を楽しむことの出来るこの時期に周りに友人がいないというのは寂しいものだと思うが？」

友人？そんなものは必要ない。

「だから、必要ありません。

別にあなたに気にしていただくことでもないですし。」

そう言った目に光は無く、その言葉を発することを苦痛とも思っていない表情だった。

「しかしだな・・・」

「どうでもいいでしょう？
それとも、生徒のプライベートに教師が介入するんですか？
話が以上ならここまででいいですか？もう一人で充分ですから。」

そういって俺は織斑先生から離れていく。

「吉田！」

呼ばれて振り返ると織斑先生の顔には昼間ほどの覇気は無い。

「・・・いや、なんでもない。
すまない、もういいぞ。」

何なんだ？
首をかしげながら俺は寮に入る。

～千冬～

必要ない、か。
吉田の言葉が自分の記憶の中のある人物を連想させる。
あいつも自分の周りから興味の無いものは排除してきた人間だったな。
だが、あいつには妹、一夏、不本意だが、私もいる。
独りと言うわけではない。
だが、あいつは友人を必要ないといった。
理由を聞いてもあいつは何も話さないだろう。
今日一日見ていたが、あいつは周りの事を気にも留めていない。
他人が自分の世界に入らなければ、かまわない。
例え隣に大統領がいたとしても、緊張することさえ無いだろう。

自分以外のものを必要としていない。
今はまだそれでも生きていけるだろう。
だが、必ず限界は訪れる。
人間とは一人で生きていけるほど強い生き物ではない。
それに気付かなければ、限界を迎えたとき、あいつの中には何も残らない。
それでは死人と何も変わらない。
気付け・・・
人は誰かとともにいることで満たされることができる生き物なのだと。

～春～
自分の部屋の番号を見つけ部屋に入る。
ダンボールが三つ。
俺の帰りを出迎えてくれる。
どうやらＩＳ学園は節度があるらしい。
一人部屋だ。
まぁ、この歳の男女が同じ部屋というわけにもいかないから当然だろうが、もし手違いがあって俺と相部屋なんてことになったらルームメイトは確実に病んでしまうだろう。

「まずは、荷解きからだが・・・
優先すべきはあいつらか・・・」

そう言うと一つ色の違うダンボールの荷解きをする。
ダンボールから取り出したそいつらを机に並べ、別のダンボールから寝巻きを取り出しシャワーを浴びる。
シャワーから出て寝巻きに着替えてから椅子に腰掛けそいつらに手

を伸ばす。
大人に教わったことの中で、唯一こいつらの事はよかったことだと思う。
これはもうやめられないだろうな。
そんなことを考えているとそいつらはあっという間に俺の目の前から消えてしまった。
再びそいつらに手を伸ばし、至福の時間に酔いしれながら一日の終わりを迎える。

個室（後書き）

ひとつ言えることは
現実に生きる皆さんは二十歳になってから楽しみましょう。
更新ですが、一週間に一、二回を目安とお考えください。
一回で複数同時に投稿予定です

接触（前書き）

遅くなりましたが、更新いたしました。
複数話更新する予定でしたが、今回は一話とさせていただきます。
まことに申し訳ございませんがよろしければお付き合いください

接触

あの長かった週の土曜。
俺は旭日重工の研究所に来ていた。
厄介なことに巻き込まれた為にＩＳをとりにくるように言われたからである。
研究所でＩＳの起動をおこなってはいたが、専用機を持っていたわけではなかった春に今回の騒動をチャンスと、旭日重工が専用機を用意し他国のＩＳのより詳しいデータを取ってきてもらうということになったのだ。
そして、顔なじみが居るある部屋の前に立ち、ノックもせずにその部屋に入る。

「よう、調子はどうだ？」

部屋に入ってそう声をかけると、人が住めるような状態では無い、ものが山積みにされた部屋から返事が聞こえる。

「やぁ『ダッチ』どうしたんだい、いったい？」

そういって回りに詰まれたものを崩しながらある男が出てくる。
金髪を後ろで束ね、無精ひげに眼鏡。
年齢は二十代～三十代前半といったところか。
アロハシャツを着てその男は姿を見せる。

『ダッチ』というのは俺のことだ。あだ名をつけるのが好きらしい。
吉田から来ているそうだが、吉からとったヨッシーでは舌が伸びる緑の恐竜になってしまうからとか、誰でも思いつきそうだからと、わけのわからないプライドが邪魔をしたらしく、少しひねって吉田

の田から、ダッチだそうだ。
少しじゃないだろ。
普通の人は吉田からは決して思いつかないであろうあだ名だ。
自称『知的な変人』とのことだが、俺から言わせれば『イかれた変人』なだけだ。

「こんな部屋でよく生活できるな。
普通なら生活するより、まず掃除から始めると思うが？」

そう問いかけるとその男はタバコに火をつけて話し出す。

「掃除なんて必要ないよ。
僕しか使わないこの部屋で誰の目を気にする必要があるんだい？
君の事を今更気にしろって言うのかい？」

そういって息を吐く。

この男、ベニーは俺が研究所で過ごした中で一番一緒に居た時間が多く、交わした言葉も多かっただろう。
その為感じ方や考え方も影響を受けなかったといえば嘘になるだろう。
だが、俺はこんな汚い部屋で生活できるような人間ではない。

「ベニー、俺はこの部屋からさっさと出てＩＳを受け取りたいんだが？」

そう言うと金髪アロハな男、ベニーは俺が今ここに居る用件を思い出したようだ。

「ごめん、ごめん。

忘れてたよ。
そうだった、ＩＳだったね。
用意してあるよ。
それに、しっかりあのプログラムは組みあがって後はインストールするだけだ。」

そう言って頭をかきながら部屋から歩き出す。

廊下を歩きながら世間話を始める。

「こういう時は、学校はどうだい？
って、聞いたほうがいいのかな？」

「いらねぇーよ。
今すぐ卒業させてほしいぐらいだからな。
それにこんな面倒なことに巻き込まれたのも学校に行かされたことが原因だ。
給料が出なきゃ誰がやるか。」

「ハハハッ！
やっぱり君はそういうと思ったよ。。」

そう皮肉そうに口にする彼の口にはかすかだが笑みがあった。

「もう一人のイレギュラーはどうだい？
まだ少しだけど一緒にすごしてみた感想は？」

「あぁ？

感想なん・・・あるぞ。
気に入らないって感想に、理由ならなんとなくな。」

「へぇ？君が他人に興味を持ったのかい？」

「そんなんじゃねぇよ。今気付いただけだ。」

「さしつかえ無ければ聞いてもいいかい？」

「高いぞ？」

「今回のプログラムでチャラでどうだい？」

そう言うベニーの顔は笑っている。

「ちっ、ずいぶんぼられた気分だが教えてやるよ。
≪同属嫌悪≫だな。」

「？？？
どういうことだい？」

「理由は教えてやっただろ。
意味までは教えてやらねぇよ。」

アリーナまでそんな会話をしながら俺は久しぶりに気を許せる相手との会話を楽しんだ。

研究所内にあるアリーナで俺はＩＳの前に立っていた。

ラファール・リヴァイヴ

俺がここで起動訓練をしていたときに散々ボロボロにした機体が俺を待っていた。
その周りにはさまざまな機械が取り付けられており、俺にはとても扱えないような代物をベニーは自分の体を動かすかのように扱う。

「今プログラムをインストールしてるからちょっと待ってくれよ。」

「あぁ、俺が自分で出来てればわざわざ作ってもらう必要も無かったんだけどよ。」

「気にしないでくれよ。
これが僕の仕事でもあるし、趣味でもあるんだ。
それに、もともと設計予定だったものだからね。」

今ベニーがＩＳにインストールさせているプログラムというのは簡単に言うと攻撃補助プログラムである。
なぜそんなものをわざわざＩＳにインストールさせる必要があるのか。
理由は簡単だ。
俺がＩＳの操縦が下手だったからだ。
一年半かけて何とか飛行、簡単な回避運動は取れるようになったが、まだ相手をロックして攻撃を仕掛けるなんて事ができるレベルではなかったのだ。
だから、俺と言う存在を隠し、操縦がしっかり出来るようになってからの発表。
俺という広告塔を使って利益を上げる、というプランだったんだが、織斑のせいでダメになった。

と、そういうことだ。
だから俺には専用機が用意されず、他の一般生徒と同様に訓練機で授業受ける、という予定があの二人のせいでこうなった。
厄介な事してくれやがって。

「よし、じゃあ起動させてくれるかい？
僕が設計した、この二挺拳銃≪トゥーハンド≫をね。」

準備が整ったようで、ベニーがこちらに視線を向ける。

「設計って、これ作ったのはデュノア社だろ？
」

「何を言ってるんだい！！この画期的なシステムを開発したのは僕なんだよ！！
それを搭載したこの機体はもはや僕が設計したといっても過言ではない！！」

そう握りこぶしを作りながら力説するベニーを横目に俺はＩＳに近寄る。

（いや、過言だろ。）

そう思いながら俺はもう何度目になるかわからない起動をおこなう。
その感覚はもはや最初の頃に起動させた感動をカケラも感じず、ただ仕事だからと、やりたくも無いことをさせられる感覚でしかなかった。

接触（後書き）

やっとＩＳが出てきました。
遅くなってすいません。
というわけで、春君のＩＳはリヴァイヴです。
ほかの小説ではオリジナルや、他のゲームやアニメ等から来ているのもありますが、機体選びでやらかしてしまうと、普通の少年と言うコンセプトから外れてしまうので、今回は世界でもシェアの高いリヴァイヴとさせていただきました。
この次はＩＳの機体設定にいくと思います。
更新量が少なくて申し訳ないですが、ゆるくお付き合いください。
あと、著者の中である程度の流れはできているんですが、皆さんの意見お待ちしています。

機体設定

名前
二挺拳銃≪トゥーハンド≫
世代
第二世代
ベニーいわく『第三世代だ！！！』との事
外見はラファール・リヴァイヴである。カラーリングは上半身部分、下半身部分ともに緑色
春の操縦技術を考慮して、シールドエネルギーの消費が抑えられるように装甲は厚めに。
右肩には外見に専用機らしさをと、ベニーが特殊なコーティングをしてある。
（白い輪郭をとった、黒色の刺青のようなコーティング）

マシンポテンシャルは速度が出すぎても春ではコントロール仕切れないということで最高速度は少し下げてあるが、加速だけは通常機と同様の加速力を持ち合わせる。
反応速度は、春にあわせてあるので、他の専用機に比べると若干遅れる。

他の専用機に比べると全てが若干下回っているということ。
もともとデータ収集が春の仕事なので勝つことを根底に作られてはいないためこの様な設定になった。

武装
固定武装
ソードカトラス×２

ベレッタＭ９２Ｆを元に設計。銃身とスライドが少し長い。通常のハンドガンとして使用する。

レビィ
攻撃補助プログラム
固定武装の領域だけでなく、後付武装の領域まで使用する、大容量の攻撃補助プログラム。これをつけたおかげで戦闘になるようになったが、火力不足となり、結局戦闘になるかどうかは使用者の使い方次第となった。
大容量のため、実用化が難しいと生産にストップがかかっていたが、今回の騒動で試作プログラムを組むことが許された。

この小説情報にも載せているものから来ているので、読んだことのある方は察しがつくんじゃないかなと思います。

後付武装
ビー×２
ＵＺＩ　ウージーを元に設計。連射で手数を稼ぎたいときに使用する武装。

ジルバ×１
ＲＰＧ　対戦車擲弾発射機を元に設計。一撃で強力な威力を持つが、ＩＳ相手には簡単に当てられないので隙を突いて相手に当てるしかない。決め手として使用する武装。
また、弾頭を切り替えることで攻撃以外にも使用可能。

ロマン
これは外せないだろうとベニーによってつけられた。
使われないことを祈っている。（１０話から装備）

他、弾薬、特殊弾頭など。
レビィのおかげで武装の数がだいぶ制限されることになった。

追加装備

『ラグーン』

両足に装備する物と背中に背負うようにするコンテナの二つセットである。
インストールさせることができないため、常に物として形を保つ。
そのためＩＳを解除してもその場に残り続ける。

コンテナはシールド変換能力と海中でのステルス能力を積んでいる。
そのためコンテナの様な形で割りと大きめである。
大きさは人がドラム缶を背負っているぐらいとお考えください。

両足は水中での高い起動力を目的として開発されたものである。
その大きさは足のサイズが縦にも横にも三倍になったものとお考えください。

そしてその脚には銃が収納されている。

【マルス】×２

ＡＰＳ水中アサルトライフルをモデルに設計。
水中でも通常の銃のように扱えるように設計されたもの。
さすがに震度が深いとそこまで性能は発揮しないが、震度１００ｍぐらいなら通常の銃と距離や威力に変化なく使える。
もちろん地上、空中での使用も可能。

決闘（前書き）

ユニークが１０００名様超えたことで浮かれて投稿してしまいました・・・
複数投稿どこへ行った・・・（笑）
やっとＩＳでの戦闘になります。
戦闘描写・・・かなり省略した感じになってますがお付き合いください。

決闘

週があけ、俺にとっては面倒な学園生活が再開された。
そして今日はあの馬鹿二人のおかげで巻き込まれてしまった例の日でもある。
そして俺は今アリーナ内のピットにいる。
ＩＳスーツに着替え、待機しているとそこへ暴君がやってきた。

「準備は出来ているようだな。」

「えぇ・・・まぁ。・・・本当にやらないとダメですか？
俺よりもあの二人のどちらかでいいじゃないですか。」

そう言うともはや暴君の固定武装の出席簿が現れ俺を叩く。

「推薦されたんだ、さっさとやって来い。
今まで訓練してきたというならクラスの奴らよりは動けるだろう。」

そう言うと俺から少し離れて言葉を続ける。

「織斑は機体の準備にまだ時間がかかる。
まずはセシリア・オルコットと対戦してもらう。
代表候補生に勝てるとは思わんが、どの程度できるのかをこちらも把握しておきたいのでな。」

時間の節約か。
それにしても、織斑にはもう専用機が用意されるのか。
専用機の開発も容易ではないだろうに、ずいぶんと手際のいいことだ。

しかし準備に時間がかかるなら、初期設定やファーストシフトが終わってないのだろう。
そんなデータは役に立たないゴミだな。
織斑のデータはまた後日だ。
てっきり学園の打鉄や、リヴァイヴを使うと思ってたんだが、どうやら今月の上乗せ分は十分稼げそうだな。

「オルコットにも同様に伝えておく。
その後の対戦はお前達の損傷が少なかった方が先に織斑とやりあってもらう。
わかったな？」

酷い方はメンテに時間がかかるだろうからな。
その分の時間のロスを避けるためか。
確実に俺が後になるだろう。

「わかりました。
じゃぁ、時間になったらまた声をかけてください。
ここで待機してますから。」

「わかった。
では後は好きにやれ。」

そういうと暴君はピットから出て行った。

本当にやるんだな。

今まで戦闘はしてきた。

ただそれはあくまで訓練。
危険が無い様、ゴム弾や刃が潰された剣での訓練。
実弾や真剣での戦闘はこれが始めて・・・
シールドや絶対防御は働くだろうが・・・
そう考えると春の中にどす黒く、ヘドロのような感情が心の底から湧き上がり、手足が震える。
その感情に気付かないふりをするため、ベニーからもらった≪薬≫を体に取り込む。

～日曜日の研究所～

「ダッチ、ちょっと弱気過ぎないかい？」

そういてベニーは春を見る。その目は軽くあきれている。

「しょうがねぇだろ。こんなもん持ったこともなきゃ、撃った事もないんだからよ。」

そう。今自分の手には人を用意に殺傷せしめる道具が握られている。
そんなものを躊躇無く人に向けられるほど春の神経は強くは無かった。

「う～ん、そんなこと言われてもやってもらわないと困るし・・・
しょうがないな。
ちょっと待ってて。」

そういってベニーはあるものを持って俺の前に現れる。

「これは？」

「今の君を変えるものさ。ハイになれるし、常習性は無いけど、使った後結構きついからそれだけは覚悟しといてね。」

そういってベニーは俺にそれを渡した。

副作用を極限まで抑えたそれをつかい、その感情に蓋をする。

【吉田、準備が整った。
後はお前の好きなタイミングでアリーナに出ろ。
こちらから開始の合図はしない。
好きなようにやりあえ。】

時間が来たようだ。
そう言われ、俺はＩＳを展開する。
行くか。
そこには先ほどまで手足が震えていた少年の顔は無く、いびつに歪んだ顔をした男の姿があった。

「来ましたわね。てっきり棄権すると思ってましたわ。」

空中ですでにＩＳを展開しているオルコットが俺を待っていた。

やはり、この態度のでかさはこの時代の象徴のような女だな。
「今棄権するならまだ間に合いましてよ？
この私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズに勝てるわけ無いのですから、棄権しても恥じることではありませんわよ。
あなたに勝ち目は無いのですから。
その根拠を武装の差から教えて差し上げますわ。
まず、この私のブルー・ティアーズのスターライトｍｋ？は～～～」

勝手に話し出した。
ありがたい、こいつが自分のＩＳの性能を説明してくれるならそれを記録しておくだけでずいぶんと手間は省けるだろう。
だが、そんなことを簡単に教えるとは、やはりこいつは馬鹿の分類に入るだろう。
そんなことを考えながら自分の武器を取り出す。

ソードカトラス

俺の固定武装を取り出し、マガジンをこめる。
スライドを引き、銃身に弾を食わせる。
そしてまだクソみないな高説を語っているやつに銃口を向ける。
「～～～、さぁわかったでしょう、このブルー・ティアーズの性能が。
その力を目に焼き付けなさい！！！」

ババン！！

そう言い終った瞬間、オルコットを頭に衝撃が襲う。

「うるせえ。
聞いてもいねえもん、いつまでしゃべってんだ。

手前はＴＶ伝道師か。」
体勢を立て直したオルコットがこちらを睨む。
「ひ、卑怯ですわ！
こちらはまだ構えてもいませんでしたのに！！！」
「一ついいこと教えといてやるよ。」
「な、なんですの？」
オルコットは動揺しているようだが、そんなこと俺には関係ない。
再び銃口を向けてやつにある事を教えてやる。
「こんなもんはな、撃てて当たりゃいいんだよ。
勉強になったな、白人至上主義やろう。」
そう言ってまた引き金を引き、その弾丸はオルコットの額を捕らえた。
試合はその後一方的なものとなる。
そう、下馬評道理の展開。セシリア・オルコットが圧倒的優位に立っていたのだ。
春の攻撃が当たったのは最初の奇襲だけ。
その後は一方的に攻撃され、動く的でしかなかった。
「ふん！威勢がいいのは最初だけでしたわね。
やはり私の敵ではなかったということですわ。」
そう言って俺の上空で俺に視線を落とすオルコット。
ちっ、わかっちゃいたが、思った以上に強かった。

装甲を上げてもらわなかったらもっと早くに終わってたな。
まぁいい。あいつの第三世代兵器の性能は見れた。
この記録がありゃ上乗せは充分だ。
そう考えているとまた攻撃が俺を捕らえる。

「ウフフ、もう終わりですわね。
今謝罪するならギブアップとみなしてさしあげてもいいですわよ？」

どうするかな・・・
正直これ以上やる意味は無いんだが・・・
そう考えているとまた攻撃が飛んでくる。

「何ですのその目は！私の優しさに文句がおありですの！？」

どうやら俺の目つきが気に入らなかったらしい。
つくづくこの目つきが疎ましい、厄介な顔に生まれたもんだ。
どうやら今更ギブアップを聞き入れてもらえそうも無いな。
この次は織斑とか・・・
損傷は俺の方が圧倒的にひどいから俺が後だろうがもう一回やりあうのか・・・面倒だな。
これで終わらせるには・・・
答えを出した春は一気に空に向かって上昇を始めた。

それを見ていた者達には春の行動が理解できなかった。
なぜ上昇したのか？
上を取れば勝てると思ったのか？
このとき、春の考えを理解できるものは誰一人アリーナにはいなかった。

しかし、次にとった行動により、たった一人だけが春の行動を理解し、マイクのスイッチをＯＮにする。

【吉田っ！！！】

～セシリア～
いったい何を考えてますの？
なぜ急に上昇を？
もう勝負はついていますのに。
今までの攻勢ですでに勝利を確信していたセシリアに春の行動は理解できるものではなかった。
やはり、有色人種の考えることは理解できませんわね。
そんなことを考えているとその有色人種が行動を起こす。
手に握ったスターライトｍｋ？と展開していたブルー・ティアーズを吉田に向け狙いを定める。
「いいでしょう。
文字通り、撃ち落して差し上げますわ。」

～春～
よし、やるか。
≪薬≫のおかげで感じるはずの感情に蓋をしたこの男に、今からやる行動に躊躇は無い。
カトラスを収納、そしてその代わりに両手に≪ビー≫を呼び出す。
それをやつに向ける。
その後にとる行動は単純だ。
急降下。

それも俺のトゥーハンドが出せる最高速度での急降下だ。
そのときある声が飛んでくる。

【吉田っ！！！】

その声を無視し、行動を継続する。
その行動にビーでの射撃を加えてオルコットに一直線に降下を始める。
オルコットは待っていたと、自分の武装全てを俺に向けて攻撃を開始する。
装甲が削られ、シールドエネルギーもレッドゾーン。
それでも俺は降下をやめない。
それどころか重力の力を借りてさらに速度が上がる。
ビーの弾が切れる、だがマガジンを排出し、マガジンをビーに直接呼び出しリロード。
それを繰り返しながらオルコットとの距離を詰めていく。

～セシリア～

「くっ、この野蛮人。さっさと落ちなさい。」

攻撃は当たっているのに吉田をなかなか落とせない事に苛立ちを募らせ始めたオルコットは次の行動に出る。
ブルー・ティアーズのもう一つの武装、ミサイルを吉田に向けて発射した。
そのミサイルの爆炎が視界を遮り、それが吉田に命中した証拠だと、セシリアは勝利を確信した。

「やりましたわ！これで私の勝ちです！」

だが、この後起こる出来事により、セシリアは混乱せざるおえない状況に追い込まれる。

〜春〜

よし、この距離ならもうあがりは見えた。

そう思っていた矢先、予想外のものがオルコットから放たれる。

ミサイル

そんなものを喰らえば一気にゲームオーバーだ。

「ＦＡＣＫ！！！」

春は狙いをオルコットからミサイルに切り替えビーでの射撃を行う。

一つ、二つと、どうにかミサイルを落とすことは出来たが爆炎に包まれロースト寸前。

俺自身に熱が伝わるほどの高温だ。

シールドエネルギーもめでたいことに奇跡の一桁だ。

だが、その一桁で俺の目的は達成できる。

爆炎を抜け、目標を掴む。

その顔は醜い笑みを浮かべ、その口から皮肉を込めて声を撃ち出す。

「お前の勝ちだ！クソッタレッ！！！」

〜セシリア〜

今この男はなんていいましたの？

私の勝ち？どうやら敗北は自覚しているらしいですわね。

では何故、私の体を掴んでいるんですの？

状況が把握できない。

迷っている所にＩＳから危険を知らせる警告音が聞こえ、自分の置

かれている状況を一気に理解させられることになる。
そう、この男が今していることはカミカゼ仕様の戦闘機と同じなのだと。

～春～
もう勝負はついた。
これが決まってもこいつのシールドエネルギーは０にはならない。
そんなことはわかってる。
だが、どうせなら楽しまなきゃ損だ。
≪薬≫をきめた頭が今の状況を楽しませている。

「くっ、離しなさい！」

俺に掴まれて抵抗しているがもう遅い。
自分のＩＳでスピードを殺そうにも、ここまで加速のついたＩＳの勢いをこの短時間ではもう止められない。

「勝ちは決まったんだ、俺と一緒に踊ってもらうぜ。
ホットな鉄屑でハイなチャチャをな！」

「なっ！！！」

そう言った瞬間、俺達は地面に激突し、その衝撃で機体が地面を跳ね、土を叩く。

その光景を見ていたものは言葉を失い、土煙がはれるまで誰も言葉を出せる者はいなかった。

だが、ただ一人、織斑千冬の声がアリーナに響き渡る。

【救護班、直ちに二人の回収を！！！】

この試合の後、織斑対オルコットの試合は行われず、その日の決闘は誰も予想していなかった形で結末を迎えた。

決闘（後書き）

いや～、薬。やったこと無いですが、使用したらこんな感じにいかれちゃうんですかね。
と、妄想で書いてましたがこんなんでどうでしょうか？
もっとラリッちゃうと思いますが、そこはまぁご都合主義と言うことで・・・
戦闘描写は難しいので簡単な流れと要点的な所だけを書いてみました。
徐々に書けるようになるといいかなと思いますが、まだまだ先になりそうです。
ではまた次の更新でお会いしましょう。
感想、お待ちしてます。

白色（前書き）

初の感想をいただきました。
著者にしては最高のお言葉でございました。
テンションはあがっておりますが、話は進んじゃいません。
短いですがどうぞよろしく

白色

全身を襲う痛みで目が覚めると、そこはもう何度目になるかわからない病室だった。

「くそっ、またここかよ。」

そう悪態をついて周りを見渡すと、やはり変わらない。
訓練で怪我をしたときに何度も搬送された病院の個室だ。
一人部屋なのに馬鹿みたいに広く、清潔感の白一色。
ベットの近くに引き出しの着いた棚と椅子が二つある以外何も無い殺風景な部屋。
こんな部屋に入院させられたら逆に病んじまうんじゃないかとも思えるほどだ。
だがここ以外には世話になれない。
すでに肝臓や肺は健康な高校生のモノとは別物だし、今回は薬物反応まで出そうだからな。
それらを黙認している旭日重工お抱えの病院でないと大問題になってるところだろう。

少し頭が冷静になってくるとあの戦闘を思い出し、ある感情がこみ上げる。

『恐怖』

下手をすれば死んでいたかもしれない戦闘の記憶が、春の体を強張らせ、手足の震えが始まる。

「ちくしょう・・・」

そうつぶやく体勢は小さく丸い、まるでアルマジロのようだ。
その背中は小さく、歳相応、いや下手をしたらもっと幼い少年の姿であった。

その恐怖を殺すのにどれだけ時間がかかっただろう。
冷静になれたと自己判断し、ナースコールに手を伸ばす。
もうここでの対応も慣れたものだ。
まずは意識が戻ったことを旭日重工に知らせる。
その次にお偉いさんが来て、説教ではないが次は無いようにと圧力をかけられ、それを聞き流す。
その作業をこなすのが俺の入院中の仕事だ。
そしてその作業が終わった後、珍しく客がやってくる。

「やぁ、大丈夫かい？」

相変わらずのアロハ。
こいつは他に服を持ってないのかと、センスを疑いたくなる男がやってきた。

「大丈夫だったらここには居ないだろうが。
三日寝てても体はいてぇし、あの薬のせいか、頭が重い。なんだありゃ？」

そう言って俺はベニーに視線を向ける。

「あれはほら、興奮作用を与えるための・・・」

「そんなこと聞いてんじゃねぇよ。
マリファナか？スピードか？なんにしてもそんな類のもんだろが。」

ベニーは苦笑いしながら俺の問いに答える。

「まぁそんなところさ。
あんな訓練の時に見せてた精神状態で戦闘できるわけないからね。
少しハイになってもらうために与えたんだけど、効果的だったみたいだね。」

「みたいじゃねぇよ。おかげでこのざまだ。治療費は誰もちだ。くそったれ。」

そんな暴言を吐きながらこのやり取りを続けていると、ベニーがやってきた本題を切り出した。

「で、どうだった。僕が開発した『レヴィ』は？」

「どうだったじゃねぇよ。俺が攻撃の為にやったのは相手に向かって適当に手を向けただけ。
そしたら後は勝手に動いて撃ちやがる。まぁ、訓練より狙いが良くなってたけどよ。
あれで大丈夫なのかよ？」

「よかった。それでいいんだよ。
攻撃の為の高度な計算をすべてレヴィがやってくれるから、君は適当に狙うだけでいい。
簡単に戦闘できるようになって一安心だ。
さらに、レヴィは自己学習機能もついてるからね。訓練より良くなったのはその為さ。
戦闘を繰り返せばどんどん精度が上がっていくよ。
容量を喰うのが唯一の弱点かな。」

自分の作品のできを冷静に評価するベニー。

「ならいいけどよ。でもあれ、無差別ってわけじゃないだろな？」

「大丈夫。ちゃんと識別機能は付いてるし、それ様のパスワードも設定してある。
友軍機に攻撃したりするような無茶はしないよ。
まぁ、それを外すことも出来るけどね。」

「ンな物騒なことさらっと言うんじゃねぇよ。あのままで充分だ。
あれなら情報収集には困らないぐらいの戦闘が出来るからな。」

「それはなによりだ。なら僕はもう行くよ。
また明日。君の退院に仕方ないけど付き添ってあげにね。」

そう言って椅子から腰を上げる。

「ガキじゃねぇんだ。一人で充分だ。
そんな暇あんならレヴィの容量少しでも軽くしとけ。」

「ハハッ、手厳しいな、でもそうくると思ったよ。

ちょっとトゥーハンドをカスタマイズしておいた。
ほんとにちょっとなんだけどね。」

「何したんだ？」

「カトラスを粒子化して保存しておくんじゃなく、ＩＳと同様に常時展開状態にしておいた。
持ち替えの際は両脇にホルスターをつけといたからそこに収納して、それから呼び出してくれるかい？
手間は増えたけど、その空き容量にあるものをつんどいたから。」

「何積んだんだ？」

「それはね、ロボットアニメの定番にして、男のロマンじゃないかな？
後でマニュアル読んどいてくれるかい？
じゃぁまた何かあったら連絡してくれ。
ＩＳとマニュアルは引き出しの中に入ってるから。」

「・・・外してくれって連絡はどこにすりゃいいんだ？」

「さぁ？僕のところでは取り扱ってないかな。」

そう言って笑顔で部屋から出て行くベニー部屋から出て行くベニーを見送る。

マジかよ・・・変なもん積み込みやがって。

そう考えながら引き出しから待機状態のＩＳとマニュアルを取り出す。

髑髏に二本の剣が添えられた形のネックレス。
ずいぶんと悪趣味だが、俺は結構気に入っている。
それを身に付け、マニュアルをごみ箱に投げ、体を休める。

明日退院して、織斑とやりあうのはいつになるんだ？
あいつの機体、ファーストシフト終わってりゃいいんだけどな。
病院での残りの時間を自分の給料の足しになることを考えながら夜を迎えるのであった。

白色（後書き）

すみません。
ぜんぜん話が進みませんでした。
まぁ名前が明らかになったものもあったりしましたが、次はもっと話が進められるといいかなと思っております。

硬直（前書き）

何とか複数投稿できそうです。
今回は両方短めでしたが、お付き合いください

硬直

退院したその足でＩＳ学園に向かう。
授業に興味はないし、行きたくは無い。
だが、世の中には出席日数というものが必要なときがあり、学園で技術を磨くことが仕事だという人もいるのだ。
軋む体を動かしながら再び学園を尋ねるのだった。

もう一限目には間に合わないな。
途中で入るというのもな・・・かといって終わってから教室に入るのも・・・どっちにしろ注目は浴びるだろう。
どうでもいいや。
その足が止まることは無かったが、歩みの速度は確実に遅くなっていった。

～教室～
「ではここを誰かに説明してもらいましょうか・・・って、どうして皆さん視線をそらすんですか？」

教室では山田先生が教鞭を振りながらの授業が行われているが、どうにも生徒にいいように遊ばれているようだ。

「そういう事するんでしたらもっと難しい問だ【ガラッ】を・・・？」

その音にクラスの視線が集中する。

「・・・遅れました。」

さすがにこれだけの瞳の視線を一斉に浴びると少し驚くが、そのまま何事も無かったかのように席に向かう。
そこに暴君が立ちはだかる。

「よく来たな。いきなり拉致されたかと思ったら、ここ数日どこからも連絡もなく休み、いきなりとは登校ずいぶんなご身分だな?」

どうやら旭日重工からの説明が無かったことがえらくご不満のようだ。
俺のせいじゃないだろう。

「すいま『それと、貴様の部屋に置いてあったもの。あれも大した物だな?』・・・勝手に入ったんですか?」

「貴様の連絡先になるようなものがないか探させてもらった。教師としていきなり貴様の身柄を持っていかれてハイソウデスカとはいかないのでな。」

この二人の会話に周りの生徒は付いていけない。
頭には?が浮かんでいる。

「今日の放課後職員室に来い。そこでの説明で納得できたら許してやろう。」

「わかりました。」

そう言って席に着く。
教室の空気は完全に陽気な春の空気から、冷たい真冬の空気に変わっていた。

「えっ、え～では、この問題を誰か～」

何とかこの空気を換えようと山田先生ががんばりを見せ、授業を再開する。
何とかその授業は終わりを迎え、次の授業ＩＳの訓練に切り替わる。

～アリーナ～

「よし、専用機持ちはＩＳを起動させろ。
他の者達にＩＳの基本的な飛行操縦を見せてもらう。」

面倒だ。今手元に無いって事でごまかせないだろうか。
そんなことを考えていると馬鹿二人が起動させて俺を待っている。
織斑のＩＳ、どうやらファーストシフトは終わっているらしい。
ありがたい。これで稼げる。そんなことを考えていると、

「さっさと起動させろ。それともこれだけの時間をかけて起動できないのか？」

暴君の放つ言葉に逆らうことが出来ず俺もＩＳを起動する。

どうやら本当にいじったらしい。カトラスが両脇のホルスターに収納されている。
ってことは、あいつの言ったロマンも本当に・・・
そんなことを考えていると暴君から出席簿のプレゼントを受ける。

「さっさと飛べ。それとも、特別メニューを組んでほしいのか？」

その発言に体が反射的に宙を飛ぶことを選ぶ。

「すぐ行きます！」

そうして俺もあの二人の後を追い空を飛んだ。

飛んでいる順番は
白人、熱血、そして俺。かなり距離が空いているが仕方ないか。
気が付くとあの二人が普通に話している。
あれだけ熱いお国対決をしておいてやけに仲がいいな。

この時春は知らない。
自分が入院している間にこの二人が決闘の続きをしたこと。
その勝敗と、それによって生まれた一つの感情も。

だが、大人に囲まれた中で生活してきた春にはその人物が放つ空気を読むことに長けていた。
それは人から人に向けられる感情を感じ取る力。
そんな誰にでもある力だが、それが人よりも優れたものとなったこと。
それが春のＩＳを動かしたことによって養われた一番の力だろう。

なんだ、そういうことか。
自分には関係ないからその空気に触れる事無く飛行を続けているとあのお方から声が飛んでくる。

「よし、そこから急降下と完全停止をやってもらう。
オルコット、織斑は地面から１０ｃｍ。
吉田、貴様は急降下せずそのままゆっくり降りて来い。
アリーナに大穴を空けられるのはもうごめんだ。」

その発言を聞き下では笑い声が聞こえる。
そして俺たちの中の一人が、少し挙動不審になりながらチラチラ俺を見る。
どうやら、あのチャチャがずいぶんとお気に召さなかったらしい。
急降下と聞いて同様が隠せていない。
そんな事を俺のせいにされても困るので俺はゆっくりと降下を始める。

ゆっくり降下を始めていた俺を急激なスピードで俺を追い抜いていく青色の閃光。
どうやら白人が行ったらしい。さすが代表候補生様だ。
暴君に怒られてないところを見ると上出来だった様だ。
その後に白色の閃光がその後に続き俺を追い抜くが、

？ドォーーーーン！！？

その後に聞こえてきた音ですべてを理解する。
まぁ、最初はそうなるよな。と

硬直（後書き）

次回は酸っぱいイベリコに登場してもらう予定でいますが、予定ですのでその辺はあまりあてにしないようにしてください。
あと、ヒロインのほうも著者の中で固まってきてます。
どんな結果になるかはまだまだかかりますがそれまでお付き合いくだされば幸いです。
来週になるのではないかなと思いますが、ではまた次の更新で

孤独（前書き）

気づいたらＰＶが１００００を超えていたことに驚きました。
こんなアンチ的な作品はどうかなと思っていたのですがうれしい限りです。

来週って言ってましたよね？と聞かれたらあれですよ。
カレンダーで日曜日って一番左にあるじゃないですか？
それだと思ってください（汗）
さて、今回の更新ですが暗いというか、黒いです。
その影響でしょうか、著者もテンション下がったので今回は一話です。

孤独

ゆっくりと降下し、地面に付くころには織斑が空けた大穴の周りに女子たちが集まっていた。
中で二人ほどにらみ合いをしているが、その面子を見る限り、また織斑の事でもめているのだろう。
唯一つ、俺が気に入らなかったものがあった。
周りの女子たち。
半分ほどは織斑を心配しているようだが、残りの半分は違う。
確実に織斑を嘲笑している。

「ちょっと、あれ本気なの？」

「セシリアとやりあえてたからもっと出来るんだと・・・」

「ちょっとありえないよね～」

その光景にかつての自分の姿が重なる。
そう、勝手に周りが人に期待して、期待と違えば手のひらを返したような態度。
こんなのはもう見飽きた。
いつもならば俺には関係ないから、と無視するところだが今回は違った。
ホルスターからカトラスを抜き、空に向かって一発。

≪ドォーン≫

そして嘲笑していた女子たちに銃口を向ける。

「うるせーぞ、あばずれども。」

～一夏～

「いって～」

まさか激突するとは。

ＩＳ着てても痛いもんだな。そんなことを考えているとセシリアが俺の元に駆け寄ってくる。

「大丈夫ですの？一夏さん？」

「あぁ・・・」

あれ以来急に親しげになってきたが、俺何かしたか？

「ＩＳを着ていたんだ。大丈夫に決まっている。」

そう言いながら箒がやってくる。

「あら箒さん。大丈夫の一言もありませんの？」

「大丈夫に決まっているといっただろ。心配など必要ない。それよりも一夏なんだ今のは？もっと真剣にやったらどうだ。」

いや、俺は真剣だったんだけど。

俺の目の前で二人がにらみ合いを始め、その背後に竜と虎が見える。

俺が空けた穴の周りには他の生徒たちも集まってきている。

そりゃこんなことすりゃ人も集まるか・・・
そのリアクションは人それぞれだったが、俺は愛想笑いするしかなかった。
その時、

≪ドォーン≫

不意に聞こえる一発の銃声。
何だ？
思わず体が硬直するが、その銃声のほうを見るとあいつが銃を人に向けている。

「うるせーぞ、あばずれども。」

なっ、何やってんだあいつ。そう思ったとき俺の体はあいつに向かって走り出していた。

～春～
銃を向けられて硬直する女子たち。
こんなサイズの銃を向けられたら普通はこうなる。
いや、このサイズの銃でなくったて硬直するだろう。

「おい、何が面白かったんだよ？」

そう女子たちに問いかける。

「えっ・・・？」

質問されたことがわかってないのか返答がなかなか返ってこない。

「あいつのやったことの、何が面白かったって聞いてんだよ！」

そう強く言うと女子たちは体をこわばらせる。

「最初から上手く扱えるわけねぇだろうが。

それともてめぇらは最初から言われた距離ができるような優等生様なのかよ。

だったら見せてもらおうか。

出来なかったらあいつに向けた言葉が今度はお前らに返ってくるんだ。それも、このやり取りをした後での空気だ。

さぞかし気持ちよく感じるだろうぜ。」

そう言いたいことを口にすると織斑が俺の前にやってくる。

「何やってんだよ！」

うぜぇ、何なんだよこいつは。

自分を嘲笑っていたやつらをかばうこいつの行動に自然と腹が立つ。

てめぇは右の頬を打たれたら左の頬を差し出す聖人にでもなったつもりか。

イライラする。

織斑を見ず背中をむけ歩き出す。

「おい、ちょっ・・・」

織斑の言葉をさえぎるように暴君が声を出す。

「今日はここまでだ。各自着替えて教室に戻っておくように。

織斑、貴様はこの穴を放課後に埋めて置くこと。いいな？」

「えっ、ちょっ、千冬ねぇ、えっ、え～～～！？」

バシッ

「織斑先生だ。それでは解散！」

空気のよどんだアリーナで織村先生の声だけが響いていた。

～放課後～

俺は朝言われたとおり職員室の前にやってきた。

さて、なんて説明する？

あの暴君に下手な嘘は通用しない。

なら、こちらの切れるカードを切ってかわすしかないか。

覚悟を決め職員室の扉を開く。

「失礼します。」

そこでは教師たちが慌ただしく業務に追われていた。

まだ新学期が始まったばかりだから仕方ないか。

現に山田先生も職員室で走り回っている。

「来たか。ここではなんだ、場所を変えるぞ。」

俺が来たことに気付いた暴君・・・織斑先生に連れられ俺は別の部屋に連れられる。
その手には紙袋。その中にあるのか・・・俺はそれから視線を外せなかった。

通されたのはいくつもの席が向かい合わせている会議室のような部屋。

「好きな席に座れ。お茶でいいな？」

「えぇ・・・」

そう言って織斑先生は俺にお茶を出す。

「さてこれの事を聞く前に、今日の授業でのことだが・・・」

「そんなことはどうでもいいです。まず、あなたが俺の部屋から持っていったという物を見せてもらえますか？」

そう言うと織斑先生は持って来た紙袋を俺の前に出す。

「貴様の物に間違いないな？」

そう言って俺に確認するように促す。
さて、何が入っているか・・・俺はその袋の中を確認する。
まず、バカルディのラム、ショットグラス、タバコのアメリカン・スピリット、灰皿、ＺＩＰＰＯ、ベニーからもらった薬。
・・・なるほど、真っ黒だな。切れるカードなんか一つもない。
俺は負けの決まった勝負に乗るしかなかった。

「で、お前はこれら誰のもので、どう使用していたのかをどうしていたのか説明してくれるんだろうな？」

暴君の顔はやけにうれしそうだ。

「えぇ、説明しましょう。
全部俺のです。以上。他には何にもないです。」

期待違いだといった顔で俺を見る暴君。

「・・・やけに素直だな。」

「これだけの物証を持って来た相手に勝てる気がしないだけです。
もう帰ってもいいですか？」

「そんなわけあるか。
貴様、自分がいくつかわかっているのか？
まだこれらが許されるような歳ではないだろう？」
そんなこと知ってる。でもやめられないのだから仕方ない。これが俺のガス抜きの方法なのだから。

「そうですね。すいませんでした。
これは没収してもらって結構ですから、もう帰っても？」

そう言って織斑先生を見る。

「あのな、そんな簡単に済むわけが・・・」

織斑先生は言葉を続けるがその顔は一生徒に向けるような表情では

ない。
もっと身近なものを心配するような表情。
・・・誰だ?
この女は誰にこの目を向けている?
そう考えたとき春の中にある人物の顔が現れる。
織斑一夏。
俺が知る限りこの女がこんな表情をする可能性が最も高い男。
なるほど・・・少し賭けてみるか。

「そんな顔しなくてもあいつには何一つ進めてませんよ。」

「何を言ってる。そんなのは当たり前だ。」

その言葉を放つ暴君の顔がわずかだが緩む。
間違いないな。
俺は確信を得てこの状況を打開する為に動く。

「でも、それが気になったんですよね?自分の弟が。」

「まぁ、あんな馬鹿でも家族だからな。」

その言葉を聞いたとき俺の中で何かが切れる。
家族だと?そんなもんクソくらえっ!
バカルディを取り出しショットグラスに一気に注ぐ。

「おい、貴様何を・・・」

ドンッ!

その言葉を聞き終わる前に飲みほし足を机の上に。

アメリカン・スピリットに火を付ける。

「はっ、家族だと？
笑わせんな。そんなもん血の繋がった他人だろうが！
そんなもんの心配とは、あんたずいぶんあまいようだな。」

そう言葉にすると俺は感情を抑えきれなくなり一気に言葉を吐き出す。

「やっとわかったぜ。あんたが初日からやけに俺に絡んできた理由がな。」

その口調はもう人前で作るものじゃない、いつも悪態を吐く口調のものとなっている。
息と同じく煙を吐き暴君を見据える。
暴君も俺の変貌振りに驚いている。
その隙にさらに攻勢をかける。

「あんた、俺と織斑をダブらせてたんだろ？」

その一言に暴君がわずかな反応を見せるが、そのわずかを見逃す様な春ではない。

「自分の弟と同じ境遇の俺が、ひょっとしたら自分の弟の姿だったかもしれないって。
どうした？見抜かれたのが驚きか？」

暴君の顔はいつもものものに戻っていたが覇気がかけているように見える。

「何を言っている。貴様と一夏が重なるだと?そんな訳・・・」

暴君の言葉を奪い俺の攻勢は続く。

「俺がこの短時間で気付いたんだ。あいつの一番近くにいたあんたならとっくに気付いてるはずだろ?」

それを聞いた暴君はもう暴君ではなく、織斑千冬という女になっていた。

「何を、貴様にあいつの何がわかると言うんだ?」

その言葉を言ったことを後悔させてやる。グラスに二杯目をつぎ、言葉を撃ち出す。

「わかるさ。あいつは俺が同じだって。
あいつも俺も周りを≪拒絶≫して生きていってことぐらい。」

その言葉を聞いたとき織斑千冬は自分でも認めていなかった、見ようとしていなかったことを言われその言葉に動揺した。

「違う、それは・・・」

その言葉にもはや力はない。

「違うって言ってやってもいいが、違うのは通る道だけ。
行き着く先は≪孤独≫って泥の棺桶だけだ。」

そう言葉にし、グラスの中身を喉に流し込む。

「知ってるか?

人は興味の無いものを追及しようとは思わない。
それはどんなものにも共通し、人の言動も同じさ。そいつに興味が無いからそいつの言葉の真意を読み取ろうとしない。
鈍感ってのはな、人の好意に対して、最も無自覚で残酷な拒絶って事を。
俺は最初から周り全てを拒絶し、あいつは鈍感という壁で人の好意を拒絶する。
程度の違いはあれど、あいつと俺の根底は同じなんだよ。」

その言葉を撃つ相手はもはや俺のことを見てはいない。

「・・・違う・・・」

そう言う体にもう力が無い。
この勝負もらった。

「違いやしない。俺もあいつも突き詰めりゃ同じ人間。
神に助けを祈らなかったわけじゃない。
だがこんなクソッたれな世界じゃどうやら神もベガスで休暇中らしくてな。
俺を助けるよりもルーレットに夢中らしい。」

俺は紙袋を手に席を立つ。

「あんたはこういう、俺みたいな薄汚れたものを見慣れてるって思ったんだがな。」

そう言って織斑千冬をみる。
もう聞こえてねぇか・・・
俺は部屋を出る扉にと手をかけ、お節介な一言を告げる。

「だが、あいつはまだ夕闇の中に立ってるだけだ。
こっちの、俺と同じ闇(がわ)に立っているわけじゃねぇ、陽(ヒ)の元に戻る道が無いわけじゃねぇんだ。
だが、あいつを救ってやりてぇなら急いだほうがいいだろうがな。
大事な家族なんだろ？」

そうの言葉を継げ俺は部屋を出て、俺のいるべき場所。
陽の元でもなく、夕闇でもない。
ただこの世の汚泥が詰まったその世界へと足を沈めていくのだった。

孤独（後書き）

織斑先生が若干打たれ弱かった感じになってしまいましたが、ここは春の黒い部分を出しておきたかったのでこの様な感じになってしまいました。

都合よく春の言葉を並べてましたが、これ話の流れ的に大丈夫でしょうか？

そこが心配でなりません。

まぁ、そん時はそんとき考えます。

後イベリコ。

やっぱり登場しませんでした。申し訳ありません。

次こそは・・・

では、また次の更新でお会いしましょう。

俺はこう感じるといった意見、心情の変化の参考にさせていただきますので、今回の作品の感想、春の言動の感想お待ちしてます。

霹靂（前書き）

お気に入り登録数が２０を超えました。
ありがたい話です。
登録してくださっている皆様がどう思われるかはわかりませんが、
自分の思った話を書ければと思います。
今回はやっとイベリコです。

霹靂

あれから数週間が過ぎ、俺には≪孤独≫という平穏が訪れた。
周りは俺のことを避け、俺も周りに干渉しない。
あれ以来織斑先生も俺には強くかかわろうとしない。
その代わりに織斑に気を使い、今まで以上にあいつの言動に注意を入れるようになった。
この数週間の間にあったことといえば・・・

～数週間前～
～一夏～
「織斑君、クラス代表おめでとう!!!」

俺はこの状況についていけていなかった。
何で、俺がクラス代表なんだ?
俺はセシリアに負けたんだけど?
そのセシリアとあんな形だったけど引き分けた吉田とまだ戦ってもいないのに・・・
あの衝撃的な決闘は両者の意識が飛んだためＩＳが同時に解除されたので引き分けということになった。
それでも一夏の頭には疑問しかなかった。
「なぁ、俺がクラス代表って事だけど、吉田とまだ戦ってないのに勝手にきめていいのか?」
そう疑問を口にするとセシリアが口を開く。
「そうですわね、確かに一夏さんが疑問に思うのも無理はありませんが、これは織斑先生が許可してくださったことですので。」
「千冬姉が?」

何でも、今日の放課後吉田との対決はいつになるのかを聴きに言った際、
「あいつにクラス代表をやる意思はないそうだ。お前がやってかまわない。」
と言われたそうだ。
その時の千冬姉はいつもの千冬姉とは別人のようだったって話だけど、何かあったのか？
そんなことを気にしているとセシリアが言葉を続ける。
「一勝一分けの私でしたが、織斑先生が私がやって構わないとおっしゃったのです。
その私が一夏さんにその権利をお譲りするという形で今回のクラス代表が決定いたしましたの。
それとも、お嫌でしたか？」
そりゃ出来るならやりたくはない。
なぜなら面倒くさそうだから。
でも、この女子に囲まれた状況でＮＯと言える日本人じゃなかった俺は、
「わかった。俺がやるよ。」
その一言でさらに盛り上がる会場。
「よし、正式に本人からの承諾を得たところで、もう一度、『かんぱーい』」
「「「「かんぱーい」」」」
そう言って会場はみんな自由に動き出したわけだが、吉田の姿は無い。
「なぁ、吉田は？」
そう女の子に聞くと、
「えっ、よ、吉田君？あ、あの、用事があるとかで・・・」
「ふーん、そっか。」
一夏はその一言で納得したようにそれ以上の詮索はしない。
ここに居る女子の誰一人として吉田を誘ってはいない。

返答になんといって断られるかが怖くて誰も誘えないで終わった為である。
だが人の真意を読もうとしないこの織斑一夏にとってはその答えが全てであった。
会場が落ち着き始めたところである人物が訪れ、セシリアと一夏両名の取材をし、写真を撮ったりと馬鹿騒ぎをしてあっという間に時間は過ぎていった。

～春～

・・・くそっ、気持ちわり～

織斑先生と話したあの後も飲み続けていたのが効いたのか、頭はすでにアルコールに飲まれていた。
時計を見ればすでに時刻は夜の１１時過ぎ、さすがにこんな時間なら誰もいないだろうとタバコに火をつけながら廊下を自販機に向かって歩いて行った。

～薫子～

二人の取材を終え、ここまできたらついでに吉田君の取材もしてしまおうとこんな時間に寮をうろついていた。
「あの二人、インタビューに答えてくれたんだけど、今ひとつ面白みにかけるのよねぇ。
でも、初日に『かかわるな』なんて、クールな事言ってくれちゃう吉田君ならきっと面白いインタビューになるはず。」
そんな不満と期待をもらしながら吉田の部屋に向かっている薫子の耳にある声が飛び込んでくる。
「ぅ～・・・ぅ～」

最初は気のせいかと思った。
こんな時間に廊下を歩いている生徒などいないだろうと。
だがその声は確実にこちらに近づいてくる。
「うぅ～・・・うぅ～・・・」
その声が聞こえた時薫子の体は確実に硬直した。
気のせいじゃない。
何かがこの廊下を動いている。
体は恐怖で硬直していたがマスメディアの心が騒ぎカメラをその声のする方に恐る恐る向ける。

そこには小さな、本当に小さな明かりが一つ。
ふらふらと、だが確実に廊下をこちらに向かって進んでいる。
その明かりはまるで生きているかの様にゆっくりと明るくなっては暗くなる。
そしてその明かりに付き従うかのように聞こえるのがあの声。
「うぅ～・・・うぅ～・・・」
薫子はその場から離れたい気持ちとそのスクープを撮りたい気持ちとの葛藤に悩まされながらもある答えを出した。
離れたい気持ちが勝った彼女のとった行動は・・・
よし、逃げながら写真を撮ろう。
ひょっとしたら一枚ぐらいまともな写真が撮れるかもしれない。
そんな淡い期待を胸にカメラを連射モードに、手は後ろに向けながら、体は全力でその光から離れていく。
廊下にはカメラの連射音と、走る足音、うなり声が響く異様な音を奏でながら夜は深まっていった・・・

～春～

うるせ～な、何だいったい？

カメラの連射音とは気付かず、廊下を歩く春。

「うぅ・・・やっぱ飲みすぎた・・・何のみゃ直るよこれ・・・」

タバコを銜えながら廊下を歩き、自販機に向かって歩く足もとはおぼつかない。

壁にもたれかかりながら進んでいるわけだが・・・

「もう無理だ・・・帰って寝よう・・・」

ここまで来た道を引き返すため体を反転させ、部屋に向かって歩みを進める。

部屋までたどり着き、扉を開け部屋に入るとその場で倒れこむ春。

このとき彼は知らない。

自分の行動がこのＩＳ学園に数々の伝説を残すことになることを。

一つ目の「一言目のかかわるな発言」

これはすでに生徒の間で知らない者はいないほどの言葉である。

これが吉田春という人物をＨｅｌという立ち位置に位置付けるには充分な言葉であり、この一言に逆に落とされたという女子もいないわけではなかった。

そして今日新たな伝説を作った。

それは本人の知るところでなければ誰も真実を知らない伝説であるが・・・

数日後、新聞部が出した新聞にはこう記載されていた。

【スクープ！！！学生寮をはいかいする人魂！！！】

その写真の真相を知る人物は誰もいない。

と、新聞で騒ぎがあったくらいだろう。

～現在、放課後～

～春～

俺は今アリーナで織斑が篠ノ之とオルコットの二人にボコボコにやられる様を記録している。

自分自身の訓練はやっている。

アリーナに装備されている訓練機器でターゲットを表示、そのターゲットにいかに精確に当てるかの訓練を繰り返している。

そのおかげでレヴィもずいぶんと射撃が上手くなった。

今ならあの白人とも前より勝負らしい形になるだろう。

だが、あいつは俺の目から見ても駄目だな・・・

ここしばらくあいつのＩＳを見ていたからわかったことだがあいつの機体はどうやらシールドエネルギーを削りながら攻撃するらしい。

あいつの戦い方に問題があるな・・・

自分のＨＰを削りながら戦うって、毒状態で戦闘するのと一緒だろうに・・・

答えを見つけても教える必要が無いからと織斑に声をかけることもせず、アリーナから背を向けて歩き出す。

データは充分取れてる。これで上乗せは充分だろう。

アリーナから離れ、寮に向かって歩いている春に予想外の出来事が起こるまで後１００ｍ

〜???〜
ちょっと、どうなってんのよここは?
何でこんなに広いわけ?
何でこんなに建物があるわけよ?
自分の目的地にたどり着けないことへの苛立ちだ高まっている所へ、
偶然にも人が通りかかる。
ちょうどいいじゃない、あの人に聞いてみよ♪
春に予想外の出来事が起こるまで後３０m

〜春〜
寮に向かって歩いていると人とすれ違う。
もはや俺に声をかける人物などいないからと完全に無視して歩いていると何か聞こえる。
「・・・ぇ。・・・っと・・・」
誰と喋ってるんだ?その声を無視し、かまわず寮に向かって歩いていると、
「・・・ぇ。・・ょっと、あん・・・」
まだ聞こえる。それでも無視して歩いていると・・・
「人の話を・・・きけぇーーー!」
腰の辺りにいまだかつてないほどの衝撃が走る。
そのまま地面に向かって倒れこむ春の背中には確実に人の重みがある。
誰だ?こんな非常識なことを・・・
そう思いながら振り返るとそこには触覚を二本揺らしながら人の背中に足を乗せている女が腕を組みながらこう言い放つ。
「ちょっと、職員室まで案内しなさい!!!」
決して人に物を頼む姿勢じゃないこの格好を非常識、理不尽と言わずになんと言うだろう。

これがいまだかつてない衝撃に襲われた最初の一日であった。

霹靂（後書き）

イベリコの登場です。
やっと出ました。
他の小説なんかだと十話いかない位には登場している人物なんですが、いかんせん更新量が少ないばっかりにこんなことに・・・
申し訳ない気持ちでいっぱいでございます。
こんな調子だとあの巷で人気のお二人様の登場はいつになるのか・・・

今月中にでたらいいな・・・
ハッ?!な、なんでもないですよ（汗）
感想お待ちしてます。
で、ではまた次の更新でお会いしましょう。

案内（前書き）

お気に入りに登録してくださる方が増えるのは大変喜ばしいことです。
ユニークもおかげさまで２０００人を超えることが出来ました。
期待に応えられたらな～と思いながら、キーボードを叩いております。
原作や他の小説とはまた違った進み方ですが、特にこれといった進展はありません。
ではお付き合いください。

案内

～春～

「・・・けっ！」

俺の上に乗っている無礼者に向かって言葉を吐く。

？？？

何を言っているのか聞こえなかったのか動きがない。

「どけって！！！」

「ひゃっ？！」

あわてて俺の上から飛び降りる無礼者。

俺は体をしぶしぶ起こし無礼者を睨む。

「何してんだこらっ！」

俺の言葉に驚きながらも言い返してくる無礼者。

「あ、あんたが無視するからでしょ！」

俺は気付かなかった。

いや、気付いていたが無視していたと言った方が正しいのだから俺のせいって事になるのか？

そんなことを考えていると無礼者は言葉を発する。

「ま、まぁいいわ、さっさと職員室まで案内なさい。

そのためにわざわざ声かけたんだから。」

そう言って俺に案内を促す。

いや、まて。俺は案内するなんて一言も言ってない。

体の汚れを払い、無礼者に背を向け俺は再び歩き出す。

「なっ、ちょっとあんた待ちなさいよ・・・」

そう言って俺の後ろを付いてくる無礼者。

厄介な道を選んでしまった。やはり俺の運はＩＳを動かしたときに無くなったらしい。

しばらく歩いているが無礼者は一向に俺の後ろを離れない。
それどころか俺が無視しているのが気に入らないらしくずっと俺に呼びかけてくる。
「ちょっと、ねぇ聞いてんの？ねぇってば！」
まるでおもちゃを買ってもらえない子供のように騒ぎ続ける無礼者を無視し寮に近づく。
この学校は生徒のことを考えてくれているようで、寮から校舎までは割りと近くに設計されている。
このうるさい奴を引き離すのに最も有効な排除方法・・・
それは目的地まで誘導してやることだろう。
別に校舎の前を通らなくても寮には帰れたが、寮まで付いてこられると鬱陶しいので仕方なく校舎の前を通る。
そこでようやく無礼者の方を見る。
「ちょっと、いいかげんにゃ？！」
いきなり振り向かれたことに驚きの声を上げ尻餅をついている。
俺が受けた蹴りに比べたらそんなもの・・・無言で腰を撫でながら無礼者が立ち上がるのを待っていると・・・
「何してくれんのよっ！！！」
理不尽な罵声。
こいつの取扱説明書はどこに手配したら手に入るんだ？
文句を言いながら立ち上がる無礼者に向かって、聞きたかったであろう一言を向ける。
「ここが普段授業で使っている校舎だ。職員室もここにある。」
そう言って無礼者に背を向け俺はさっさと寮に向かった。

〜？？？〜

「ここが普段授業で使っている校舎だ。職員室もここにある。」

その言葉を聞いてその建物を見る。

やっと見つかった。

「あ、あり・・・」

言葉をかけようとした相手は既に姿が遠く、声も聞こえないような所まで歩いている。

釈然としない気分で校舎の中に入っていく。

「何なのよあいつ。

人のこと散々無視しといて、いきなり振り返るんだもん。

びっくりするに決まってるじゃない。」

ぶつぶつ文句を言いながら校内を歩いていると職員室の文字を見つける。

やっとあった。

ほっとした気持ちで職員室の扉を開け、自分の担任の先生を呼んでもらう。

「あら、凰さん。よくここまで来れましたね。

てっきり迷子になって連絡してくると思って待ってたんですけど。」

連絡待ってるくらいなら入り口で待っててほしかった・・・

そんなことを考えながらここまでの経緯を説明する。

「えぇっと、確かに迷子になったんですけど、案内してもらって・・・」

あれを案内といえるのだろうか？

そんなことを疑問に思いながら言葉を口にする。

「よかったじゃない、親切な人がいて。

早速友達が出来たのかしら？」

ほほえましい表情で先生がこちらを見てくる。

「えぇっと本当に案内してくれただけで、すぐに居なくなっちゃって・・・」

そういうと残念そうな顔をする先生。

「あら、そうなの？残念。どんな人だった？」
どんな人だったか？
話してないからわからないから・・・
「えっと、人の話を無視して、」
「うんうん。」
先生があいづちを打ちながら聞いている。
「怒ってて・・・、」
「うんうん。」
「男でした。」
「う・・・ん？」
先生の表情はさっきまで見せていた表情とはまた違い、驚いている。
「凰さん・・・案内してくれたのって・・・男の人だったの？」
「はい。」
肯定の言葉を聞いた瞬間、私の周りの時間が止まる。
？？？
何なのよ？
驚いている先生が質問してくる。
「凰さん、それって織斑一夏君よね？」
その質問の答えを周りの先生も期待しているようだ。
一夏か、会いたい相手だけど今回は違った。
「いいえ？」
その言葉に止まっていた時間が動き出した。
「「「えぇ～～～～～っ？！」」」
「ちょっと、凰さん。どうやってあの子に案内なんてさせたの？」
何をそんなに驚いているのだろう？
案内させたといっても、私はあいつの後ろを歩いてきただけだし・・・
「えっと、そんなに驚くことなんですか？」
説明してもらいたいのはこっちだと、質問に質問で返す。
「そうね。凰さんは転校生だから知らないわよね。

あの子はね・・・」
先生は若干興奮しながら私に話してくれた。
吉田春という人物が何をやった人物なのかを・・・

～春～

「いって～、ここに来てから怪我しかしてなくないか?」
そんな独り言を口にしながら着替えて椅子に腰掛ける。
一人部屋で腰にシップを張り、タバコに火をつける。
口に銜え、息を吸うのと同様に煙も肺の中に入れ不純物が体を満たすのを感じながら息を吐く。
しかし、あいつ何だったんだ?
この学園にまだ俺に話しかけてくる奴がいるなんて・・・
織斑千冬でさえ俺に一線を引き始めたというのに生徒でまだ俺に話しかけるような勇気のある奴がいたのか、それともただの馬鹿か・・・
考えても答えは出ない。
ラムのグラスに手を伸ばし、グラスに注ぐ。
それを一口、口に入れアルコールが体を満たすのを感じながら別のことを考える。
今週末に渡すデータで、来月上乗せされて振り込まれる給料のことでも考えよう。
さぁて、いくら入るか。
そこには学生でなく、サラリーマンの考えをした男が期待に頭を回しながら、酒と煙達と戯れながら朝が来るのを待っていた。

案内（後書き）

次回も話が進まないかも・・・
最近調子がいいので連投できてますが、またいつ不定期になるかわかりませんのでご了承ください。
皆さんが、この流れだとヒロインがいないまま話が進むんじゃ？と思ってらっしゃらないかが心配です。
感想お待ちしてます。

悪夢（前書き）

感想をいただきました。
感想をいただくとテンションが上がって今日も更新をしようって気になってしまいます。
感想・・・恐ろしい子。
さて、また話は進みませんな～（汗）
もっとテンポよくいけたらとも思うんですが、他の話とは違う感じでやっていきたいというのもあるんでこんなペースですが、よろしければお付き合いください。

悪夢

～アリーナ～

俺はターゲットにカトラスを向ける。

レヴィが銃を向けた対象に対し、自動的に攻撃補正を行い引き金を引いてくれる。

ターゲットの真ん中にあたり、新たなターゲットが表示される。

何度これを繰り返した頃だろう、俺の後ろに気配を感じた。

振り返るとそこには篠ノ之とオルコットがＩＳを展開して立っている。

ブルー・ティアーズに打鉄。

それら纏い、なぜかそいつらはこの広いアリーナで俺の後ろに立っている。

俺は無視しターゲットに銃を向ける。

ＩＳにアラート表示が出て急いで回避行動をとる。

攻撃方向を見る。

そこには銃を俺に向けているのはオルコット。

「・・・何のつもりだ？」

俺はオルコットを睨みつけるが奴からの反応はなく次の攻撃が来る。

「ちっ！」

再び回避をとるが回避先にはある人物が待っていた。

「クソがっ！」

そう悪態をつく俺に篠ノ之が剣を振り上げ俺に向かって一気に振り下ろす。

カトラスをしまい、呼び出すのはジルバ。

こいつで防ぐんだが、俺では接近戦の得意なこいつの攻撃を防ぎきることは出来ない。

だからここでレヴィの機能を応用させる。

レヴィの攻撃補正を相手の攻撃箇所に設定。

これにより相手が俺に攻撃を仕掛けるであろう武器や部位にこちらも攻撃を仕掛ける。
つまり、剣にジルバをあてにいく。これでこちらのアーマーには当たらず、シールドエネルギーを消費せずジルバで防ぐという形が可能になる。
「何だ、何の用だ?!」
篠ノ之にも同様に質問を投げかけるがやはり返事はない。
じりじりと攻撃を受けている間にオルコットからの射撃が俺を狙い、その攻撃を回避するために急加速でその場から離れる。
くそっ、薬のんどきゃよかった。
いまさら後悔してもどうにもならないが、そう思わずにはいられない。
ピットへの道を塞ぐ様に俺の進路を限定している二人を相手にするのは俺には無理だ。
この状況から逃れるために冷静な頭を働かせる。
ＩＳを解除すればさすがに・・・
そう思い地上に降りＩＳを解除する。
そしてアリーナから離れようとしたときにある人物が俺の前に立っている。

織斑一夏

「悪い、邪魔したな色男。」
そう言ってこいつの横を通り過ぎアリーナの出口に向かったときありえないものが俺の目に飛び込んでくる。

俺の胸から刃が生えている。

その後に訪れる激痛と熱が俺に何が起こったのかを説明する。

「～～～～っ？！？！」

声にならない叫びを上げ、その刃から逃れようとする。

だがその刃は俺から離れない。それどころかより長く俺から生えていく。

そうしてその刃の持ち主が俺の背後いるとわかるところまで気配を感じる。

「お前なんかいらねぇよ。」

そう言って刃に力が加わる。

「～～～～っ！」

「あなたなんか必要ありませんわ。」

そう言って俺の体を熱が通り過ぎる。

通り過ぎた後に残ったのは、左ひじが黒くこげ、あるはずの左ひじの先が地面に転がっている。

「貴様は不要だ。」

その言葉と同時に右肩から先の感覚がなくなる。

「～～～

閉じたはずの瞼がゆっくりと開く。
まず見るのは両手。
しっかりと繋がっているか、動くのかを確認する。
そして胸。
傷は無い。
その確認が済むと滝のように汗が流れる。
そして体が震えだす。

セシリアと戦った後からこんな悪夢を見始めた。
あの戦闘の恐怖が日を追うごとに大きく、そして暗いものへとなっていったのだ。
そしてそれは夢となり、日に日にリアルになってついに今日は三人で俺を惨殺しにきやがった。
震えが収まると時計を見る。
朝の四時。
こんな夢を見た後に二度寝できるほど春の神経は太くなかった。
恐ろしいほどかいた汗を流すためにシャワーを浴び、グラスにラムを注ぐ。
それを一気に飲み干すと頭によみがえるのはさっきの夢。

「お前なんかいらねぇよ。」
「あなたなんか必要ありませんわ。」
「貴様は不要だ。」

その言葉がやけに胸に引っかかる。
あいつら本人がそう言ったわけではないのにやけにリアルに聞こえた。
他人の言葉を気にするなんて・・・ずいぶんと疲れてるようだ。
気分を変えるために再びグラスにラムを注ぎそれもまた一気に飲み干した・・・

～教室～
「あぁ～～～、朝からやりすぎた・・・」
結局そのまま飲み続け、一瓶あけてしまった。
口にマスクをし、匂いがばれないようにしながら教室に向かう。
もう今日は保健室で寝てよう。
そう考えながら教室の前に立ち、扉を開けようとした瞬間、
「じゃぁ一夏、また後で来るからね。逃げないでよ！」
その大声は俺の頭を直撃し、扉の前でうずくまる。
「わぁ、何あんた、扉の前で座り込んで、だいじょう・・・」
そう言って俺に触れようとする人物だったがその後ろに立っていた人に驚き手が引っ込む。
「もうＳＨＲの時間だ。教室にもどれ。」
暴君のご登場だ。
その予期せぬ言葉に俺へ言葉の砲撃を直撃させた人物は、
「は、はいっ！！」
再び大声をあげ、おれの頭に爆弾を落としていった。
そいつは足音だけを残して急いで俺から離れていった。
「お前もいつまでそうしている。
さっさと教室に入れ。」
そう言って暴君に教室に入るように促されるが、

「先生・・・体調悪いんで、保健・・・」
そういい終わるよりも早く山田先生がやって来て、
「吉田君、大丈夫ですかっ!?」
三度大声を聞かされ限界を迎えた俺の頭は意識を保つことを放棄し、
休息をとることを最優先し俺の意識はそこで途切れた。

悪夢（後書き）

さぁ、話は進みませんでしたが今回はここで終了です。
やっぱり安全とわかっていてもあんな物騒なものを振り回して戦うんですから、恐怖は感じるでしょうし、そんな簡単に払拭できないと思ったので今回のお話を書かせてもらいました。

お酒は量を考えて飲むようにしましょう。
はっきりいって飲みすぎは体を壊すだけです。
ではまた次の更新でお会いしましょう。
感想お待ちしてます。

拒絶（前書き）

最近感想をもらって浮かれて続投を続けているU↓です。
今回も進まないですよー（笑）
いったい、いつになったらクラス代表戦でドンパチが始まるのでしょう・・・
今回はちょっと理解してもらうのは難しいかもしれませんがどこかで描いておきたかったことなので今回書かせてもらいました。
それではお付き合いください。

拒絶

目が覚めるといつもの病室や俺の部屋では無い。
「・・・どこだここ？」
周りを見渡しても記憶に無い内装。
外はすでに明かりが薄れ夜が顔を覗かせる。
何か手がかりになりそうなものを探していると眠っていた枕元に紙がおいてある。
≪意識が戻ったら必ず職員室に連絡しろ。
しなかったらどんなことがあっても留年させるぞ≫
・・・こんなことを生徒に言うような人物は一人しかいないだろう。
俺は目に入ったインターホンで職員室に連絡を入れる。
「もしもし、吉田ですが織斑先生は居ますか？」
今最も会いたくない相手と顔を合わせるための手続きを自分でとっているこの行動を情けなく思いながら暴君の登場を待った。

しばらく待っていると暴君が現れた。
俺が取るべきコマンドは、
・戦う
・道具
・逃げる
どうするか悩んでいると暴君から先制攻撃をくらう。
「いい度胸だな、学校に来る前から酒盛りか？」
クリティカル！
俺のライフはもう半分を切った。

なんて下らないことをやってる場合じゃない。
頭の中でスイッチを切り替え通常の受け答えをする。

「えぇ、まぁ・・・その・・・すいません。」
みっともない姿を見られたのが恥ずかしかったためいつものように振舞えない。
そんな俺のリアクションが気に入らないのだろう。
額にしわを寄せながら暴君が言葉を継げる。
「いつもの貴様らしくないな。
何があったら朝からあんな状態になるほど飲むことがある?」
ばれている。
その言葉を発する織斑千冬の顔は俺と距離をとろうとする以前の織斑千冬の顔にもどっており、その覇気に満ち溢れた顔で俺に問いかける。
言ったところでこの人には理解できないだろう。
ブリュンヒルデなんて呼ばれていたこの人には決して・・・
「別に・・・」
そう言って顔をそらす。
だがいつもなら決してしないこの行動の不自然さを見のがす様な人じゃないのがこの暴君だ。
「以前私にあれだけのことを言った奴の行動ではないな。
話せ。じゃないと問答無用で留年させるぞ。」
そう言って俺を睨む。
あんたこそ、生徒にむけて言う台詞じゃないだろう。
そんなことを考えながら夢のことを少しだけ話す。
「・・・ISで戦うのが怖かっただけです。」
暴君は何を言っている?といった顔で俺を見ている。
やっぱりそうだ。
天才や生まれ持った資質を持った奴に凡人の気持ちなど理解できるはずが無い。

それだけ言って部屋を出るつもりだった。
だが俺の耳に入ってきたのは意外な言葉だった。
「そんなの当たり前だろう。」
その言葉を耳にしたとき、俺の時は止まる。
「ＩＳを便利な物としか考えてないような奴らや人を傷つけることを怖いと思ってないやつは気付かないが、人を傷つけること、人に傷つけられることにおびえる奴は最初にその壁にぶつかるものだ。」
・・・この人は何を言っている？
なぜあんたが俺の抱える恐怖という感情について話している？
そんなことを考えていると暴君はまだ言葉を口にする。
「それに気付けたということは、貴様は拒絶しているのではなく・・・」
その言葉をすべて聞く前に体が勝手に動き出す。
「し、失礼します。」
急いで部屋を飛び出す。
自分でも明らかに行動がおかしいのはわかっている。
だがあれ以上あの場所で、あの言葉の続きを聞くわけにはいかなかった。
クソッ、飲んで忘れよう。
そう思って急いで寮へと向かう足は気が付けば全力であの部屋から、いや織斑千冬から離れようともがいているようだった。

拒絶（後書き）

いや、今回のお話、いきなりすぎましたかね？
春に自分の中の感情と向き合ってもらうこと、そして自分が悩んでいたことが、自分だけが抱えているような物ではないということを知ってもらうための些細なきっかけになったのではないかと思っております。
人間の感情なんでその時々で大きく動きますから、今傾いてても時間がたてば元通りになってるなんてことはざらにあると思います。
今回は夢とお酒のせいでぐらついていた感情も次ではいつも道理の春に戻っていることと思います。
感情や考え方はその辺が難しいんですが何とか形になるように作品作りを続けて行きたいと思いますのでよろしくお願いします。
感想お待ちしてます。

警報（前書き）

おはようございます。
目が覚めたら朝の四時半でした。
老人の気分です。
ちょっと話を進めてみようと思います。
どの程度進むかわかりませんがお付き合いください。

警報

急いで寮に入り、なりふり構わず自分の部屋を目指す。
その姿を周りがどう思おうと関係なかった。
ただ自分の部屋へ、休んだおかげで少しはましになった頭で考えられることはそれしかなかった。
不意に前の部屋の扉が開き、同時に不意の一撃をくらう。
「一夏の、バカッ～～～～～！！！」
今日四度目となる大声。
少しましになったとはいえこの音量は許容範囲外だ。
足が止まり頭を抱える。
その俺の横を通り過ぎていくのは二本の髪を揺らしながら歩く無礼者。
あいつが近くに居るのがわかるのは姿を目で確認するよりも、耳で声を聞くほうが先かもしれない。
自分で音を発して周りに存在を知らせる・・・
そういうものなかったけ？
・・・あぁ、熊除けの鈴か・・・
だがあいつの音量は鈴なんてかわいいもんじゃない。
ありゃサイレンだな。警報機としておこう。
ベニーの変の影響か、勝手に変なあだ名を自分の中で設定する。
こんなことが考えられるようになるまで回復を待ったら再び自分の部屋へと急いで駆け込み、その日はそれ以上考えるのを放棄した。

～数日後～

変化のない日常が俺を通り過ぎる。
そして気が付けばなぜかアリーナでＩＳの試合を見せられることになっている。
今日の授業が無くなったのはうれしいが何でこんなことになってんだ？
興味が無かったので教師や周りの話を聞いていない春にこの状況は理解できなかった。
仕方ないので周りの話に耳を澄ませると・・・

「ねぇ、誰が優勝すると思う？」
「私はやっぱり凰さんかな。だって代表候補生で専用機持ちでしょ？」
「私は織斑君。なんだか面白いことやってくれそうだし。」

そういや昨日暴君が・・・
「明日の試合は全員しっかり見ておけよ。
クラス代表たちの戦いだ。
今のお前たちよりはずっとましな戦いを見せてくれるだろう。
それを見てしっかりシュミレーションしておくように。」

とか言ってなかったか？
周りの話の流れと昨日の暴君の発言から、今日はクラス代表が戦う日らしい。
そこまでは理解できたがどうにも面倒だ。
白式のデータは現状ある程度記録できたからもう必要ないんだが・・・
そんなことを考えていると俺の興味を引くものが現れる。

≪甲龍≫

中国の第三世代ＩＳだ。
そしてそれを動かしているのは警報機。
春には動かしている人物の姿は目に入らず、その機体のみを見ている。
どうやらこの学園は金のなる木だな。
そんなことを考えながらこの試合を見る意味を見つけ記録を開始した。

試合は一方的だった。
織斑は警報機にまともに近づくことすら出来ていない。
俺と白人ともこんな感じだったのだろう。
確かに二人には操縦技術の差はあったが、一方的な試合になった一番の原因は第三世代兵器だろう。
最初の光景には驚かされた。
詳しいことは俺にはわからないが、織斑が突然吹き飛んだ。
そこから持ち直して回避を続けている織斑だったが、どうにも接近することが出来ない。
もう勝負は決まったな。
ありがたいデータをとることが出来たので満足だと、席を離れ通路に向かう。
【ドォーーーーーン！！！】
爆音の次に訪れたのは警報音
観客席の出口に近づいたところでさっきまで聞こえていた音とはま

るで違う音が飛び込んできた。
なんだっ？
急いで振り返ればアリーナの中心には黒煙。
そして信じられないことにアリーナのシールドが破られていた。
すげーな、ここに攻撃を仕掛けるなんて・・・
暴君がいるここを攻めるバカの末路なんて決まっているだろうと思って無視してトイレにいこうと思ったがどうにもそうは行かないらしい。
隔壁が閉ざされている。
どうやら状況を確認している間に閉ざされたらしい。
面倒ごとってのは重なるものらしい。

その襲撃によってパニックになり押し寄せる生徒の波。
入り口は閉ざされているためその波が進むことはないが勢いが殺しきれず人の押し寿司のようになっていく。
春の中で苛立ちが高まる。
うぜぇ。
無理なのがわかったらとりあえず離れろよ。
出口の近くに居たので隔壁に押し付けられるようにして力を受け、他の人よりいたい思いをさせられていることに腹が立つ。

そのパニックが三十秒ほど続いたとき、春の何かが限界を迎える。
ＩＳの展開。
その衝撃で周りの生徒が倒れこむがそんなこと知ったことではない。
「うぜぇから。ちょっとそこで待ってろっ！」
そう言って周りの生徒たちを黙らせる。
その次にとる行動は・・・

扉の近くのインターホンを手に取り、管制室に電話する。

～千冬～

どうなっている？あれはどこのＩＳだ？

現状が理解できていないのはこの人も同じだった。

今わかっていることはあのＩＳが一夏や凰に危害を加える可能性があること。

他の生徒たちの身が危ないであろうということ。

だがこちらからの操作を受け付けない現状、何も打つ手はなかった。

「チッ！」

舌打ちで苛立ちをあらわにし、この状況を打破するための案を考える。

そんな時インターホンがなる。

こういった状況でも使えることに気付かなかったが、いったい誰が？

そんなことを考えながら受話器を手にする。

その受話器の向こうに居る者に声を絞る。

「誰だ？」

～春～

「誰だ？」

電話越しでも不機嫌なのがよくわかる暴君。

「どうにかなんないですか？こっちはパニック状態で収拾つかないんですけど？」

そう言うと声の調子が少し変わる。

「吉田か。悪いがこちらでも今どうすることも出来ない。

隔壁もアリーナのシールドもこちらの手を離れている。」
ちっ、こんなときに使えねぇな。
そんなことを考えていると、
「今、何か思ったか？」
エスパーか、おい。
「別に。じゃぁ今はどうしようもないってことですか・・・」
そう言って俺も頭を働かせる。
俺がどうにかしたいのはこの押しつぶされそうな状況からの脱出・・・
隔壁は操作できない・・・
開けられない・・・
そのときある案が思いつく。
その為にあることを確認するため再び言葉を口にする。
「あの、この建物って保険に入ってますか？」
「何だ突然？使用目的が目的だ。すべての保険に入ってはいるが・・・」
その言葉が聞けりゃ充分だ。
ホルスターからカトラスを抜き出し、ジェスチャーで扉から離れるように女子たちに伝える。
「それが聞けてなによりです。」
その言葉を口にすると同時に引き金を引いた。

警報（後書き）

話を進めてみたんですが、こんな感じでどうでしょうか？
流れは出来ていても上手く表現できないこのもどかしさをどうにかしたいです。
今日の更新は以上です。
感想お待ちしております。

保険（前書き）

アイエスよ、私は帰ってきた！！！ＢＹガトー（笑）
と、ネタに走りましたがやっと更新復活です。
友人に安くパソコンを譲ってもらい、これからは新しい友とヨロシクやっていきます。
日数は充分あったので、とりあえず海までのプロットは上がっています。
更新ペースは上がらないかもしれないですが、お気に入りに登録してくださった皆様の期待に応えられるようにがんばりたいと思います。
しかし、更新を休んでいる間にお気に入り登録数が倍になっていたので大変うれしく思いました。
４０名以上の皆様。
これからもよろしくお願いします。
では続きをお楽しみください。

保険

～千冬～
吉田の言葉を聞いたあとにすぐ響く銃声。
突然のことに受話器を耳から離し、銃声が鳴り止むのを待つ。
そして鳴り止んだところで吉田に向けて言葉を放つ。

「何をした！！！」

～春～
織斑先生の言葉を聞いて隔壁に向けてカトラスの弾丸を打ち出す。
打ち出された弾丸は隔壁に食い込み、どんどんその形を変形させていく。
そしてマガジンの弾をすべて打ち出すころには隔壁が変形し、拳が入るほどの穴が開いていた。

よしっ！

これで何とか・・・
そしてその開いた穴に手を突っ込み、強引に隔壁を開き、人が通れるほどの穴に拡大していく。
その行動を終えたとき受話器から声が飛んで居るのに気付いた。

「おい、吉田。
聞いているのか？

一体何をした！！！」

その声にこちらも返事を返す。
「あぁ、どうも。
何をしたって、隔壁に穴を・・・」
そう言うと受話器の向こうでは大変ご立腹の暴君の声が飛んでくる。

「誰がそんなことを許した！！！
何を考えている！！！」

確かに許可はもらってはいない。
俺が勝手に隔壁に穴を開けただけだ。
だがこの人の立場ならこの言葉を言えば何もいえないだろう。

「生徒の安全と、施設の保全。
教師としてとるのはどちらが正しいですか？
どうせ保険に入っているんでしょ？
ならそれでいいじゃないですか？」

その言葉を聞いて織斑先生は何も言ってこない。
教師として、人として物と命、どちらを優先させるべきなのかがわかっていればこの時春のとった行動を攻められはしないだろう。

「・・・チッ！仕方ない。今回だけは多めにみよう。
そのままアリーナから脱出は出来そうか？」

そう問いかける織斑先生に俺は言葉を返す。
「えぇ、まぁ・・・
ただ、隔壁はぶっ壊していきますけど、それでもいいですか？」

その問いかけに織斑先生は、
「今回だけだ。
特別に許可する。
その場に居る生徒を無事脱出させろ。
それが出来たら貴様の持っていた物。
あれについては不問にしよう。」

ありがたい。これからはお咎め無しであいつらが楽しめる。
その言葉を聞きやる気の出た春はこの場に居る生徒の脱出の命を受けることにした。

「わかりました。脱出させますが各隔壁内の間に生徒っていないですよね？」
その確認が取れれば脱出はより簡単になる。
その問いかけに織斑先生は、
「ちょっと待て、山田先生に確認させる・・・」
そして少し待つと返事が返ってくる。
「大丈夫だ。誰も隔壁の間にはいない。」
その言葉を聞いて俺はジルバを呼び出す。
「わかりました。じゃ修理は保険で勝手にやってください。」
そう言って受話器を置いた春は隔壁の奥に入り、ジルバを出口をふさぐ隔壁に向かってぶっ放した。

ジルバから打ち出された弾頭の衝撃で隔壁が吹き飛ぶ。

よしっ！

これなら時間はかからないな。

そんなことを考えていると隔壁を吹き飛ばしたときの爆炎のせいでスプリンクラーが作動する。
体を水にぬらしながら隔壁の破壊に向かう春の周りに生徒たちが集まっている。

「えっと、吉田君がここから出してくれるの・・・？」
「ちょっと、早くしてよ！」
「押さないで、押さないでよ。」

生徒たちはそれぞれが自分の身の安全を獲得するのに必死で、他人のことなんか考える余裕はない。
その光景にため息をつきながら俺は声を発する。

「ここから出してほしかったら俺の指示に従え。
走るな。騒ぐな。
これだけ守れれば出してやるから静かにしてろ。」

その言葉を聞くと周りの生徒たちは静かになり、春の周りから離れていく。
はぁ・・・ため息をつきながらこの状況の解決と自分の所有物の権利獲得の為、春は次の隔壁にジルバを向け、転送し装填し直した弾頭を発射した。

いくつかの障壁をぶっ飛ばし、出口に繋がる隔壁の前で脱出に必要な最後の隔壁に向けジルバの弾頭を発射する。
爆散する隔壁。
そしてぬれた体とＩＳがアリーナから出ると、そこには同じくＩＳを身に纏った人達が爆発の衝撃に咳き込んでいた。

人居るじゃん。
そんなことを考えながらアリーナから出た春の後ろから生徒たちが続々と決壊したダムのように放たれていく。

頼まれたことをやり遂げ、自分の所有物の権利を得た春にその光景にもはや興味は無く、春は自分の為にアリーナの上空に向かうため、ＩＳを空に飛ばした。

保険（後書き）

たいへんお待たせしたこと申し訳なく思います。
これからは更新を再開していきたいと思いますのでチェックしていただけるとうれしく思います。
今日はもう一話更新する予定ですので、更新したばかりのものをチェックされた方は時間を置いてからもう一度アクセスしてもらえたら次のが更新されていると思います。

返済（前書き）

今日二度目の投稿です。
迂回していくとは思いますが、話が進めていけるようにがんばりますので、これからもお付き合いください。

返済

～アリーナ上空～
～春～
春は生徒たちを無事脱出させた後アリーナの上空に上り、アリーナのシールドの上にＩＳの足をつけていた。
織斑とクラス代表と乱入者の戦闘を記録するためである。

見たこともないＩＳの戦闘データならさらに追加分は稼げるだろうと、その様子を記録するためにＩＳのカメラを最大望遠にし、その戦闘の様子を記録する。

織斑がもう一人の前に立ち、いきなり急加速する。
その後に放つ攻撃が命中し、乱入者は機能を停止する。
その影響だろうか、アリーナを包んでいたシールドが消え、足をつけていた春は一気に落下することになる。

急いでＩＳを浮遊させ、ゆっくりと地面に向けて降下させていく。
地面に付くころには織斑たちも疲労困憊といった感じで肩で息をしていた。

【ごくろうだったな。後は教師たちで処理するからお前たちはピットに戻れ。】
暴君の言葉がアリーナに響く。

俺も充分ありがたいデータをとることが出来たので俺もピットに戻るように移動を開始した。

その時、
≪警告≫
≪敵性ＩＳの再起動を確認≫
≪攻撃態勢に入っています≫

その言葉を目にし、乱入者をみる。
そこには再び立ち上がり、織斑達に攻撃を仕掛けようとしているＩＳの姿があった。

俺たちの位置関係は簡単に言えば二等辺三角形のような感じになっている。
俺と織斑達の距離は近く、俺と乱入者との距離は遠く、織斑達も俺と同じぐらい離れている。

乱入者との戦闘でシールドエネルギーがジリ貧のあいつらがあんなのを喰らえば・・・
その時俺の体は反射的に織斑達に向かって急加速をしていた。

その時織斑達に与えた衝撃は俺が無礼者に初めて出会ったときに腰に受けた衝撃に近いものだっただろう。

～一夏～
やっと終わった。

ため息をつきながらピットに向かい体を休めようとしていた俺と鈴に突然背中から衝撃が襲う。
何だっ?!
倒れこんだ状態で振り返ればさっきまで自分達の体があった位置をビームが通り過ぎる。

「おわっ?!」

その光景に驚いていると俺達に衝撃を与えたであろう人物が俺達の背中の上に乗っかっている。

吉田春だ。

ビームが通り過ぎたことにも驚いたが、意外な人物が自分達の背中の上に乗っかっていることにさらに驚かされた。

「おいっ、吉田ッ・・・」
そう言葉を投げかける俺に向かって吉田は、
「黙って伏せてろっ!!」
そう言って俺達を地面に押し付ける。

~鈴~
いきなり何なのよ。
背中に衝撃が来たと思ったら頭を押さえつけられ振り返ることも出来ない。
誰よ一体。

そんなことを考えながら言葉を口にする。
「ちょっと、何なのよっ！？」

～春～

クソったれっ！
制服からＩＳを起動させたためシールドエネルギーが減少していた
春の背中をビームが通り過ぎていく。
「おいっ、吉田ッ・・・」
そう言って声をかける織斑を押さえつけ、
「黙って伏せてろっ！！」
その言葉を口にするともう一人の警報機が言葉を発する。
「ちょっと、何なのよっ！？」
こいつは頭を押さえつけているために振り返ることが出来ず、状況
が把握できないようだ。
こいつらを押さえつけている俺の背中をビームが通り過ぎていくが、
その威力は見る見るうちに俺のシールドを削り、俺のＩＳは機能が
停止する。

「クソッ、もう何もできねぇぞ！」
その言葉を口にした時、乱入者が再びこちらに攻撃の銃口を向ける。

ビュン！！！

ビームが空気の壁を破る音が聞こえ俺は人生を諦めた。
夢で見たように俺はアリーナで人生を終えるらしい。
目をつぶっている俺に向かって攻撃が・・・・・

飛んでこなかった。

どういうことだ？

そう思い振り返ると乱入者は空を見上げながら倒れこんでいた。

「大丈夫ですの、一夏さん？」

そう声を発しながらこちらに飛んでくる青色の機体。
その声の主は白人だった。
どうやらこいつのおかげで助かったらしい。

「あぁ、助かったよセシリア。」
そう言って機体を起こす織斑。

機能が停止したトゥーハンドを解除し、俺はこのアリーナから走って離れた。

怖かったのだ。

自分がとっさにとった行動が。
下手をしたら大怪我を追っていたかもしれないということが。
他人の為に体が動いたことが。

薬を飲んでいなかった春に自分のとった行動が今になって押し寄せる。
どうやら今日もあの悪夢を見ることになりそうだ。
そんな恐怖を消し去るために早く自分の部屋へ。
現実から逃避できるものを求めてこの場から離れることを最優先にした。

～千冬～
誰にも悟られないよう小さくため息をつく。
一夏達は無事か・・・
その現実が自分に一息つけるだけの時間をくれる。
それもあいつのおかげか。
そう思ってスクリーンを見るがあいつはもうその場にいない。

いつの間に・・・

そんなことを考えながらとりあえずアリーナに居るものたちに向けて言葉を発する。
【そいつが再び動かないか教師達が来るまで見ていろ。
教師が来てからピットに戻るように。】
その言葉を守り、一夏達は教師達が来るまで乱入者を見張っている。
少しすると教師部隊がやってきて乱入者の機体を包囲し、回収に入る。
わずかな時間をとても長く感じたこの戦いに幕を下ろすための言葉を再び発する。

【今度こそご苦労だった。
よくやったな。】

返済（後書き）

今日はとりあえずここで終了です。
久々の更新でしたが、チェックしていただけると幸いです。
感想お待ちしています。

分岐（前書き）

動きます。

分岐

～アリーナ～
～一夏～
【とりあえずピットで待ってろ、私もすぐに行く。】
その言葉を聞き、一夏達はピットで千冬姉が来るのを待った。
待っている間にさっきの出来事を振り返る。

「いや、しかし驚いたな。
何がおきたかと思ったら、吉田が俺達の上に乗ってるんだからな。」

「私、何がおきてたかわかんなかったんだけど。
えっ、何!?あれって私達の上に吉田が乗ってたの?」

「あぁ、吉田が俺たち押さえつけてたんだよ。
最初は何かと思ったけどな。」

そう言う一夏の顔はわずかだが笑みが見える。

「何を笑っている。
お前があんなところでだらだらしているからあんなことになるんだ。
」

「そうですわよ一夏さんっ！
笑い事ではありませんわ。
あの時あの野蛮人が居なかったら今頃お二人ともここに立っていま
せんでしたわよ！」

箒とセシリアにそう言われ一夏の顔は元に戻る。

「そ、そうだな・・・あの攻撃が当たってたら今こうして話してられないか・・・」

その言葉が出るのと同時にピットに
千冬姉がやってくる。

「あれだけの後に話している余裕があるのか。
何ならあの機体の回収作業を手伝うか？」

とんでもない。
そんなことやらされたらいつ帰れるかわからない。

「「「「大丈夫ですっ！！！」」」」

四人同時にその言葉を発した。
その言葉を聞き少し残念そうにする千冬姉が口を開く。

「まぁいい。
今回の件だが、実験機の暴走ということで処理することになった。
くれぐれもあれが無人機だったなどと他の者に口にしないように。
その時は覚悟しろよ。」

その目は本気だ。
何をさせられるかわからない。

「「「「もちろんです！！！」」」」

「では解散だ。ゆっくり体を休めろ。」

ふぅ、帰ってシャワー浴びよう。
そんなことを考えながら扉に向かう。
ピットの扉の前に立ったとき、千冬姉に声をかけられる。

「織斑、凰。
お前達は・・・」

～春～
部屋に戻りシャワーを浴びながら自分のしたことを振り返る。

最後の攻撃に反応したことを。
何であそこであいつらを庇うように・・・

「クソッ！」

浴室の壁を殴り不満をあらわにする。
自分のとった行動が気に入らなかった。
他人なんかどうでもいいはずだ。

自分には関係ない連中だ。
それなのに体が動いていたことが面白くなかった。

そのせいで俺はさらに恐怖を蓄積することになったというのに・・・

やっぱりこんなところに来るんじゃなかった。
後悔しかない頭を切り替えるためシャワーのお湯を水に切り替え、頭と体を一気に冷やす。

シャワーを終え、着替えを済ませ一服しようとタバコに火をつけようとしていた時この部屋では絶対に聞こえるはずのない音が聞こえた。

コンッコンッ！

聞き間違いだろう。
無視してタバコに火を・・・

コンッコンッ！！！

在りえない。
ドアの向こうに人が居るはずがない。
無視してタバコに火をつける。
煙を取り込もうとした瞬間・・・

ドンッドンッ！！！

確実にドアを叩く強さが変わった。
タバコを灰皿に置き、しぶしぶドアに近づく。
誰だ・・・厄介な客になんて言ってやろうかを考えながらドアノブに手を伸ばす。

春は気付かなかった。
いや、この世界の誰も気付きはしないだろう。
ドアノブに手を伸ばしドアを開けた瞬間、再びあの音が。

初めて男がＩＳを動かしたときに鳴ったあの音が響いたことに・・・・

『ガッチャン！！！！』

分岐（後書き）

さぁ、来客は誰でしょうか？
続きます。

報酬（前書き）

来客のご登場です。

報酬

人間は生きていくうえでさまざまな言葉を口にする。
その多くは人と投げ交わす言葉。
それは相手にこの感情を伝えたいから。
相手にこちらの気持ちを知ってほしいから。
そんな言葉の中で、ある言葉を一切使わなくなったとしたら、その言葉の価値を忘れてしまうだろう。

『　　』

相手がこちらに向けて届かせようとして使う言葉の価値は、相手に使われてこそ初めてその価値に気付くのだ。

～？？？～

私は今、吉田春の部屋の前に立っている。
それはなぜか？
用事があるからだ。
そして、いくつかの目撃情報によって導き出された答えだった。

証言　1
「知らないわよそんなの。それより、もう安全なの？」

証言　2
「えっ？もう寮に帰ったんじゃないの？」

証言　3
「私達が出たときにはもう居なかったけど・・・」

証言　４
「吉田君?あぁ、なんかさっきすごい勢いで走って行ったよ。」

証言　５
「彼が寮と学校意外に居るの見たことないから寮なんじゃない?」

証言　６
「私達も探してるんだけど居ないんだよねぇ～
お礼しようと思ったんだけど・・・」

ｅｔｃ・・・

とのこと。
一番確率が高いのが学校か寮のどちらかという答えにいたる。
あれから校舎に行くような馬鹿はいないだろう。
よって答えは一つ。
つまりここだ。

にしても、居場所を聞いていて思ったのは周りがあまり吉田春という人物に関心を持っていないようだった。
最初の発言から考えたらそんなものなのかな・・・
そのくせ一夏のことには過敏に反応して・・・
考えたらイライラしてきた。
そんなことを考えながら扉を叩く。

コンッコンッ！

少し待ってみるが返事は無い。

気付いてないのかもしれない。
もう一度。
確実に聞こえる大きさで。

コンッコンッ！！！

やはり返事は無い。
いないのだろうか？
だが他に居る場所の証言も取れなかったのでここしか当てが無いので仕方が無い。
三度目の正直ということもある。
そう思い扉を叩くが、その手には確実に最初より力が込められている。

ドンッドンッ！！！

イラッ

額に薄く青筋をたて、体をわずかに揺らしながら考える。
そうか、きっと居ないんだ。
なら誰かが来たことをわかるようにしといてやろう♪

そう思った彼女がとった行動は・・・
扉から数歩離れ、全力で扉に向かって蹴りを放つことだった。

～春～

ドアノブに手をかけ、扉を開ける。
そして俺の目に飛び込んできたのは、文字通り俺に向かって飛び込んできた女だった。

身長差で俺の下腹部にけりが直撃する。

悶絶

数歩下がり、腹を押さえながらひざから落ち、腹を抱えるようにうずくまる。

ありえねぇ・・・

その間俺に蹴りを食らわした本人はというと・・・

「えっ、あっ、ちょっ、ま、また後で来るから・・・
その時はすぐ出なさいよ！！！」

そう言い残して去っていった。

通り魔とはこんな感じなのだろうか・・・
そんなことを考えながら体を気遣うのだった。

～一時間後～
扉の横にある紙を貼り付け、部屋に戻る。
動けるまでになった体を引きずりながら椅子に向かう。
一服しなきゃやってらんねぇ。
そんなことを思いさっきは吸えずに燃え尽きたタバコを無視し新しいタバコに手を伸ばす。

やっと一服だ。

「はぁ～、生き返る。」

ありえない日常を忘れ去ろうと次に手を伸ばすのはラム。
グラスに注いで口に注ごうとした瞬間・・・

コンッコンッ

どこかで見てるんじゃないかとしか思えないようなタイミングでノックがやってくる。
そしてその主はさっき俺に一撃をくれたあいつだろう。

「ドアの横に貼ってある紙に心当たりがあったら帰れ～。」

そう言ってグラスを再び口へ向かって傾ける。

～???～
「はぁ？紙って何よ？」
そう思い扉の周りを見渡すと・・・
確かに紙があり、その内容は・・・

【猛獣はＧｅｔ　ａｗａｙ！！！】

プチンッ

さっきは当てる相手を間違えた攻撃をもう一度放った。

〜春〜
ドゴンッ！！！

うおっ！
なんだ！？
やけに鈍い音を放った扉に足を進める。
そこで見たものは文字通り扉を蹴り破った女が立っている姿だった。
その姿はまさしく猛獣だろう。
自覚症状があったのか。
そんなこと言ったら俺も扉のようになるだろう。
諦めるしか無いようだ。

「・・・はぁ〜、もういい。
なんだよ。何のようだ？」

扉の上に立っている人物に向かって言葉を発する。

「あんた、喧嘩売ってんのっ！？」

早速これか・・・
面倒な・・・

「あぁ、悪かった。剥がしとくから。」
次はクマ出没注意とでも貼っておこう。

「で、何のようだ？
わざわざ扉けり破りに来たのか？」

来訪者に向かって用件を尋ねる。
その言葉を聞き、少しだけ言葉が通じる様になった来訪者は、

「っんなわけあるかっ！
あんたがいちいち挑発するようなことするからでしょうが！」

その挑発に乗らなきゃいいじゃねぇか。

「悪かったって。
で、早く用件。」

もういいから用事済ませて帰ってくれ。

「もう、変なことに時間かけさせるからじゃない。」
不満そうに腕を組みながら俺のほうを見据える。

「今日のことよ。
あんただって？
最後庇ってくれたの？」

そのことか。
助けたのに文句を言いにこられる筋合いは無い。

「なんだ、文句なら聞く義理は無い。
さっさと帰れ。」

そう言って扉だったものから引き摺り下ろし、部屋から出そうと服の襟をつかんで歩き出す。

「ちょっ、ちがっ！」

来訪者の言葉を無視し、部屋と廊下の境界線まで連れて行く。

「じゃぁな。
俺はこれから修理に忙しい。」

そう言って扉の亡骸を立てて修理を始めようとした時、ある言葉が飛んでくる。

『　　』

何だ？何て言った！？

その言葉に驚いて振り返るとそこには来訪者が俺の顔を見ていた。

「ちゃんと言ったわよ？
これで二回分だからね。
じゃぁ！」

そう言って俺の部屋の前から離れていく来訪者に俺は声をかけようとする。

なんて声をかける？

俺は、あいつの・・・

「おいっ！」

来訪者を呼び止めようと普段出さないような大きな声を出す。

来訪者は立ち止まりこちらを振り返る。

「何よッ？」

その顔は少し驚いている様だ。

「っ、あっ、ぅ・・・お前、名前はっ？」

そう言うと来訪者は、

「あたしの名前は・・・」

それだけ言って去っていった。

それから俺は一人扉の応急処置をしながら考える。

いつ振りだろうか。

自分から相手に名前を尋ねたのは？

そしてあの言葉を聞いたのは？

扉を直し、向かう先はグラスが待っている椅子ではなく、ベット。

自然と体がそちらに導かれ、俺もそれに抵抗することなく従った。

その夜俺は見ると思っていた悪夢は見ることはなかった。

いったいどれだけ久しぶりだろう？

アルコールに満たされずに眠るのは。

いったいいつ振りだろう？

こんな感情を思うのは。

報酬（後書き）

春の不憫な扱いに涙が出そうです。（ＴｏＴ）
と、こんな感じでドタバタは終了ですかね。
今回のタイトルは自分の中では内容に合わせることが出来たんじゃないかなと思います。
まぁ、ありきたりっちゃありきたりなんですけどね（笑）
転校生二人がやっと出てきそうですが、以前どこかのあとがきで書いたように今月中に出せるかどうか・・・（笑）
感想お待ちしてます。

古傷

～旭日重工～
～研究所～
～ベニー～

今日はダッチが収集したデータを持って研究所に来ているんだが、どうにも様子がおかしい。

「ねぇダッチ？」

そう声をかけるだけで、ダッチはビクッと体を震わせ、こちらの言動に注意を払っている。
僕が何かしたのかい？
その行動の不自然さは消えないが、今日は仕事の話だ。

「これが今月分のデータだ・・・」

そう言って挙動不審ながらに僕にデータを渡す。

「了解。
確かに預かったよ。」

そう言ってデータ内容を確認する。
かなりの量の映像データだ。
これだけの量があればかなり第三世代兵器を解析できるだろう。

「ごくろうさま、ダッチ。
お詫びってほどじゃないけど、面白いものを見せてあげるよ。」

「へぇ、そいつはクールなもんなのか？」

そう言うとダッチはこちらに身を寄せてくる。

「もちろん。」

そう言ってまずはダッチに給料明細を見せる。

「最高にクールだぜ、ベニー！
こいつを見りゃ昨日までの地獄が報われるってもんだ。」

さっきまでの挙動不審な彼とは別人のように騒ぎ出すダッチ。
どうやら今月の給料はずいぶんと羽振りがよかったらしい。
上乗せ分で稼いだ分でおごってもらわないと。
そう考えながらもう一つ、僕は画面を開きダッチに今度は別のものを見せる。

「ダッチ、もう一つあるんだけど、どう思う？
多分世の中でこれだけだと思うよ。
こんなクールなものは。」

そう言って見せたものにダッチの顔はさっきまでとは一変して難しそうな顔をしている。

「・・・何だこれ？」

「トゥーハンドのオートクチュールみたいな物かな？
だけど、このタイプの設計は多分どこも着手してないと思うよ？」

そりゃそうだろう。
ＩＳは宇宙空間での活動を想定した上で開発された物。
今僕の前に写っているそれは、確実にそれとは真逆のコンセプトの元に設計されたものだ。
ダッチにもそれがわかったらしい。

「・・・これ、実用化しても需要あるのか？」

確かに、そこは難しいところかもしれないけれど、宇宙という未知の領域を食い物にする前に、自分達の星を徹底的に食い潰すための発明品だ。
需要がまったく無いわけではないだろう。

「まぁ、トゥーハンドには後付武装領域に余裕が無いから、専用のハンガーに取り付けて、展開してからの装備になると思うけどね。まだ完成もしていない試作品だからどうなるかはわからないけど、おそらく試験運用に君に送られることになると思うよ？」

そう言うとダッチは心の底から嫌そうな顔をしてこっちを見る。

「これ、開発にベニーも絡んでんのか？」

「いいや？
これは僕の管轄外だね。
確か今年入社した社員が企画して設計もしているって話だったけど・・・名前なんていったかな？」

大して興味が無かったので名前なんて覚えちゃいない。
ただ、僕のトゥーハンドにどんなものを付けるのか、それだけが気になったからこのデータを頂戴しただけだった。

「何でもいいさ、好きにしてくれ。
俺はただそいつのデータをとりゃいいだけだろう？」

そう言ってタバコに火をつけるダッチ。
どうやら諦めたらしい。

「あぁ、実験品のデータ収集も君の仕事だからね。
立派な会社員の務めってわけだ。」

「俺にクソったれのホワイトカラーみてぇなスーツ着ろってか？
勘弁してくれ。」

そう言うとダッチは深いため息をついて扉に向かって体を動かせる。

「どこ行くんだい？」

「トイレだよ、こんちきしょう。
また面倒なもん押し付けられるかと思うと気が重くなってよ。
クソと一緒に出してくる。」

そう言ってこの部屋から出て行った。
その後姿を見届けた後、僕は春の集めたデータを検証する。
そうして大量の映像を見て考える。
これだけのデータがあれば、うちでも・・・
そう、今僕の目の前にあるのは世界でも力をいれて開発されている物達の貴重なデータだ。
それを余すところ無く利用しなければ・・・
僕は思考の海へと潜って行った。

～春～

トイレに向かって歩みを進める。

タバコを銜えながら息を吐くその姿はもう完全に十代が見せる姿ではない。

また面倒なもん押し付けられそうだな・・・

今から気が重いのを払拭しようとしているとある部屋の前を通りかかる。

そこはもう一年ほど誰も使っていない部屋。

春の頭にはその部屋の住人との映像が一瞬映し出される。

「クソッ！」

その映像を見なかったことにしてトイレに向かって歩を進めた。

古傷（後書き）

本日はもう一話更新いたします。
１８時にお会いしましょう。

銀と金（前書き）

何とか、このお二人の投入が間に合いました・・・
ではどうぞ。

銀と金

～春～

休みが明け、再びあの学園での生活が再開する。
気が重い。
もう行きたくねぇな。
少し遅れてやってきた五月病に悩まされながら嫌がる頭を無理やり体で制し、学校へと足を進める。

相変わらず朝から騒がしい教室の前に立ち扉を開けると一瞬で静寂が訪れる。
静かになって何よりだ。
そんなことを思いながら自分の席に着く。
そして机に突っ伏していると周りに人の気配を感じる。

「なぁ吉田、ちょっといいか？」

また厄介ごとを持ち込んでくれそうな声を俺は無視していると暴君がやってきたのか教室が完全な静寂に包まれ、空気が変わる。

「おはよう諸君。
休日は充実していたか？
そんな諸君に新しい活力をくれてやろう。
入って来い。」

そう言うと扉が開き、その後に訪れたのは超音波攻撃だった。

「「「「「キャーーーーーーーーーッ！！！！！」」」」」

ウゼェ、そう思い顔を上げるとそこには信じられない光景があった。

教壇の前に立っているのは暴君と山田先生と、もう二人。

そのうちの一人に異常があったのだ。

金髪、整った顔立ち、そして、

「シャルル・デュノアです。
皆さんよろしくお願いします。」

そう、その格好は完全に男のそれだった。

「「「「「キャーーーーーーーーッ」」」」」

何度騒げば気がすむんだこのクラスの馬鹿どもは・・・

それにしてもデュノアか・・・

旭日重工と同じようにＩＳの開発企業だ。

嫌々ながら会社員を兼任している春だ、それくらいの知識はある。

そして、こんなクソみたいな時代、企業なんてもんが考えることはどこも一緒だろう。

・・・別口で稼ぐのも悪くないかもな・・・

その頭には真っ黒い文字で、転売という言葉が明確に表示されていた。

そんなことを考えていると、

「ラウラ、お前も挨拶をしろ。」

「はっ！」

そう言って姿勢を正し、背筋を伸ばして言葉を口にする。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

それだけ言うと姿勢を軽く崩す。
あっさりしている。
あれぐらいのほうが好感がもてそうだ。
よく見るとそいつはクラスを値踏みするかのように視線を飛ばす。
そして、ある人物のところでその視線が止まり体が動いていった。
そして次の瞬間。

バシンッ！

痛快な音が聞こえ俺は思わず笑ってしまった。

「ハハハッ！」

そのリアクションに回りは困惑している。
初対面にビンタか。
最高にクールじゃねぇか。

そんなことを考えていると暴君が言葉を発する。

「馬鹿はそこまでだ。
貴様ら、さっさと着替えてグラウンドに集合。
遅れたものはどうなるかわかっているだろうな。」

その言葉を聞き春以外の人間の時が早送りで再生される。
その中を一人いつも道理の動きでグランドに向かおうと教室を出る。
その道筋は織斑達と同じ道。
だが、俺には何の面倒ごとも降りかかる事は無いだろう。

なぜなら、厄介ごとは先に行った連中が引き連れて行ってくれたからだ。
俺の前方から大音量の奇声が飛んでくる。
おめでたい連中を無視して俺は一つ下りる階段をずらして更衣室に向かった。

～更衣室～
俺が着替えていると疲労困憊の二人がやってくる。

「吉田っ、お前何でもう着替えてんだよっ！」

肩で息をしている織斑に理不尽な言葉を浴びせられる。

「知るか。お前たちのおかげでいつもより廊下が空いてただけだ。」

そう言って俺はＩＳスーツの上半身に腕を通して着替えを終える。
着替えが終わったので更衣室から出ようとすると声をかけられる。

「君が吉田春君だよね？
シャルル・デュノアです。
これからよろしくね。」

そう言って手を出してくるこいつの手を払おうとしたが・・・
取引先になるかもしれない相手を邪険にすることは無い。
その手をとって力を込める。

「こちらこそよろしく。」

そのやり取りが一夏には信じられなかった。
春の行動が最初に自分と交わしたやり取りとはまるで違うものだったからだ。
釈然としない気持ちを抱きながら着替えを始める。
そんな織斑を横目で見ながら手をつないでいる相手、デュノアに耳打ちをする。
「お前の欲しいものは、もう俺が持っている。
心当たりが無かったら無視してかまわないが、心当たりがあるなら、放課後俺の部屋に来い。」
その言葉に体を硬直させるデュノア。
間違いないな。
そのリアクションに確信を持って更衣室からでてグランドに向かった。

銀と金（後書き）

さぁ、どんなやり取りになるのでしょうか？
その内容はまた数話後に。
感想お待ちしてます。

攻める快感（前書き）

サディスティック星の王子様の誕生です。

～グランド～
～春～

着替えを終え、グランドに到着すると、そこには着替えが終わった女子達が集まり話をしている。

「え～、でも・・・」

「いや、意外と・・・」

「確かに、ありかも・・・」

所詮くだらない話だろうとその話を無視して適当にグランドに立っている。

そのとき春は知らなかった。
女子達が話していた内容が自分のことだと。
あの襲撃の際、脱出するために動いた春の株価は連日ストップ高を記録し、今まで避けていた女子達の中で吉田春を一時期ドライアイスとまで言っていたが、今では逆にありなんじゃないかという話が出ていたのである。
そんなことを知るはずも無ければ興味も無い春は静かに教師達の登場を待った。

少し待つと織斑達がやってきて、その後すぐに織斑先生がやってくる。

「全員そろっているか？
いない者の名前を挙げろ。」

その言葉に誰も返答を返さない。

「よし、そろっているな。
では今日は実際に起動と歩行の訓練だ。
その前に面白いことをやってもらうがな。」

その顔は大変楽しそうに、そして悪いことを考えている顔だった。

「オルコット、凰。
前に出ろ。」

その言葉に両者は驚いて前に出る。

「何でしょう？」

「何ですか？」

両者ともに前に出された理由が理解できていないようだ。

「お前たち二人には模擬戦をやってもらう。
全員の手本になるようにな。」

そう言うと二人は言葉にはしないがめんどくさそうな空気をかもし出す。
だが、暴君に何か耳打ちされるとやる気がうなぎのぼり、

「ここは私の出番ですわねっ！！！」

「私以外に誰がやるっていうのよっ！！！」

あの二人がやりあうのならそれはそれでありがたいデータが取れそうだな。

そんなことを考えていると、上空から異音と奇声が降りて、いや降ってくる。

『ど、どいてくださ～い！！！』

その声に空を見上げると、小さな点が大きくなり、明らかに止まれるスピードではない速度で落ちてくる。

・・・またか。

俺は黙ってＩＳを展開し、その後にやってくるであろう衝撃に備えた。

ドォーーーーン！！！

どうやらこの学園は地面に穴を開けるのが恒例行事らしい。

その落下後には山田先生と織斑が重なり合っていた。

その光景に目を奪われている春の後ろではある会話が行われていたことを知るよしも無い。

「これって、守ってもらったのかな？」

「えっ、でも・・・」

「いや、やっぱり意外と・・・」

そんな会話を知るよしも無い春はその光景に目を奪われていると、織斑パーティーが動き出す。
最初に動いたのは白人だった。
ブルーティアーズが、的確に織斑のいた場所を狙う。
偶然動いたために避けられた織斑に残念そうに言葉をかけている。
そのつきに動いたのは、確か・・・今世紀最大の天才の妹、掃除用具。
織斑に向かって言葉の刃を振り下ろす。
その次に動いたのは警報機だった。
両手に持った剣を織斑に向かって投げつける。
それを打ち落としたのはなんと、間抜けに地面に激突した山田先生だった。
その光景は意外と言えば意外だったが、春にはそれとは違う感情が一瞬だがよぎる。

ムカッ！

ん？
何だ今の感じ？
そんなことを考えていると暴君から指示を与えられた二人が、山田先生と勝負をすることになっている。
あんなことをした人物と勝負になるのかと思っていると、俺の予想を裏切り勝負は圧倒的なまでの強さを見せた山田先生の勝利となる。
その華麗な操縦技術は俺と同じ機体を使用しているとは思えないほど華麗なものだった。
才能の差に嫉妬すら覚える。
そんなことと思っていると暴君から言葉が飛んでくる。

「専用機持ちがリーダーになり他の者に指導するように。
振り分けはさっき並んでいた列でいいだろう。

わかったらさっさと分かれて指導に当たれ。
無駄な時間をとるようなら私が特別な指導を与えてやろう。」

その言葉を聞いて速やかに行動を開始する生徒達。
織斑とデュノアのところは予想道理というべきか、やけに騒がしい。
対して俺と眼帯の・・・名前なんだっけ？
最初の行動に興味はもてたがその前の自己紹介を聞いていなかったので名前がわからない。
まぁいい、独眼竜で。
この二つはやけにおとなしいものだった。
独眼竜のグループはさばさばと指示を与え、こなして終了。
その繰り返しをしていたが、俺のグループは違う意味でおとなしかった。
その理由は俺のグループの面子にあった。
女子達がやけに大人しい。
それどころかどこか挙動不審だ。
どこかで見た顔だな。
名前は知らないが確か話したことはある・・・。
何だっけ・・・
しばらく指示も与えず自分の記憶をさかのぼる。
そして答えを見つけたときの春の顔はとても悪い物だった事は間違いないだろう。

「よしっ、誰でもいい。
とりあえずこいつに乗れ。」

そう指示を与えると譲り合っている女子達の一人がしぶしぶＩＳを装着する。

そうか、お前が生贄か。

ＩＳを装着した生徒をどうしてやろうかと考え、答えを出した。

「まずは歩行だな。
とりあえずここまで歩いて来い。」

そう言って少し距離をとり、自分のところまで歩いてくるように指示を出す。
今まで決して見せたことの無いような春の言動に戸惑いながら生贄は少しずつ俺に向かって歩いてくる。

少し時間はかかったが俺の元に無事到着し、ほっと胸をなでおろす。

「よし、ご苦労様。」

そう言って労をねぎらう言葉をかける。
だが俺の中での本番はこれからだ。

無言で生贄の後ろに回り、ＩＳを装着した体の両脇に手を入れ急上昇する。
突然のことに周りの生徒も、そして暴君も言葉をかけるまもなく俺は人が点に見えるほどの高さまで上昇する。

「えっ・・・えっ！？
ちょっ、よ、吉田君！？」

生贄が俺に声をかけるがその声を無視してその場で浮遊する。

「えっ・・・えっ、ちょっと、これどうやって・・・」

そう言ってこの状況からどうにか脱出しようとするが、無理だろう。

まだ数えるほど、そして稼働時間も限られたような奴がどうにかできるような状態じゃない。
あわてている生贄の耳元である言葉をささやいてやる。

「さぁ、これから楽しい事をしようじゃねぇか。」

そう言って俺のとる行動は、もはや俺が上昇する＝という方程式が出来ているほど有名となった行動、急降下だった。

「――――――――――ッ～～～～～～～～～～～～！！！」

声になっていないほど甲高い叫びを上げどうすることもできずそのまま急降下に身を任せる。
そして生贄に言葉をかける。

「さぁ、地面まで１０ｃｍで止めてみなっ！」

そう言って手を離す。

そんなことがパニック状態の生贄に出来るはずがない。
手足をバタつかせながら、どうにかしようと必死にあがいている。
そして、地面まで後１０ｍというところで諦め、目を瞑って激突に覚悟を決める。

だが襲うはずの衝撃がやってこない。
恐る恐る目を開くと地面まで後３ｍというところで体が止まっている。
周りを見渡してみると、自分のＩＳの足を掴んだ吉田春がそこにいた。

「楽しかっただろ？」

その顔はとても楽しそうに、無邪気な子供のような表情だった。
春が手を離すと重力に逆らわず生贄は当然のように地面に落下する。
自分が思っていた衝撃よりもはるかに軽減された衝撃が襲ってくる。
とりあえず自分の身が安全であることにホッとした。
そして生贄を襲った恐怖が今になって訪れる。
その顔にはあふれ出ている涙に鼻水。
そして、括約筋が弛緩し、体の外にある液体が放出された。
「～～～～えぇぇぇぇぇぇっん」
その光景にその場にいた全員が視線を集める。
当然あのお方も・・・

「吉田っ！！！」

まぁ、今回は仕方ないか。
黙ってそのお叱りを受けることにした。
そのお叱りを受けている中、視線をさっきまで俺がいた位置に向けると、泣き叫んでいる生贄の周りには俺が教えるはずだった他の生徒達が集まり慰めの言葉をかけている。
暴君のお叱りの最中に他の行動をとるなんてことは自殺志願者に等しいだろうが、今回だけは動かないわけにはいかなかった。

「おいっ、吉田っ！！！」

暴君の言葉が飛んでくるが歩みを進める。
泣いている生贄の周りにいる奴らのほうに向かい歩を進めると生贄の周りにいた生徒達から敵を見るような目で睨まれる。

「ちょっと、何てことしてくれるのよ！！！」

「そうよっ、もし怪我でもしたらどうしてくれんのよっ！」

「あんた頭おかしいんじゃない？」

様々な暴言が俺に向かって飛んでくるが、そんなものは敗者の言葉、無いものに等しい無力な言葉だ。

一切視線をそらさずその場にいる全員に向かって言葉を向ける。

「たまたまそいつだったってだけで、お前らの誰が同じ目にあってもおかしくなかったんだ。

そいつに感謝しろよ。

そして、そいつの感じた恐怖が、織斑があの時感じた恐怖だ。

それに耐えられもしねぇ様な奴らが馬鹿にするような言葉吐くんじゃねぇよ。

なんなら今からお前ら全員体験してみるか？」

その言葉を聞いて俺に向かって言葉をはくことをやめる女子達。

そう。

俺の教えるはずだった奴らはあの時織斑を嘲笑した奴らだった。

あの時発した言葉を後悔させてやる。

それが俺の目的で、その目的は達成された。

さいっっっこうの気分だ。

「吉田・・・貴様、私の存在を無視とは・・・

楽しい話し合いをする必要があると思わないか・・・？」

そう・・・この一言さえなければ。

その後俺は残り全ての時間をグランドで正座で説教というシュール

な画ですごすことになった。

攻める快感（後書き）

まだまだこれからそちらの道を探求していってもらいたいものです。
感想お待ちしてます。

見えない影（前書き）

変化にいたるための道筋ですかな

見えない影

～春～

織斑先生との大変楽しいお話から解放され、己の物ではないようになった足を無理やり立たせ更衣室に向かう。

次の授業には確実に間に合わないだろう。

そんなことを考えながら更衣室の扉を開けるとまだ人がいた。

デュノアだ。

制服に袖を通し、もうここから出るばかりといった格好で俺と目があう。

「きゃっ！」

そう言って急いで自分の体を隠す。

「は？」

何やってんだこいつは？

その行動を無視して着替えを始める。

「ね、ねぇ、吉田君？

な、何もみてないよね？」

質問の意図が見えない。

何もって、制服の袖に手を通していた姿を見ただけだが？

意味がわからないので聞き返す。

「何もって、何をだ？」

そう言うと勝手に納得したのか息を吐き、

「ご、ごめんね。
な、何も見てないならそれでいいんだ。」

は？
わけのわからない奴だ。
この学園にはつくづく変な奴が集まるらしい。
その中に自分も入っているとは露とも思っていない春である。

「ねぇ、吉田君・・・
授業が始まる前に言ってた事だけど・・・」

そう言って俺に言葉を投げかけてくるデュノア。
ここで話すようなことではないだろうとこの場から追い出すために最適な言葉を返してやる。

「放課後と言ったろ。
ここで話してもいいが、あの担任のありがたいお話をお前も聞くことになるぞ？」

そう言うと状況が理解できたらしい。

「うっ、えっ、あっ。
そ、そうだね。
じゃぁ放課後。」

そう言って扉の前に急いで走り出すデュノア。
だが不意に立ち止まりこちらを向く。
何のようだ？

そんなことを考えていると言葉をかけられる。

「そう言えば今日のお昼に一夏達と一緒にお昼をとるってことになったんだけど、よかったら・・・」

相手の言葉を全て述べさせる前に俺の言葉でその先を制する。

「断る。」

まさかの即答にどうリアクションしていいのかわからなかったのか、扉の前で挙動不審になっているが、すぐに冷静になりその答えを受け入れる。

「そ、そう。わかった。
じゃぁまた後で。」

そう言って部屋から出て行った。
このやり取りをしている間も足の感覚は戻らず、俺が着替えて教室に戻るのは次の授業が終わる１０分前。
ありがたいお話を再び聞くことになったのは言うまでもない。

～昼～

もはや自分の指定席になった屋上の入り口の裏で、【１０秒チャージ二時間がんばれ】を口に流し込みながら時間が過ぎるのを待つ。
チャージが終わったので上着の内ポケットからタバコとＺＩＰＰＯ、携帯灰皿を取り出す。
喫煙者の最低限のマナーだ。
公共の場で吸っていることについては完全無視を決め込みながらタ

バコに火をつける。
自分の時間を満喫していると扉が開く音が聞こえタバコを落としそうになる。

「お、俺たちしかいないじゃんか。」

・・・あいつらか・・・
額に手を当て、この時間が終わってしまうことにがっかりしながらも、その場から動くことなく、ただ時間が過ぎるのを待った。
あいつらはのんきに昼食のようだ。
声から察するに5人。
デュノアの誘いを断ったことは正解だったが、この場所取りは失敗だったようだ。

やけに騒がしい昼食をとりながら話しているあいつらの会話を聞いていたわけではない。
だがパーティー効果がこの場で適用されたのかあいつらの会話が耳に入ってきた。

「なぁ、吉田ってさ・・・」

不意に自分の名前が聞こえたことに驚く。
まさかあれだけのんきな話をしているときに俺の名前が出るとは思っていなかったからだ。
予想外の出来事につい脳が続きを聞こうと会話に集中する。

～一夏～
「あいつって、一体どういう奴なんだろうな？」
そう言葉を口にするとセシリアから早速返事が返ってくる。
「どうもこうもありませんわ。
あんな男、ただの野蛮人で充分です。
いえ、人とつけるのもおこがましい。
野獣と呼ぶのがふさわしいですわね。」
「野獣って・・・
まぁそりゃちょっとやりすぎな所もあるけど、今日のことはこの前俺が言われてたことがあったからだろ？」
「まぁ確かにな。
やり方に問題はあるが、やったことは一夏を馬鹿にした者達への指導と取れなくもない・・・」
「いや、あれはさすがにやりすぎでしょ。
あの子、あの人数の前で赤っ恥かかされたのよ？
いくらなんでもあれはきついでしょ。」
「そうだけどさ、あれって吉田なりの優しさだったんじゃないのか？」
一夏のその言葉に一夏以外の時が止まる。
どうリアクションしていいのかわからなかった。

あれが優しさ？

そうだとしたら、不器用にもほどがあるだろう。

【自分、不器用ですから。】

その言葉を口にする吉田の姿がまるで想像が出来ない。

一夏以外の全員が困惑の表情を浮かべた。

「あの時、ほら俺が地面に激突した時だって、俺が激突したのを笑ってる人たちに向けてはあんな態度だったけど、俺には激突したこと自体を笑ったりはしなかったろ？

まぁ、あの後ちょっとあったけど・・・」

そういわれると確かにあの時吉田春は一夏自身を馬鹿にしたような態度はとっていなかった。

「まぁ、そうだな・・・」

「確かに、そうですわね・・・」

釈然としない気持ちもあるが一夏の言葉に賛成の票を投じる二人。

「ちょっと、私そんなこと知らないんだけど。」

「僕もちょっとわからないかな・・・」

その状況を知らない二人はどういう状況だったのかを説明してもらいたい気分でいっぱいだ。

「いや、二人が転校してくる前に・・・」

状況の説明をすると理解できたのか、しぶしぶ賛成に票を投じる。
その後しばらく、あ～でもない。こ～でもないと議論を酌み交わしていると一人が思い出したかのように言葉を口にする。

「あっ、そういえば私、あいつに一回・・・」

そう言って鈴が案内してもらったことを話し出す。
その話を聞いたあとにリアクションをとる。

「なっ、やっぱあいつみんなが思ってるよな奴じゃないんじゃないか？
なんっつ～のか、こう、人と付き合うのが苦手・・・みたいな？」

そう口にする一夏。
だがそれ以外のメンバーは・・・
いや、苦手な奴は人前であんな恥を書くようなことはさせないだろう・・・
そう思いながらも吉田の行動の中に微かな。
本当にかすかな優しさを見た気がした。

「まぁ・・・確かに少しは印象が変わったか・・・」

「仕方ありませんわね。
野獣から、野蛮人に昇格させてあげてもよろしいですわね。」

「まぁ、ちょっとだけどいい人ってことにしといてあげるわ。」

「・・・そうだね・・・」

一夏に上手く丸め込まれた気がしながらもそれぞれの中で春のイメージがわずかだが好転的なものに変わった。

一人を除いて・・・

～シャルル～

そんなことやってたんだ・・・

春の入学してから今日までの行動を聞いて正直驚いた。

あの食事に誘った時、あそこまで即答で断ったことにも自分の中で納得できる理由が出来た。

そして考える。

ひょっとして自分はとんでもない人物と取引をしようとしているのかも知れない・・・

そんなことを考えながらこの場の空気を壊すことなく会話の中にはいって話を続けるがその頭の中は、彼とどのように取引をしようか、それだけをただ考えていた。

～春～

今まで自分のいないところでどれだけ陰口を叩かれようと知ったこ

とではなかった。
それは周りが勝手な期待を俺に押し付けてきただけで俺がそれに応える必要がないと理解できるようになったから。
だが今回は違った。
確かに陰口を叩かれたが、俺という人間を卑下する類のものではない。
むしろ、俺という人間を認めるといった驚きの内容だったからだ。
そんなことを言われたのはいつ以来か・・・
またしてもある人物との映像が頭を過ぎるがそれを無視しながら新しいタバコに火をつける。
その煙は空にとけ、形は一瞬しか残らなかった。
それと同じく、春の顔には一瞬だけ、ほんの一瞬だけだが暖かな笑みがあったことを本人も含め誰も知らない。

そして、春の新しい伝説が学園の新聞部によって知らせれることになる。

【吉田春！まさかの行動！！！
公衆の面前での調教か！？ペットにまさかの聖水プレイ！？】

その新聞が春の目に入ることはなかったが、その記事を読んだ一部の変わった趣味、趣向を持った生徒の間で春の株価が最高値がとんでもなく跳ね上がったことはあまり知られていない。

見えない影（後書き）

人間、いないところでけなされるのが日常で、褒められることのほうが圧倒的に少ないことでしょう。
皆さんはもし自分がいないところで自分のことがほめられているとしたら、その時何のリアクションもとらずにいられますか？
私には無理でしょう（笑）

真っ黒な商談（前書き）

今回はお二人の（会社との）取引です。
色気のある話で張りませんな（汗）

お気に入りに登録してくださっている方が５０名を超えました。
大変ありがたいことです。
これからも呼んでいただけるようがんばっていきたいと思いますのでお付き合いください。

真っ黒な商談

～放課後～
～春～

放課後になり、アリーナで織斑が訓練をしている。
目新しい上達はない。
あいつは馬鹿の一つ覚えのように常時雪片を展開し、エネルギーを消費しながら戦闘をしている。
馬鹿だ。
そんなことを思いながらデータを取っているとデュノアがやってくる。
あいつの機体もリヴァイヴか・・・
そりゃ自社の作品なのだから当然か・・・
そんなことを考えていると二人が模擬戦を始める。
圧倒的だな。
操縦技術の差がありすぎて世代差など関係なかった。
山田先生と白人達の試合のような一方的な展開で織斑は撃墜される。
ちっ、やはり俺にＩＳを操る才能はないな。
そのことを再確認させられるような試合展開だった。
二人が話している様子を遠巻きに見ている三人。
自分が好意を寄せている相手が同じ男子とはいえ仲良くしているのが気に入らないようだ。
どうでもいいな。
そう思い記録をつけるのをやめ、離れようとしたときに目の端が大変面白そうなものを見つける。

真っ黒いＩＳ

それに乗っているのは独眼竜だった。
それを見つけた春の顔は醜くゆがんでいたことだろう。
さぁ、何を見せてくれる？
そんな期待を胸に、再びアリーナでの記録を再開した。

いくつかの言葉を交わしているようだが、ここからでは何を話しているかなんてさっぱりだ。
だがどうやら独眼竜は気に入らなかったらしい。
織斑に向かって攻撃を仕掛ける。
肩に積んだレールカノンが轟音を奏でる。
直撃だろう。
そう思っていたが、そうはならない。
デュノアが防いだのだ。
ずいぶんお優しいことだ。
そんなことを考えていると放送がかかり、それに興がそれたのだろう。
独眼竜は離れていった。

あれがあいつのＩＳか・・・
そのデータに興味を示しながら俺は寮へと足を向けた。

～寮～
部屋で俺の時間を楽しんでいると、

コンッコンッ！

どうやら来たようだ。
ドアの隣に張りなおした【クマ出没注意!!!】に対し、蹴破るのではなくノックしてきたので間違いないだろう。
ゆっくりと体を起こしドアに向かって足を進める。
ドアノブに手を伸ばし、扉の前に立っていた予想道理の人物に声をかける。

「ようこそ。」

そう言って部屋の中に招き入れた。

「そこに適当に座れ。」

デュノアをベットに座らせ、自分はさっきまで座っていた席に腰掛、グラスを手にする。

「えっと・・・
それは何を飲んでるのかな?」

会話の糸口を探して口にした言葉だったのだろうが、俺はそれに対して行動をとる。
黙ってグラスに注いでやり、デュノアに手渡す。
それのにおいを嗅ぎ首をかしげながら口に入れる。

「・・・?!
けほっ!!」

咳き込みながらグラスを置き、自分の中に入ってきた物をを吐き出

そうとする。
その光景を見ながらタバコに火をつけ一服する。
だがあまりにも長い間咳き込んでいるので仕方なく水を入れたグラスを差し出す。

「ご、ごめん。」

喉が焼けてしまったようだ。
だがそんなことはこれから話すことに関係ないと、飲み終えるのを待って俺から声をかける。

「で、率直に聞こう。
お前、いやデュノア社いくら出す?」

~デュノア~
まださっき口に入れたもので喉が痛い。
水を飲んでも洗い流せるようなものではなかった。
それは彼は僕の前で飲み干し、再びグラスに注いでいる。
気が付けばタバコまで・・・
そんなことを考えていると彼から直球。
時速300キロの剛速球が投げかけられる。

「で、率直に聞こう。
お前、いやデュノア社いくら出す?」

「けほっ?!」

その言葉に思わず咳き込んだ。
もう少し前置きがあると思ったのにいきなり本題とは・・・
本当に彼は一夏が言っていたような人間なんだろうか？
そんなことを考えながらその商談を進めるため返事を返した。

～春～

「えっと、まず君が持っている物が何かを教えてもらえるかな？」

デュノアにそう尋ねられる。
当然だろう。
ゴミみたいなデータに金を積む企業などいない。
俺がこれまで記録したデータの概要を大まかに伝えてやる。

「まずは白式の一次移行後の戦闘データ。
その次にブルー・ティアーズの装備の概要と実戦データ。
甲龍の映像データ。
そして・・・これは多分どこに手を回しても手に入らないだろうな。
この前突然乱入してきた所属不明のＩＳの戦闘映像データだ。」

そう言ってデュノアに概要を説明する。

「・・・それ、全部君が？」

「当たり前だ。こんなこと手伝ってくれるような奴がいるわけないだろが。」

こんなことが公になれば社会的にただで済むわけがない。

それでもこれだけのデータを収集した春に、デュノアはただ素直に感心した。

「・・・すごいね。」

「全部給料のためだと思えばこなせる。で、さっきの質問に戻るぞ?」

そう言うとデュノアは会社に確認したであろう金額を提示してきた。

「１００万ユーロでどう?」

普通に聞けばその金額で飛びつくだろう。

だが、この男は違う。

篠ノ野束により、日本の通貨価値は跳ね上がり、１$が１０円、１ユーロが８円という世界金融を崩壊させる事態に陥っているのだ。

そんな中、世界最強の通貨を使用しないような取引など話にならない。

俺は黙って扉に向かって歩き扉を開ける。

「帰れ。」

そう言うとデュノアはあわてて金額を吊り上げてくる。

「１２０、いや１５０で・・・」

どうしてもデータが欲しいらしいが、そんなはした金でやるようなデータは無い。

「出ろ。」

そう言うとまだ諦めが付かないのだろう。

「ちょっと待って、今会社に電話して聞いてみるから・・・」

そう言って急いで電話をかけ始める。

「もしもし、僕です。
はい、そのデータのことなんですが、提示した金額ではどうにも・・・」

フランス語で話しているこいつの言葉はさっぱりだが、感じからするにどうにも進行速度は期待できない。

デュノアの肩を叩き俺のほうを向けさせ言葉をかける。

「おい、俺が言う言葉を出来るだけ強く訳せ。」

そう言って言葉を口にする。

「よく聞けドテチン、ユーロなんて甘っちょろいこと言ってんじゃねぇ！
円だ。それで３０００万。
それ以外で取引するつもりは無ねぇ！
わかったらとっとと口座番号控える準備しやがれ、このクソッたれ！！！」

そう言うと少し驚いていたようだがその言葉を何とか訳そうと電話の相手に伝えている。

そのやり取りを待っていると向こうから提示額が出される。

「えっと・・・２０００で・・・」

「３０００だ。」

「２２００・・・」

どうやっても安く済ませたいらしい。
とどめの一言を口にする。

「これも伝えろ。」

そう言って深呼吸をし、確実に電話の向こうの相手に聞こえる声量で話す。

「第三世代のこれだけのデータなめてんじゃねぇぞ！
他国のデータがこんな金額で買えるわけ無ねぇんだ！
てめぇ以外にも取引先なんかいくらでもあんだぞ！
３０００なんてはした金で貴重なデータが手に入るんだ、黙って用意しやがれ！！！
じゃねぇとこの話は無しだ！
わかったかこのボケナス！！！」

その言葉をデュノアが伝えようとすると、さっきまで電話の向こうでやけにうるさかったすでに静かになっている。
そしてさっきの言葉を伝えたデュノアが口にしたセリフが・・・

「・・・えっと、振込先の口座番号を教えてもらえるかな？」

その顔は完全に伝言板としての役割から開放されてほっとした表情だった。

全ての処理を終え、俺はパソコンで入金を確認する。

「・・・っし！
最高だ！」

そう言ってガッツポーズをとる。
思いもよらぬボーナスだ。
その後ろでぐったりとしているデュノアがベットで横になっている。

「おい。」

そう声をかけると、

「は、はい。
なんでしょう！？」

完全にさっきのやり取りで春という人間に飲まれてしまったため背筋を伸ばして返事をする。

「・・・まぁ、あれだ・・・
あ、あっ、あり・・・」

首をかしげるデュノア。

「～～～っご苦労！」

そう言ってデータの入ったチップを投げる。

「えっ・・・あ、うん・・・」

その表情には困惑の色が見えたがそれを見なかったことにする。

「おい、お前の口座は？」

さらに困惑の表情を見せるデュノア。

「えっ・・・ぼ、僕お金なんか持ってないよ！？」

手と首を、もげるんじゃないかというスピードで勢いよく振っている。

「誰がお前から金取るなんていった。
今回の手間賃振り込んでやるからさっさと口座番号言え。」

そう言うといっていることが理解できたらしい。

「えっ？でも僕はデータをもらう側で・・・」

「そりゃてめぇの会社がだろうが。
厄介な使いっ走りの駄賃だと思ってもらっとけ。」

そういうと少し考えてから答えを出したらしい。
その顔はわずかだがさっきよりも明るい。

「ハハッ！そうだね。
じゃぁもらっておこうかな？」

そう言って俺に振込先を教えてくる。
少し色を付けておいてやるか・・・
そう思いながら金を振り込んでやる。

「これでこっちで必要な物は大体買えるだろう。
後は好きに使え。」

そう言ってデュノアを見るとなぜか笑顔だ。
？
なんだ？気味が悪いな・・・
そんなことを考えていると、

「一夏の言ってたことも案外的外れじゃないかもね？」

「は？」

言っている意味がよくわからなかったので聞き返したが、

「何でもないよ♪」

そう言ってごまかされた。
用件が済んだのでこいつを部屋においておく理由も無くなった。

「おい、そろそろ帰れ。
俺はこれから一杯やって寝るんだ。」

そう言うと物分りがいいのかすんなりと扉に向かって移動する。

「じゃぁね。
また明日。」

「あぁ・・・」

そう言って俺は静かに扉を閉めた。

真っ黒な商談（後書き）

春の中でのお金の感覚は庶民とはかけ離れた物ですのであまり気にしないでください。
次は春に大きく動いてもらう予定です。
どうなるかは更新でご確認ください。

黒の豪雨と白い傘、壊れた傘

～放課後～
～春～
デュノアにデータを売ってから数日がたち、あれからも相変わらずな日常が過ぎている。

ただ、妙なことがいくつか・・・
一つは女子の反応が以前と違うということ。
やけに人の顔を見てこそこそと話をしている。
まぁそれはいつものことだが、その感じが少し変わった気がする。
たったそれだけだが、それが一つ。

次にデュノアだ・・・
あいつは織斑と同室ということらしい。
限られた環境で同姓の友人が貴重というのもわからなくはない。
だが・・・
あいつの放っている空気というものが・・・
妙にこう・・・色で言うところのピンク色みたいな・・・

それも織斑に対して・・・

考えるのはよそう。

頭をかすめる考えを消し去るように今日もデータ収集のためアリー

ナに足を進める。

〜アリーナ〜
そこにはいつもより多くの人がいる。
なんだ？

そんなことを思いながらその中心に足を進めると途中でいくつかの声が耳に入る。

「ちょっと、あれってやばくない？」

「誰か呼んできたほうがいいんじゃないの？」

何をやってるんだ？
その言葉の意味するものがわからず、足を進めるとそこで行われていたのは・・・

〜一夏〜
シャルル達と話していたからいつもより遅くアリーナに向かう。
その途中である言葉が耳に入ってくる。

「アリーナで代表候補生同士がやりあってるって！
急いで見に行かなきゃ！」

セシリアと鈴か？
そんなことを考えながら俺達もアリーナに向かった。

アリーナについて俺達が目にしたものは、鈴の攻撃を手をかざすだけで防ぎ、セシリアの攻撃をものともしないラウラの姿だった。

その強さは圧倒的で、二人を相手に余裕さえあるようだった。

「あれは・・・ＡＩＣ!?
そんな、もう実用化できる国があったなんて・・・」

そう言って驚いているシャルル。

「どんなものなんだ?」

その問いかけに応えてくれるが難しいことはよくわからない。
要は相手の動きを止める。
そのことだけは理解できた。

勝負は決した。
ラウラの勝ちだった。
悔しかったがあれがあいつの力なんだと、視線を落としその現実を受け入れていると、

「なっ、あれ以上は危険だぞ!」

箒の声に再び視線を上げるとラウラはもう動けない二人に対してさらに攻撃を仕掛ける。

「あれ以上は危険だよ・・・

急いで止めないと！」

その時俺の体は反射的に白式を纏い、真っ直ぐ、迷うことなくアリーナのシールドに雪片を衝きたて、そのままラウラに向かって突進した。

その時俺は気付かなかった。

俺以外にもう一つ、ラウラに向かって突撃するＩＳの姿に・・・

～春～

その姿を見たとき、何故だか理由はわからないが体がピットに向かっていた。

何故だろう？

足が急げといっているように徐々に速くなる。

気がつくと全力で走っている。

何故だ？

そんなことを考えながらピットに付き中を見ると状況はさっきよりも確実に悪いほうに傾いていた。

その時からの記憶がない。

一体自分が何をしたのか・・・

気が付いたとき、そこには暴君がなぜか目の前にいた。

～十数分前～

その光景を見たときに衝動的にトゥーハンドを起動し、真っ黒いＩＳに向かって突撃を開始する。

そのＩＳは涼やかな顔で俺の突撃を避け、こちらに肩のレールカノンを向けてくる。

知ったことか！

そう思い再び突撃するが俺以外にもう一機ＩＳがあいつに向かって突っ込んでくる。

「やめろっ～～～！！！」

そう言って突っ込んできた織斑の突撃は奴の前で完全にその力を失

う。

「くっ、動けねぇ・・・」

その姿を無視し、俺はジルバを転送する。

そして織斑にかまわず、奴に向かってぶち込んだ。

「なっ?!」

「くっ?!」

爆発の衝撃がその場を包む。

その衝撃で二人を拘束していたワイヤーが外れ、その場に力なく崩れる二人。

その爆炎の中から織斑が咳き込みながら出てくる。

「何すんだよっ?!」

その声を無視し、奴を探す。

どこだ?

その時センサーがこちらに向かっての攻撃を感知。

急いでその場から離脱し、再び突撃を開始する。

「ふっ、馬鹿め!」

そう言って俺に向かい手をかざす。

その直後動けなくなる。

知るか。

動け。

あいつに届け。

そう思うが体は動かない。

「さっきの攻撃はよかったが、その後がお粗末だったな。」

そう言って俺に砲弾を食らわせる。

俺は後ろに吹き飛ばされ、その衝撃に流され数回転しながら地面と対面する。

「クソッたれが！！！」

体勢を立て直し、両脇からカトラスを抜き、一気に奴に向かって攻撃を仕掛けるが、一発も届くことはない。

「この国にいるのは馬鹿ばかりだな。

やはり、こんな国に教官はふさわしくない。」

そう言って俺に向かって再び砲撃を繰り出そうとするが、もう一人の攻撃によってそれがやってくることはなかった。

「ちっ、貴様は邪魔だ。

織斑一夏！！！」

そう言って織斑に向かい直し、攻撃対象を俺ではなく織斑に変更。

両腕からエネルギー状の刃を作り出し、織斑と対峙しようとした時、
この世界で最強の女傑が現れた。

「やめろ馬鹿ども！！！」

その声に二人はその体を急停止させる。

「馬鹿騒ぎをしていると聞いてきてみればなんだこれは！」

その言葉に二人は言い訳を並べているが、暴君に一蹴される。

「こんな面倒を起こされては困る！
この続きは学年別トーナメントでつけろ！
それまでの一切の争いは禁じる！
いいな？」

その言葉に二人はしぶしぶ納得しているようだ。
だが俺は・・・

「貴様もだ！
いいな？」

そう言葉をかけられるが、体はその言葉に逆らうように行動を起こす。

両手にビーを転送。
それを一気に奴に向かって掃射する。

「っ！！！」

急いで腕をかざそうとするが間に合わずビーの攻撃をくらい数歩足が下がる。

「おい！
吉田っ！！！」

その声はもはや春には届かない。

ビーを投げ捨て、カトラスを再び抜き、それもまた奴に向けて撃ち出し、一気に距離を詰める。

「っ貴様！
教官の命令が・・・」

その言葉の続きを述べることはなかった。
その続きを述べる前に俺の突進を受け、空を見るように倒れこむ。
俺はその上に馬乗りになり、やつを見下ろす。

「っく、離れろ！」

そう言って俺に両手の刃を衝き立てるが俺はそれを無視し、ジルバを呼び出す。

「ロケット・マンだ、ベイビー！」

そう言ってジルバの引き金を躊躇う事無く引き、やつと一緒に爆炎に包まれた。

「っく、一夏！
あの二人を引きずり出して来い！」

その声を聞き爆炎の中に歩みを進めようとしたとき一夏は信じられないものを目にする。

「なっ、嘘だろ！？」

二人はあの爆炎の中、まだ戦闘を行っていたのである。

一人は腕からはやした刃を相手に突き刺し、一人は馬乗りの状態で銃を撃っている。

信じらんねぇ・・・

その姿に呆然としていると・・・

「早くしろっ！！！」

その言葉に急いでその間に割って入る。

「おい、やめろ、やめろって！」

そう言って無理やり二人の間に割って入り、両方からの攻撃をくらう。

その攻撃をくらいながら、どうにか一人、確実に頭の冷えていないほうを羽交い絞めにしながら引っ張り出す。

「離せっ、離せよこらっ！

あいつ、あいつは・・・！」

ここで手を離せば確実に再び突進するだろう。
それに姉の言葉があったため絶対に離すまいと全力でその体を押さえつける。

「き、貴様っ！」

そう言ってやつもこちらに向かって突撃しようとしたとき、あのお方が前に立ちはだかった。

「いい加減にしろ！
これ以上は許さん！
二人とも武器をしまえ！」

その言葉にやつは納得できないといった顔でしぶしぶ武器を収める。

「離せっ！
あいつをぶっ飛ばすんだよ！
邪魔すんなっ！」

そう言って織斑の手の中でまだ暴れている春に、向かって歩みを進める最強の女傑。

そしてＩＳの突起を足場に飛び上がり俺の目線と同じ高さまで上がってくると、

バシンッ！！！

左頬を思い切りはたかれ意識を取り戻させられた。

俺は何をやっていた？
何で体中が痛いんだ？
何故暴君が目の前にいる？

わからない事だらけで唖然としている春に暴君が声をかける。

「馬鹿が、自分が何をしていたか覚えているか？」

そう問われ、

「いいえ、全く。」

その言葉に大きくため息をしたかと思えば頭が遠ざかり、

ゴンッ！！！

頭突きを食らわせて俺の目の前から離れる。

「もう一度だけだ！
これが最後の忠告だ！
学年別トーナメントまで一切の戦闘を禁止する！
これが守れないようならこの学園から出て行ってもらう！
いいな！」

その言葉を聞き、よく理解できない状況だがＹＥＳという以外に選択肢はないようだ。

「わかりました。」

「はい、教官！」

そうしてこの場は収められた。

何をしていたのかまるで覚えていない・・・

だが何故俺はあんなことを？

そう思いながらピットに向かうとその途中であるものを目にする。

デュノアが抱えていた二人を。

その時理解した。

俺は・・・

そして記憶が飛んでいた間に何をやっていたのかも思い出した。

「クソボケがっ！」

その言葉は誰に対していったものでもない。

ただ自分に対して。

なんと言っていいのかわからない感情に向かって発したものだった。

そして思った。

あいつは絶対に負かす。

そう思い早速頭をフル回転させ案を考える。

頭が活性化された状態だったためかやけにスムーズに行動を起こし

てくれ、一つの案が思い浮かぶ。
さっそく行動に移さねぇと。
ＩＳを解除し、制服に戻ってから携帯電話を取り出しある人物に電話をかける。

『もしもし、どうしたんだい？』

「お仕事の時間だぜベニー、それも旭日重工からの仕事じゃねぇ。俺個人の依頼だ。」

『へぇ、君が僕に仕事の依頼なんてね。一体何があったんだい？』

「別に何もねぇよ。
ただ、どうしても負かしてやりてぇ相手ができた。
そいつを負かすための算段を立てたから、それに必要なものを大至急用意してもらいたい。」

『いいけど、君も知ってるだろう？僕は高いよ？』

「かまわねぇよ。
前金で５００、残りは終わってからもう５００。
もちろん円で。
それでどうだ？」

『乗った。
で、僕は何をすればいい？』

「これからいうものを用意してくれ・・・」

そう言って俺はあいつを負かすために考えたことを実現するために行動を起こした。

黒の豪雨と白い傘、壊れた傘（後書き）

春のわからなかった感情に対してはもう少ししたら本人に自覚してもらうつもりでいます。

この流れでアル事について、なんとなくわかった人もいるかと思いますが、その辺には触れずもう少しお付き合いください。

ご意見・ご感想お待ちしてます。

席には着いた。さぁ、ギャンブルの始まりだ！（前書き）

今回は次に向けての繋ぎの話ですので短めです。
ではお付き合いください。

席には着いた。さぁ、ギャンブルの始まりだ！

～春～

あれから日にちはあっという間に流れる。
俺はベニーに頼んだものを携え、アリーナの更衣室で静かに時を待つ。

織斑達もいるが自分達もラウラとやることで頭がいっぱいらしい。

椅子に腰掛け自分の行動を振り返る。
やれることは全てやった。
後重要なことは・・・

そう考えながらトーナメントの組み合わせ表の開示を待った。

人数が多いため、二つのグループに分かれ、アリーナを複数使って試合をするようだ。
これを乗り切れば・・・
そう思い同じグループにやつの名前がないかを探す。

Aグループ
吉田春
〇〇〇〇〇
織斑一夏
〇〇〇〇〇

Bグループ

Aグループ
ラウラ・ボーデヴィッヒ
〇〇〇〇〇

パチッ、パチッ・・・

そのトーナメント表を見たときに指を鳴らす。
よしっ、よし、よし、よしっ！
自分の望んだ最高の形だ！
指を鳴らすのをやめ、右手を左手に殴りつける様にして胸の前で合致させる。

バシッ

その音がやけに心地いい。

自分のパートナーの名前など見えていない。
あいつらのパートナーの名前もどうでもいい。
ただ必要なピースの名前を探しただけ。
どうやら神もこの勝負は見たいらしい。
そんなこと考えながらやりあう場所を確認する。

あいつとやりあうのはグループの決勝か・・・
それまでは絶対に負けられない。
俺の考え通りに事を運べば・・・
そう考えながら自分のやらなければならないことを再確認しながらやつとの会合のときを待つ。

俺がこの日までにやったことはいたってシンプル。
回避訓練。
ただそれだけだ。

あの後やつとやりあった記録を確認したが、一対一では勝負にならないだろう。

それもそうだ。

相手は他国の代表候補生二人を相手にして余裕で勝利するような化け物なのだから。

そのことを念頭において練った案だからこそ、回避訓練が何より必要だったのだ。

ベニーに頼んだものの一つはすぐに用意できるといわれたが、もう一つがとんでもないものだったらしい。

「僕の部屋の機材を全て新調してくれ。
じゃないともうやめる！！！」

と、軽くストを起こされかけたぐらいだからな。

だが、あいつを負かせるなら正直今回は報酬なんてどうでもいい。
ロハでさえ、今の俺には安すぎる報酬だ。

デュノアからのボーナスもあったことで余裕があった俺にためらいはなくすぐに機材を手配した。

ベニーが新調した物の伝票を見てご機嫌だったときに面白いものを見せてくれた。

どうやって調べたのか、あいつのデータだった。
何でも俺達の年齢で少佐というふざけた階級の持ち主だ。
それ以外にも、銃器、兵器のスペシャリスト。
そしてあの暴君の元教え子ときた。

やる前からやる気をそがれる情報を読んでいくと面白いものが目に入る。

「！・・・へぇ・・・」

その項目に目を通したとき、確実に俺は悪人の顔をしていたに違いない。

トーナメントが始まった。
程なくして俺の順番になるが、変化がある。

俺は訓練のかいあってか、ほとんど攻撃を受けなくなった。
これだけの向上が見られたのもある意味あいつのおかげだろうか・・・

・

そんなことを考える余裕があるほど回避技術が向上していたのだ。
それとは別の変化もある。
それはいつも戦闘の際には、服用していたある物をトーナメントの開始前に捨ててきたことだ。

このトーナメントでは絶対に使わないと決め、初めて自分の意思で、このアリーナで戦闘を行っている。

体は小刻みに震えるがそんなものに構っている場合じゃない。
さっさとあいつとやりあうんだ。

そのためだけに俺は相手に向かって銃を向ける。

順当に勝ちを重ね、俺はＡグループの決勝にやってきた。
いよいよ俺のやりたかった勝負の席に着けるということがたまらなく面白かった。

掛け金は充分持った。

後はあれをするだけだ・・・

その顔は薬も飲んでいないのにひどくゆがんだものだった。

席には着いた。さぁ、ギャンブルの始まりだ！（後書き）

よくある引きの形ですがすいません（汗）
次がいよいよ本番です。
原作や、他の方々が書いている小説とはまた違った形で勝負が展開しますが、次がこれまでの話の中で自分が最も書きたかったものになっています。

ただ・・・それを上手く表現できないこの手が憎い・・・
ではまた次の更新でお会いしましょう

さぁ、ここからが勝負どころだ！（前書き）

さぁ、パーティータイムです。
ですが、今のうちに言っておきます。
無双はござぁ～せん。
あしからず。
ではどうぞ。

さぁ、ここからが勝負どころだ！

アリーナに出るとグループ決勝ということもあり、会場の空気は最高潮だ。

そんな中、俺は黙ってあいつを見据える。
あいつも俺を睨み返してくる。

相思相愛で何よりだ。

そう思いながらあいつに向かい、右手人差し指で頭の横を数回叩き、ジェスチャーで奴にＩＳネットワークに接続させ、プライベートチャンネルを開かせる。

「何のつもりだ？」

その声は当然不機嫌そのものだ。

「いやぁ、少し話をしようと思ってな。」

「私にはない。
貴様を片付け、次はあの男を始末する。
それで終わりだ。」

そう言って戦闘体制に入る。

「そう言うなって、ブーダン。」

そう言うと奴の体が一瞬固まる。

そしてその眼光は光を増し、俺を視線だけで殺せそうなものになる。

「・・・なんだと？
貴様、今何て言った？」

「もう一度言ってやるよ。
俺の話を聞けよ、ブーダン・ノワール。」

完全におちょくっている。
だがやつは俺にかかってこない。
それはまだ試合が始まっていないから。
俺のパートナーがＩＳを装備できていないためアリーナに姿を現していないのだ。

まぁ、その原因は俺にあるんだがな・・・

パートナーのリヴァイヴを壁に向かって叩きつけて、高価な鉄くずにしてきたので代わりのＩＳを用意するのに時間がかかっているのだろう。

「そんな風に私を呼ぶな！」

自分を馬鹿にされたのが気に入らないようだ。
ブーダン・ノワールとは豚の血の入ったソーセージのことだ。

「何だ、知ってたのか。
お隣の国の食材だものな。
そりゃ知ってて当然か。
でも一緒だろ？
あれには腸にひき肉と豚の血、後スパイスが適当に詰まってて、て

めぇは人の皮に血と臓物適当に詰まってるってことで。」

そう言って奴を笑う。

ベニーに見せてもらったデータで、あいつが試験管ベイビーと知ったときにからかうにはちょうどいいと思った。

「よかったじゃねぇか。
お仲間は世界の厨房で大活躍だぜ。
姿、形はてめぇとは違うがな。」

「貴様、これが試合だと思って調子に乗っていないか・・・？」

その体は小刻みに震えだす。
完全に怒り心頭だ。

だが俺はかまわずやつを馬鹿にする。

「調子になんて乗ってねぇよ。
ただブーダンにはどんな言葉を添えてやると栄えるかと思ってよ。」

そう言うと奴は眼帯に手を伸ばし、それを剥ぎ取る。

「貴様は壊す！」

「上等だよ。
こっちもその気だ、ゲシュタポがっ！」

その言葉を放ったとき、俺のパートナーがやってくる。

「おいっ！」

このトーナメントが始まって初めてパートナーを見る。

「は、はいっ！
な、何でしょうか！？」

驚いているがそんなことどうでもいい。

「あのゲシュタポは俺がやるから、もう一人の相手でも適当にしてろっ！」

そう言って奴を再び見据える。

「ゲッ、ゲシュ・・・？
は、はいっ！わかりました！」

実際は全然わかっていないが、あの日の出来事で二人の間に因縁があることは学年全員が知っていた。
それで推理して自分の中で答えを出したのだ。

それはあいつも同じだったのだろう。
あいつも視線を俺から外し、パートナーに向かって指示を飛ばす。
それが終わると確実にさっきより鋭い目で俺を見る。

左手が震える。

薬も飲まずここまでこれたが、相手は確実にこちらを殺そうとしているようなやつだ。

正直言って超怖い。

ビィーーーー！

試合開始だっ！

俺はビーを両手に呼び出し奴に向かって撃ち出す。
もちろんそんなもの届きはしない。
そんなことはわかってる。

片手をビーからジルバに変更し、奴に向かって照準を合わせる。

本来両手持ちのジルバは片手で撃つことを想定されていない。
そんなことをお構い無しに俺は奴に向かってジルバの弾頭を打ち込んだ。

「馬鹿が、まだわからないのか！
私に実弾はきかんっ！」

そう言って回避動作をしようともせずジルバの弾頭を止めようとするが、

「グルメ・パーティーは好きかよ、ブータン？

こんがりローストしてやるぜっ！」

そういった瞬間、完全に俺以外の誰も予想していなかったようなことが起こる。

ドカァァァァーーーーーーーーーン！！！

その轟音が響き渡ると同時に、アリーナの半分のスペースは爆炎に包まれ、完全に視界を炎によって失った。

俺がベニーに頼んだ物の一つだ。

「ジルバの弾頭、それにありったけの爆薬を詰めてくれ。」

その言葉を聞いたときのベニーの顔はついに春も薬のやりすぎで壊れたのかと、残念な子を見るような目だったのを覚えている。

それを気にせず要求を続けた。

そして、対象にぶつかってから爆ぜるのではなく、一定の距離になったら自動で起爆するようにしてくれと追加の要求を頼んだのだ。

その距離は奴の手前５ｍの距離。

映像データから必死に計算してはじき出した距離だ。

それにあの量の爆薬。
あの量の爆薬でおきる、あの爆発をよけられるやつはこの世にいない。

そしてそれはエリート少佐も例外ではなく、やつは爆炎に包まれながら後方へと体を動かすしかなかった。

「くっ、なんて非常識な・・・」

そう言って視線を動かしこの馬鹿げた攻撃を仕掛けてきたやつを探す。

ガンッガンッガンッ！
銃声が上空から聞こえてくる。

「ちぃっ！」

ワイヤーブレードを展開し、俺に向かって攻撃を仕掛けるが回避が向上した俺をなかなか捕らえることは出来ない。

「どうした？
この数日でＩＳの操縦がへたくそになったんじゃねぇか？
やっぱり、出来損ないなんじゃねぇのか、お前はよっ？」

そう言いながらカトラスでの攻撃を継続する。

「貴様、どこまで私を侮辱すれば・・・」

「てめぇが負けるまでだよ。このクソボケがっ！」

その言葉を口にした瞬間、俺の目の前に突然あいつが現れた。
俺には出来ない瞬時加速、それにより突然俺の目の前に現れ思いっきり俺の腹に向かってひざを入れる。

「がはっ！」

その衝撃で俺は吹き飛ばされ前回の真逆の体制に追い込まれる。

俺を見下しながら、楽しそうな顔で、

「心配するな・・・
しばらく動けなくなる程度で済ませてやる。
わたしは大人だからな。」

そう言ってトゥーハンドの両腕に自分の両手の刃を突き刺す。
シールドが発生するがそれもお構いなしで全体重をかけ俺の腕に刃の墓標を立てる。

「ハハハハハハッ！
いい格好だ！
やはり貴様みたいなやつにはそうやって地面に横たわるさまがよく似合う。」

シールドエネルギーが切れ、ＩＳの機能が停止する。
トゥーハンドの両手に風穴を開け、満足げに俺を見下す奴に向かって俺に残された、最後の口撃を放つ。

「何が大人だよ。
まだ初潮も来てねぇ様なりしやがって！」

その言葉は奴にとっても、俺にとって超えてはいけない一線だったらしい。
こちらを再び見る目は完全に人殺しの目だ。

「・・・死ねっ！！！」

リニアカノンを俺に向ける。
シールドエネルギーは残ってはいない。
そんな状態でこの攻撃は確実に死ぬな・・・

そんなことを考えていたとき、アリーナに音声が響き渡る。

【勝者
ラウラ、篠ノ之ペア】

その音声に会場が一気に沸く。

どうなっている？
そう思い視線を動かすとそこには掃除用具にやられた俺のペアがいた。
どうやらあいつがやられてくれたおかげで勝敗が付いたようだ。

ホッとしていると、まだリニアカノンは稼動している音を静かに響かせている。

やばいっ、完全に俺ここで死んだ・・・

そう思ってたところにあのお方の声が響く。

【会場の整備をしなおしたら決勝だ！

時間が勿体無いからさっさと戻れ。】

その言葉を聞いてしぶしぶ砲口を俺からそらす。

そのままアリーナから離れようとするやつに声をかける。

「おいっ！」

不機嫌を超越したような表情で俺を睨む。

「何だ・・・
やはり今ここで死にたいのか？」

その目は本気だったが、それにびびってる場合じゃない。

「賭けをしないか？」

そう、ここが勝負どころだっ！

奴はその提案に完全に呆れているようだ。

「何を言っている？
貴様は私に今！ここで！負けたばかりだろうがっ！

そんな貴様と賭けをする必要などない！」

そう言って再び俺に背を向け離れようとするやつに言葉を追加する。

「何勘違いしてやがる。
この後やるてめぇと、織斑の決勝の勝敗を賭けるんだ。」

その言葉に動きが止まりこちらを見直す。

「ほう・・・
で、賭け金は何だ？」

ギシッ！
そんな音が聞こえ気がした。
奴も席に着いた音が。

「てめぇがかったら俺をサンドバッグにする権利をやるよ。
今回の続きが出来るぜ？」

「いいだろう。」

そう言って三度背中を向けここから離れようとするやつに俺も三度声をかける。

「おい、待てよ！
てめぇの賭け金をきめてねぇだろうが！」

そう言うとこちらを振り返り、こちらの言っている言葉の意味が理解できないというリアクションを見せる。

「そんなもの必要ないだろう？
私の勝ちは揺るがん！」

そりゃそうだろうな。
代表候補生二人を相手にして勝ってるってことと、軍人で、戦いなれてるっていう自身がそうさせるのだろう。

「なら、賭け金はこっちで決めてもいいか？」

「好きにしろ。」

もうこの話に興味は無いようだが、ここからが俺にとっては重要なんだ。

「じゃぁ、織斑が勝った時には・・・」

俺はやつにその条件を飲ませることに成功した。

これで後は玉が落ちるのを待つだけだ。

織斑という玉が、俺がはった目に入るのをな・・・

その前にもう一つだけやることがあったな・・・

そう思い俺はこの勝敗に大きく係わる大役、玉を務めてくれる役者のもとへ足を動かした。

運以外のあらゆることを塗り潰すのは定石だ。
そうして隙間を埋めていって、運だけが純粋に残ったとき――――
それが最高の賭けになる。

さぁ、ここからが勝負どころだ！（後書き）

次でけりがつきます。
皆さんは春がしなければならなかったことがわかりましたか？
そして、春が奴に賭けさせた掛け金が想像できますか？

では次の更新で

ご意見・ご感想お待ちしてます。

ジャックポットは必ず出るぞ！（前書き）

今回は独自解釈の入った内容になっています。
ご理解いただけるとうれしいです。

ではどうぞ。

ジャックポットは必ず出るぞ！

～アリーナ～
～春～

どうにかやつを席に着かせることができ、舞台が整ったことにホッとする。

「多少綱渡りなところはあったがこれで・・・」

そんな言葉を口にしながらある場所に向かう。

それはこの勝負の鍵を握る役者の控え室へ・・・

あいつはＢグループの決勝を終え、こちらのアリーナの更衣室で体を休めているだろう。

こういう時にあぁいう熱血を上手く乗せるには・・・
漫画で読んだような臭い台詞、そういうのが一番効果的だろうか・・・
そんなことを考えながら俺は更衣室の扉を開けた。

～織斑～
吉田とラウラの試合はすごかった。
前回もすごかったが、今回もそれに負けないような試合だった。

そんなことを考えていると更衣室の扉が開く。

「よぉ、決勝進出おめでとう。」

そういいながら吉田が入ってきた。

「あ、あぁ・・・」

なんだ？
こいつこんなこと言う奴だったっけ？

そんなことを考えていると吉田が続けて言葉を口にする。

「あいつを倒すのは俺だと思ったんだけどな。
俺じゃ力不足だった。
悔しいが、お前に託すしかないんだ！」

そう言って顔を伏せ、俺の肩に手を置く。
その手はかすかに震えている。

「お前・・・
わかった。
俺があいつを倒してあのときの雪辱と、お前の悔しさを晴らしてくるぜ！」

その言葉を言ったとき吉田は顔を上げ、俺の眼を見る。

「すまない。
今まであんな態度を取っていた俺が言えた台詞じゃないのはわかっ

てる・・・
だが言わせてくれ！
勝ってこい！」

「おうっ！」

そう言うと吉田が手を出してくる。
俺も手を出し、熱く握手をする。

「そうだ織斑、お前に俺が勝利のおまじないをしてやるよ。
ＩＳネットワーク、開けるか？」

そう言って吉田は自分の首にぶら下げたネックレスを俺に見せる。

「あぁ、開けるけど・・・
おまじないって何だ？」

そう言ってガントレットを胸の高さまで上げると吉田がネックレス
を近づける。

「何、大したものじゃない。
ただの願掛け程度のものだと思ってくれ。」

そう言ってネットワークを繋げるとあるデータが俺の白式に流れ込
んできた。

「これは・・・時計か？」

そこには数字が並べられている。

【13：43】

その時間は少しずつ減っていく。

「時計じゃない。
タイマーだ。
そのタイマーがゼロになったときに攻撃すると、絶対に当たるんだよっ！」

そう言ってシャルルも呼ぶ。

「シャルルも来いよ！」

突然声をかけられて驚いているが、

「そうだぜ、シャルル。
こいつを受け取って、俺とシャルルと吉田。
三人で戦うんだっ！」

そう言うと少し驚いているようだがこっちにやってくる。

「う、うんっ。
じゃぁ、僕にもお願いしようかな。」

そう言って俺と同じようにタイマーを吉田から受け取る。

「よしっ、これで俺たちは一緒に戦う仲間だ。
頼んだぜ、織斑！」

そう言って俺の肩を叩く。

「織斑なんて呼ぶなよ。
俺のことは一夏でいい。
俺も春って呼ぶからよ！」

そう言うと春は笑顔で、

「わかったぜ、一夏！」

そう言って再び握手を交わしたとき放送がかかる。

【決勝戦を始める。
両ペアはピットまで集合するように。】

「時間だな・・・
頼んだぜ、一夏！」

「任せとけ！」

そう言って俺たちは別れ、シャルルとピットへと向かった。

「ねぇ、一夏・・・
吉田君、なんか変じゃなかった？」

シャルルが難しい顔をして声をかけてくる。

「何言ってんだよ。
あいつとせっかく仲良くなれたんだ。

変なんていうなよ！」

そう言うと納得してくれたのか、

「う、うん・・・」

シャルルは自分達が出た更衣室を一度振り返ったが、その後にまた俺の方をみて、

「ご、ごめんね変なこと言って。
決勝、がんばろうね。」

「あぁ！
いよいよ俺たちが望んだ決戦の場だ。
絶対に負けられないからなっ！」

そう言って俺たちはピットへ進ませる足を速めた。

～春～

ロッカーの自分の制服に着替え、ポケットからいつものセットを取り出す。

それを口に銜え、火を点ける。

煙を吸い、そして息とともに一気に吐き出す。

「・・・・っっっっっ！
ハハハハハハハハハッ！
最高だっ！
あいつ、最高に馬鹿だっ！」

笑いが止まらなかった。
途中から笑いをこらえるのに必死でぼろが出ないかと心配だったがそれを乗り切り、今それを放出する。

ヤベッ、腹筋がねじ切れそうだ。

自分でもよくあんなクソ臭え台詞を口にしたもんだと、自分で自分をほめてやりたくなった。

笑いすぎて目の端に堪った涙を指で拭い、更衣室に映し出された映像を見る。

そこにはすでに準備ができた両ペアが試合開始の合図を待っている。

「あいつの負け、あいつの負けだぜ。
ジャックポットは必ず出すぞ！
ざまぁみろだ、クソッたれっ！」

そう言って俺は試合開始の合図を待った。

ビィーーーーーーーー！

ルーレットは廻った。

さぁ、いけっ！

織斑とあいつ、デュノアと掃除用具の二組に分かれて戦闘を行っていたが、デュノアと掃除用具の勝負はあっという間に付いた。

実力が違うからな・・・

そんなことを考えながら画面を見る。

そして、俺が望んだ最高の状況、二対一という状況だ。

タイマーを確認する。

【０４：１３】

俺の勝ちが見えてきた・・・

そう考えながら、俺は新しいタバコに火をつける。

～一夏～

くっ、二人がかりでこんなに強いのかよっ！
ラウラの強さに押されながら何とかその攻撃を凌ぐ。
白式の画面に表示されている時間は三分を切った。
せっかく春が俺たちに託してくれたんだっ！
絶対に一撃だけでも決めてやる！

その思いだけでラウラの攻撃を凌ぐ。

【０１：４８】

ラウラのワイヤーブレードが俺の脚を捕らえ、俺は遠心力を加えられた力で放り投げられる。

「うわぁぁぁぁぁぁっ！」

壁に激突し、シールドエネルギーも２００を切った。
ヤバイ、攻撃に回すエネルギーを考えたらもうダメージは受けられない。

そんなことを考えていると、

「一夏っ、離れてっ！！！」

そう言われ、急いで前を見る。
そこには俺に向け、リニアカノンを構えるラウラの姿。

「ヤベッ！」

急いで動こうとするが体が壁に食い込み、なかなか動けない。

「終わりだ。
貴様を倒した後、私はあいつを・・・」

その顔はやけにうれしそうに笑っている。

「そうはさせないよっ！」

そう言ってシャルルがラウラに向かって攻撃を仕掛ける。
だがその攻撃に左手を向け、シャルルの攻撃を全て止める。

「学習しない連中だ。
私にそんな攻撃は聞かないと何度言ったらわかるんだ！」

そう言ってシャルルの攻撃を無視し俺に向かって攻撃を撃ち出す。

「まだだぁ～っ！」

シャルルが時間を稼いでくれたおかげで脱出した俺は何とかその攻撃を避け体制を立て直す。

タイマーを見るともう時間が来る。
俺はシャルルに通信を入れる。

「シャルル、このままじゃやられる。
春の願掛けに賭けてみよう！」

「うぅ～ん・・・
そうだね。
もうここまできたらそれに賭けるしかないよねっ！」
そう言って俺たちはラウラを挟むように一直線に並ぶ。
タイマーはもう１０秒を切った。
「準備は言いか？」
「もちろんだよ！」
「「いくぜっ！（よっ！）」」
そう言って俺たちはラウラに向かって瞬時加速を行った。

～春～

やべぇ～

織斑の実力、読み違えてたか？
タイマーの時間まで持たないんじゃないかと不安になりながら画面を見つめる。
後１分

それでジャックポットだ。
さっきの試合で痛む体を軽く動かし、腰掛けていた椅子から立ち上がる。

後４０秒

俺は口に銜えていたタバコを右手の指に持たせる。
それはまるで指揮者がタクトを持つように。

後２０秒
それをご機嫌に振り回し、誰もいない更衣室を歩き回る。

後１０秒
画面の前に立ち、ある言葉を口にする。

後９秒

「さぁ、

7

魔法が

5

解ける

3

時間だぜ、

1

灰被姫（シンデレラ）！」

その瞬間俺の左手は中指を立て画面に向かって見せ付けるような形になっていた。

～ラウラ～

ふんっ、苦し紛れの突撃か・・・

停止結界で動けなくしてから惨めに負かしてやろう。

そう思い両手を奴らに向かって出したとき、ＩＳの画面に見慣れない言葉が表示された。

【デイビー・クロケットは孤独星（ローン・スター）のもとへ！】

何だ？

何のことだ？

自分の専用機となって久しいがこんな表示は見たことがない。

だがそれが意味するところはすぐにわかることになった。

キュゥーン・・・

ＩＳが力を失う。
動かなくなったわけではない。
ただ、兵装が全て力を失ったのだ。
もちろんそれは停止結界も例外ではない。

「な、こんなっ・・・」

そのとき私は戦場でのタブーを犯した。
動揺と状況把握を怠ったこと。
それが意味するものは・・・
死神に目をつけられるのと等しい。

～春～
俺の目の前でやつは織斑の斬撃、デュノアの轟撃の挟撃を受けた瞬間だった。
左手はさっきと同じ形のまま、俺は今の気分を表す言葉を口にした。

「してやったぜぇ！！！！！」

その瞬間、俺がどうしても負かしてやりたかったラウラ・ボーデヴィッヒは地面に頭を垂れ地に伏した。

説明すると簡単なことだ。

あいつのＩＳのシステムがダウンしたのは俺がやつにくれてやったウイルスのせいだ。
それも質の悪いやつ。

そして、織斑達に渡したタイマーがそれが発病するまでの時間を表示したもの。

それが発症し、やつのＩＳはただの的になった。

と、要はそれだけのこと。

ではいつやつはその質の悪いウイルスに感染したのか・・・

それは試合が始まる前・・・

俺とのプライベートチャンネルで会話を交わしたその瞬間から感染は始まっていた。

通常の会話の回線はＩＳネットワークに接続しなくても行えるが、プライベートチャンネルは本人が許可した者としか交わせない。
それはＩＳのコアネットワークを駆使して行われるものだからだ。

俺はそこを衝いた。

コアネットワークはコアに直結している回線だ。
神経みたいなものだろう。
そしてそれは必ずコアに繋がっている。

コアはＩＳの心臓や脳といった部分だ。

そこにウイルスを流し込んだ。

そんな重要なところに疾患があれば当然体である機体はどうなるか？

答えは簡単。

今やつがおちいった状態になる。

そのウイルスがベニーに電話で頼んだもの。
そしてストを起こされかけ、機材を新調してまで俺が欲しかったものだ。
今世紀最大の天才の創った物。
それに効くようなウイルスを作るのは大変だったらしい。

ストが起こしたくなるほどに・・・

だがそれを創ったときのベニーの顔は解けなかった問題が解けた子供のようにうれしそうなものだった。

だがそんなウイルスにも弱点があった。
感染するまでに時間がかかること。
だから俺は時間を稼ぐことができるように回避訓練をし、プライベートチャンネルを切らせないように絶えずあいつを馬鹿にし続けた。
あいつが避けなければならなかったのは、俺の銃弾でもなければあの弾頭でもなく、ただ俺の言葉。
それが本当の弾丸だった。

どこへ飛ぶかわからない、銀の弾丸だ。
そいつは無敵の化け物も葬ることができる、値の張る無敵の弾丸だ。
だけど、使い時を間違えたら最後、化け物に食われることになる。

そして今回は使い時を間違えなかった。
それが綱渡りだったところだろう。
正直死ぬかと思ったからな・・・

あいつを負かす。
それが俺一人の手で実現できなかったのは正直悔しいが、奇麗事で目的を達成できなくては何にもならない。
できること、使えるものは全て使い、ただ目的を果たす。
それを追求した答えがこれだった。

そしてやつは今地に伏すという敗者が取るべき格好を取っている。
これで目的は達成だ。

やりがいのあるイカサマだった。

だが勝ちは勝ちだ。
払ってもらわないとな。

やつに賭けさせた賭け金を・・・

今から楽しみで仕方ない。

今日はどれだけ飲んでも眠れそうにないな。

遠足を楽しみにする子供のような顔で俺は寮に戻り、明日が来るのを待った。

ジャックポットは必ず出るぞ！（後書き）

ＶＴシステムのくだりは出てきませんでした（笑）
期待と違った方、申し訳ありませんでした。
後ちょっとで今回のいざこざも終わりです。
今までの更新ペースからしたら話が進むのが少し早かったですが、
今後ちょっと更新ペースが落ちると思ったのでとりあえずきりのいい所まではしっかりやっておきたかったので駆け足で更新させていただきました。

これからもお付き合いいただけるとうれしいです。

ご意見・ご感想お待ちしてます。

ジャックポットは出た・・・だが一つ忘れていた。俺に運がなかったということを

今回はおふざけの回ですかね。
お気に入りに登録してくださった人が６０名を超えたので調子にのって、調子に乗ったものを書いてしまいました。
次はまじめに書きます。
適当に読み流してください。

ジャックポットは出た・・・だが一つ忘れていた。俺に運がなかったということを・・・

～春～

本当に眠れずに夜が明けてしまった。
俺はガキか・・・

そんなことを考えながら制服に袖を通し、朝食を食いに向かう。

いつも誰もいない朝一に朝食をとり、そのまま学校へ。
そして屋上で一服。
そこで時間をつぶして教室へ。

それが俺の日課だった。

だが、その日はいきなりその日課を崩された・・・

「よぉ、春！
早いな。
今から朝飯か？
俺たちも今から朝飯なんだよ。
一緒に行こうぜ！」

出会ってしまった・・・
あの熱血馬鹿に・・・

しかも、昨日の演技を信じ込んでいるもんだから質が悪い。
完全に俺とお友達気分だ・・・

うなだれていると腕を掴まれる。

「よし、飯だ！
朝はしっかり食わないとな！」

「ちょっと一夏っ、そんなに引っ張ったら危ないよっ！」

デュノアの声も届かず俺は引っ張られて、食堂に連行された。
最悪な一日が始まりそうな気がする・・・

そんなことを考えながら俺は食堂へと向かう事になった。

朝食をいつもの倍は食わされ、あの熱血から何とか逃げ、屋上で一服しようと扉を開けると、そこに居たのは・・・

「あら、野ば・・・
コホンッ！
吉田さんじゃありませんの？
一体どうしたんです？
こんな時間に屋上に御用ですか？」

そりゃこっちの台詞だ。
完全に今野蛮って言おうとしたよな。

はぁ～

覚悟は決めた。

不幸よ。

今日だけはとことん付き合ってやるよ。

「どうしましたの？」

そう言われて顔を向けると白人が不思議そうな顔をしている。

「いやっ・・・

そうだな・・・

考えてたんだ・・・

そうっ！

お前らが一体織斑のどこに惚れたのかを？」

しまった～！！！

俺は何を言っている！

自分から開けるなって書いてあった箱を開けるようなことを・・・

そんなことを考えながら後悔していると、

「なっ、な、なな・・・

何でそのことをあなたが知っていますのッ！？」

・・・はい？

こいつ、まさか周りが気付いていないとでも思っていたのか？

そんなことを考えていると白人が動き出す。

「ほ、他の方には何も言ってませんわよねっ！？」

慌てふためき、混乱しているようだ。

何とか適当に流すか・・・

「勿論だっ！

ただ、織斑がそのことについて話があるとか何とか・・・」

そう言うと白人は生身で瞬時加速を行い、

「それは本当ですの！？」

俺の目の前までやってくる。

「おっ、おう・・・」

「で、一夏さんは今どちらに！？」

「た、多分食堂に・・・」

「わかりましたわ！

吉田さん、貴重な情報、感謝しますわ！！！」

そう言って一瞬で姿を消した。

人間、あんな動きができるのか・・・

そんなことを考えながら指定席に向かい、一服して時間をつぶす。

一服を終え、教室に向かって足を進める。
この調子だととことん不幸は舞い込んできそうだな。
そんなことを考えていると廊下を歩いていると・・・

「どぉ～～～ん！！！」

その言葉と同時に腰に強烈な衝撃が俺を襲う！
その衝撃の招待を確認しようと振り返るとそこには奴がいた。

「あんたこんなところで何してんのよ？」

そこに立っていたのは警報機。
こんなところって、ここは廊下だ。
俺がいて何が悪い？

そんなことを考えていると警報機からサイレンが発せられる。

「そうだった！
そんなことはどうでもいいわっ！
それよりあんた、セシリアに何言ったのよ？」

そんなことって、お前が聞いてきたことだろうが・・・
そんな事言ったらもう一回蹴られそうだったので無難な質問を返す。

「何って、何だ？
何かあったのか？」

そう質問すると、

「あったのかじゃないわよ！
あんたから話を聞いたとかでセシリアが食堂にやってきて一夏に迫ったら、一夏は、
『話？
特にこれといったことはないけどな・・・
そうだ、セシリアも食うだろ？
朝はしっかり食べないとな！』
って、いつもの調子で返したらセシリアが暴れだして、食堂使えなくなっちゃったんだから！！！
どうしてくれんのよ！」

・・・そうか、不幸はそれほどのレベルで迫ってくるのか・・・
自分に降りかかろうとしている不幸のレベルを確認できたことを考えていると、

「聞いてんのっ！？」

そう言って今度はローキックをくらう。

突然の衝撃に思わず膝をつく。

本気で蹴りやがって・・・
そんなことを思っていると、

「あんたのせいで朝食食べれなかったんだから、今度ご飯おごんなさいよっ！
言っとくけど、私遠慮ないからねっ！」

そう言って俺の前から姿を遠ざけていく。

とことん厄介ごとは舞い込んでくるが、一つ確認できた。

あいつら、すっかり元気なようだ・・・

いつもなら決して思うことのないであろうそんな事を考えながら、
俺は足を引きずりながら教室へ向かった。

～教室～
椅子に座もたれながら天井を見上げる。

さぁ、不幸よ。
これ以上何を起こす？

そんなことを考えていると、不幸は当然の様にやってきた。

まず教室に入ってきたのは山田先生。

「は～い、みなさ～ん、席についてくださ～い・・・」

心なしか、いや確実に元気がない。
いつもあれだけいじられても元気な人が珍しい。
そんなことを考えていると・・・

「えぇ～、今日は新しいお仲間を紹介しなければなりません・・・」

ざわつく教室。
また転校生？

そこにざわついているようだが、俺は違った。
何であんなに嫌そうなんだ？
そんなことを考えていると教室の扉が開き、そのお仲間がやってくる。

「どうも皆さん。
シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです。
よろしくお願いします。」

そう言って挨拶を決め込む奴のその格好は朝とは違う、完全に性別を超えたものだった。

「「「

「ねぇ、昨日って、男子がお風呂使ったのよね？」

「それって、もしかして、織斑君と吉田君・・・そしてデュノアさんが一緒にってこと！？」

「まさか、三人で・・・キャッ／／／」

そんな会話をしながら春に視線を向けているが、今日の春は朝から起きている立て続けの出来事の影響で気がついていない。

「一夏っ！！！
貴様、そんなふしだらな事をっ！！！」

掃除用具が席を立ち、織斑に向かって歩み寄る。

「一夏さん・・・
私と大事なお話をしませんこと・・・？」

そう言って白人も立ち上がり、織斑に迫る。

その背後には確実に、達人だけが発することを許されたオーラが出ていたことだろう。

不幸は俺だけではなかったのか・・・

そんなことを思いながら織斑の追い詰められるさまを眺めていた。
その時だ。
不幸は俺に向かってとんでもない爆弾を投下してきた。

「なんだ、やけに騒がしいな・・・
こんな国はやはり教官には向かないな・・・・」

そう言って堂々と遅刻してやってきたあいつに視線が集まる。

「？

なんだ、私の顔に何かついているか？」

そう言って自分の顔を触って確認する独眼竜。

そして一通り触って確認を済ますと教室を移動しだす。

そして歩みを止めたのは・・・

俺の席の前。

「貴様、昨日の試合ではやってくれたな・・・」

イカサマがばれたのか・・・

そう思っていると独眼竜は言葉を続ける。

「賭けは私の負けだ。
そして、私一個人としても負けだ。」

・・・はい？

こいつは何を言っているんだ？
と疑問に思っていると言葉を続ける。

「貴様がやったことはあの後全てわかった。
私を負かすという目的のために、私との試合であのようなふるまいをした理由も、周りさえも利用し目的遂行にあくまで貪欲なあの精神も、全て理解した。
同じ年齢にあそこまで徹底してできるやつがいると思わなかった。
正直言って、今回は私の完敗だ。」

そう言って頭を下げる。

いや、俺は別にそんなことどうでもいいんだが・・・

そんなことを考えていると独眼竜の顔がやたらと近い。

「な、何だ?」

そう言って顔を遠ざける。

「私はお前を気に入った。
日本では気に入ったものを嫁とすると聞いた。
嫁とは妻のことだろう?
ならば婚姻の証を立てなくてはな。
さぁ、その唇を私に差し出せっ!」

おかしい。
言っていることが完全におかしいぞ、こいつ。

急いでその席を立ち、逃走を図る。

だが、本当の爆弾はこれからやってくるのだった。

「吉田・・・
貴様・・・昨日の試合・・・ずいぶんと好き勝手にやってくれたようだな・・・」

そう言って俺の前に立ちはだかる、暴君にしてこの世で最強の生命体。
織斑千冬。

その体からは完全に何かが出ていることを感じ取ることができた。

「えっ・・・と・・・。
やったとは、なんでしょうか・・・？」

「しらを切れると思うなよ・・・
試合中にボーデヴィッヒにしたことだ・・・
貴様、あの試合を学校授業の一環ということを忘れていたようだな・・・」

授業。
それは生徒に学ばせ、その実力を向上させるためのもの。
そして、教師はその姿を評価し、成績をつけなくてはならない。

「貴様が行った行為が、正当な評価を付けられなくしたんだぞ・・・
そのおかげで私は無用な残業という労力を割くことになった・・・
その点についてはどう思う？」

その目は真っ黒い瞳で俺のことを見ている。
見続けていると俺もその闇に飲まれてしまいそうなほど。

「す、すいませんでした・・・」

そう言うと暴君の表情が一変する。

「そうか、謝罪の気持ちはあるんだな・・・」

やけに優しそうな表情が気になるが、余計なことに触れてはならない。

「はいっ！
勿論です。」

「では、私の言うことを一つ聞いてはくれないか？」

そう問われ、俺は一瞬で返事を出す。

「よろこんでっ！」

その一言が爆弾の導火線に火をつけてしまったのだ。

「そうか・・・
私は前々から人の体で変形ロボットの変形シーンを見てみたかったんだ・・・」

「・・・はっ？」

その言葉の意味を理解する前に俺の体はサイバトロンの司令官の変形シーンを生身でやらされることになった。

そのとき俺は見たこともない自分の爺さんと婆さんの顔を見たことだけを覚えている・・・

そして何故だろう。

こう叫びたかった。

「オプティマーーーーーーーース！！！」

ジャックポットは出た・・・だが一つ忘れていた。俺に運がなかったということを

はい、おふざけでした。
こんな事書いてると調子に乗っていると見放されてしまうので、次回は本当の続きを投稿させてもらいます。
おふざけして、さぁ～せんっしたっ！！！

行動とそれに伴うもの（前書き）

どうもU→でございます。
いや～、この話の前の話はちょっと自分の中で悪ふざけが過ぎたと思うような内容だったこと、ここにお詫び申し上げます。
これを読んでくださっている皆様のご期待にそえるよう、悪ふざけが過ぎない作品作りをしていきますのでこれからもお付き合いくださるとうれしいです。

今回は春が普通ならあるはずの工程を三段飛ばしで動いちゃいます。
どうぞお付き合いください。

行動とそれに伴うもの

～春～

「よせっ、これ以上の戦闘行為はやめるんだ、織斑千冬（メガトロン）・・・
はっ？！」

起床

なんだろう、妙な夢を見ていた気がする・・・

記憶に無いが体の間接部分がやけに痛む気がした。

そんなことを考えながらシャワーを浴び、一服しながら時計を見る。

【０８：１０】

視線をそらし、再び息を吸い煙を取り込む。
そしてもう一度時計を確認する。

【０８：１１】

見間違いじゃないようだ。
そんなことを考えていると、頭が冷静になっていく。

Q・始業は何時からだ？

A・８時３０分

Q・ここから教室までは歩いて何分？

A・歩いて１０分、走って５分

Q・準備にかかる時間は？

A・普通で１０分、急いで５分

Q・今こんなことを考えている時間的余裕はありますか？

A・ギリアウトです

・・・やっべっ！

適当に着替え、急いで部屋を飛び出した。

遅刻なんてしてみろ、体がロボットフィギュアの様になる事間違い無しだ。

なぜかそんな気がして真っ黒な肺に無茶をさせ、全速力で教室に向かう。

～教室～

始業ギリギリに何とか間に合いゼェゼェ言いながら席で呼吸を整える。

何で朝からこんな疲れなきゃならないんだ・・・
そんなことを考えているとすぐに山田先生がやってきた。

「は～い、みなさ～ん、席についてくださ～い・・・」

心なしか、いや確実に元気がない。

何故だろう、どこかで見たことあるような・・・
そんな感覚に襲われながら、山田先生の話を聞いた。

「えぇ～、今日は新しいお仲間を紹介しなければなりません・・・」

ざわつく教室。
また転校生？
そこにざわついているようだが、俺は違った。

何であんなに嫌そうなんだ？

そんなことを考えていると教室の扉が開き、そのお仲間がやってくる。

「どうも皆さん。
シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです。
よろしくお願いします。」

「「「

「と、いうわけでこれからデュノアさんということで皆さんと仲良くお勉強していくことになりました・・・
皆さん・・・
仲良くしてあげてくださいね？」

そういう山田先生に元気がないのは気になったが、今そこは正直どうでもいいことだろう。

「ねぇ、昨日って、男子がお風呂使ったのよね？」

「それって、もしかして、織斑君と吉田君・・・そしてデュノアさんが一緒にってこと！？」

「まさか、三人で・・・キャッ／／／」

そんな話し声を聞きながら春は教卓を見る。

どうでもいい・・・

そこには相変わらず、他人の事に無関心な春がいた。

だが、そんな春の興味を引くことが起こる。

『一夏っ～～～～～っ！！！』

そう言ってＩＳを展開した状態で教室の壁をぶち破ってきた警報機。

文明が開発した、扉というものと、トコトン相性が合わないようだ。

その光景を呆れながら見ていると、警報機の肩がゆっくりと光を放ち始める。

あれって・・・確実にやばいよな・・・

そう思い自分へやってくるリスクを最小限にするためトゥーハンドを展開し、衝撃に供える。

ゴォン！

衝撃砲は放たれた。

射線軸上の物体をなぎ倒しながら織斑に向かって一直線に駆け抜ける。

あぁ～ぁ、貴重な金づるが・・・

そんなことを考えていたとき、一瞬でそいつは現れた。

独眼竜。

あいつが織斑への攻撃を防いだのだ。

意外な光景にちょっと驚いた。

「貴様、随分と無粋な真似をしてくれたものだな・・・」

そう言って警報機を見据える。

「何よっ、一夏に用があっただけで、あんたには関係ないでしょう

がっ！」

その通りだ。
クラス全員がそう思った。
だが、独眼竜の一言でその考えは覆されることになる。

「関係大有りだっ！
こいつは私の嫁なのだからっ！」

クラスの時が止まる。

・・・・・っは？

その時その台詞をはいた本人以外、クラス全員アホ面全開だった。
それは山田先生も含めてだ。

その言葉の意味が理解しきれていないうちに、独眼竜は行動をとる。

織斑の体を抱き寄せ、なんとキスをした。
それと同時に響く黄色い悲鳴。

「「「「「「「「「「キャーーーーーーーーーーッ！！！」」」」」」」」」」

そう言ってクラスのガラスにヒビをいれる女子達。
そしてそれとは違うリアクションをとる女子達。

「「「「「な、何をやっている！（んですの！）（のよ！）（だよ！）」」」」」

そう言って四人が一斉に動いた。

相変わらず騒がしい。

面倒だなと思う意外に違う考えが俺の中にはあった。

胸の辺りがムカムカする。

何でだ？

織斑とあいつが一緒に騒いでいるのが面白くない。

その時に見せる笑顔にムカムカが増す。

その顔が見たいが、織斑といるときに出る顔は見たくない。

なんなんだこれ？

思春期を大人に囲まれ、ある感情に近づく機会の無かった春が、その感情に気付き始める。

これって、ひょっとして・・・

俺は・・・

そう考えていると独眼竜のある言葉が入ってくる。

「私はこいつが『好き』だっ！

気持ちを伝える手段は人それぞれだ。

『好き』な者へ愛情表現するのに、何故他人の許可を取らねばならん！」

独眼竜の言葉が何かの鍵を回した。

そうか・・・

確かにそうだな・・・

そう思い俺の脚は前に向かって歩き出す。

〜???〜

「このっ・・・いい加減に・・・」

そう言ってラウラに攻撃を繰り出そうとしたとき、不意にその手を誰かに止められた。

誰?

他の面子は全員視界に入っているのに、何故腕が動かないのだろう?

まさか、ＡＩＣ?

またやられるのか・・・

そう考えたが、ラウラの両手は別の方向を向いている。

では誰が?

そう考えていたとき、引っ張られるように振り返させられ、

「なっ！」

その瞬間視界はある人物の顔で覆われた。

～春～

俺はそいつの腕を掴み、こちらを向かせる。

「なっ！」

何か言葉を口にしたが、体は止まらなかった。

そいつの口に向かって俺の口を寄せる。

その姿はさっきの織斑と独眼竜の姿とまったく同じだった。

「「「「「「「「「キャーーーーーーーーーーッ！！！」」」」」」」」」

さっきと全く同じ悲鳴を上げる女子達。

飽きない連中だ。

織斑達も自分達の目の前で起こった光景が理解できないようだった。
そんなことを考えていると、俺と唇が合わさった人物がプルプルと震えだす。

「どうした？」

そう質問すると、

「今・・・何したの・・・？」

「何って、キスしたぞ。」

「何で・・・？」

「何でって、そりゃ好きだからだろ。」

「好きって、それは友達的な意味で？」

質問がまどろっこしいな・・・
そんなことを思いながらその質問に答える。

「イエ、性的な意味で。」

その質問に出題者よりも先に周りが反応する。

「エ、えっ、エ？
どういうこと？
今織斑君取り合ってたんじゃないの？」

「何で？

いつの間に二人はそこにいたる関係になってたの？」

「何？
性的な意味ってどういう風に捉えるの？」

「私のご主人様になってもらうはずだったのに・・・」

周りに視線をずらすとそれぞれが勝手なことを言ってそれぞれの世界に入っていく。
クラスが騒ぎ始めるが、そんなことに興味は無い。
俺は視線を戻してそいつを見る。

しばらく口がパクパクと酸欠の金魚みたいなり、顔が青くなったかと思ったら今度は突然真っ赤になる。
かと思えば今度は俯いた。
どうしたんだ？
そう思っていると・・・

「く・きよ・・・い・・」

あ？
その続きを聞こうと顔を近づけると・・・

「空気読みなさいよ～～～～～！！！」

そう言われ俺はそいつからの攻撃の直撃を頭にくらいそこで意識が途絶えた。

その日の放課後

またしても新たな伝説が新聞部の手によって刻まれた。
その号外の見出しにはいつもの名前ともう一人、今度は連名で・・・

≪ラウラ・ボーデヴィッヒ&吉田春！≫
≪クルーな中に潜んでいた熱い情熱！≫
≪公衆の面前でまさかの愛の告白！≫
≪Sキャラからまさかの Mキャラへ転身(ジョブチェンジ)か？≫

その号外は３０分もしないうちになくなったとか

もちろん本人達はその伝説を知ることは無い・・・

行動とそれに伴うもの（後書き）

ぶっ飛んでいたんじゃないでしょうか（笑）
今回の春のムカつきは片思いをした経験のある人なら誰でも思ったことがあるんじゃないでしょうか？
理解していただけるとうれしいかなぁ～なんて思っています。

ご意見・ご感想お待ちしています。

順応するには時間がかかる（前書き）

どうも。
U↓です。
連日投稿していたんですが、仕事が繁忙期のためパソコンに向かっている時間が減ってしまい、更新ができずに心苦しい思いをしています。

前回のお話で感想をいただき、考え方はやはり人それぞれだということを痛感いたしました。
多くの人に共感していただける作品が作れたらいいかなと思います。

今後はちょっと量と更新日数が減ると思いますが、それでも読んでくださるという方々を大切にしたいと思います。
ではお付き合いください。

順応するには時間がかかる

～週末～
～春～

あれから数日が過ぎ、俺は旭日重工の俺の部屋で目が覚めた。

何故旭日重工で朝を迎えるのか。
原因は何なんだろう・・・

あの後気を失ったまま一日が過ぎ、次の日を迎えたときに俺を待っていたものは今までの日常とはまるで違ったものだった。

「「「「「春く～～～ん！！！」」」」」

何故か俺に声をかけてくるようになった女子達。
理由はさっぱりわからないが厄介ごとが増えた日常を送る羽目になる。

そのせいでどこにいても織斑の様に女子の視線に追い掛け回されるようになった。
面倒ごとはごめんだと相手にしなかったが、寮の中でもそれが続き、さすがに鬱陶しくなり、金曜の夜から旭日重工の俺の部屋で週末を過ごすとことにした。

春は知らないが、女子達が話しかけてくるようになった原因はこの前に起こしたことが原因だ。

彼女には織斑と言う好きな人がいる。
←
そのことは織斑以外の人間にはすでに明白なこと。
←
つまり、春は告白した瞬間に失恋が決まっている。
←
ならば、そこを優しく慰め、あわよくば自分が・・・
と言う、浅ましい考えで女子達が春に声をかけ始めたということを。

顔はもともと整っていた。
よく見ればかっこいい分類に類する男だ。
だが、言動が近づきにくかったため周りも距離をとっていたがあの告白で、春も普通に感情を表現するような人間なのだとわかったため、それならば・・・と行動に移すようになったというわけだ。

現在の人気は一夏と春、五分五分の派閥に分かれている。
大躍進だ。

だがそんなことを知らない春には鬱陶しいだけだった。

洗面所で顔を洗い、ベニーの部屋に向かってタバコを吸いながら足を進める・・・

ベニーの部屋の前に立ち、扉を開ける。

そこは相変わらずクソ汚い部屋だ。

「おいこらっ、来たぞ！」

そう言って声をかけると、

「あぁ、おはよう・・・」

そう言って重そうに体を引きづってこちらに向かってくるベニー。
歩きながら周りのものを崩しながらこちらに向かってくる。

「もういい、そこにいろ。
俺が行く。」

そう言って物を崩さないように慎重にベニーの元へ向かう。

「～～ぁ、で今日はデータでも持って来たのかい？
提出する予定日じゃないけど？」

あくびをしながら俺の来た用件を確認する。

「別に・・・
学校が面倒だからこっちに着ただけだ。
そのついでにデータ渡しておこうと思ってよ。
それと、後払いの報酬もな。」

そう言って封筒とデータを出そうとしたとき、ベニーは目が覚めたようだ。
封筒とデータを受け取り、至福の笑みを浮かべている。

「そうかい、そうかい。
それならそうと言ってくれればいいのに。
コーヒーでも出そうかい？」

そう言ってコーヒーカップを探し始める。

「いらねぇよ。
そんなに探さなきゃ出てこねぇ様なカップで飲み物が飲めるかっ！」

そう言うとベニーは探すのをやめ、パソコンに向かい始める。

「まったく、人の親切は素直に受けるものだと思うけどな・・・」

そう言ってパソコンに向かい始める。

「今回の僕の傑作はどうだった？」

パソコンに向かいながら俺に声をかけてくる。

「いい出来だったぜ。
あれでもう少し早く効果が出れば上出来だったがな・・・」

そう言って少し悔しそうな顔をする春。

「あれ以上は無理だよ。
僕も自分でよく創ったと思うような一品だったからね。」

「あれを提出すりゃ出世できたんじゃねぇのか？」

そう問いかけると、

「あれは趣味で作ったものの一つだ。
その領域にまで会社に乗り込んでもらいたくないからね。
もうデータは消しちゃったし。」

平然と言い放つベニー。

あんな大した代物を平然と消したとか・・・
やっぱりこいつは変人だ。

そんなことを考えながらこのゴミ部屋を掃除していると、

「そういえば、この前言ってたトゥーハンドのオートクチュールの話憶えてる?」

パソコンに向かいながら俺に話しかけてくるベニー。

「あぁ、例のわけわかんねぇやつな。
それがどうした?」

「臨海学校には間に合うから、そのときにちゃんと確認しておいてくれよ?」

そう言われるが・・・

「・・・何の話だ?」

自分に関係のある行事を全く知らなかったこの男に、ベニーは再び残念な子を見る目になった。

順応するには時間がかかる（後書き）

短くて申し訳ありません。
また明日も投稿させていただきますのでお付き合いくださると幸いです。

そう、それは突然に・・・（前書き）

途中まで一切登場予定の無かった人物です。
どのように絡んでいくのかは考え中です（笑）
ではお付き合いください。

あと、ラウラとの賭けについてご意見をいただきました。
海についたあたりで書くつもりでいますのでそれまでお待ちください。
内容は
「春らしくない！」
といわれても仕方ないかもしれませんが、人間関係を円満に運ぶためには必要なこと。
それだけ言っておきます。

そう、それは突然に・・・

～週末～
～織斑～

どうも皆さん。
織斑一夏です。

なぜ俺はこんな状況に立たされているのでしょうか？

後ろでは着替えをしているシャル。
それも、更衣室のカーテンを隔てた中と外という状況ではなく、同じ更衣室の中という状況で。

何故？

そんなことを考えながら俺はこの時間が早く過ぎるのを待った。

～春～

マジかよ・・・
面倒な・・・

そんなことを考えながら俺は今大型ショッピングモールの中を歩いている。

サルエルカーゴに、カットソー。
その上にカーディガンシャツ。
そして、何故か頭には肩まであるブロンドの髪。

ベニーのやつ・・・

～数時間前～

「・・・ダッチ・・・それ、本気で言ってるのかい？」

そう言って残念な目で俺を見る。

「何の話だ？」

記憶に無いものはしょうがないだろう。
そんなことを思いながらベニーの話を聞く。

何でも臨海学校と言う行事があるらしく、そこで専用機持ちは追加装備の確認作業などがあるらしい。

そこで旭日重工も一緒に春に新製品の確認をさせようと言うことらしい。
ついでに他国の最新鋭装備のデータも記録してこいときた。

そっちが本命だろうが・・・
思っても口にしないのが大人なところだ。

「で、何かいるのかそれって？」

そう問いかけると、

「僕が知るわけ無いだろう？
適当にいりそうな物買い物してきなよ。
６桁の物だって躊躇無く買えるだけの給料もらってるだろう？」

そう言われ残高を思い出す。

・・・確かに余裕で買えるな。

そう言われ早速買い物に行こうと部屋を出ようとすると、

「ちょっと待ってよダッチ。
まさか、その格好で行く気かい？」

「あぁ、来たのも似たような格好だぞ？」

そういう春の格好はジャージ。
頭を抱えるベニー。

「～～～ぁ、もうっ！
春これに着替えるんだっ！」

そう言ってゴミ部屋をあさり始めるベニー。
せっかく片付けたのに・・・
そんなことを思いながらベニーの出してきた物に袖を通した。

～現在～

ったく、服はいい趣味してる。
何でいつもこういう格好しないんだ。
それはいいとして、何でこんなかつらを・・・

そう思いかつらに手を伸ばし、外そうとしたときベニーの言葉が頭を過ぎる。

「君は一応有名人なんだからね。
これぐらいの変装しないと。」

そう言ったベニーの顔は間違いなく笑っていたのを憶えている。

確かに学生の身でタバコを吸っている姿を見られるのは多少まずいか・・・

そんなことを考えながら一軒の量販店に買い物をしようと足を進める。

〜？？？〜

「なぁ、まだ買い物するのか？」

そう言って問いかける相手は俺のほうを振り返り、

「何言ってんのよ。
当然でしょ！！！」

理不尽な言葉に荷物持ちに決定権が無いことは明白である。

「一夏さんと一緒にいたって言う金髪さんに負けないようなハイパーウルトラデンジャラス水着を探すんだからっ！！！」

そう言ってまたしても水着売り場へ足を進める。

探すって、一夏を誘えるかもわからないのに・・・
そんなこといったら今度は殴られるのでその言葉を胸に留め足を止める。

「じゃぁ俺そこのベンチで待ってるから、終わったら出てこいよ。」

「は〜〜〜い」

そう言って店に入っていった妹を見送り、ベンチに荷物を置き、腰

をかける。
荷物持ちは疲れるぜぇ。
そんなことを考えながら待っていると、視線に入った自販機が入る。
のども渇いたし、また長いだろうから一息つくか。
そう思い自販機に向かって足を進めた。

ジュースを買い、その場で蓋を開ける。
一口口に入れただけで体が喜んでいるかのような感覚がやって来る。
労働の後の一杯は格別だな。
そんなことを思いながらベンチに向かおうとしたとき、

ドンッ！

「ちょっと・・・
何すんのよっ！」

事件は突然おきるものだ。

そう、それは突然に・・・（後書き）

この後の展開・・・
どうしようか考えながら書くことになると思います。
どうせならここも考えておけばよかった・・・
ではまた次回の更新でお会いしましょう。

支払いをしよう（前書き）

昨日の今日で申し訳ありません。
掛け金のことを今回の更新で記載させていただきます。

流れ的に、ここで乗せておいたほうがいいんじゃない？
と自分の中で出したので前回の話をほったらかしてこの話を書かせてもらいました。
いや、女の子なのに汗臭い。
そんな話はいかがでしょうか？

支払いをしよう

現在、ある人物を捜索するという極秘任務を進行中である。
その相手を探す道中で合流した二人、計三人でその相手を捜索する。

「一体、どこに行きましたの？」

「あいつら・・・見つけたらただじゃおかないんだからねっ！」

そう言って私ですら身構えたくなるような殺気を放ちながら捜索活動を行っているわけだが、本来私がこの者たちと行動を共にするなど不可能だったであろう。

これもあいつが持ち出した賭けのおかげなのかもしれないな・・・
そんなことを考えながら数日前の出来事を思い出す。

～数日前～
私は賭けに負けるはずが無かった。
実力差は明白だったのだから。

だが私は負けた。
何が起こったかは理解できなかったが、それでも私は負けたのだ。

勝ち続けなければならない。
私は強くなければならない。
それが私の存在理由・・・

そんな私が負けたとき、あいつが言ってくれた。

「別に一人で勝たなくてもいいし、一人で強くなる必要も無いだろ？
お前が何かと戦わないといけないのなら、俺も一緒に戦ってやるよ。」

その瞬間、私の心の中に私しか座ることの無い席の他にもう一つ席ができた。
そこに座ったのは敬愛する教官の弟。

織斑一夏

こいつと一緒に居たいと思った。
そんなことを思うのは初めてだった。
心というものがあるのなら、暖かくなったこの感情がそうなのだろう。

だから私はあいつを嫁にする。
それは何があってもだ！

嫁にキスをしたやり取りをした日の放課後、あの二人をアリーナへと呼び出した。

「ちょっと、話って何なのよっ！」

「そうですわっ！
朝一夏さんにあのようなことをしておいて、私達にも何かするつもりですのっ！？」

そう言って私を睨む二人。
そう言われても仕方ないか・・・

だが、賭けには敗れたのでしっかりと掛け金は払わなくてはならない。

胸を張り、しっかりを二人を見つめる。

「何よ？」

「何ですの？」

そう言葉を投げかけられるがその言葉に対する回答は・・・

「先日は大変失礼な言動を取った事をここに謝罪いたしますっ！」

そう言って頭を思い切り下げる。

「「・・・はいっ？」」

突然の謝罪に状況が理解できていない二人。

～トーナメント会場～

「じゃぁ、織斑が勝った時には謝罪をしてもらおうか。」

「謝罪だと？」

やつが持ち出した掛け金が理解できなかった。

何故謝罪？

何に？

どうして？

そんなことを考えていると、

「人間誰かと喧嘩した時はきちんと謝るもんだ。
てめぇが傷つけたあの二人にしっかりと謝罪の言葉を。
それが俺の掛け金だ。」

こいつは馬鹿なのだろうか？

自分がサンドバックになるかもしれないような状況で、要求するものが謝罪だとは・・・

「いいだろう。

もし私が負けるなどということがあれば、あの二人に謝罪をしよう。

だが、私が勝ったときは遠慮なく貴様の体を破壊させてもらうから

なっ！」

そう言ってその場を離れた。
その時頭の中にあったのはやつの体をどこから壊死させるか。
それしかなかった。

だが敗れた私にそれを行う資格は無い。
賭けには敗れたのだからしっかりと掛け金は払わなければならない。

頭を上げ言葉を続ける。

「あのときの私の行動はこのような謝罪では済まされないだろう。
だから、私を殴ってくれ。
なんなら武器を使ってもらってもかまわない。」

そう言ってポケットからさまざまな武器を取り出す。
バタフライナイフにメリケンサック、銃まで選びたい放題だ。

「えっ？あ、ちょっと・・・」

「いえ、私達はそこまで・・・」

そう言って私を止めようとする。

「では、どうすれば許してもらえる？」

そう問いかけると、

「そうですわね・・・この前のことは先ほどの謝罪で許して差し上げますわ。
ですが・・・朝のことは別です。
歯を食いしばってくださいませんこと？」

「そうね。私もそれで勘弁してあげるわ。」

歯を・・・？

少し考えた後、何が行われるかが理解できたので己の歯を食いしばり、やってくるであろう衝撃に備えた。

バチンッ！

一つの音が響いた後にもう一つ同じ音が響く。

「ふぅ・・・これで勘弁してあげるわ。」

「そうですわね。
ラウラさんもそれでよろしいかしら？」

そう言って声をかけてくる二人。

「あぁ・・・この程度で済ませてもらえるならこちらとしては感謝の言葉を出したいくらいだ。」

そう言って二人を見る。

「これで朝のことはチャラにしてあげるけど、一夏は渡さないからね。」

「私もですわ。
行動を起こすことを躊躇っていた私にも落ち度はありましたが、これからは私も迷いません。
誰にも一夏さんを渡したりはしませんわ！」

そう言って私に宣戦布告をしてくる。

そうか・・・
これがクラリッサの言っていた強敵（とも）と言うやつか。

そんなことを考えながら両者に向かいこちらも同様に宣戦布告をする。

「私も嫁を誰にも渡すつもりは無い。
ここからは正々堂々と勝負だっ！」

そう言って私たちの間にあった一つの障壁は崩された。

支払いをしよう（後書き）

どうだったでしょうか？
女の子の心の中って多分男には一生かけても理解できないものだと思い、無理やりかもしれませんが何とか形にさせてもらいました。

汗臭いのは勘弁してください。
なんとなく、ＩＳならこんな感じの青春模様もありなんじゃない？と思ったものですから・・・

そして、掃除用具と軽い露出狂のお二人をほったらかしにしてこの様なやり取りをしてしまったことを申し訳なく思います。
ですが、この状況の中であの二人がいることが不自然に思えたものですから・・・

ご意見などございましたらどんどん書き込んでください。
随時参考資料として勉強させていただきます。

アンタッチャブル（前書き）

一日ほったらかしにしてしまいましたが、春の周辺で起こった出来事に戻らせていただきます。

お付き合いください。

アンタッチャブル

～春～

買い物を終え、喫煙所で一服をしている。

ガラスで外の光景が見えるが、周りの視線は喫煙者に対して冷たいものだ。

こうして分煙していても周りの目が厳しいのは時代のせいなのだろうか・・・

そんなことを考えながらガラスの向こうの光景を見る。

こうやって見ると、ガキのころとはやっぱり違うな。

男女が仲良く歩いている姿もあるが、女子が男子を小間使いの様に扱っている姿も珍しくは無い。

現に、赤い髪の男女が、男に荷物を持たせて歩いている。

年を重ねるごとにあの光景が増えるのだろうか。

そんなことを思っているとある事をふと考えた。

俺は何でＩＳを動かせるのだろう・・・

そんな考えても答えの出ない難問を考えていると、タバコを吸い終えてしまった。

のども渇いたし、ジュースでも買って帰るか。

喫煙所に入る前に見かけた自販機に向かい足を進めると、そこには

わずかだが、人だかりができていた。

～？？？～

「ちょっと、これどうしてくれんのよっ！」

そう言われてもな。

話に夢中で俺に気付かなかったのはそっちだろう・・・
そんなことを言ったらもっとひどいことになるだろうと思いその言葉を心に留め相手の言葉を受け止める。

「しみになっちゃうじゃない！
クリーニング代払いなさいよっ！」

「そうよ、それとちゃんと謝罪してよねっ！」

そう言って俺に詰め寄る女子たち。
これが文句を言われる状況じゃなかったら幸せだったんだろうな。
そんなことを考えながらどうにかこの場をやり過ごそうとしていた。
その時、

「邪魔だ。」

そう言って、俺の腰に突然の衝撃がやってくる。

～春～

自販機の近くに行くとそこにはわずかな人だかり。
自販機に並んでいるのか？
そんなことを考えていると、

「しみになっちゃうじゃない！
クリーニング代払いなさいよっ！」

「そうよ、それとちゃんと謝罪してよねっ！」

そんな言葉が聞こえる。

どうでもいいな。

俺には関係ないと、その人だかりを進み人だかりの最前列へ。

そこにはさっき見かけた荷物持ちをさせられていた男がいた。
そしてそいつのいる位置は俺が自販機に向かう道をふさぐようにして立っている。

「～～～～～～ッ！
～～～～～～～～～～～～！！！」

まだ言葉を続けている奴らが面倒になり始める。
これが終わるまで自販機は使用禁止か？
そんなことは関係ないと、自分の進路を妨害する者を取り除くための行動に出る。

「邪魔だ。」

そう言って俺は障害物に蹴りを入れた。

普通こういう状況では弱いものに味方するために身を乗り出すのが定石だろう。
だが、そんなもの知ったことではないと我が道を行くのがこの男だ。
蹴られた男が地面に倒れこんだ姿を見て、周りの時は止まる。
静かになって何よりだと、自販機でジュースを買ってその場を去ろうとしたが、

「あんた、何なのよっ！」

そう言って春に矛先を向ける女子たち。

「はぁ？」

そう言葉を返すが、その目は何故声をかけられているのかが理解できていない。

「私たちの話に入ってこないでよね！」

「そうよ、何なのよあんたっ！」

そう言って矛先を完全に変えてくる女子たち。

知ったことではないと、無視して歩き始めるが、

「ちょっと、私たちの話聞きなさいよっ！」

そう言って春の肩を掴んで無理やり振り返らせる。

その時彼女達は自分の行いを後悔する事になるとも知らずに手を出してしまったのだ。

ＩＳ学園では皆が知っているこの男に書かれた注意書きを知らずに。

その言葉はまるで洗剤の様な注意書きで・・・

『触るな危険！！！』

アンタッチャブル（後書き）

続きます。

堪忍袋、その大きさは人それぞれである（前書き）

自分の書いたものがサイト内でどれぐらい需要があるのかが気になり、週間アクセスの多い順で検索したところ、１００位以内に入っていました。
他のものでは探すのが大変そうだったので一番わかりやすいものに逃げただけなんですが・・・
やはり、転生者や最強系は人気があるんですね。
上を見ると3万アクセスなどと言う雲の上のような数字もありましたが、自分の中では今の現状で満足しています。
読んでくれる人がこうしていてくれるだけでありがたいことだと思っていますから。

タイトルですが、キリストが一ガロン入るほどの大きさの容器なら、私のはせいぜいエコバックくらいの大きさでしょう。
春のは・・・せいぜい小銭いれぐらいでしょうかね。

堪忍袋、その大きさは人それぞれである

～春～

いきなり肩を掴まれ、振り替えさせられる。

イラッ

軽く苛立ちながらその手を払う。

「何だ？
俺の用は終わった。
後は勝手にやってくれ。」

そう言って振り返り、この場を離れようとするが・・・

「あんたに無くてもあたし達にはあんのよ。
大体、男子が私たちに何口答えしてんのよっ！」

そう言って再び俺の肩を掴み向き直させる。

イラッ！

まぁ、まだこの程度では怒らない。
この程度、この世界ではよくある事だ。
そう思い自分を抑える。

「あんたも一緒に謝んなさいよ。
『愚かな僕達をどうか許してください』ってね！」

「超うける。
それいいじゃん。
あんた達、さっさと言いなさいよっ！」

そう言って俺達の謝罪を待つ女子たち。

地面に倒れこんだ方は諦めて立ち上がり謝罪の準備をしてる。
この時代、女子に逆らうことはできないのだから当然のことだろう。
周りもこの理不尽な態度を見えていないかのように振舞う。

だが、この男には女子たちが威張れる要素など一つも無いことを周りは知らない。

「ちょっと、早くしなさいよっ！」

そう言って俺の肩を押してきた。
人間、案外簡単に我慢の糸は切れる。

ぷちん

トゥーハンドを起動させ、周りにその展開の衝撃が放たれる。

「「キャッ！」」

「うぉっ！」

その衝撃で女子たちと男子が腰から地面に座り込む。

「うぜぇ・・・」

そう言い放つと女子たちを見据える。

「えっ!?
何っ!?
ちょっと、どういうこと!?」

「私が知るわけ無いでしょっ!?」

女子たちは軽くパニック状態だ。

その光景を見ながらゆっくりとホルスターからカトラスを抜き取り、撃鉄を起こし、銃口を女子たちに向ける。

「えっ?
何?」

「嘘でしょ?
ちょっ・・・?」

動揺が激しくなる女子たちに向かって・・・

「バァン!!!」

そう言うと同時に思い切り自分の身を小さくする女子たち。

その姿はさっきまでの態度はどこへ行ったのかと言うほどにみすぼらしいものだった。

「おい、さっさと立て。」

そう言って男のほうを見る。

「さっさとここから離れたほうがいいと思うぞ。
厄介ごとに巻き込まれたくないならな。」

そう言ってトゥーハンドを解除し、荷物を片手にその場を離れる。
まったく、なんて休日だ・・・

そんなことを考えながら急いで寮に戻るため足を進めた。

〜???〜

な、何だったんだ?

その場に取り残された俺の周りの光景はさっきとは一変したもの。
威張り散らしていた女子たちが小さくなり、俺はそれを立って眺めている。
完全に俺が悪者のような構図だ。

その時後ろから声が聞こえた。

「おにぃ、何してんのっ？」

そう言って俺を呼ぶ妹の腕を掴み急いで足を動かす。

もちろん荷物は忘れずに片手に持って。

「ちょっ・・・何やったのよ、おにぃ？」

「そんなの、俺が知りたいっての！」

そう言って急いで家に向かって足を進める。

家に帰り、改めて状況を整理した。

あれって、間違いなくＩＳだったよな・・・

男でＩＳが使えるって・・・

ある事を思い出して友人に向かって電話をかける。

数回のコールの後、その友人が電話に出た。

『もしもし？

どうしたんだ？』

相変わらずのんきそうだ。
そんなことを考えながら電話の向こうの友人に自分の疑問を問いかける。

「なぁ、お前以外にＩＳが使える男って確かもう一人いたよな？」

『あぁ、いるぞ。
同じクラスで俺の友達だ。』

友達か・・・
それなら・・・

「そうか。
ならちょっと頼まれてくれないか？」

『ん？
何をだ？』

「伝言だよ。」

そう言ってあの状況を逃れることができた恩人への伝言を友人に頼んだ・・・

ちゃんと届くといいんだが。
そんなことを思いながら電話向こうの友人に言葉を継げる。

堪忍袋、その大きさは人それぞれである（後書き）

次はまた別人物の視点から書かせていただきます。
短めですがよかったら読んでやってください。
更新時間の変更をお知らせします。
今後は0時ではなく7時に更新予約を入れましたので、その時間からチェックしてもらえればと思います。
何故変更したのか？
理由は簡単です。
更新したばかりの時間が一番チェックされる数が多いのですが、0時だと、次の日に眠たくなるかな？
と今更ながら気付いたものですから。
まぁもっと早くに気付くべきだったのかもしれません。
またいつ変更になるかわかりませんが、しばらくおつきあいください。
では次回の更新でお会いしましょう。

そのとき〇〇はその一部始終を捉えた！（前書き）

今回もまた別人の視点です。
テレビの衝撃映像の言葉のようですがあながち間違っていないと思います（笑）

そのとき○○はその一部始終を捉えた！

～千冬～

全く・・・
山田君も要らぬことを・・・

しかし、あいつはこういう物が好みなのか・・・
そんなことを考えながら一夏が選んだ水着を持ってレジに向かう。

「あの、織斑千冬さんですよ？」

そう言ってレジの店員に声をかけられる。

「そうだが？」

反射的に返事をしてしまったことが間違いだった。

「やっぱりっ！
あの、私あなたのファンなんです！
握手してもらえませんか？」

しまった。
こういう奴がいるから気をつけなければならなかったのに、一夏といたせいで調子が狂ってしまったか・・・

そんな事を考えながら、簡単に握手を済ませる。

「あの・・・一緒にいらっしゃった方って、ひょっとして恋人か何かでしょうか？」

どういう教育を受けているんだこの店員は？
失礼と言う言葉を知らないらしい。

その言葉に対し、一言で切り捨てる。

「そんな事を貴様に応える必要はない。」

そう言って会計を済ませ店から出て山田君を探す。

一体どこで時間をつぶしているのだろうか？
探すのも面倒だ、携帯で場所を聞いたほうが・・・
そう思い携帯電話を取り出し通話ボタンを押す。

『あっ、織斑先生。
買い物は終わったんですか？』

「あぁ、一夏は先に帰らせたから後は君の水着を選ぶだけなんだが・・・」

『そのことですが、生徒の皆さんと一緒に選んで買ったんで大丈夫ですよ。
今みんなでお茶しているところなんです。
織斑先生もぜひ。』

確かに冷房が効いてはいるが、それと喉が渇くのは別だ。

「わかった。

私もそっちに向かおう。
場所はどの辺りだ？」

『えっとですねぇ・・・』

山田先生に聞いたカフェに向かい足を進めるとその手前で人だかりができている。

一体何の騒ぎだ？

学園の影響か、騒ぎを見るとどうにも気になってしまい足が進む。
そこで見たものは・・・

「うぜぇ・・・」

そんな言葉を吐きながらＩＳを身に纏っている者。
あのＩＳ、まさかな・・・
そんな事を考えながらその様子を伺う。

「えっ！？
何っ！？
ちょっと、どういうこと！？」

「私が知るわけ無いでしょっ！？」

そいつの前に立つ女子たちはパニック状態。

銃を抜き、その銃口を女子に向ける。

「えっ？
何？」

「嘘でしょ？
ちょっ・・・？」

動揺が激しくなる女子たちに向かって・・・

「バァン！！！」

そう言うと同時に思い切り自分の身を小さくする女子たち。

何をやっているんだあいつは・・・
そう思いながら眉間のしわを抑えるようにしてこの状況に呆れていた。

「おい、さっさと立て。」

そう言葉を放つあいつ。
よく見るともう一人男がいる。
あれは確か一夏の友人の・・・
名前までは出てこなかったが友人の一人として見かけた事のある顔だった。

「さっさとここから離れたほうがいいと思うぞ。
厄介ごとに巻き込まれたくないならな。」

そう言って離れていくあいつ。

その状況に取り残されていたものも声をかけられ急いでその場を離れていった。

何だ・・・
そういう事か。
瞬時に何があったかが理解できた。

そしてそれがわかったとき、わずかに頬が緩んだ。

この数ヶ月で随分と変わったものだ・・・
だが、こんなところでＩＳを起動させた責任はとらせないとな・・・
そう思いながら山田君たちがいるカフェに向かう。

その足取りは軽く、さっきの店員とのやり取りすらなかったことになるほど晴れ晴れとした気分で足を進めるのであった。

そのとき〇〇はその一部始終を捉えた！（後書き）

春の変化にあのお方の驚きなどが書けたらいいなと思い書かせてもらいました。
本来この件自体を書く予定が無かったので駆け足で書かせてもらいましたが、理解してもらえたら幸いです。

ではまた次の更新でご意見・ご感想お待ちしてます。

正直な話、乗り物に強いわけではない（前書き）

バスの中でのお話です。
全く関係ありませんが、私の友人に以前

「バスガス爆発」

と言う早口言葉を言わせたところ、

「バスバスバスバス」

といわれたことがあります。
バスが連続して走行していたんでしょうか？
関係ないお話でしたが、バスつながりと言うことで・・・

正直な話、乗り物に強いわけではない

六次の隔たりと言う言葉を知っているだろうか？
人は自分の知り合いを6人以上介すると世界中の人々と間接的な知り合いになれる、という仮説である。

俺はそんな簡単に世界と繋がれるとなんて思ってはいない。
俺の世界は恐ろしく狭いものだと思っていたから。

だが、ここに来た影響で俺の世界は思わぬ形で広がった。
それがどう影響するかは、まだまだこれから時間を重ねてみないとわからないだろう・・・

週があけ、俺たちはバスに揺られて臨海学校の宿泊施設に向かっている。

バスに揺られると、あの社会見学を思い出す。

何であの時・・・

そんな事を考えるが、今更どうにかなるようなことでもない。
窓の外を流れる景色を見ながらそんな事を考えていると、声をかけられた。

「春、ちょっといいか？」

・・・こいつはまだあの時の演技を信じているのか・・・
そろそろあのときのことは演技だったと説明したほうがいいだろう。
そう思い織斑の方を見る。

「あのな、あのときの事だが・・・」

言葉を続けようとした時、先制パンチを食らう。

「伝言があってよ、日曜日は助かった。『　　。』だってよ。」

その言葉を聞いたとき、俺の思考は停止した。

日曜？
助かった？

何のことだ？
俺はお前には関わっていないぞ？

その事を考えようと思考が再開したとき周りが食いついてきた。

「えっ？何？何の話？」

「教えて、教えて！」

そう言って織斑に詰め寄る女子たち。

「あぁ、日曜に春が絡まれてた俺の友達を助けてくれたんだよ。」

その言葉を聞いてもピンとこない。
助けた？
こいつの友人を？

さっぱり理解できないが、さっき聞いた言葉が今になって俺の頭に届く。

「ちょっと聞いた？
吉田君が人助けしたんだって。」

「本当に？」

「本当ならきっと今までの冷たい態度は演技だったのよ！
きっとあのクールな態度の裏にとんでもなく熱い情熱が・・・」

「私、本気で考えてみようかしら・・・」

女子たちは織斑の一言でヒートアップしている。
だが、そんな様子が春に届くことは無かった。

『　　』

その言葉を理解したとき、顔が熱くなる。
その姿はよくある言葉で表現すれば茹蛸のような顔だ。

「ちょっ、春大丈夫か？」

言葉をかけられるがその言葉が春の頭に届くことは無い。

あいつに言われてからどうにも『　　』と言う言葉に異常に反応するようになってしまったようだ。

状況を打破しようと織斑の胸倉を掴み、座席に叩きつける。

その顔は相変わらず茹蛸状態だが今はこれ以上こいつに口を開かせるわけにはいかない。

トゥーハンドを部分展開し、ビーをその手に持つ。

そしてその銃口を織斑の額に押し付ける。

「額でタバコを吸うコツ、教えてやろうか？
いいか？
これ以上その口を開くんじゃねぇ！」

その行動は周りから見たら照れ隠し以外の何ものでもないが、それを考える余裕が春には無かった。

「わ、わかった。
わかったからそいつをしまえって！」

その顔は驚いてはいたが恐怖が表れた様子は無かった。

しばらくその状態だったが熱が冷めたとき後頭部にもはや定番となった攻撃が飛んできた。

バシンッ！

「馬鹿者！
バスの中を血風呂（ブラッドバス）にするつもりかっ！」

そう言って俺に注意を入れる。

今回は全面的に俺が悪いので黙ってのありがたい説法を聞くことになった。

その間女子たちが春について今後どうするかを本気で議論していたことは春は知らない。

～一夏～

びっくりした。
まさか銃を突きつけられるとは・・・

そんな事を考えながら自分の席に戻る。

「一体吉田君に何を言ったの？」

シャルが俺に聞いてくる。

「そうですわよ？

何を言ったら銃口を突きつけられるような事態になるんですの？」

セシリアも身を乗り出して聞いてくるが、大したことは言ってないんだけどな・・・

そんな事を考えているとラウラが席を立つ。

「ラウラ、どうした？」

そう声をかけると、

「私の嫁に銃口を向けるとは・・・

やはり、あいつは賭けなど関係なく壊しておくか・・・」

そう言ってどこから出したのか拳銃を持って春に向かおうとしてる。

「ちょっと待てって！

俺は大丈夫だから、そんな物騒な物しまえって。」

そう言って急いでラウラを羽交い絞めにする。

「しかしだな・・・

！・・・嫁よ、人前でずいぶんと大胆だな。

そんなに私が恋しかったのか？

言ってくれればいつでも・・・」

そう言って俺の腕の中でくねくねし始めるラウラ。

何言ってるんだ？

その意味を理解しようと考えていると、肩にものすごい力をかけられる。

「イタイ、痛い！」

その痛みでラウラを離し後ろを振り返ると、

「ねぇ、一夏・・・

女の子にそんなことしちゃいけないよね・・・？」

そういうシャルは笑顔だが、何故だろう。

とてつもなく怖い。

「一夏さん、レディにそんなに気安く触るものではありませんわよ・・・」

そういうセシリアの髪の毛が重力に逆らっているように見える。

一体俺が何をした？

そんな事を考えながら、何故か俺もバスの中で二人から説法を聞かされることになった。

正直な話、乗り物に強いわけではない（後書き）

次回は旅館かな？
海かな？
まぁそこら辺だと思ってください。

では次の更新でお会いしましょう。

水に浸かるときは水着か裸で（前書き）

お盆休みに突入です。
更新量は若干減りましたが何とか毎日更新できていることがうれしいU↓です。
気が付けば、ありがたいことにＰＶが１０万人を天元突破！
ユニークも１万人を突破しました。
最初の頃にはどうがんばっても実現不可能な数字が今こうしてあるのは読んでくださっている皆さんのおかげです。
本当にありがとうございます。

ですがここで難題が。
この話をみなさんがどう感るか・・・
少し不安ですがお付き合いください。

水に浸かるときは水着か裸で

旅館に到着し、適当に挨拶を済ませたところで自分の部屋に案内された。

ありがたいことに一人部屋だ。
あの馬鹿と一緒の部屋だったらどうしようかと悩んでいたが、それは杞憂だったようだ。
だが、隣の部屋には最強の女帝。
魔王。
暴君。
それらの言葉全てが似合う女性が控えている。
下手なことはできないだろう。
そんな事を考えながら扉を開けた。

そこは驚くほど整えられた一室。
部屋が客をもてなしてくれているように思えるほど綺麗なものだった。

すげぇ・・・

旅館と言うものを少しなめていた様だ。
考えを改め、着替えようとする。
もちろん浴衣にだ。

海？
そんなところに行って何になる？
暑いだけだ。
そんなところより涼しいところで一杯やってるほうがよっぽど楽し

い。

完全に臨海学校に来た学生の自由時間の過ごし方としては間違っているが春にとってはそれが正解だった。

着替える前に持ってきた荷物の一つを残し、他の物は冷蔵庫にしまう。

さて、こいつの肴は何にしよう・・・

そんな事を考えていたときあることに気付いた。

お茶菓子はあっても肴になるようなものが無い・・・

未成年が泊まる部屋にそんなものがあるはずも無い。

頼んで出てくるようなものでもないか・・・

そんな事を考えしぶしぶ着替えの手を別の服に伸ばし、残していた物も冷蔵庫にしまい部屋を出る。

何かしらの店は近くにあるだろう。

そんな事を考えながら私服で旅館から足を伸ばした。

海岸沿いの道を歩いているとこの暑い中を無邪気にはしゃいでいる連中が目に入る。

元気だな・・・

うだるような暑さにうんざりしながらポケットからいつものセットを取り出し火をつける。
海に夢中でこっちに気付く奴などいないだろうと思ったからだ。

呼吸と同様に煙を吸いながら歩いているとあることに気付いた。
あいつもあそこで遊んでるんじゃ？

そう思い視線を向ける。
だが人数が多くてよくわからない。

「ちっ・・・」

舌打ちをして諦めかけたがあることに気付いた。
あいつのそばにいるんじゃないのか？
イラッとはするがもっとも有力な候補が上がった。

森の中から一本の木を探すのは大変でも、きこりを探すのはそうでもないんじゃないか？

そう思い一人のきこりを探す。
上半身に布を纏っていないきこりを・・。

そのきこりは予想通り木を探すより簡単に見つかった。

オイルを塗っているようだ。
あの光景、どう考えても恋人にやってもらう行為だよな・・・
そんな事を考えていると俺の探していた奴も見つかった。

相変わらず慌しく動いている。
元気で何よりだ。
そんなことも思ったが、やはりあいつと一緒に居るところを見るのは腹が立った。

だがあの行動をとった後、俺のことを徹底的に避けるようにしていたあいつに、これまで人と接していなかった俺がどうしていいのかもわからなかった為現状に変化は無い。

釈然としない気持ちであいつらの行動を見ているしかなかったが、あいつらが海に向かって歩き出す。

その光景を見ていることできない苛立ちを紛らわせるようにタバコを吸う。

しばらく見ていると様子が急変する。

あいつの姿が突然海に消えた。

「なっ・・・！」

その瞬間、ＩＳが砂浜を翔る。

「「「「キャァ～～～！！！」」」」

「何？何なの？」

「今何か飛んでかなかった？」

その衝撃で砂が舞い上がり砂嵐のように、その衝撃で周りに被害が

出るがそんなこと春は考えていない。
その頭にあるのはあいつの安否。
その衝撃が海に届き、あいつの姿が消えたあたりについた時ＩＳを解除する。
そのまま重力に任せ海に飲まれる。
服が水を吸い、体が重い。
その重さに任せてその身を沈ませると探していた姿を確認する。
急いで手を伸ばし俺より深く沈もうとする体の手を掴む。
重たい体を無理やり浮かせ必死の思いで海面に顔を出す。
「ぶはっ・・・
おいっ、大丈夫かよっ！」
そう言ってほほを叩くが反応が無い。
そこに織斑もやってきた。
「おい、大丈夫かっ！？」
「さっさとこいつ浜まで運ぶの手伝えっ！」
そう言葉を吐き、織斑と協力して何とか浜まで運び終える。
少し水を飲んだだけで大したことは無いらしい。
ホッとしたが急いでその場を離れることが頭に浮かぶ。
今は近くにいても気が付けばまたいつもの様になるだろう。

避けられるぐらいなら・・・
そう思い歩き出そうとしたときあることに気付いた。

服がクソ重い・・・
下着までびしょ濡れだ。
携帯は・・・
旅館においてきた自分を褒めてやりたくなった。
財布は・・・
ポケットに入ってはいるが札は全滅だ。
いつものセットは・・・
こっちも全滅だな。

出た結論は一つ。
ＡＴＭも探さないとな・・・

そんな事を考えながら上半身の服を脱ぎ、絞ると面白いほど水が絞れる。
それを何度か繰り返し少しはましになった服に袖を通し、砂浜を離れる。

あんなことがありゃもう深いところまで行かないだろう。
そう思いながら砂浜を離れとりあえずコンビニを探しに足を向けた。

～？？？～

調子に乗って足をつって体が海に沈んでいく。

嘘でしょ・・・

こんなことで・・・

そんな事を考えながら自分の意識が薄れていくことがわかる。

こんなことで私の人生終わっちゃうの・・・？

後悔の念だけを抱えその体が海の闇に沈もうとしたとき、自分の手を掴まれるのを感じた。

あっ・・・

この手って・・・

そんな事を考えたとき意識は闇の中に沈んだ。

意識が戻ったときに目に入ってきたのは自分の手を掴んでくれたであろう人物。

「い、一夏・・・」

「大丈夫か！？」

心配してくれたんだ・・・

それが無性にうれしかった。
あの状況で自分を助けてくれたことが自分の気持ちを高ぶらせる。
あぁ・・・これで周りに人がいなかったら・・・
そんな事を考えているとある人物が視線に入った。

そいつは背中を向けここから離れようとしている。

一体何をしに来たんだろうか?
そんな事を考えていたとき、思いがけない一言を言われた。

「よかった・・・
これも春のおかげだな。」

そう言われた時その言葉の意味が理解できなかった。

えっ?
一夏は何を言っているんだろう。
あいつのおかげ?
あいつが何をしたっていうの?
そんな疑問を解決するため問いかける。

「えっ・・・
何言ってるの?」

状況が理解できない私に一夏が言葉を告げる。

「一番最初に助けてくれたのは春だぞ?
いきなりＩＳで飛んできたときはびっくりしたけど、そのおかげで

間に合ったんだ。
俺はここまで運ぶの手伝ったぐらいだぞ？」

そう言う一夏の顔は嘘をついているようには見えない。

「そ、そう・・・
そうなんだ・・・」

その言葉を聞いたとき少し、いやかなり動揺した。

あれ以来避けていたのにまさか最初に来たのがあいつだったなんて・・・

心にわずかな罪悪感があった。
私はあれ以来ずっと避けてきたのに・・・

そんな事を考えながら体を気遣われセシリア達に旅館へと連行された。

水に浸かるときは水着か裸で（後書き）

こんな簡単にフラグが立つんなら世の中苦労しねぇよ！

と思われた方もいるかもしれませんが、彼女は現在、大好評絶賛織斑ＬＯＶＥです。

ですが、自分のために動いてくれる人を嫌うという人も少ないと思います。

これが春に対する態度の変化の切欠になるといいかなと思います。

私の言い訳は以上です。

いや～難しいですな、恋愛って。

つまみの基本は柿の種（前書き）

お気に入りに登録してくださっている人数が増えたり減ったりと落ち着かない日々をすごしています、U↓です。

食事を取りましょう。

夏ですから夏ばてしないように皆さんしっかりと脂っこいものを取りましょう。

そういう私の主食は主にそうめんです。（笑）

濡れた格好で買い物をする姿は周りから見たら異様なものでしかなく、俺の周りに人はいなかった。

買い物はしやすかったが店員の目が痛かったことだけを憶えている。

買い物袋を両手に持ち、旅館に帰るとロビーで声をかけられた。

「あ～、『ダッチ』だ～。
どうしたの～その荷物？」

一瞬体が固まった。
『ダッチ』と言う呼び方をするのはベニーだけだったからだ。
誰がその呼び方を？

そう思い視線を向けるとそこにいたのはやけにとろそうな女がいた。
どうにも行動に機敏さが感じられない。
こっちに向かう姿すらゆっくりで軽く苛立ちを覚えるほどに。

だが俺を『ダッチ』と呼んだことが印象的だったのでそいつが寄ってくるまで動けずにいた。

「買い物してきたの～？
何買って来たの～？」

そう言って袋の中身に興味があるようだ。

中身は肴になるような物とさっきの出来事で湿気ってしまったセッ

ト。
見られるのはまずいと、その中から一つ取り出してそいつに渡す。
「それやるからとっとと部屋に帰れ。」
そう言ってチョコを渡して自分の部屋に戻る。

その光景を見ていた他の女子が、やけに羨ましそうにそのチョコを見ていたことに春は気付きもしない。

部屋に入る浴衣に着替える。
磯臭くないだろうか？
そう思い袖を通した浴衣の匂いをかぐ。
こうして浴衣を着るのは初めてだが、着てみると随分楽だ。
これから寝巻きはこれにしようか・・・
そんな事を考えていると部屋をノックされる。

誰だ？
これから始まる俺の至福の時間を邪魔しようとした奴に向かってなんていおうか考えながらその扉を開ける。

だが、そこに立っていた人物に俺は何も言えなかった。

なぜならそこにいたのは・・・

「夕食の時間だ。
大広間まで来い。」

そう言って暴君に拉致られ俺は大広間まで連行されることになった。

そこにはすでに多くの生徒が集まり、食事を前に浮かれているようだった。

そんな中、二箇所空気の違うところがある。

一つは織斑が座るであろう座布団の両脇。
もう一つは俺が座る椅子の両脇。

やけにその周りだけ女子が緊張しているように見えた。

織斑の方の事は知ったことではないが、俺の方は簡単な理由だろう。

俺が座るんだ。
その両脇は空気が重くなっているに違いない。
そう思いながら自分の席に座る。

だが春は知らない。
自分の両脇の席に座る女子たちが緊張している理由を。

キス事件　（勝手にそう呼ばれているだけ）　以来女子たちの中で春の人気は高まっていた。

それに加えて今日の救出劇。
しかも自分が助けたとは名乗らずに颯爽と去っていったその姿。
さらにバスの中で見せたあの恥ずかしがる姿、それらの出来事で春派閥の女子たちの中でその人気はピークを迎えていた。

食事を取りながら会話を交えて何とか仲良くなろう。
そう考え気合の入っている女子たちの緊張状態を違う意味で勘違いした春はある事を考えていた。

・・・面倒くせぇな・・・

そんな事を考えながらどう食事の時間をすごすかを考え、答えが出たのでそのタイミングを待つ。

「では、いただきます。」

『いただきま～す！』

織斑の号令にあわせて全員が食事の号令を復唱する。

その号令と同時に大広間はやけに騒がしくなる。
それは俺の席の周りも例外ではない。

やっぱりあわないな・・・

そう思い席を立つ。

「えっ、あ、吉田君？」

「どうしたの？」

そう声をかけられるがその声を無視して大広間を出た。

５分経過

春の立った席に春の姿は無い。

１０分経過

まだ戻らない。

１５分が経過したとき、さすがに変だと隣の席に座っていた女子が動いた。

廊下を覗いてみるが春の姿は無い。

一体どこに行ったんだろう？

そう思い教師達が食事を取っている部屋を訪ねた。

部屋に戻り、テレビをつけ手には飲みなれたラムを片手に買ってきたつまみを口に入れる。

テレビでは野球をやっている。
別に野球が好きなわけではないが、特に面白いものがやっていなかったからだ。

場面はノーアウト2塁1塁。
打者は四番とチャンスの場面。
上手くいけば得点のチャンスだろうと画面に集中し、ピッチャーが球を投げた瞬間、俺の頭にも球が飛んできた。

ガンッ！

ストレートで球速１６０キロほどだろうか。
だがその球は丸くなく、四角く黒く硬い。
やけに見慣れたものだった。
頭は出血していないだろうか？
そんな事を考えながら投手のほうを見る。

その球を投げてきた投手は背後には見える人には完全に人型の幽波紋（スタンド）が見えていただろう。

「貴様・・・
今が何の時間か・・・
わかっているか・・・・？」

言葉を切りながら俺に問いかけてくる暴君。

馬鹿でもわかるだろう。
完全に怒っていらっしゃる。
だが現状なだめる手段を持たない俺にはどうしようもないのでその問いに答える。

「えっと・・・
夕食の時間ですか？」

そう応えると、

「正解だ・・・
では貴様は今何をしている・・・？」

正解したようだ。
１０ポイントいただこう。

次の質問にも答える。

「夕食をとってますが？」

そう言って机の上に手を向け、これを見よ！言わんばかりに並べられた肴を見せ付ける。

「そうか・・・

この臨海学校は授業の一環だ・・・
団体行動は基本中の基本だ・・・
そこで提案だ・・・
その基本を守れなかった貴様を今ここで肉塊にするのと・・・
大人しく大広間で食事を取るのと・・・
どっちを選ぶ・・・？」

その問いに選択肢はあるのだろうか？

そう思いながら生きるために必要な選択肢を選ぶ。

「・・・大広間に行きます。」

選択肢を選んだ時に画面に映っていたのは、まさかのトリプルプレーでチェンジになっていた残念な光景だった。

肩を落としながら再び大広間に向かう。

その道中で言葉をかけられる。

「何故一緒に食事を取らなかった？
別にさっさと食べて部屋に戻ればこんなこと言う手間もかからなかったのに。」

そう問われ、すでに軽く酔っていたせいか普通に返答してしまった。

「もう長いこと他人と一緒に食事を取るってことをしてなかったん

で、正直落ち着かないんですよ・・・」

その言葉を聞いたとき暴君の顔が一瞬曇るが、その後に言葉を口にする。

「だったら、これから慣れていけばいい。
お前が思うほど他人ととる食事は悪いものじゃないぞ。」

そう言われた時大広間につく。

後ろから肩を叩かれ、言葉をかけられる。

「今のお前は入学した時とは別人だ。
今を楽しみ、大事にしろ。
そうすればきっと今までとは違うものが見えるはずだ。」

そう言って離れていった。

言っている事はよくわからなかったが、とりあえずここで食事を取らないと俺は肉塊になることだけは確かだろう。

仕方なく大広間の扉を再び開けた。

つまみの基本は柿の種（後書き）

私のつまみはどんなものにも基本柿の種がセットです。
私情が出たタイトルで申し訳ありません。
皆さんのつまみはなんでしょうか？
ではまた後日お会いしましょう。

酔うと人はいつもとは違う行動をとるものだ（前書き）

前々回の感想で自分の作品に自身が持てそうなU↓です。

酔った春が学園の生徒達と初めて絡みます。
前は二日酔いでしたが今回は酔っていますので前回とは違う行動をとります。
何をするのか、どうぞご覧ください。

酔うと人はいつもとは違う行動をとるものだ

～箒～

風情ある旬の食材をふんだんに使われた夕食を味わっていると、急に広間が騒がしくなった。

「「「「「「キャーーーーーーッ！」」」」」」

何事だ？

そう思い視線を向けるとそこで行われていたのは一夏が隣に座っていたセシリアになんと、

あ～ん！

をしている光景だった。

バキッ

箸が折れてしまった。

どうやら安物の箸だったようだな・・・

そう思いながら箸をおく。

その手はかすかに震えているが本人はそんな事を気にしない。

箸が使えないなら次は汁物を・・・

そう思い漆器の器に手を伸ばし、口に向かい傾ける。

いい香りだ。

においを楽しみながら口に運んでいたとき・・・

「「「「「「「「キャーーーーーーーーーーーッ！！！」」」」」」」」

その言葉に飲んでいたものを噴出し、再び視線を向ける。
今度は隣に座っていたシャルロットにも同様の行為を行っていた。

グシャッ！

器が変形して元の原形をとどめていない。
汁も浴衣にかかってしまった。
そんな事を考えながら平静を装い浴衣を拭くが、その手の震えは最初よりも激しい。

最初は皆と同様その光景に見入っていた隣の生徒も、箒の様子に気付き、顔色は蒼白そのものだった。

この器って、あんな形になるんだ・・・

そんな事を考えながら箒の様子を伺っている。

箸が無くなり、汁物も飲めなくなった。
後はデザートか・・・

そう思い果物に手を伸ばす。
夏ということで梨が出されている。
これは涼しそうな・・・
そう思いそえられていたフォークを梨に刺した。

知っているだろうか？
梨には解熱作用があるらしく、夏にぴったりの果物なのだ。
その果物を今最も解熱が必要な人物が口に運ぼうとした瞬間・・・

「「「「「「キャーーーーーーーーーーー：@＾¥＾@
“＝＃＄％＆！！！」」」」」」」

もはや後半は言葉ですらない。
その声の方向に三度視線を向けたとき、口に向けられていたはずの
フォークはその力を失い、完全に重力に従うように方向を変えた・・
・

箒の起こしたその光景を見ていた隣の生徒も箒の手と同様、震えが
止まらなくなっていた。

超能力を身につけてしまった彼女が見た光景は・・・

ラウラが一夏の膝の上に座り上目使いで一夏の口に向かい、

あ～ん！

と食べ物を向けている光景。

今までのしてもらっていたのとはベクトルが１８０。違うその光景
が織斑千冬以外にも幽波紋（スタンド）を使うことができる人物の出現を呼んだ。

完全に私の目の前にある食物を食べる手段を失った。
その場にいることがいたたまれなくなり広間を出て自分の部屋に向
かう。

廊下を歩きながら思う。

本当ならあの場所にいるのは私のはずなのに・・・

そう思いさっきの光景を思い出す。

その光景と同時に思い出したのは以前に一夏たちと屋上で食事をしたときに自分もしてもらった、

あ～ん！

の光景だった。

あれは私だったから・・・

私だけの・・・

そう思い自分の中の醜い感情に気付かないふりをする。

嫉妬

言葉にしてしまうのは簡単でも、認めてしまえばこれほど醜いものは無い。

その感情が自分を支配していくことに気付かないふりをした。

昔はずっと一緒だったのに・・・
子供のころの光景を思い出す。
あのころは楽しかった。
私が誰よりも一夏のそばに居れた・・・

だが今は違う。

一夏は力を手に入れ、遠くへ行ってしまった。
そして、同じくその力を持つもの達がそばにいる。
それは私では届かない場所・・・
今では私よりも彼女たちの方が一夏に近い・・・
それが耐えられなかった。

だからこそ、この世で一番頼みたくない相手に頼んでまで欲したのだ。

一夏と同じ力を・・・

それがあればまた私は一夏と同じ場所に立てる。

その力が手に入ると思うからこそ今日一日一夏の周りの行動に声を出すことなく耐えられた・・・

明日・・・
そう、明日になれば私も彼女達と同じ場所に立てる！
いや、そこよりももっと一夏の近くに・・・！

そう思い大人しく自分の部屋に向かい足を進めた。

～春～

大広間に戻ったときに目に入った光景に俺は自然と足が後ろに下がる。

織斑の周りにはとんでもない人だかり。
その半数はすでに人の解する言葉を発してはいない。

・・・これを楽しめと？

とても楽しめそうに無い状況ができていたが、それを見なかったことにして自分の席に近づく。

両脇の生徒は春が戻ってきた瞬間に声をかけてきた。

「「おかえりっ！」」

その顔がやけに笑顔なことに驚いた。
何故にこいつらは笑顔なんだ？
そんな事を思いながら席に着く。

「い・・・ます。」

小さく言葉を口にし、目の前の食事に箸をつける。

うまい・・・

最初の一口目に感じた感想がそれだった。
学園の食事も上手かったが、この食事は旨い。
美味しいと思えた。

何故そう感じたのかはわからなかったが箸が止まらなかった。
箸を進めていたときにあることに気付いた。

両脇の生徒が春と同じように箸を動かしていたのだ。

食事が始まってから時間がたち、すでに食べ終わっている生徒が何人もいる中でその生徒達の食事の量は春と大差なかった。

そのとき思ったことが口に出てしまった。

「お前ら、食べてなかったのか？」

いつもなら決して口にしないであろう、周りを気にする言葉。
酔っていることが原因だが、本人に自覚は無い。
その疑問を投げかけたときに返ってきた返事を聞いたとき、その言葉を口にしたことを後悔した。

「うん、吉田君と一緒に食べようと思って・・・」

「せっかく隣なんだし、お話しながら食べたくって・・・」

その言葉を聞いたとき無性に体が熱くなる。

どうしていいのかわからず、真っ赤になるしかなかった。

こいつらは何を言っている？
誰と食べる？
誰と話すって？

自分の許容量を超えた言葉を前に春のとった行動は、織斑先生に言われたことを実行するものだった。

さっさと食べて自分の部屋へ。

一気に残りを食べ、急いで席を立つ。
その速度にさすがに両脇の生徒も付いていけなかった。

話できなかったな・・・

そう思っていたとき、予想だにしていなかった言葉をかけられた。

『あ　　う』

それはとても小さく両脇だから聞くことができるほどの音量だったが確かにその言葉が発せられたのだ。

その言葉を言った本人はすでに広間から姿を消し、その後に残ったのは顔がとんでもなくにやけた女子二人の姿だった。

酔うと人はいつもとは違う行動をとるものだ（後書き）

どうでしょう・・・？
納得いかないという方もいらっしゃるかもしれませんが、ちょっと人間味のあるところを表現したかったもので。
春の口からこのお話の中で初めてある言葉が出ました。
どこで出そうか悩んだんですが、こういう所で出すのもありなんじゃないかなと思い初お披露目です。

ご意見ございましたらどうぞおっしゃってください。
お待ちしてます。

死刑宣告（前書き）

自分ではわかっていても、他人に言われるときつい事ってありますよね？
今回はそんなお話です。

死刑宣告

～春～

広間を出て、まず最初に向かったのは男湯。

全身から火が出るほど熱い体を冷ますために水風呂に浸かりに来たのだ。

浴衣を無造作に脱ぎ捨て、下着も脱ぎっぱなし。

脱衣籠の存在を無視して浴室に向かう。

そのまま一気に水風呂に潜る。

数十秒もぐり、冷えた体を震わせながら水風呂からでる。

そう、あれは酔っていたせいだ・・・

俺は飲みすぎたんだ・・・

そう自分に言い聞かせさっきの行動を酒のせいにする。

『　　』

一体いつ振りに口にしたのかもわからない言葉が出たことが驚きだった。

俺に一体何がおきている？

自分でも感じる変化に戸惑いながら風呂に入りなおし冷えた体を温めなおした。

風呂から上がり、部屋でゆっくりさっきの晩酌の続きをする。

グラスに氷を入れ、酒を注ぐ。

こいつのせいだ・・・

そう思いさっきの行動の原因とした物を口に流し込んだ。

それはいつもと同じもののはず。

だがその味に違いがあるように感じる・・・

旨い・・・

そんな事を感じながら口に入れていたとき、俺の部屋の扉は再び突然開くのだった。

「客が来たぞ。

もてなしの一杯を出してもらおうか。」

そう言って扉を開けたのは隣の部屋の住人の魔王だった。

「部屋、間違ってますよ。」

その声の主を見ずそう魔除けの言葉をかける。

だが魔王にその手の呪文は通用しなかった。

「そうか、客をもてなさないというのだな・・・

どうするか・・・

確か、先日学外でＩＳを無断で起動させた大馬鹿者を見た気がするな・・・

教師としてはそんな大馬鹿者に特別指導のメニューを組まなければならないんだが・・・」

その言葉を聞いたとき、魔王の方を見た。

あごに手を当て、ずいぶんと楽しそうな顔をしている。

「どんなおもてなしがお望みでしょうか・・・？」

うんざりしながら客の注文を聞く。

「お前の持ってきた物の中で一番高い奴を出してもらおうか。

それとつまみだな。

そのもてなしがあればきっと先日何があったかは酔って忘れてしまうだろう。」

ずいぶん楽しそうな顔をしながら言ってくれる。

一番高い酒だと？

せっかく楽しみにしていた俺の一番の楽しみを奪おうというのかこの魔王は・・・
だが特別メニューはごめんこうむる。
そんな時間があったら候補生のデータ集めの時間が欲しい。
心の葛藤で金に軍配が上がったのでそのとんでもない客を店に招く。
「いらっしゃいませ・・・」
冷蔵庫で冷やしてあった酒の蓋を開け、客に注ぐ。
その香りを楽しんで口に入れる。
最初の一口は俺が・・・
悔しくて涙が出そうだった。
「・・・いい趣味だ。
将来は酒屋か居酒屋でもやるといい。」
「それは、俺にこの先ＩＳでやっていけないと言ってるようなもんですよ・・・」
そう言葉を口にすると魔王が口を開く。
「・・・正直に言おう。

お前の操縦技術は学園に来たばかりのときに比べると確かに向上した。
だが、私の目から見て正直今以上の向上は望めない。
それが私の見解だ。」
生徒の将来を見事に切り捨てる一言だ。
自分の中にあった一つの考えではあったが、実際に言われると正直つらい。
「よくもまぁ、ギロチンの刃を落とす紐を放せますね・・・
でも、そうでしょうね。
俺の適性、最初に起動したときから上がってないんですよ・・・
ずっとC。
最初は上がると思ったんですけど、人生そううまくはいかないものらしいです。」
そう言って俺も魔王と同じ酒をグラスに注ぎ、口に入れる。
不味いな・・・
何故だろう・・・
そう思いながら自分の口にした苦い言葉と一緒に体の中に流し込む。
その後に言葉を続ける。
「最初は俺だけでしたけど、織斑が現れた。
このことから、他の男のＩＳ操縦者がいつ出てもおかしくないってことは馬鹿でもわかります。
そしてそいつが俺以上の適性だったら旭日重工は意地でも取りに行くでしょう。

そうなれば俺は必要なくなるわけです・・・
俺は常にゴミ箱に入っていて、いつ来るかわからない回収車が来るのかを待っているってわけですよ。」

そう言って二口目を喉に流し込む。
グラスが空になったので再びグラスに酒を注ぐ。

「・・・その為のあいつらのデータか？」

そう言われた時驚いて魔王の方を見る。

「なっ・・・」

何で知っているんだ？
そう思わずにはいられなかった。

いつから？
何故？

そんなことが頭をめぐっている間に魔王が言葉を口にする。

「デュノアにデータを売ったそうだな。
あいつが自分の正体を私に伝えに来たときに一緒に聞いた。」

そう言って魔王もグラスを開ける。
自分で注ぎながら俺のほうを見据え口を開く。

「自分のしたことがわかっているな？」

その目は完全にさっきとは違う。

まるで倒すべき敵を見るようなそんな目だ。

「えぇ・・・
わかってますよ。
自分の為に仕事をした。
あなたなら理解できるでしょう？
この世の中、綺麗事じゃ生きていけないってことを。
その身をどれだけ汚せるか。
そうやって生きていくしかできないって奴らがいるってことが。」

そう言って魔王の目を見返す。

お互いに視線はそらさない。
どれだけの時間そうしていたのかわからなかったが拮抗を崩したのは魔王だった。
グラスの中身を一気に飲み干し言葉を口にした。

「そうか。
わかっているならそれでいい。
自分のケツを自分で拭く覚悟があるようだからな・・・
好きにしろ。」

そう言って再び自分のグラスに酒を注ぐ。

驚いた・・・
てっきり退学に他国への通達などで大事になると思った。
だがそれをせず、俺の行動を黙認すると言っているようなものなのだから。

グラスを手に持ち、魔王の方に寄せる。

「感謝します。」

そう言うと魔王もグラスを俺のほうに寄せ、

「上手くやれ。
私はかばうことのできる立場じゃないからな。」

そう言って俺達の間でグラスが奏でる心地いい音が部屋に響いた。

死刑宣告（後書き）

こんな感じで理解ある人が多いといいんですけど、あくまでこれは私の頭の中の理想像であって現実はこううまくいかないかもしれません。
そこら辺を理解していただけるとうれしいです。

ではまた明日。
次は割りと軽い話です。
いや、スカスカと言ってもいいでしょう（笑）

初めてのお使い（夜中編）（前書き）

ドーレミファーソラシドー
ソシラソファミレー♪
そんな音楽をＢＧＭにかけてあげたくなります。

全く関係ないんですが、ここで個人的なお話をすることを許してください。
皆さんは集英社から出ている
『貧乏神が！』
と言う漫画をご存知でしょうか？

私は連載当初からの読者なんですが、いやこれが・・・
めちゃくちゃ面白いんですよ。
月間誌に連載されているんですが、現在１０巻まで刊行されており、大変面白く読ませていただいております。
画力が高く、さらにネタのクオリティーもかなりのもの。

さらにはやりのネタを取り入れると言うまさにギャグ！

と言うものかと思いきや、話も作られていて読んでいくと手が止まらずページをめくってしまうんです。

ブックオフでも漫喫でもかまいません。
ぜひ一巻、いえ、一話だけでも読んでみてください。

ただの一読者にすぎませんが、皆さんにもないですか？
他の人に勧めたい漫画って？

それをこの場を使って紹介したこと、大変申し訳ありませんでした。
ではどうぞ、ご覧ください。

初めてのお使い（夜中編）

～一夏～

千冬ねぇ、一体どこに行ったんだ？

ジュースを買いに行かされ、戻ってきたときには他のみんなもいなくて、どうしていいのかわからないジュースを手に持って部屋で呆然としていた。

これ、飲んでいいよな・・・
そう思いジュースの蓋を開ける。

美味いな～

そんな事を思いながらテレビを見ていたが、千冬ねぇはまだ帰って来ない。

一体どこに行ったんだろう？
そう思い旅館の中の散策を開始した。

廊下、中庭、ロビー、離れと一通り探したがいっこうに姿は無い。

他の先生の部屋かな？

そんな事を思いながら自分の部屋に戻ろうとしたとき、探し人の声が聞こえた。

「しかし、お前は洋酒ばかりでビールは飲まないのか？」

そんな言葉が聞こえ足を止める。
そこは俺達の隣の部屋。
春の部屋だ。

何でこんなところから？
そう思い扉を開けた。

「あぁ？」
「んっ？」

同時に二人からの視線をあびちょっと驚いたがさらに驚いたものがあった。

何で酒瓶が転がってるんだ？
そう思いっていると何事もなかったかのように会話を続ける二人。

「ビールなんて小便と一緒、いくら飲んでも酔えやしねぇ。
大人だったら洋酒（ラム）でしょ？」

そう言って新しい酒瓶を持ち出す春。
一体この人たちは何してるんだ？

そう思っていると完全に俺を無視して会話が進む。

「ほう・・・

それはビールを飲んでいる奴は餓鬼だと言いたいのか？」

あっ、やばい。

千冬ねぇの目が変わった。

とめたほうがいいよな・・・？

そう思ったが多分俺のことを無視して会話を続ける二人に何を言っても無駄だろうと諦めその様子を眺める。

「別に、そんなことは言ってませんよ。

ただ、年下（オレ）が飲んでるような物が飲めないってんなら、明日からスーツはやめて、山田先生みたいな女の子って格好して授業したらどうですか？

リボンなんかつけたりして週末には野原でピクニック。

花でも積んだりして――――――」

春がそう言葉を続けようとした瞬間、千冬ねぇが酒瓶に直接口をつけゴクゴクと飲み始める。

瓶の中身が半分ほどになったぐらいでその瓶を口から離し春を見て不適に笑う。

「貴様こそ、女の私にできたことができないような玉無しではあるまい？

どうする？

無理に、とは言わないがな。

できないのならお前こそズボンをやめてスカートを履い――――――」

千冬ねぇが今度は逆に春を馬鹿にするような言葉を口から出そうと

した瞬間、春もその酒瓶を口にして一気に残りを飲み干す。
そしてその後に千冬ねぇに向かい

『どうだ？』

と言わんばかりの顔をする。

あの二人、明日からが臨海学校の本番ってことわかってるのかな？
そんな事を思っていると二人に同時に睨みつけられる。

「何ぼさっと立ってやがる！」

「は、はいっ！？」

春に突然声をかけられ思わず背筋が延びる。

「一夏・・・
そんなところで立っている暇があるなら・・・」

千冬ねぇも同様に俺に声をかけてくる。

「「さっさとつまみ買って来い！！！」」

そう言って俺に向かって二人同時に財布を投げつけてきた。
それが顔に当たり、その場に座り込む。

痛いって。

そんな事を思っていると春から、

「1キロも南に歩きゃコンビニあるからさっさと行って来い！」

その言葉の後に千冬ねぇからも言葉が飛んでくる。

「追加の酒も忘れるなよっ！」

そう言ってグラスに酒を注ぎ始める二人。

もう、勝手にしてくれ・・・

そう思いながらも夜中のお使いに出かけるのであった。

初めてのお使い（夜中編）（後書き）

スッカスカやぞ！
ザブン〇ル風に言いたいですね、この言葉。
ちょっとシリアスな物を書くとその反動でチャラ男の様な話にエンカウントするような気がします。
直したほうがいいでしょうか？
ご意見ください。
お待ちしています。

以前にも話した。人間、興味のあるもの以外はどうでもいい・・・

～春～

昨日の飲み会を後悔しながら集合場所に向かう。

４０。越えの酒を二人で６本も空けるものではないな・・・

そんな事を考えながら集合場所で頭を抱える。

それは織斑先生も同様のようだ。

眉間に手を押し付けどうにか今の状況を紛らわそうとしている。

そんな中時間が来たようで臨海学校本番が始まる。

「あぁ～、みんなそろっているな？」

そう言う暴君の言葉に力はない。

だがその言葉に返事を返すものはいないのでそのまま話を進める。

「今日は昨日までとは違い本格的に授業を開始する。

一般生徒は各班に別れＩＳの検証と確認作業。

専用機持ちは自国から送られてきた専用装備の確認だ。

無駄話をする暇があったら各員行動に移れ。

今日の私は機嫌が悪い・・・」

その言葉を聞くと生徒は蜘蛛の子を散らすように別れていった。

さすが暴君だ。

そんな事を思いながら自分に送られてきた専用の装備を確認に用意されたテントに向かう。

そこにはいくつかの装備と武装。
その中でいちばん目を引くのはアレだろう。
そう思いベニーとの話にも上った装備に近寄る。

それはＩＳとしては正直どうなのだろう・・・
そういう装備だった。

それは足と背中に装備し水中で行動することを想定されたもの。

その名は『ラグーン』

脚に装備する部分は通常状態のトゥーハンドの脚の３倍はあろうかという大きさの脚。
そして背中につける部分は背中に背負う様にして装備する大型のコンテナだった。

こいつをいったい如何しろと？
そう思いマニュアルに目を通す。

脚につけるさらにでかい脚の追加武装は水中での起動力を飛躍的に向上させるものらしい。

全然理解できない言葉が羅列されわけもわからずページをめくると、後ろに簡単にわかるように補足説明が書かれていた。

どうやら水圧を受ければ受けるほど、その圧力を変換し、推進力に変える。

つまり、深く潜れば潜るほどこいつは早く動けるらしい。

とんでもねぇ技術だな・・・

その予測最高速度は現行のＩＳのどんな機体の最高速度をも上回るであろうというものだった。

だが、水中対空中。

勝敗は考えるまでもないだろう。

ページをめくると他にも装備があるようだ。

【マルス】

水中銃らしい。

これで水中からでも攻撃は可能って事か・・・

そんな事を思いながら続きを読む。

背中のコンテナのページに入った。

こっちはシールドエネルギー変換用の追加装備らしい。

変換？

どういうことかと思い文字を読み進めるがやはり理解できない言葉が並ぶ。

こいつにも補足説明がないかとページをめくっているとやっぱりあった。

ありがたいことだ。

そんな事を思いながらその項目を読む。

シールドは装備者を守るために働く。

危害を加えてくる要因は様々だがそれらを遮断する万能の盾だ。

だが、それが発動すると一気にエネルギーを消費する効率の悪いものでもある。

こいつはその様々な要因から、たった一つの要因にしか反応しないようにするというものだ。

ひよこのオス、メスを区別してくれるようなシステムを積んでいるらしい。

そんな事を想像しながら続きを読む。

そのたった一つの要因。

それは水中の見えない破壊神。

水圧だ。

人が普通に遊ぶ程度の深さならそれほど負担のかかるものではないが、震度が深くなればなるほどその身にかかる水圧は力を増す。

こいつの本来の目的は海底での作業を可能にすること。

海底のいまだに発掘されていない、この星の資源を掘り起こすのに効率のいい物を。

それがこいつが創られた理由らしい。

酸素だ、気圧だなんていうものはもともと宇宙用に開発されているＩＳ（こいつ）がやってくれるが、水圧はどうにもならない。

それを遮断するためにＩＳは一緒に熱だ、衝撃だと、様々なものを同時に遮断しようとするため１で済むものに対して、他の物も遮断しようし１０、２０とエネルギーを使うらしい。

その１を正確に補足させ、燃費のいいものにしようというシステムらしい。

さらにＩＳで触れているものにもそれは適用されるようで、武装も水圧に負けることなく展開できるそうだ。

ただ、撃ち出された物はその恩恵を受けられなくなるため、水中からの銃での長距離射撃や、震度の深いところでの射撃はその力をすぐに失ってしまう。

おまけに１つにしか反応しないこいつは水中で与えられる衝撃や熱

は一切防がないという、ピーキーな物らしい。
難しいのは苦手だ・・・
そんな事を考えているとコンテナの中の別のシステムの項目に入った。
その続きには驚きの言葉が綴られていた。
この追加装備『ラグーン』を装備していると海の中ではレーダーやソナーに一切感知されない。
その言葉を読んだ瞬間、ありえないと思った。
ＩＳのハイパーセンサーはたいていの物を捉えることのできる高性能センサーだ。
遮蔽物だったり、超高熱で遮ったり、よほど距離がないとその捕捉から逃れるのは困難だ。
そして、衛星カメラ。
これは昔からあるものだが現在でもその性能は依然として健在である。
さらにはソナー。
水中を探るのにこれ以上の物はない。
だがそれらを騙しきるというとんでも技術がここにも盛り込まれていた。
これ、誰にもわからないってことは、もしもの場合誰も俺を助けようがないってことじゃないのか・・・？

重要なことに気付き、ある名前を探す。

どんな天才（ばか）の設計だ？

そんな事を思いながらマニュアルの中から設計者の名前を探していたとき外からとんでもない音が聞こえた。

ドドドドドドドン！！！！

その爆音に驚きマニュアルを放り投げ急いで外に出る。

そこにあったのは爆炎と深紅の機体。

まるで血染めの機体をかるその操縦者は今まで大した興味の対象でもなかった、あの掃除用具であった。

「じゃぁ箒ちゃん、次行くよ～！」

そう言う声の方向に目を向けると素っ頓狂な格好をしている人物。

その隣にはミサイルの砲台が。

誰だ、あの気○い？

そんな事を思いながら掃除用具を見直す。

その姿は完全にセシリアなどの代表候補生と大差ない物だった。

一体どうなっている？

そんな事を思いながらその様子を記録する俺に気○いが声をかけてくる。

「誰、君？

私のかわいい箒ちゃんを盗み見なんていい度胸してるじゃない！」

そんな事を言いながら俺に近寄ってくる。

誰だあんた？

知らない人には一切の遠慮のない春はＩＳを展開し、カトラスを気○いに向けるが、そこからの反応が返ってこない。

どうなっている？

本当なら足元にでも威嚇射撃を行っているはずなのにそれが行われないことに驚いていると、

「束さんにＩＳは無力だよ？

そんなことも知らないのかな？」

そう言って俺の目の前までやってくる。

何なんだ、こいつは？

そんな事を思うがトゥーハンドは思うように動かない。

「ずいぶん不細工なもの積んでるんだね。
私が綺麗に整えてあげようか？」

そんな事を言いながら勝手に人のＩＳを弄りだす。

「何してんだ、てめぇ！」

そう言うとその気○いは言葉を口にした。

「誰に口きいてんの？
今すぐこのＩＳ分解するよ？」

その目には一切の迷いがない目だ。

一体何なんだ？

そんな時暴君が言葉を発した。

「そこら辺にしておけ。
私の生徒に変なことをするのは許さんぞ！」

そう言うと気○いもあっさりと言葉を返す。

「冗談だよ～、ちぃ～ちゃん！
だから怒らないでぇ～？」

そう言って織斑先生に抱き付こうとする気○い。

何なんだ？

そんな事を考えていると、大きな胸を揺らしながら暴君の従者がこちらに走り寄って来た。

「大変、大変です織斑先生！」

そう言ってこちらに寄ってくる山田先生。

実にけしからん胸だ・・・

そんな事を思いながらこの後に起こることを想像できずにいる自分がいた。

以前にも話した。人間、興味のあるもの以外はどうでもいい・・・（後書き）

大きな事はいいことだ。
友人の中には、
『貧乳はステータスだ！』
そんな戯言を言っている奴もいますが、
『大は小をかねる』
この言葉が私にとっては全てです。
まぁ、好みは人それぞれですから。
ラグーンの性能、若干チートですが今回限りの登場予定ですので多めに見てやってください。
ハッ！今ひょっとしてネタばれ的なこと言ったのか俺は？

作戦。その裏には様々な思惑があるものだ。

～春～

山田先生が主に何か言葉を告げたかと思えば、

「全員、私について来いっ！」

そう言って強制連行され旅館に戻された。

掃除用具のあの機体のデータをもう少し取りたかったんだがな・・・

そんな事を考えながら旅館に戻る。

通された部屋には、一体どこから持ってきた？

と言いたくなるような設備が置かれた部屋。

そこで何が起こったかの説明を受けた。

アメリカとイスラエル。

その共同開発の軍用ＩＳが暴走したとのこと。

マジかよ・・・

アメリカ

ＩＳが誕生するまでは世界最強の国。
みんなの友達“イーグル・サム”
その軍事力と経済力で世界のリーダーだった国だ。
イスラエルもアメリカと同じぐらい軍として質の高いものだって話をベニーから聞いたことがある。

そんな国同士がお手て繋いで軍用ＩＳの開発だぁ？
冗談はよせ。

そんないかれた機体を俺達でどうにかしろってふざけた依頼が来たらしい。

誰だそんなこと言った馬鹿は。
そんな事を思いながら話を聞いていた。

「で、相手の装備は？」

独眼竜が質問をする。

「そうですわね。
このデータだけでは判断し切れませんわね。」

白人もその意見に賛同するようだ。
暴君が俺の方を見る。
その視線はどちらの意味で捉えていいのかわからないものだったが、
その後に話し始める。

「これは極秘事項だ。

決して口外するなよ。」

そう言ってデータを開示した。

そうか、これはさすがに記録するのはまずそうだ。

そう思い大人しくそのデータを覗く。

うわぁ・・・

こんなん候補生クラスでどうにかできるようなもんでもないだろう・・・

そんな事を思っていると暴君が作戦を伝え始める。

奇襲による攻撃で一気にけりをつけるつもりらしい。

そうだな。

実力差、性能差。

そのどちらを考えてもそれが一番だろう。

そんな事を考えながら俺には関係ない作戦だったので適当に聞いていると・・・

『ちょっとまったぁ～！』

そう言って気○いが現れた。

一体誰なんだこいつ？

そんな事を思っていると気○いがとんでもないことをさらっと言った。

「箒ちゃんの【第四世代】ＩＳ、紅椿なら一気に運べるよっ！

だからその作戦のメンバーを変更しようっ！
うんっ、そうしようっ！」

その後何か暴君と言い合いをしているがそんなこと聞こえちゃいない。

【第四世代】だと？

今俺が集めているデータも世界最先端の【第三世代】だというのにさらにその上が・・・

軍用ＩＳのデータは極秘事項で口外できないが、そっちのほうは何も言われてねぇな・・・

あごに手を当てそんな事を考えている姿を見逃さなかった人物がいたことに春は気付かなかった。

作戦が決まりその場を納めるため暴君が言葉を発する。

「織斑と篠ノ之と共に作戦準備に入れ。
それ以外のものは部屋で待機しろ。
では解散っ！」

そう言って各自がそれぞれの行動に移る。

俺も行動の準備をしないとな・・・

そんな事を思いながら部屋ではなく装備が送られてきたテントに向かって足を進めた。

～ラウラ～

「ボーデヴィッヒ。」

教官に部屋に戻る前に呼び止められた。
すぐにその前に向かい用件を伺う。

「はっ、なんでしょうか？
教官？」

「教官はよせと言っただろうが・・・
まぁいい。
お前に頼みたいことがある。
いいか？
これから作戦が終わるまで吉田から目を離すな。
あいつが外に出ようとしたら実力行使でそれを阻止しろ。」

「はっ？」

教官の言っていることの意味が理解できなかった。
何故に奴の監視を？
そんな事を思っていると・・・

「これはお前だから頼むんだ。
理由は聞かず、私の頼みを聞いてくれ。」

頼み。
これは命令ではなく、織斑千冬と言う個人からの頼み事なのだ。
それがうれしくてその頼みを快諾する。

「了解でありますっ！」

そう言って部屋を出た。
教官と話していたせいでもう廊下の見えるところに人影はない。

命令通りなら部屋にいるはずか・・・
そう思い奴の部屋に向かう。

部屋の前に立つが、変だ。
中から人の気配を感じない。
わずかに、ゆっくりと部屋の扉を開ける。
そして覗くとそこには人の姿がなかった。

どこに行った？
そんな事を思いながら旅館の中を捜索する。

玄関の前に着いたとき、妙に変な生徒達を見かけた。
その顔はなんだかやけにニヤついている。

「どうした？」

そう言うと、そのニヤケ面を引き締めながら私に顔を向け、

「な、ナんでもないヨっ！」

「ウん、何もない、ナニもないよ。」

声がおかしい。
そして表情も引き締めたはずなのにすでに緩んでいる。

浴衣の袖から握りなれたものを出してそいつらに向ける。
その光が顔に迫ったときそいつらの表情は一変したが、私は言葉を投げかける。

「何があった？」

そう言って答えを聞き出した。

急いで足をある場所に向かわせ走る。
聞きだした答えが私の探し人の居場所に繋がるものだったからだ。

『え、えっと・・・
吉田君が外に出ていくのが見えて声をかけたら・・・
≪黙っててくれ、そうしたら後で礼をするから。≫
って・・・』

そう言って出て行った奴が行く先は予想がつく。
このタイミングで出て行くというは嫁達が出発する位置か、自分の追加装備の用意されたテントだ。

嫁達の位置には教官もいるはずだ。
そっちらに行ったのなら教官自身が気付くはず。
なら私がつぶさなければならない候補は・・・
そう思いさっきで自分たちがいたテントに向かって足を急がせた。

～春～

トゥーハンドを起動させ、ハンガーに取り付けられた追加装備を装着する。

別にこれハンガーなくても自分で取り付けられるな。

そんな事を思いながら自分の身に纏った。

装着が完了したので海に向かって足を進める。
その足跡がまるでＵＭＡの足跡の様に残るがそのまま海に向かう。
腰ぐらいまで海に使ったぐらいで思わぬことが起こった。
ドボォーーーーーン！
自分の目の前に巨大な水柱が起こる。
「そこで止まれ・・・」
その声のするほうを見ずに体を止める。
「きさま、何をしている？
教官の命令は待機のはずだが？」
その声の主が誰だか予想がついたので振り向かず言葉を交わす。
「なに、どうってことない。
ただのダイビングだ。」
どうにも苦しい言い訳だがこれしか思いつかなかった。
「そうか・・・
なら、永遠に海の底に沈めてやろうか？」
ＩＳに警告画面が表示される。
本気なんだな・・・

なら俺がとる行動は一つだ。
ＩＳを一気に進め、海に向かって一気に潜った。

～ラウラ～

「馬鹿が・・・
そんなことしたところでっ！」

そう言ってターゲットに向け砲口を向けたとき、あることに気付いた。

ＩＳがターゲットを認識できていない。
ハイパーセンサーで捕らえられていないのだ。
ハイパーセンサーでターゲットを認識し、オートで補正していた状態だった為、とっさの行動に支障をきたしたのだ。

ありえない。

海に潜る。
この程度の深度でハイパーセンサーの効果がなくなるなどと・・・
どうなっている？

そんなことを思いながら攻撃をオートではなくマニュアルで補正するように切り替え、とりあえず目標が進んだ方向に向かってＩＳを

近づける。
だが水面にもはや奴の姿は映らず、目視でも捉えることができずにいる。

急いで眼帯をはずし、ヴォーダン・オージェでも姿を探すが、どこにもその姿はなかった。

「馬鹿な・・・」

だが、ＩＳで長時間の海中潜行は無理だろうと空中で春のＩＳが浮上するのを待った。
それが徒労になるとも知らず・・・

作戦。その裏には様々な思惑があるものだ。（後書き）

早速、能力が発揮されました。
まぁ、海限定。
この場限りの能力だと思って勘弁してやってください。
この後の話にこの能力がないとちょっと困ったもので。
チートは嫌いですが涙を呑んで採用しました。

陰と陽、闇と光、暗と明（前書き）

真っ向から対立します。

陰と陽、闇と光、暗と明

～春～

独眼竜から逃れ、例の暴走機と織斑達がやりあうであろうポイントに向かう。

さすが水中では最速と言うだけのことはある。
まだ最高速度を出していないのに、空中での最高速度を上回る速度で進む。
これなら戦闘に間に合いそうだな。
そんな事を向かいながら目的地を目指した。

俺が到着したときにはすでに戦闘は行われていた。

海中からその映像の記録を開始する。
すげぇな・・・
あの新型機と暴走機。
どちらもまともじゃねぇだろ・・・
そんな事を思いながら戦闘を眺める。

そんな時、センサーがありえないものを捕らえた。

船だ。

ありえない。
ここはすでに政府の手によって無菌室になってるはずだ。
そんなところに何故？

そう思いその船に向かい少しずつ近づく。

近づいていたとき、戦況に変化がある。

暴走機の攻撃がその船に近づいたのだ。

ちっ・・・

関係ない奴がどこで死のうが興味は無いが、俺の目の前でスプラッタはごめんだ。
そう思い船に向かう。

向かう途中で追加装備の脚から【マルス】を抜き出す。

それを海中から降り注ぐ光の羽に向かい一気に撃ち出した。

〜一夏〜
視界の端が驚きのものを捕らえる。
船だ。
何であんなところに？
そう思ったとき銀の福音から攻撃が放たれる。
その攻撃の数は多く俺たちだけでなく、その船にも降り注いだ。
まずいっ！
そう思ったとき俺の体はその船に向かい急降下する。
「一夏っ！」
そう箒に声をかけられるが構わずその船の上で壁になろうとしたとき俺は驚かされた。
水中から一斉に何かが飛び出してきたのだ。
「うわぁっ！」
急いでそれを避けようとするが全ては避けきれずいくつか被弾した。
だがそれは多くの羽を撃ち抜き船に被害はない。
そしてその後に現れたものに俺は驚かされた。

海からゆっくりと顔を出したのはこの場に居ないはずの人の顔。
吉田春の顔が海から俺に向かって言葉を発したのだ。

「さっさと戦闘に戻れこのボケッ！
こんな関係ねぇ奴らに構ってる場合じゃねぇだろうがっ！」

そういわれてカチンと来た。

「関係ないってなんだよっ！
俺はその人達を・・・」

「守りてぇなんて綺麗事抜かしたらてめぇ、ぶっ飛ばすぞっ！
さっさと集中しろっ！
戦闘に戻れってんだよっ！」

そう言って俺に攻撃を仕掛けてくる。
あたりはしなかったがその行動が気に入らなかった。

クソッ

そんな事を思って戦闘に戻ろうとしたとき、

「キャァァーーーーーー！」

箒の叫び。

急いでその声のしたところへ、その体を支える。

「箒っ！

大丈夫か？」

そう声をかけるが俺の腕の中でＩＳが消失していく。

気を失ったらしい。

その光景を見ていたときまたしても声が飛んできた。

「集中しろって言ったろうがっ！」

ハッとして上空を見ると俺に向かって飛んでくる光の羽。

ヤバイ！

腕の箒をかばうようにしてその攻撃の直撃に備えるが、俺が思っていたほどの数の攻撃がやって来なかった。

だが、いくつかの攻撃をくらいシールドが発動し、エネルギーが切れる。

「くっ・・・そっ！」

そう言って俺と箒は海に落ちた。

～春～

あのボケがっ！

そう思いあいつらに向かって降り注ぐ羽に向かってマルスを撃ち出す。

だが数が数だ。

全ては落とせず、いくつかがあいつに当たりそれでエネルギーが切れたらしく海に落ちていく。

海に落ちてすぐのところであいつらを回収し、この海域を離れようとしたとき、ＩＳの画面に不吉な言葉が表示される。

【展開限界時間まで後５分】

その表示が始まったと同時に画面の端にカウントダウンのタイマーが表示された。

マジかよ・・・

今からどう急いでも時間までには戻れねぇ・・・

戻りながらどうするか考えていたとき海底にあるものを見つけた。

潜水艦だ。

賭けてみるか・・・

潜水艦に近づき、内部をスキャンする。
浸水はそれほど酷くない。
酸素もまだ残っているようだ。

どうにかするかいなだろう・・・
そう思いながら二人を片手にまとめて持ち、潜水艦の内部に入り込むため作業を開始した。

ＩＳの画面を見ると後４０秒で展開限界を迎えるところだった。

片手しか使えない状態で、潜水艦の中に侵入するのは片手でシャツのボタンを留める、軽く１０倍は大変だった。
侵入が終わったので、織斑と掃除用具を床に転がし、ＩＳを解除する。
解除したせいで背中のコンテナ状のラグーンが床に落ち、とんでも

ない音を立てた。
一瞬ビクッとしたが、大丈夫そうだ。

「やばかった～」

そうホッとしたのもつかの間。
「やばかったじゃねぇよ・・・」

突然の声に心臓が止まりかける。

その声のほうを見ると、織斑が体を持ち上げて立ち上がろうとしていた。
ラグーンの落下の衝撃で意識が戻ったらしい。

「何だ・・・
気が付いたのか・・・」

面倒事起こしやがって。
そんな事を思っていると織斑が近づいてくる。

「どういうつもりだよっ！」

そう言って俺の胸倉を掴む。

「おいおい、何のつもりだ？
命の恩人に何してるか分かってんのか？」

そう言ってその手を離そうとするが相当強い力で掴んでいるらしくなかなか離せない。

「どういうつもりだって聞いてんだろ！？」

そう声を強めて俺に詰め寄る。

こういう熱血なところがウゼェんだよな・・・

そう思いながらその問いに応える。

「何のことだよ？」

問いの内容が分からなかったので内容を聞こうとすると、

「さっきの船のことだよっ！

関係ないってなんだよっ！」

声の大きいことだ。

それだけ元気ならこいつは大丈夫だな。

「説明してやるから、場所変えるぞ。

そいつ起こすのはまずいだろ？」

そう言って視線で掃除用具を見る。

「・・・わかったよ。」

しぶしぶ掴んでいた腕を離す。

掃除用具を抱えて歩き始める。

先日のことがあったので、真空パックに入れたタバコとライターをＩＳスーツの胸元から取り出し、ライターに火をつけあたりを照らす。

「・・・なんでそんなの持ってるんだよ?」

その質問に答えず足を進める。

船員達が使っていた部屋だろうか?

「ちょっと待ってろ。」

そう言って通路に織斑を待たせて部屋の中へ。

ベットに転がっていたモノを払ってどかす。

シーツも軽く払い、明かりを消して織斑を部屋に入れる。

「いいぞ。
入って来い。」

「暗くて見えねぇよ・・・」

そんな事を言いながら俺の声のするほうまでやってくる。

足がベットに当たったのが分かったのかそこで気配が動かなくなる。

「ベットだ。
かてぇ床よりはずっと快適だろう。」

そう言うと、ゆっくり体を低くし、掃除用具を置く。

そのまま適当に燃えそうなものを持ってゆっくりと部屋を出て再び通路に。

織斑もついてくる。

再びライターに火をつけ、さっき持ってきたものに火をつけ明かりにする。

それを挟みお互いが座り込んだ。

「・・・で、さっきの話だったな。
あの船か・・・
あんなもの関係ないですむことだろうが？
何ムキになってやがる。」

そう言うと再びエンジンがかかる織斑。

「関係ないじゃねぇだろ！？
あの船に乗ってる人たちに何かあったらどうするんだよ！？」

「俺が適当に攻撃落としてやったろうが？
それでいいじゃねぇか？」

「いいじゃねぇか、じゃねぇよ！
お前や俺が居なかったら大変なことになってただろう？
俺はヤバイと思って向かったら、攻撃がとんできて・・・
そうだよっ！
お前あの時なんていったか覚えてるかよ！？」

デケェ声だすなよ・・・
そう思い今度は手に握っていたタバコに火をつけ煙を吐く。

「何してんだよ！？」

そういわれるがその言葉を無視して質問に答えた。

「守りてぇなんて抜かすな・・・
だろ?
昨日の晩飯忘れるほど年食っちゃいねぇよ・・・」

「タバコはっ・・・
もういいっ、そうだよっ!
何であんなこと言ったんだよ!?」

そう言って再び声を大きくする馬鹿。

「ウゼェな・・・
どうでもいいだろそんなことはよぉ・・・」

そう言って煙を馬鹿に向かって吐く。

「春、真剣に聞けよっ!」

そう言って立ち上がりこっちに近寄ろうとする。
俺は自分の傍らに置いた物を火に投げ入れ再び明かりを大きくする。
そして、その後馬鹿を見る。

「春って呼ぶんじゃねぇよ、もう一回呼んだらてめぇこの地下墓地(カタコンベ)
に置いてくぞ?」

空気が変わった。

さっきまで織斑と話していたときとは違う。

完全に学園に着たばかりのころの、周りを拒絶していた『吉田春』
なっていた。

陰と陽、闇と光、暗と明（後書き）

次もやりあいます。

水と油は混ざり合わない（前書き）

後半戦です。

お気に入りに登録してくださっている方が８０名を突破しました！！！

ありがたい話です。

目標は、めざせ１００人！！！

水と油は混ざり合わない

～春～

「な、何言ってんだよ？
春って呼べって・・・・」

おめでたい奴だ・・・

「あん時のはてめぇを調子に乗せるための演技だよ。
あん時はてめぇに勝ってもらわないと賭けに勝てなかったからそのためだ。
それなのにアレ以来妙に馴れ馴れしくしやがって・・・
正直鬱陶しかったんだよ・・・・」

織斑の顔は何を言っているのか分からないといった顔だ。

「賭け？
何の・・・」

そう言葉を口にするがその言葉を無視して話し始める。

「ちょっとそこで待ってろ。」

そう言って掃除用具が眠っている部屋に戻り、ライターであたりを照らしあるものを三つ布に包んで持って戻る。

「何を・・・」

そう問われ、言葉を発する。

「関係ねぇ、守りたい、って話だったな。
いいぜ、説明してやるよ。
この世の中は二つのものに分類される。
何か分かるか？」

「なんだよ一体・・・」

しばらく考えているが答えが出ないようだ。

「生き物と物だよ。
そして、俺がこの世で守りてぇのは生き物じゃねぇ・・・
物さ。」

そう言った時ある人物の顔が浮かぶが気にせず煙を吐き出す。

「おい、何言って・・・」

「黙って聞け。
俺のターンだ。
さて、その物もどんどん選別して行きゃ、二つのものに分類される。
分かるか？
金になるか、ならないかだ。
俺は金、自分にとって利益になる物しか守らない。
それがお前の聞きたかった俺の答えだ。」

「利益ってそんなことで人を・・・」

納得しないのか俺の言葉に反論を述べようとする。

「助けない理由にはならないってか・・・
トコトン馬鹿だなお前は・・・
どうしてそんなに他人のために必死になれる？」

「そりゃお前、人が傷付くのは嫌だろう？」

そう問いかけられ、ちょうどタバコが短くなったので新しいものに火をつける。

「別に・・・
俺に関係ねぇ奴がどうなろうと知ったこっちゃねぇよ・・・
テレビで見る交通事故にあって死んだ知りもしねぇ奴の為にお前は泣けんのか？
あん時は目の前でスプラッタが見たくなかっただけだ。
お前らを助けたのも、同じ理由さ。
そんだけのこと。」

そう言って笑う。

「・・・おい、自分が何言ってるか分かってるのか？」

そう言って軽く体を振るわせる。

「あぁ？」

何言ってる？
そう思い聞き返すと、

「自分が何言ってるか分かってるのかって聞いてんだよ！！！」

そう言って勢いよく立ち上がる。
ホント熱血だ。

「分かってるさ・・・
てめぇの言いてぇこともな・・・
命を軽く見るなって事だろ？
だけどな、生き物なんて死ぬことの決まった物の為になんで必死に
ならなきゃいけねぇんだ？
例外なく、人もいつかは死ぬ。
それが早いか遅いかの違いだ・・・
だから俺は終わりを迎えるまでに面白おかしく生きれるように金を
必要としてるんだ。
それ以外は諦めた。
最近はちょっと欲張ってるみてぇだが・・・」

「なんで・・・
何でそんな風にいえるんだよ！」

熱くなってきたようだ。

「別に、てめぇと生き方が違ったからってだけだ。
面白いもの見せてやるよ。」

そう言ってさっき持ってきた布を開ける。

そのうちの一つを馬鹿に向かって投げる。

「なに・・・
うわぁっ！！！」

そう言って投げたものを落とした。

「何驚いてるよ。
俺たちの頭にも同じモンがついてるじゃねぇか？」

俺たちの頭についているもの。

骸骨だ。

そう言ってもう一つの骸骨を右手で野球ボールでも扱うように手首のだけで軽く宙に飛ばして受け取り、宙に飛ばしてを繰り返す。
そして左手には昔の紙幣がぶら下げられた。

「こいつは金になら無いモノだ。
そしてさっきの船の連中もだ。
こんなものを守ろうと思うか？
守るなら断然こっちだろ？」

そう言って左手を突き出し軽く笑う。
織斑は俺に向かって歩み寄って俺の胸倉を掴み力ずくで立たせる。
骸骨が床に乾いた音を立て転がる。

「なんだよ、自分の意見が理解されないと今度は力で納得させるのか？
どんだけガキだよ・・・」

そう言って呆れて声を出すと、

「うるせぇ！

それでも俺は人を・・・守りてぇ！」

そう言った時織斑の腹を思い切り殴った。

「守りてぇ、ねぇ・・・
だけどよ、その力がお前にあんのかよ？」

膝をついている奴を見下ろしながらそう言葉を発する。

「てめぇ、今までにどれだけのものに守られてきた？
どうせこれまでの人生、姉貴に守られてきたんだろう？
学園に来てからもそうだ。
クラス代表戦だって、俺や白人に守られ。
トーナメントではデュノアに守られ。
今回のことでは俺と話していた間そいつに守られ、あの状況を俺に助けられ。
守られてばかりのお前に、一体何が守れるってんだ？」

そう言って座り込むように馬鹿に顔を近づける。

そしてふさぎこんでいた馬鹿に向かって言葉と暴力をくれてやる。。

「守りてぇなんて、そんな偽善をぬかしてぇならてめぇの身一つ守れる力持ってからぬかしやがれ！」

そう言って思いっきり顔を殴りつけた。

「うがぁ！」

いいのが入った。

吹き飛び床を転がる馬鹿。

しばらく眺めていたが、動く様子はない。
静かになって何よりだ。

その場を離れて掃除用具のほうに向かう。

そして掃除用具を抱え上げ、織斑の横に並べる。

「ったく、気分わりぃ・・・
助けるんじゃなかったぜ・・・」

そう言ってＩＳを展開する。
そしてラグーンを自分で装着する。
充分時間を空けたおかげで展開限界までには充分戻れそうだ。

二人を抱え、入ってきた扉に向かい蹴りをいれ扉を蹴り破る。

一気に水が流れ込んでくるがＩＳのおかげで何の影響もなく海へ出る。
一度だけ、誰も花を供えに来ることがなかった地下墓地（カタコンベ）を見て一礼し、そのまま最高速度で一気に旅館に向かって帰路を急いだ。

水と油は混ざり合わない（後書き）

次はどうなるでしょうか？
おまちくださいませ。
ご意見、ご感想お待ちしてます。

化学反応はどう起こるかわからない（前書き）

悩みぬいてもらいましょう。

化学反応はどう起こるかわからない

～春～

テントの設置された海岸にたどり着いたとき、俺をあるものが出迎えた。

独眼竜の砲口だ。

「貴様・・・
一体今まで何を・・・」

かなりキレてるようだが、どうでもいい。
そう思い自分の抱えていたものを海岸に投げ捨てた。

「何を・・・
!!!!
大丈夫か?」

そう言ってＩＳを解除して俺が投げ捨てた者に駆け寄っていく。

その姿に興味を示さず、自分のテントに。
そこにラグーンを設置しなおし、外に出る。
そのまま旅館に向かって歩いていると途中で厄介な相手に出会った。

「吉田っ!
今までどこにいた!?」

暴君の叫びにうんざりしながらもその足を止めず、旅館に向かう。

「海岸に行きゃ分かりますよ・・・」

そう言って暴君とすれ違う。

旅館に戻り、部屋で一服していると扉が開いた。

暴君だ。

そのまま俺の近くにやってきたかと思うと、

バチンッ！

俺の頬をはたいた。

「命令違反の罰だ。」

そう言って俺のそばに座る。

「・・・まだ何か？」

その目は完全に敵意むき出しのものだ。
早くこの場から消えて欲しい。
そんな事を思いながら暴君を見る。

「どういうことか説明しろ、何故一夏たちをお前が回収している？
あの場にお前のＩＳの反応はなかったぞ？」

そう問われたので、ラグーンの機能の説明と、行った理由を説明した。

「わかった・・・
ではもう一つ聞かせろ。
一夏の顔の傷は何だ？」

あぁ・・・
そこを突いてくるか。
そんな事を思いながら暴君を見る。

「俺があいつを殴ったんですよ。」

殴った。
完全に俺の一発がＫＯしたことだろう。
そう思い言葉を発すると、

バチンッ！

再び頬をはたかれた。

はぁ・・・
鬱陶しいなこの姉弟は・・・

そんな事を考えていると、

「何故殴った？」

そりゃこっちが聞きたい。
何であんたが俺を殴ってるんだ？
そう思いながらも理不尽な質問に答える。

「正当防衛でしたよ。
あいつが俺に殴りかかろうとしたんで、俺が身を守るためにあいつを殴った。
あの姿を見たら俺が加害者でしょうけど、現場にいたら俺が被害者側だったと分かってもらえると思いますけど？」

そう言って煙を吐く。

「・・・あいつは滅多なことで人に危害を加えるような奴じゃない。
何故そうなった？」

メンドくせぇな・・・

「質問ばっかりですね・・・
織斑に直接聞けばいいでしょ？
俺も疲れたんですよ。
だから、さっさとここから消えてください。」

そう言ってタバコの火を消す。

「消えろだと・・・？
貴様、誰に向かって・・・」

そう言って俺を威圧しようとするが今の俺に効果はない。

「あんただよっ！
鬱陶しいからさっさと出てけって言ってんだ！」

机を叩き、身を乗り出して発した言葉に暴君も何も言わずに立ち上がり部屋から出て行った。

クソッ・・・
そう思いながら新しいタバコに火をつけた。

～千冬～

一体何があった？

昨日までとは別人。
いや、学園に来たときに戻った。
下手をしたらそれより悪い。

春の変化に正直驚きを隠せなかった。
せっかく少しずつ人と触れ合い始めていたというのに・・・
その理由を聞こうにも一夏は意識がいつ戻るかわからない状態。

原因は不明で、頭を打った時のショックのせいということでもないらしい。
では何が・・・

解けない二つ抱えながら今後のことを考えるため山田先生たちの待機している部屋に戻った。

～春～

暴君が去ってから酒を飲むがいくら飲んでも酔えないし、美味くなかった。

昨日は美味いと感じた酒も今日はまるで泥水を飲んでいるかの様な味だ。

机の上に並んでいたそれらを手で思い切り撥ね退ける。
ボトルは畳の上を転がり中身を垂れ流し、グラスは壁にぶつかりいくつにも分離し醜く形を変える。

クソッ・・・
何なんだよ一体・・・
こんなことになったのも全部あいつのせいだ・・・

そう思い部屋を出てある場所に向かった。

ある部屋の前に立ちその扉を開けた。
そこは馬鹿が眠っている部屋。
都合よく誰もいなかったのでそのまま馬鹿の近くに座る。

「おいこら・・・
てめぇのせいで俺は最悪の気分だ・・・
てめぇの姉貴には殴られるし、酒は美味くねぇし・・・
一体どうしてくれんだよ?」

そういうが当然言葉は返ってこない。

「ッチッ・・・
聞いたぜ?
俺が原因じゃねぇなら、てめぇは何で起きねぇんだよ・・・
これじゃ俺が悪者じゃねぇか・・・」

そう言って持ってきたセットに火をつけ煙を吸う。

「このまま目が覚めなかったら、俺はあいつらに一生恨まれるんだろうな・・・」

そう言って思うのはいつもこの馬鹿の周りにいる者たちの顔。
その中にあいつもいる。

「つくづく腹が立つぜ・・・
何でてめぇは俺にねぇモノを持ってんだ・・・
そのくせ、その価値に気付いてねぇ・・・
それなのに、何でまだそれ以上抱えようとすんだよ・・・」

そう言っても答えはいっこうに返ってこないが、そのまま言葉を続けた。

「守りてぇって言ったよな・・・
守られた奴は確かに感謝するだろうさ。
だがな、それは万人に当てはまることじゃないのさ・・・
何かを守るためにお前が傷付く。
そんなお前を見たくない奴だっているのさ。
たとえばお前に好意を寄せている奴らなんかは特にな・・・」

そういうが、この言葉に対しては起きていてもまともな返事じゃないだろうと思った。
こいつの鈍感って壁がなくならない限りは難しい。
以前の独眼竜の言動さえ、ＬＯＶＥではなく、ＬＩＫＥの方だと思ってる奴だ。
あいつらの先はまだまだ長い。

あの地下墓地（カタコンベ）でいえなかった言葉を続けながら馬鹿を見る。
額に手を当て、ため息をつきながら言葉を続けた。

「諦めちまえよ・・・

そうすりゃ楽になれるんだぜ？
誰にも失望されない、何かあっても誰も悲しまない。
そうすりゃ誰にも迷惑かけずに生きていけるじゃねぇか・・・」

その言葉を向けている相手は果たしてこの馬鹿なのか、それとも・・
・

しばらく時間をおいた後、額に当てていた手を離し、煙を吸って馬鹿を見る。

「なぁ・・・
俺にも、何か持てると思うか？
お前ほどじゃなくても、一つや二つぐらいなら・・・」

そういうが当然答えは返ってこない。

「・・・何てな。
今更俺が、何を持とうってんだ？
こんな薄汚れた奴が持ったら持ったモンまで汚しちまう・・・」

そう言って再び額に手を置く。

クソッ

らしくねぇな・・・

こんなことで迷うことなんてなかったじゃねぇか・・・
そう思い再び煙を吸う。

そんな自分の中で答えが出ないでいたこの部屋に来客が訪れた。

化学反応はどう起こるかわからない（後書き）

来客は誰でしょうか？
また次の更新でお会いしましょう。

その来客は俺の予想を上回っていた。

「嫁よ、具合・・・は？」

そう言って固まる独眼竜。

「誰があなたの嫁ですか、そんなところで立ち止まって、どうしました・・・の？」

そう言って固まる白人。

「何してんのよあんたた・・・ち？」

そう言って固まる警報機。

「どうしたの三人と・・・も？」

そう言って固まるデュノア。

「お前達、いったいなに・・・を！」

そう言って俺を睨む掃除用具。

「・・・よぉ。」

そう言って軽く挨拶をした。

その手にはいつもの煙。
そしてその傍らには携帯用の灰皿。
ＯＵＴ！
だが、それを気にせずゆっくりと口に運ぶ。

「～～っふ～。
邪魔になりそうだから帰るわ。
後はお前らの勝手にしろ。」

そう言って席を立とうとしたとき、

「待て、貴様の力が要る。」

そう言って俺を止める独眼竜。
手にもっているものについてはノーコメントのようだ。

「何言ってんだ？」

突然そんな事言われても意味が分からなかった。
俺の力？
この中で最弱の俺の力が？

そんな事を考えていると独眼竜が言葉を口にした。

「貴様のステルス能力が必要だ。
協力しろ。」

あぁ、そういうこと。

どうやら、さっきまいたときに見せた能力を必要としているようだ。

「何で？」

そう言ってその必要性を聞く。

「我々はこれから銀の福音の迎撃に向かう。
その際奇襲に貴様のその力が欲しい。」

なるほど、その馬鹿の雪辱戦か。

だが、俺には関係ない。
断ろうと言葉を発する前に、

「そいつの力など、必要ない！！！」

予想外の所から声がした。

みなが一声にその声を発した人物を見た。
その人物は・・・

「そんな、そんな奴の力など必要ない。
そんな奴の力など・・・・」

そう言って体を振るわせる掃除用具。

「箒・・・」
「箒さん・・・」
「どうしたの？箒」

そう言ってその近くに寄る独眼竜以外の３人。

「奴はそう言っているが・・・」

独眼竜が言葉を口にするが、俺の返事は決まっていた。

「だそうだ。
俺の力なんて必要ないらしいから、頑張ってくれ。」

そういって独眼竜の横を通り、掃除用具の隣へ。
さっきのリアクションから想像するにどうやらこいつは、

「てめぇの趣味は盗み聞きか？
たいそうな趣味だな？」

そう耳元で囁いた。

その瞬間、俺の頬に熱いものがやってくる。

バチンッ！

頬を打たれた。

「っ・・・
貴様に、貴様に・・・！」

激しく激昂しているようだ。

ぶられた頬の熱をその身にやどし、その部屋から出た。

〜箒〜

奴が出て行ってラウラが作戦を考え始める。
だが、そのほとんどが入ってこなかった。

私は・・・

あの潜水艦の中での会話を聞いていた。

あの大きな音で気が付き、気付けば二人が口論していた。
その中に入ることができず、そのまま寝たふりをしていると一夏が
私を抱えてくれた。

幸せだった。

だが、再び奴との口論が始まると、さっきの船の話へ。
正直、私も一夏の行動はどうかと思った。

違法行為をしていた連中を守るなど、どうかしている。
そう思ったからだ。
正直私も奴の言葉が正しいと思った。

だが、一夏は言った。

『それでも俺は人を・・・守りてぇ！』

その言葉を聞いたとき、私は恥ずかしくなった。
私は、一夏が怒っている相手と同じ考えだったことが。

一夏が傷付くのが嫌だった。

私の勝手な意見だ。
他の人の為に動ける一夏を好きになったはずなのに、その行動を私は理解することができなかったことが恥ずかしかった。
そして、それを黙っていることで隠していた自分が恥ずかしかった。

だがあいつは、自分の意見をはっきりと一夏に伝えた。
私とは違う。
ただ黙っていることしかできなかった私と、自分の意見を言えたあいつ。
どちらが一夏と向かい合っているだろう？

そして、同じ言葉を一夏に向かって言っていたかもしれない自分の姿が奴に重なった。
そんな奴を私は打った。

同属嫌悪

その言葉で表現するにふさわしかっただろう。
そんな事を考えながら私が思ったことは・・・

『私は、』

～春～

イテェ・・・

頬に熱を残しながら廊下を歩いていると、

「あぁ～、ダッチだ～。」

そう言って声をかけてきたのは昨日見かけたとろそうな女だった。

「・・・何だ？」

面倒だが、気がまぎれるならと思い返事を返した。

「ん～、特に用事ってことはないんだけど・・・
何かあった～？」

「何でだ？」

質問の意味が理解できなかった。
何故俺がこいつに気を使われなければならないのか。
そんな事を考えていると、

「だって、ダッチ泣きそうな顔してるよ?」

そう言われ目に手を当てる。

わずかに触るだけで自分の目から久しく見ることのなかったものがその手についた。

何で?

疑問は解決できないままだが、今はこの場から離れたほうがいいだろう。

「何でもない。
じゃぁな。」

そう言って自分の部屋に戻った。

俺は卑怯だ。

自分の本心をきちんと伝えることもせず、ただ気に入らなかったから手を上げ・・・
自分の持っていないものを持っているあいつを妬んで・・・

俺は卑怯だ・・・

そして、

～箒・春～

『最低だ・・・』

福音は奏でる。死の訪れを（前書き）

最近アクセス人数が増え、なんとお気に入りご登録人数が目標の１００人に到達しました。
いや～、もう満足です。
いつこの小説を終えても・・・

いや、まだまだ続きますよ？
一回言ってみたかったんですよね（笑）

今回はえらい短めです。
ご了承ください。

部屋に戻り、一服しなおす。

頬の痛みはいまだに取れない。

くそ・・・

何で俺がこんな目にあわなきゃならないんだ?

そんな事を考えていると、ふとある事を思い出した。

あいつら、迎撃に行くって言ってたよな・・・

迎撃ならさっき以上の戦力で向かうはず。

送られてきた追加装備が見れるかも・・・

そんな事を考えながら再びラグーンを身に纏うため、テントに向かって部屋を出た。

テントで待っていると、人の気配を感じた。

どうやら来たようだ。

「では、各自追加武装のインストールが完了したら再びここに集合。
儔、貴様はそこで待っていろ。」

そう言う独眼竜の声が聞こえた。

その後すぐに静かになった。

俺も準備するか。
そう思い、自分も観察の準備を始めた。

～海～

現状は1対5で掃除用具たちが有利だった。

その中でもめざましい活躍をしていたのは掃除用具と独眼竜だろう。
一方は機体性能で、もう一方は操縦技術で銀の福音と充分に戦えていた。

その様子を海中から眺める。

これ、銀の福音が映らないように編集するのめんどくさいなぁ～

そんな事を考えながら戦場を観察していると、掃除用具の見事な一撃が銀の福音に決まった。

そのまま海中に落ちてくる。
俺の横を通り過ぎ、そのまま海の底へ。
終わった。
充分なデータも取れたので次の給料のことを考えながら戻ろうとしたとき、あることが引っかかった。

・・・あれ？

ＩＳって、操縦者の意識がなくなるか、シールドエネルギーが尽きるか、展開限界迎えるまでは展開してたよな？
それってつまり、展開している限り、戦闘は可能ってことだよな？

嫌なことが脳裏を過ぎり、急いで銀の福音に視線を向ける。
海の底がほのかに明るい。
光も届かないはずの場所が明るいのだ。
完全に厄介ごとだ。

そう思い急いで体を海から出した。

そこで待っていたのはさっきまで戦闘を行い、息の上がった専用機持ち達。

「なっ、何故貴様がここにいる？」

独眼竜が当然のように質問してくるが、正直今はそれどころではない。

「全員、命だけ持ってこの場から離れろ！
あいつは・・・」

そういった瞬間、俺の後ろから爆音と巨大な水柱が立ち上る。

専用機持ち達の顔が凍りついた。
俺もその顔を見ただけで状況が把握できた。
恐る恐る振り返ると、そこにいたのは、天使のような翼をまとい、美しい歌声を奏でながら、俺たちに死を届ける、悪魔の姿だった。

弱者はただ逃げる（前書き）

そういえば、振り仮名もつけず、このタイトル、現をいくもの
皆さんはどう呼んでますか？
感想に読み方なんかを書いてみてください。
一応著者の中では決まってるんですが、いい意見があったら、その
読み方にしようと思います。

弱者はただ逃げる

奴が再び姿を現したとき、状況は一変した。

白人は奴の登場に動揺しているうちの初撃で落とされ、デュノアも掃除用具を守って落とされた。

戦況は圧倒的に不利な位置におかれている。

そして俺のいる場所は・・・

海の中

あんなのどうしようもない。

一方的な強さの前に俺がとった行動は隠れること。

海の中なら俺は誰にも見つからないのだ。

だから・・・

そんな事を考えていると、隣から声を発するものがいる。

「ちょっと、離しなさいよ!!!」

そう言って俺が掴んでいる手を離そうとする。

「馬鹿言うな!

飛び出して何になる?!」

そう言ってその行動をやめさせようとするが、

「うるさいわねぇ、私はこんな所で隠れてるような真似したくないのよ！
私も一緒に・・・」

そう言って戦場に戻ろうとしているこいつを何とか引き止めたかった。

「お前も見ただろ？
あいつの強さ。
あんなのに勝てるわけがねぇ、あいつの迎撃はもう軍とかに任せて俺たちはもう旅館に・・・」

そう言って手を引いて旅館に戻ろうとしたが、いっこうに体が動こうとしない。

「・・・なさいよ・・・」

何か聞こえる。

「・・しなさいよ・・・」

振り返り、そいつを見ると、

「離しなさいよ！！！」

そう言って俺から力ずくで離れる。

「おいっ、何してんだ、さっさとＩＳ（こいつ）に・・・」

そう言って手を伸ばすがその手は払いのけられた。

「何なのよ、あんた・・・」

何だ？

何か言ってくる。

「何がしたいのよあんたはっ！

突然現れたかと思ったら、今度はいきなり人の手つかんで逃げろだなんて！

聞いたわよっ！？

あんた、物が、お金が大事なんでしょ？

だったらさっさと帰って財布でも大事に抱えてなさよっ！

こんなところに来る必要なんてなかったじゃないっ！」

そう言われて潜水艦（カタコンベ）での織斑との会話を思い出す。

そうか、掃除用具から聞いたか・・・

視線を逸らすと続けて言葉を投げつけられる。

「あんた、逃げてばかりじゃない。

ここに来た初日、私のこと助けといてすぐいなくなって、こっちはお礼も言えず・・・

ここに着てからだけじゃない。

学園でも私のこと避けてたでしょ！？」

そう言われてアレからの行動を思い返す。

こいつは俺のことを避けていた。

だが、俺もこちらから近づこうとしなかった。

いや、その姿を見かけたとき俺はこいつから逃げていた・・・

「そして今も口にすることは逃げることばっかり。
一体何なのよあんたは！？」

そうだ・・・
俺は逃げてばかりだ。
だがそれは・・・

「あんた、一夏に言ったそうね。
守られてばかりだって。
いいじゃない、守られたって。
守ってくれる人がいるんだから、その人に頼ったって。
いつかその恩を返せばいい。
そして、今度はその人を守れるようになればいいじゃない。
今は無理でも時間なんてこの先まだまだあるんだから！
なのに何？
あんたは逃げてばかり。
逃げた先に何があんのよ？
逃げた先は安全なわけ？
その先がまた苦しかったら逃げて、そうやって逃げてばかりいるんじゃないの？」

そう言われた時、何も言い返せなかった。
その通りだ。

「あんた言ったわよね？
私のことが好きだって！？
だったら、好きな女とその大切なものくらい守って見せなさいよっ！！！」

そう言って海面に向かって浮上していく。

その体を掴もうとした手は掴むものを持たず、海水だけをただ握り締めた。

対価とそれで得るもの

春が海水を掴むより少し時は遡る。

～織斑～

目が覚めるとそこは奇妙な光景が広がる世界。

右側には青空が。
左側には夜があった。

そして、自分はその境界線。

夕暮れに立っていた。

「どこだ、ここ？」

当然の質問を口にしながら足を進める。

右と左、どちらに行こうにも見えない壁のようなもので進めない。
なのでそのまま夕暮れの中を歩いていると、正面にある女性が立っていた。

その身に甲冑を纏い、まるでジャンヌダルクを彷彿とさせるような女性。

その女性に近づくと声をかけられた。

「止まりなさい。」

そういって、俺の前に剣を向ける女性。

「ここから先に進ませるわけには行きません。」

そう言って俺の進路を塞ぐように立ちはだかる。

「えっと、他に進めないんですけど・・・」

そう言って左右に体を向け、どちらにも進めないことを証明して見せた。

「では、後ろに引き返しては？」

そう言われ、後ろを振り返るが、何故だろう？
引き返す、戻るのではなく、進まなければならない。
そんな気がしてならなかった。

「いえ、その・・・

なんていうんですかね。
この先に行かないといけない気がするんです。」

そう言って女性を見る。

「この先に待っているのが苦痛をともなうとしても？」

女性が問いかける。

「苦痛？
そうですねぇ・・・
人間生きているだけで苦痛はともなうモンですよね？
だったら、別に構いません。」

そう言って一歩足を進める。

「では問います。
あなたにとって大切なものは何ですか？」

その問いにこちらも答える。

「生きているもの・・・
ですかね。」

そう言ってまた一歩踏み出す。

「生きているものですか・・・
では、その中にあなたは入っていますか？」

「えっ！？」

そう問われたとき、足が止まった。

俺が入っているか？
生きているものの中に？
大切なものの中に？

質問がよくわからなかった。

そのとき女性が言葉を続けた。

「あなたは生きているものを守りたいと言った。
ですが、それを守るあなた自身もまた、生きているものなのです。
自分を守ることもできないに他の者を守ることなどできません。」

その言葉がやけに胸に刺さった。

何故だろう？

理由がわからないままその場を動けずにいた。
そのまま女性が言葉を口にする。

「あなたが守るために戦う。
そして傷付く。
その姿を見たくない人がいたとしたら、あなたはどうしますか？」

そういわれたとき正直、なんて答えたらいいかわからなかった・・・

「すいません・・・
答えられません・・・」

そう言って俯く。

「えっと、じゃぁ、どうしたら・・・」

そう答えを求めると、

「答えは自分で出すしかありません。
ですが、答えを導き出すための力を貸すことはできます。」

そう言われ、迷わず望んだ。
その力を。

「お願いします！
俺は、守るための力が欲しいです。
自分の手の届く範囲、その全ての人を守る力が・・・！
その力の足しになるなら、あなたの言う答えを導き出すための力でも・・・！」

そう言って顔を上げ女性を見る。

「周りから偽善とや綺麗事と言われ続けてもその行動を貫き通すことができますか？」

その言葉はきっと俺の信念を確かめる言葉。

「きっと、いや、必ず貫いてみせます。」

そう言って手を強く握り締める。
だが一つ気になった。

この女性の言葉、問われる事と同じことを最近聞いた気がする。
そんな事を考えていると、

「・・・覚悟はありますか？」

女性は俺に問いかける。

それは今までと違う感じがした。

「かく、ご？」

何のことだろう？

質問の意味が理解できなかったのでその言葉を鸚鵡返しのように問い返した。

「あなたが望む力、その代償として、あなたにあるものを払ってもらいます。」

「一体何を？」

命とか言われたらどうしよう・・・

そんな事を考えていると女性からやってきた言葉は、

「あなたの中のあるものを対価としていただきます。」

そう言われた。

あるもの？

正直、何のことを言われたのかが全然理解できなかった。
首をかしげていると、
「どうしますか？
今こうしている間にも、あなたが守りたいと願うものは傷付いていきますよ？」
そう問われたとき、俺に選択の余地はなった。
「構いませんっ！
それで力が手に入るのなら・・・
俺はそれをあなたに譲りますっ！」
そう言ったとき、女性の口元がわずかに緩んだように見えた。
「わかりました。
ではあなたに力を譲りましょう。
あなたの覚悟と引き換えに。」
そういった瞬間、俺の目の前に夕暮れ以外の道ができた。
それはある方向に向かって伸びていく道だ。
「あなたは、これから今までと違う道を行くことになるでしょう。
それをどう捉えるかはあなた次第ですが、今までと違ったものが見えてくるはずです。
良き選択であらんことを・・・」
そう言ってその道に剣を向け石像のようになってしまった女性。

いったい、何を対価に払ったのだろうか？
首をかしげながらその剣に導かれた道を進む。
その空はやけに眩しく、その光に目が焼けてしまいそうだった。

自覚と覚悟

～？？？～

「っく！
さっさと落ちなさいよっ！」

そう言って攻撃を行うが見事に回避される。
こちらの第三世代兵器がまるで通用しないことに腹が立った。

「このっ、次こそ！」

そう言って構えたとき、ラウラが言葉を発した。

「私があいつの動きを止める。
その隙に二人で攻撃を叩き込めっ！」

そう言って福音に向かっていくラウラ。

アイコンタクトでお互いにその後に続く。

ラウラが福音の攻撃をものともせず突進。
いつもなら決してしないだろう。
だがそれを行った。

その行動に報いるためにも決してしくじれない。

ラウラが何とか懐に入る。

あの距離なら・・・

「これで貴様は・・・」

そう言って手をかざすラウラ。

福音の動きが止まる。

よし、これで・・・

急いで福音に迫ったとき、信じられないものを目にした。

体から生えていた翼が動いている。

エネルギー状の翼がラウラを包み込んだのだ。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

その中から聞こえてくるラウラの悲鳴。

その翼の監獄を解いたとき、そこから海に向かって落ちていくラウラの姿が目に入った。

「いかんっ！」

そう言って急いでラウラの元に向かう箒。

私はその場を動けずにいた。

その圧倒的な力を見てしまったから。

あいつの言うとおりだった。

こんなの、私たちがどうこうできる相手じゃなかったんだ・・・

そう思いながら、福音がこちらに向かってくるのをただ動けずに待っているしかなかった。

福音が目の前に。
その翼がラウラのときと同じように動き出す。
さっきのラウラのように翼に包まれ私も落とされるのか・・・

そう思いある言葉を口にした。

「ごめんね、一夏・・・」

その瞬間、私の体に力がかかった。

だがそれは、福音のものではない、別の者の力だった。

「・・・触れんじゃねぇ!!!」

その言葉を口にした奴は、福音から私の体を蹴り飛ばしていた。

～春～

そうだ。
俺は逃げてばかりだ。

嫌われるのがいやで逃げ。
傷付ける、傷つけられるのがいやで逃げ。
伸ばした手を払われるのがいやで逃げ。

いつも逃げてきた。
その行動の悪い結果だけを想像し、そうなるのがいやで何もせず逃げてきた。

俺が汚れているからとか、持とうとしたモノも汚れるとか、そんな言い訳を並べて逃げたんだ。

人は些細なことで離れていく。
それが怖かった。
人が離れていく思いをするのが怖かったから・・・

だが、今俺の目の前で、あいつが傷付こうとしている。

織斑(バカ)に言った、

『何かを守るためにお前が傷付く。
そんなお前を見たくない・・・』

その言葉が頭に浮かんだ。
大切な奴が傷付くのがいやだ。

そう、あいつが傷付くのが・・・

だけど・・・

そんな風に悩んでいると、急に頭のねじが緩んだのか、悩んでいるのが馬鹿らしくなった。

俺は何が大事だ?

自分に問いかける。

金だ。

その答えに迷いはない。

それと・・・

その言葉の後にある人物の顔が浮かぶ。

「・・・も大事だ。」

そうだ。

それも俺の大事なものだ。

欲張ってやろうじゃねぇか・・・

そう思い、体を海面に向ける。

そして一気に海中から空に向かって動き出した。

この後のことなんか知るかっ！

今まで今後のことを考えて動いていた春が、初めてこの後に起こることを考えるのをやめた。

それは春にとって良い選択だったのか、悪い選択だったのか。

答えが出るのはこの戦いの後である。

福音があいつを包み込もうとした光景を見たとき、まず思ったのはあいつを福音から放すこと。
そのための手段を選んでいる時間なんてなかった。

ラグーンの力で加速した速度のまま、蹴りをあいつに叩き込んだ。

「そいつに・・・
触れんじゃねぇ！！！」

そう言って俺は守りたいはずのものに見事に蹴りを放った。

その威力は見事なもので、一気に福音との距離を空けることができた。

後が怖いな・・・

そんな事を考えていると、奴の翼が俺を包み込んだ。

「～～～～っ！！！」

ラグーンを取り外していなかったのでシールドが働かず、とんでもなく痛い思いをさせられる。

急いでラグーンを取り外す。

その間およそ1秒。

その短時間で俺の体は所々から香ばしい匂いを漂わせていた。

「てめぇ・・・
誰に手ェあげようとしてたか・・・
わかってんだろうなぁ・・・？」

シールドエネルギーがどんどん奪われていく中、そう言いながら福音との距離を詰めていく。

「他の奴らはどうでもいいが・・・
あいつにはなぁ・・・」

そう言って福音の体を掴む距離までたどり着く。
シールドエネルギーはもう２００を切った。

「手ェ出させねェ！」

そう言って福音の体を掴んだ。

「ＳＹＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！”＃＄＆―～＝＊」

聞きとりきれないような言葉で触れられたことに対し不快感をあらわにする。

「ハハハッ！
気にいらねぇか？
貧乏くじだな。
同情するぜ。
誰も生きてここから出られねぇ。
誰一人としてだ。
この翼籠（とりかご）は『地獄のモーテル』だ。
できる限りあがいてみせな。
でねェと・・・
ブギーマンに食われるぜ？」

そう言ったとき、エネルギーは１００を切った。

くれてやるぜっ！
とっておきをなァ！

その時トゥーハンドの砂嵐のように荒れる画面にはある言葉が表示されていた。

【男のロマン】

それの起動確認の画面だった。

俺はそれを迷わず承認した。

月まで吹っ飛びなっ！

そう思った瞬間、その翼籠（とりかご）は鮮やかな色を変え、赤と黒の混ざった物となり、次の瞬間、それは弾け飛んだ。

そして、俺の意識はここでブギーマンに喰われた。

自覚と覚悟（後書き）

これで・・・
ストックが・・・
ゼロに・・・

と言うことで、次回投稿まで少々お休みをいただきます。
次回更新は来月頭を予定しています。
投稿時間に変更はありません。
その間

私の存在を忘れないっ！

と言う読者の皆様、また次回の更新でお会いしましょう。

新たな道の始まり（前書き）

お久しぶりです。
U→です。
ここから新しい章に入ります。
ではどうぞ。

新章に入ります。
ではお付き合いください。

新たな道の始まり

それは走馬灯の様に俺の頭を駆け巡っていった。

時は2年ほど遡る。

世界初の男の操縦者になった『吉田　春』から、現在の『吉田　春』にいたるまでに過ごした記憶である。

～旭日重工研究所～

今俺はどでかい研究所の中にいる。

あの社会見学でやってしまったことが原因だ。

しかしまた・・・

「でっけぇ～なぁ～。」

そう言って周りを見渡す。

ここは直径１ｋｍはあろうかと言う巨大なドーム。

天井まではどれだけあるんだ？

そんな事を考えながらこの広いアリーナで待っていると、

「どうも、君が異例の実験動物（テストパイロット）かい？」

そう言ってダルそうにこっちに歩み寄ってくる金髪の外人。

初めて見た、本物のパツキンの外人。

ちょっと感動していると、もう一人やってきた。

「ベニー、ちゃんと挨拶しないと。」

そう言って金髪の外人に注意を入れる。

日本人だ。

それも、完全にサラリーマンの手本のような格好でやってきたその人が言葉を続けた。

「初めまして。
僕らが君の担当。
ここでの世話と、データ、および機体の調整を行うことになった、
僕が岡島緑郎。
そしてこっちが・・・」

自己紹介を振っているその相手は・・・
もうそこにはいない。

「えっ？
あっ、ちょっ・・・
ベニーっ！？
あぁ～～～、またこれだ・・・」

そう言って頭を下げ現状にがっかりしている。

肩を落とし、がっかりしていた人に声をかける。

「えっと、大体わかりました。
あなたが岡島さんで、さっきの人がベニーさん、でいいんですね？」

そう問いかけると、

「あぁ・・・
ごめんね。
彼ちょっと変わってるから取っ付きにくい所あるかもしれないけど、
根は良い奴なんだ。
僕は気に入られてるけど、他の人みんなそうってわけじゃないみたいでね・・・
ちょっと人付き合いが苦手みたいなんだ。」

そう言って外人のフォローをする岡島さん。

どうやらいい人そうだ。

いきなりなれない環境に放り込まれて、不安はあったがこういう人が近くにいてくれるなら何とかやっていけそうだ。

その日は施設の案内で終わり、明日から実際にＩＳを使っての実験になるそうだ。

明日のことで頭が一杯になる。

俺が動かしたらみんなどんな顔するかな？

そんな事を考えながらここで始まる新しい生活に胸を躍らせた。

これから特別なことがきっと起こる。

いや、俺が起こすんだ！

何故なら俺は世界で最初にＩＳを動かした『男』

『吉田　春』なんだから。

そう、この時はまだ俺は現実も何も知らないただのガキだった。

勝手な理想を持ち、まるで自分が世界の主役になったかのように思えた。

そんなこと思わなければ今の俺はもう少し違ったのかもしれない・・・

記憶はさらに俺を通り過ぎていく・・・

新たな道の始まり（後書き）

今の春を作り上げたものに入ります。

頭がパンクしそうです。

文章作るの・・・

難しいです・・・

ただ、楽しい点が一つ。

真っ白な画用紙に墨汁をたらして黒く染めていく。

最高です。

現実

～翌日～

朝の６時に起こされ、準備をし、６時３０分には昨日のドームへ。

何？

ひょっとして毎日これなの？

そんな不安を抱えながら一日が始まる。

そこにはすでにＩＳが用意されていた。

その周りには何人もの大人がそのＩＳを囲んでいる。

ラファール・リヴァイブ

この機体を動かすのか・・・

そんなこと思っていると、昨日いなくなったベニーさん？がやってきた。

「えぇ・・・

じゃぁ、とりあえず動かして・・・」

目もあわせずそれだけ言って再び離れていった。

今の、言いにくる必要あったか？

若干その態度にいらつきながらＩＳに触れ起動させた。

「「「「「おぉぉぉぉ～～～！！！」」」」」

周りの反応が心地よかった。

世界で、唯一男でＩＳが動かせるのだ。

その優越感はとんでもないものだった。

周りが驚いている中、ベニーさん？が、

「じゃぁ、とりあえず歩いて。」

そう言われたので歩こうとした。

いや、周りを驚かせようと走ろうとしたのだ。

それを見たら周りはもっと驚くだろう。

そんな事を考えていたが、現実は冷酷な鎌をすぐに俺の首に振り下ろした。

あれ・・・？

走らない。

それどころか、全く体が動かなかった。

最初は周りも俺がいつ動き出すのかを楽しみにしていたようだが、俺が数分もじっとしていることがおかしく思えるようになったらしい。

その顔がやけに不安の混じったものになる。

「えっ・・・と、これ動くんですよね？」

そう言って間抜けな確認をすると、ベニーさん？は視線を合わせはしないが質問に答えた。

「当然。

まさか、起動はできても行動に移せないなんてことないよね？」

そう言って俺の現状をずばり言い当てた。

「・・・その・・・」

そういったときの周りの表情はさっきまで俺を見ていたものとは違った。

それはまるで床に落ちているゴミを見るのと変わらない目だった。

金の卵を産む鶏。

そう言われて買った鶏だが、その鶏が卵を産まないとわかったとき、飼い主はその鶏に餌を与えるだろうか？

残酷

その日は結局一歩も歩くことなく俺はそのドームを後にした。
起動はできても俺は動かせなかったのだ。

岡島さんが、日を変えて再度実行しようと言って今日の起動実験は終了したが、俺にはすでに昨日までの夢にあふれた現実はなく、冷酷な現実しかなかった。

重たくなった体を引きずり、自分の部屋に戻った。
非情な現実を受け入れられないままでいたのだ。

ＴＶとかではロボットを動かせる少年は誰もが天才で、その働きで世界を変えて見せる。

自分にもそんなことができるんだ。

そんな事を考えていた自分を殺してやりたくなるほど今日の出来事はつらかった。

それから数日、俺は誰とも言葉を交わすこともなく部屋で一人うずくまって日々を過ごした。

数日後

再び起動実験の日がやってきた。
正直気が乗らなかった。

当然だ。
前回の失敗から立ち直れていないのだから。
だが俺の仕事なのだ。
嫌だが無理やり応じさせられた。

今日、世界が終われば良いのに・・・

そんな事を考えて廊下を歩いていたとき、曲がり角の先で人の声が聞こえた。

「なぁ、どうするよ?

今日も動かせなかったら彼、正直ただのお飾りだぜ？」

「そんときゃアレだ。
ご苦労さんでした、って家に帰すんだろ？」

そうか・・・
俺はただの少年に戻るのか・・・

そんな事を考えていると、

「いや、それがよぉ、どうにもそういかないないらしくてよ・・・」

は？

何を言っているのかわからなかった。
どういうことだ？

「いかねぇ、ってどういうことだよ？」

「なんかよぉ、親が引き取りを拒否したらしいぜ？」

「どういうことだよ？」

俺も聞きたい。
一体どういうことだ？

「この前景山部長が専務と話してんのたまたま聞いたんだよ。
前の失敗のこと聞いてどうするかって話してたのを。
親元に返すかってなって、総務課に連絡させたら、
『あんなこ、うちの子じゃありません』

だってよ。
薄情な親もいたもんだ。
まぁ、ＩＳが動かせる男なんて普通じゃないから、そういうリアクションもあるのかも知れねぇけどよ・・・
施設かお飾りで研究所においとくか、そのどっちかになるらしいぜ？」

「施設ねぇ・・・
薄情な親もいたもんだ。
自分の子供じゃねぇってか。
俺はそんな親になりたくないねぇ・・・」

「その前にてめぇは彼女作ることからだろうが（笑）」

「うっせぇ（笑）」

そんな軽口を叩きながらその声は遠くなっていった。

嘘だろ・・・

信じられなかった。

自分の子供を捨てていった親が。

それを笑っていられる人たちが。

この世界はどうなっている？

そんな事を考えていると、体がどんどんおかしくなっていく。

息が吸えない。

声が出ない。

手足がしびれて動けない。

頭が働かない。

このまま死ぬんじゃないか・・・

廊下に倒れこんだ俺に誰も気付かないままただ時間だけが過ぎていく。

死ぬほど苦しい俺を世界は救ってはくれない。
この世には夢も希望もない。
神なんて奴もいないんだ・・・

そんな俺を救ったのが、偶然通りかかった一度も視線すら合わせなかったあの人物だった。

真実

気が付くと視界に入ってきたのはとんでもない量の物。

本にＣＤ、パソコンに・・・

他にも何かあるようだが頭が働かなかったのでよくわからなかった。

ただ、薄暗い部屋だ。

だがそんな部屋でうっすらと明るく音を立てている場所があった。

カタカタカタカタッ・・・・・

静かな部屋にその音だけが響いている。

痺れがとれていない体でその音がする方に体を動かす。

だが、足がもつれ・・・

ガタバタグシャパリメキッ・・・

様々な擬音を立てて俺は倒れこんだ。

再び目を開けば今度は見たことのある顔が俺の目の前にあった。

「・・・っと、ベニー・・・さん？」

疑問文で言葉を発すると、

「目が覚めたなら出てってくれるかい？
ここは僕のプライベートな空間なんだ。
本当ならここに他人を入れたくないんだ。」

そう言って俺に背中を向ける。

「あのっ・・・
えっと・・・」

何か言葉を探すが出てこない。

そんな時再びさっきと同じ症状が俺を襲う。

呼吸がおかしい。

息ができない。

手足がしびれ始める。

なんなんだよ・・・

そんな事を考えていたとき、俺に与えられたものがあった。

それは小さな紙袋だった。

その紙袋を口に当てられ、しばらくじっとしているとやっと頭が少し働き始める。

どうやら俺はこの人に助けられた?ようだ。

「あのっ・・・
すいません・・・」

そう言って出てきたのは謝罪の言葉。
そういった相手は俺から離れていき、返事を返してはくれない。
少し時間を置いたが現状に変化がないようなのでこの部屋を出よう。
そう考え、

「・・・ご迷惑おかけしました。」

そう言って部屋を出ようとした。

「・・・どこへ行くんだい?」

そう言って言葉をかけられた。

「へ?」

自分でも間抜けな返事をしたものだと思う。

だが予想外の言葉に出てしまったものはしょうがない。

「どこへって、自分の部屋に・・・」

そういった時パソコンを触りながら残酷な一言を俺に向かって撃ってきた。

「自分の部屋？
研究所（ここ）に仕事のできない人間に部屋は割り振られていないよ？」

そう言われた時先日の事が頭を過ぎり、またしてもさっきの症状が。

だが今度はさっき与えられた紙袋がある。
それをとっさに口にあて症状が治まるのを待つ。

だが、その間にも現実は俺を襲う。

「前回の実験で君の適性を一緒に図ったけど、Cだ。
はっきり言おう。
これは決して優れた評価ではない。
むしろ最低だ。」

俺の心に土足で上がりこんでくるような言葉を言い放ってきた。

「でも動かせないわけじゃない。
女性の中にも適正がない人もいる。
その人たちよりは優れている。」

ん？
今のはフォローなのか？

考えていると、言葉は続けられた。

「現実は厳しいだろ？」

その一言が見事に今の俺を打ち抜いた。

完全に見透かされていた。

今の俺の現状を。

何か言い返したかったが何も言葉が出せない。

その間にも相手からの言葉は続く。

「現実なんてこんなもんだよ。
綺麗なものなんて一つもない。
全部薄汚れ、酷い所は便器より汚い。
それが僕達が生きている世界だよ。」

そう言ってパソコンを触るのをやめ、こちらを見る。

そのとき初めてこの男、ベニーさんと目が合った。

その瞳はこの薄暗い部屋のせいかひどく暗く見えた。

教え（前書き）

お久しぶり？になるんでしょうか？
U↓です。

近況報告です。

事故にあいました。

はねられました。

左手以外は骨折です。

パソコンの故障から始まり、現在に至りますが、お払いいった方が良いでしょうか？

気が付いたのが一昨日なので正直体内時計の日数が合いません。

更新が遅れたこと申し訳ありませんが、今回の更新でストックがつきます。

右手がまともに動くころに更新させていただきます。

お気に入り登録してくださっている方々、並びにこれを呼んでくれている皆様にお詫び申し上げます。

教え

醜いアヒルの子。

出るくいは打たれる。

周りとは違うものがひどい目に合うという意味合いの言葉に近い。

世界は平等を望み、『特別』を必要としない。

これが現在の世界の常識である。

「いっている意味が分かるかい？」

そう言って問いかけてくるベニーさん。

「えっ・・・
何がですか?」

言っていることの意味が理解できなかった。

突然そんなこと言われてもその言葉の意味を全て理解することなど
その当時の俺にはできなかった。

「はぁ・・・
これだから理解力の低い奴は嫌いなんだ・・・
いいかい?
僕の言う言葉がこの世界の真実さ。
よく聞いておくといい。
この世の中、『特別』はごく一部を除いて必要とされていないんだ
よ。」

その言葉を聞いてもなお、深く理解ができなかった。

特別が悪いことなのだろうか?

自分の中で答えを出そうとしていたとき、言葉が続けられた。

「君のその症状、原因は何だと思う?」

自分が今困っている症状の原因?

そんなものわかったら苦労はしない。

「あの・・・
わかりません・・・」

そう言って視線を伏せる。

「だろうね。
答えが欲しいかい？」

もちろんだ。

「はい。」

そう応えたと同時に答えがやってきた。

「外的要因から受ける過度なストレス。
それが今君が脅かされている症状の正体だ。」

そう言ってタバコに口をつけるベニーさん。

「・・・それは一体どういったものなんですか？」

そこまで言われても全く症状の正体が見えてこなかった。

「・・・はぁ・・・
面倒だな・・・」

そう言ってタバコを口にするベニーさん。

そして息を吐くと同時に俺の症状の正体を明かした。

「簡単なことだよ。
過呼吸。
言葉にするのは簡単で、実際になるととんでもなく苦しめられる症状の一つだ。
君も体験しただろう？」

そう言って紙袋を指差すベニーさん。

そうか・・・
さっきの症状が・・・

彼の言う症状なら・・・

「そのストレス、どうしたら排除できます？」

自分が受けている影響を根底から排除する。

中学生のできる発想を飛び越えた問いかけに驚きながら、ベニーさんは応えてくれた。

「・・・根底から取り除くつもりかい？」

その表情は俺が無理難題を言っているのが理解できているから見せている表情だ。

「もちろん。
俺は・・・」

世界で最初に・・・
言葉を続けようとしたとき、先手を取られた。
「世界で最初にＩＳを動かした男かい？」
その言葉を発した人物は俺を静かに見据えていた。
「・・・」
言葉が発せなかった。
その瞳に、
彼が放つ空気に飲まれた。
何を言っても俺の言葉は力を持たないだろう。
本能的にそう感じた。
「僕が言った言葉の意味が理解できなかったのかな？
今の世界で特別は必要ないんだ。
大人しく世界の歯車になることを進めるけど？」
そう言って俺に自室の椅子の一つを勧めてくるベニーさん。
だがそんなものは・・・
「お断りです。」
そう言って部屋を出ようとしたとき、

「上出来だ！！」

そう言って俺の行動を制した人物の方向を見る。

「君に簡単に世界を生き抜く方法を教えよう。」

そういった人物はさっきまでとは違った表情で俺を見据えていた。

そこから発せられる言葉をそのまま鵜呑みにしてしまった時点で、俺の人生は狂い始めたわけだが、今更どうこうなるものでもないだろう。

教えられた言葉をその身に宿し、新たな人生の一歩を歩み始める『吉田春』の歩みを止めるものはいなかった。

このとき誰かが止めていればスタートラインは違ったのだろう。

実践（前書き）

左手で打っております。
退院するころには両利きになっているんじゃないでしょうか？

ではどうぞ。

実践

この世界を生き抜くすべを伝授され、自分の部屋のベットに横になる。

あんなので良いんだろうか・・・

伝授された方法に疑問を持ちながら、延期された明日の起動実験に備えて眠ることにした。

早朝、朝早くから起こされ、起動実験に借り出される。

めんどくさい・・・

本音を言えばこれが全てだ。

そのまま今日と言う日は始まる。

ドームに着くとそこには先日いた面子以外に数人違う顔があった。
ベニーさんが教えてくれたことを思い出す。

「次の起動実験、成功しなかったら君は確実に施設送りだろうね。
おそらくは君を捕らえる為にドームに人員が配備されるだろうから、
この間とは違う顔があると思うよ。」

そのとおりになったことに驚きはしたが、俺のやることに変わりはない。

ＩＳを起動させ、動かす。

それ以外に考える必要はない。

この心構えを教えてくれたのもベニーさんだ。

「いいかい？
最初に重要なのは期待しないことだ。」

そう俺に言ってあっさりと視線をパソコンにむきなおした。

「期待するから失望し、それのせいで傷付くんだ。

だったら、最初から期待しないことだ。
他人にも、自分にもね。
それだけで世の中の半分は軽く感じる。」

そういわれたとき、先日の実験の光景が頭に映し出された。

俺は自分にできることも考えず、ただ妄想の中で成功した姿を想像していた。

失敗などするはずがないと。

その結果がこれだ。

その言葉がとてつもなく正論に感じた。

ＩＳを身に纏い、ただ何も考えないでその体を動かす。

ゆっくりと。

静かに・・・

ウィィィ・・・

静かな機械の稼動音。

それが示すものは・・・

ＩＳが足を動かした。

そのまま一歩目を踏みしめる。

正直うれしかった。

動かせたことが。

俺がここにいる意味があったことが。

だが、言われたことを思い返す。

「調子に乗ると失敗する。

それが人間だ。
いいかい？
もしだ。
もし仮に動かせたとしよう。
そのときに浮かれちゃいけない。
そのまま自分を冷静に見ることができなければこの前の二の舞だ。
何も考えず、一歩動くごとに諭吉がもらえると思うんだ。
君がこれから先生きていくにはどうがんばっても必要なものだ。
それを得るための作業、手段だと考えることだ。
そう考えれば自分がさめて見れるはずだ。」

その言葉にはさすがに抵抗があった。

「諭吉って・・・
おれは・・・」

反論しようと思ったが、

「いいかい？
今君の置かれている現状はこの国の同世代の中では恵まれているほうだと理解しろ。
親が見離して、一人だとしてもそれを補って余りあるものが君にはある。
この世でただ一人、ＩＳを動かすことのできるというアドバンテージを生かすんだ。
そして、それを生かして稼ぐ。
それがこれから生きていくうえで最も重要なポイントになると理解するんだ。」

言われたことを思い出し、浮かれそうな気分を押し殺し二歩目を踏み出し、無事に地面を踏みつける。

周りの顔は、やっと作動させたかと、安堵の表情を浮かべる。

そのまま少し歩き続け、ＩＳを停止させた。

ＩＳから降り、地面を自分の足で踏んだとき、わずかに違和感があったがこれが普通なんだと納得しそのまま足を研究者達の下に進める。

「凄いじゃないか。
この前とは別人のようだよ。」

そう言って俺に近づき、肩を叩こうとした人物の手を俺は・・・

パシッ

弾いた。

そしてそのまま言葉を続けた。

「くせぇんだよ。
イカくせぇ手で俺に触んなよ・・・」

その目は完全に俺に触れようとした人物を拒絶するものであり、その言動は完全に敵意を相手にぶつけるものでしかなかった。

実践（後書き）

この次の更新のめどが立っていないのが申し訳ありませんが気長にお待ちください。

再動

こんな態度のとり方を教えてくれた人物はもう言うまでもないだろう。

「あとは・・・そうだなぁ～・・・」

そう言ってパソコンに向かうのをやめ、椅子をぐるぐると回し、自分も一緒に回しながら俺に何を伝えるのかを考える。

「あぁ！
そうだ。
これは重要だ。
教科書が合ったら赤くマークしておいて欲しいぐらいにね。」

そう言って椅子を止め、俺に向かって身を乗り出してきた。

「な、なんでしょうか？」

いきなりのアクションに正直驚きながらその続きを聞いた。

「相手を決して自分より上だと思わないこと。
これは重要なことだ。
そして、基本的に回り全てのものを必要としないこと。
近づく人も基本は払いのけるぐらいの気持ちで良いんじゃないかな？」

「は？」

正直何を言っているのかわからなかった。

そこまで俺はえらくないと思うんだが・・・

そんな事を思いながらベニーさんの言葉を聞く。

「ここで新しく研究することができるというのも全ては、君あってのものだということだよ。

だから、君が一番偉い。

それぐらいの気でいたほうが気を使わなくてすむ。

だから僕のこともベニーさん、じゃなくて、ベニーでいいよ。

僕は君の事を・・・

ヨッシー？

違うな・・・

クッパ？

関係なくなってる・・・

ルイージ？

緑から離れろ・・・いや配管工から離れろ・・・

う～ん・・・」

言いたいことを言って勝手に悩み始めたベニーさん、いや、違った。

ベニーは俺をおいて勝手に思考の旅に出てしまった。

長そうなので部屋に戻るとしよう。

「おじゃましました・・・」

そう言ってこの部屋を後にした。

自室に戻って考える。

周りに気を使わず・・・
払いのければ・・・
俺は傷付かなくてすむ・・・

もうあんな苦しい思いをするのはごめんだ。

そのためには言われたことを・・・

復習していく中で気になったことが一つ。

偉そうって、どうすればいいんだ?

横柄な態度?

言葉遣い?

馬鹿にすれば良いのか?

答えがなかなかでないので、とりあえずその時の勢いでどうにかしよう。

そう思って俺は眠りについた。

そして、とっさにとった行動がこれだった。

やりすぎじゃないか？

自分の中で自分のとった行動に問いかけるが、今からフォローなんてできるわけもない。

近寄ってきた研究者達を無視して真直ぐベニーの元へ。

歩きながら実は足が震えていることに気付かれるんじゃないかと不安になりながら昨日俺にいろいろ教えてくれた先生の下に逃げ込んだ。

「ベニー、これで充分か？」

そう問いかけると、昨日のことがなかったかのように、視線を合わせることもなく、

「あぁ・・・
もう後何セットかやってくれるかい？
もっと稼動中のデータが欲しい。」

「わかった。」

そう言って再びＩＳに近づき、その途中にいた研究者達は黙って俺に道を明けた。

さっきのように声をかけようとする者もなく、俺はゆっくりと落ち着いてＩＳを身に纏う。

この態度、慣れるまでは大変かもな・・・

そんな事を思いながら新しい自分の始まりをＩＳと同じように踏み出した。

休日（前書き）

やっと・・・
やっと右手のギブスが・・・
指の部分の開放をゆるされました！！！

と言ってもまだギブスが腕についている状態で、手首の固定は取れないので違和感はつきませんが指が自由に動くことがこれほど幸せとは思いませんでした・・・

ただ、手が・・・
異常に臭いです。
しばらくファブリーズをし続けたいぐらい臭いです。

これから少しずつ更新していきたいと思います。

またこれからよろしくお願いします。

休日

アレから数日がたった。

あの態度以来俺に必要以上に関わろうとしない人たちに囲まれることになった。

そりゃそうだ。

話しかけてあんな態度じゃいい気分じゃないからな。

だが、そんな俺の行動を気にせず、話かける人がベニー意外にもう一人いた・・・

「春、ちょっと、春ってば。」

そう言って通路で俺を呼び止めようとしたのは岡島さん、ベニーから教えてもらったあだ名は『ロック』だった。

「なんだよ、そんなに呼ばなくても聞こえてるよ。」

そう言って適当に流そうとするが、ロックは食い下がらなかった。

「今日のデータが不十分だからもう少し起動実験に付き合ってもらうよ。

君の返事はＹｅｓ以外ないからね。」

そう言って俺の襟を掴んでドームへ引っ張って歩いていくロック。

「なぁ、今日の分のノルマこなしたからもういいんじゃないのか？」

そう言って開放を期待するが、

「君がベニーから受けた変な影響のせいでみんな必要最低限な仕事しかしないからね。
いくら収集しても足りないくらいだよ。」

そう言って不満を露にしながら俺を引きずりドームに連行するロック。

なるほど、こういうおせっかいな性格だからあのベニーの面倒を見るのか・・・

初めの自己紹介のときのことを思い出しながらそんな事を思いながら一日のノルマの倍の量をこなすためドームに連行された。

ここに来て一月ほどたつだろうか。
アレからベニーにはいろいろなことを教えてもらった。

酒にタバコ。
公に言ってはならないだろうが、ベニーの紹介で娼婦の世話にもなった。

ヤル前に値段を聞いたときには、正直大人は金を払ってまでこんなことがしたいのかと思ったが、初めて味わった快感にその値段の価値があるのかもしれないと思ったことは誰にも言っていない。

今日はここに来て初めての休日だ。
そして、俺が今いるのは・・・

空が覆われた、いつも見ている光景と変わらないドームだった。

「なぁ・・・
俺は休日がすごせるって聞いたんだが・・・」

そんな言葉を口にする俺の目の前に広がる光景は・・・

左側には机。
その上には大量の野菜。

右側にも机。
その上には大量の魚介類に肉類。

俺の後ろには流しが用意されていて、そこには米と炊飯器。

正面に見えるのはどこから用意してきたのかと突っ込みたくなるような巨大なバーベキューセット。

そして、それぞれの机の前には・・・

ロックとベニー。

何で毎日顔を合わせている面子と休日を過ごさないといけないんだ・・・

そんな事を考えていた。

せっかく給料も入り、休日。
１４歳ならやりたいことは盛りだくさんだ。
だが、そんな俺の休日は・・・

「『ダッチ』、ちゃんと米を洗ってくれよ。」

そう言って適当に野菜を引きちぎっていくベニー。
人にどこから持ってきたと言ってやりたくなるようなあだ名をつけた張本人が、俺に向かって言葉を吐く。

「ベニー、君ももうちょっとサイズを考えて・・・
春、悪いけどお米炊いてくれるかな？
僕は野菜と肉の両方を担当することになると思うから・・・」

ため息混じりに渋々ベニーの行動を止め、自分で作業を始めるロック。

「何で休日に同じ面子で顔あわせてこんなことしないといけないんだ？」

今思っている不満をストレートにぶつけると、

「何言ってるんだ！
休日はバーベキューだろ！！！」

そう言ってベニーに一括された。

・・・知るか！

そんな事言われても日本人にそんな習慣はない。

初めましてこんにちは。ｍ（＿＿）ｍ

そんな風習に戸惑わずに入られなかった。

「ごめんね。
ベニーの趣味なんだ。
付き合ってあげて。」

そう言ってフォローを入れながら野菜を処理していくロック。

その手つきは手馴れたもので、主夫のような手つきで野菜を処理し、いつの間にか持ってきていた肉に魚介類まで処理している。

・・・これが恒例行事なのか・・・

そんな事を思いながら下がるテンションの元、流しに向かい米を洗い始めた。

授業の家庭科程度の知識しかない人間が、米を炊こうとするとどうなるか、想像できるだろうか・・・

俺の横にはロックに追い払われたベニーが一緒に米を洗っている。

「なぁ、ベニー。」

「なんだいダッチ。」

「米って、いつまで洗えばこの白い汁が出なくなるんだ?」

そう言ってざるの中から洗いながら絶え間なく出る白い液体を見ながら質問を投げかけた。

「さぁ?
僕はいつも基本的に何もしないからわからないよ。」

さらっと言い放ったこの男に若干の殺意を抱きながらも答えが出ないまま米を洗い続けた。

かれこれ30分ほど米を洗い続けていただろうか。

ロックが自分の作業が終わり、俺達の方にやってきた。

「後どれくらいで炊け・・・
君たちは・・・
今・・・
何を洗っているんだい?」

そう言って俺たちの洗っているものに疑問を投げかける。

俺たち二人は当然その質問に答えた。

「「何って、米に決まってるだろ(じゃないか)!!!」」

そう強く言葉を口にするが、実際俺たちが洗っていたものは一般の炊飯器の中に納まっているような白米ではなく、米の粒が粉々に砕かれ、人のよっては米粉と呼ぶ人もいるのではないだろうかと言うようなものだった。

休日（後書き）

自分も一回米を炊こうとして、米を粉々に砕いた記憶があったものですから・・・
皆さんはお米、炊けますか？
洗いすぎには注意しましょう（笑）

存在

結局、準備全てをロックにしてもらい、俺たちは食材が焼けるのを待っている。

「なぁ、ベニー。
一つ聞いてもいいか？」

そう言って思っていた疑問をベニーに投げかけた。

「なんだい？」

「他人は払いのけろなんていったあんたが、何でロックと一緒に居ることは構わないんだ？」

その質問を聞いて、ロックとベニーが二人で顔を見合わせた。
そしてその質問にベニーが答えた。

「最初は鬱陶しいだけだったけど、しばらく一緒に居て気付いたのさ。
よく気が利く便利な人間って事に。
だから一緒に居るだけ。」

そう言って食材の焼き加減を確認するベニー。

本人を目の前によくこんな台詞がはけるな。
そんな事を思って今度はロックに質問を投げかけた。

「ロックは何でこんな事言う奴と一緒に居るんだ？」

そう問われ、ちょっと考えているようなそぶりを見せてから答えを出した。

「そうだね。
世の中いろんな人間が居るからね。
それぞれの考えを持って生きている人間とどうすれば上手く付き合っていけるか。
その勉強のため・・・かな？
ここまで極端な人は初めてだったけどね。」

そう言って軽く笑って応えた。

変わってるな。
片方はパシリのように扱い、もう一人は人間との接し方のテストとして扱う。

こんな歪な関係もあるのか。

そんな事を考えていると食材が焼けたようで、ベニーは勝手に食べ始めていた。

「ちょっと、ベニー！
勝手に食べないでよ。」

そう言って一人で勝手に食べようとするベニーに注意をしながら自分も食べ始めようとするロック。

「ほら、春、ボーっとしてないで。
焼けたから君も食べなよ。」

そう言っていつの間にか取り皿に俺の分を入れてくれてそれを渡してくれた。

「あ、あぁ・・・
ありがとう・・・」

そう言って俺も肉を口にした。

それから数ヶ月、俺は研究所にいる時間の大半をベニーかロック。
そのどちらか、その両方と一緒に過ごした。

ベニーには雑学や大人の遊びを。
ロックには一般常識など。

この二人にいろいろなことを教えてもらい、そして一緒に居ることであの症状が出ることもなくなっていた。

ベニーが俺に教えてくれた周りを必要としないこと。
だが、この二人だけはその例外になっていた。

俺はこの二人をいつの間にか必要とし、頼っていた部分もあった。
意外だったのは、ベニーがなんだかんだ言って俺の力になってくれたりしたことだろうか。

いつの間にか俺はこの二人の存在に支えられ、この二人に期待してしまっている部分が大きくなっていることに気が付かずにいた。

だからいつの間にか自分が失いたくないと思えるものができていたことにも気付かなかった。

様々な物語や比喩に出てくる安易な言葉にこんな言葉がある。

【大切なものの価値はその存在がなくなって初めて気付く】

それは決して比喩でもなんでもなく、ただ事実だということを俺に突きつける事件が起きることでそれに気付き、そして俺は失うことに怯え、持つことを諦め、逃げることを選ぶようになる。

そしてそれはもう目の前まで迫っていた。

質問

旭日重工に来て半年がたとうとしていたころ、それは突然やってきた。

「出張!?」

俺の部屋にやってくるなり言われたロックのその言葉に持っていたゲームを放り投げ、ロックに詰め寄った。

「ちょっと、ダッチ!!」

協力プレイをしていたベニーが俺に向かって言葉を発するが、その発言を無視してロックに言葉を放った。

「出張って、何だよ!
急じゃねぇか!
何時から、どれくらいだよ!」

そう言って自分の不満をロックにぶつける。
決してロックのせいではないのに、ロックはその不満のこめられた

疑問にいやな顔を一つせず応えてくれた。

「出張は、そうだな・・・
出世するためのステップの一つかな？
出張先でプロジェクトを成功させて、その功績が評価されれば返ってきたときに今以上のポストにつけるからね。
急なのは・・・
ごめん・・・
前から話があったことなんだ。
だけど・・
『ダッチ！！
早くゲームとって！
死んだら最初からやり直しなんだから！！』」

そんな言葉が話の途中でとんでくる。
だが、今はゲームよりもロックの話のほうか俺の中では重要なクエストだ。
ベニーに向かってある言葉を吐く。

「日本にはな、こういう言葉があるんだよ！
気合と根性！
それでどうにかしろ！！！」

それだけ言ってロックのほうに向きなおした。
後ろではベニーが文句を言っているがそれは今聞いている場合じゃなかった。

「で、続きは？」

ちょっと驚いた顔をしていたロックが少し笑顔で俺の質問に再び答

え始める。

「ハハハッ・・・
ごめん、ごめん。
実は以前から話があったんだけど、君の事が気がかりで受けられなかったんだ。」

「俺のこと？」

何故俺が出張に絡んでくるのかがわからなかったのでその理由を黙って聞いた。

「ここに来てからすぐにあんなことがあって、人を寄せ付けなくなっていたじゃない？
だけど、今は僕やベニーとは普通に話せるし、研究所（ここ）の人とも必要最低限ではあるけど会話も交わせるようになったじゃなか。
まぁ、話し方や行動に少し心配はあるけれど今の状態ならそばにいなくても大丈夫かなと思ってね。」

この環境にも俺が適応できると判断したから。
以前からあった話しを受けようという気になったらしい。

そうか、俺の為に・・・

黙ってその答えを聞いていると次の質問にも答えてくれた。

「急だけど、出発は明日なんだ。
前もって言うとベニーが何か変なことをしそうで・・・」

そう言って視線をベニーに向けるロック。

俺も視線をベニーに向けるが、ベニーはゲームに夢中でこっちの話を全く聞いている様子もない。

「あ、え、ちょっ・・・
後もう少し・・・」

体を揺らし、完全にゲームに夢中だ。

「ベニーが人のために何かすると思うか?」

ベニーと言う人間を知っているなら当然の質問に・・・

「・・・そうだね。
でも、春なら何かしたかもしれないだろ?」

そういわれて何も言い返せなかった。

急じゃなければ最後に外出の許可とって飯でも食いにいけたのにとか、そんな事を考えていた自分がいたからだ。

「別にそんなことしねぇよ・・・」

そう言って視線を逸らす。

そんな俺の行動を黙ってみていたロックが俺を引っ張って部屋を出る。

そして部屋を出てすぐの廊下で胸元からタバコを取り出してそれに火をつける。

「廊下は禁煙じゃなかったか？」

そう問いかけると、

「罰を受けるころには海外だからいいんだよ。」

そう言って俺にも一本勧める。

俺はそれを黙って受け取り火をつける。

そして息を吐いたとき、ロックが言葉を口にし始めた。

「君がここに来てすぐ変わった原因・・・

それがベニーの影響だってことはわかってた。

ベニーの言葉、それが君には蜘蛛の糸だったってことも。」

「蜘蛛の糸？」

突然何を言っているのかと思った。

「知らない？

悪い行いをして地獄に落とされた人間の前にたらされる神様からの一本の糸の話。」

「あ～ぁ、なんかあったな。

あの残酷な話だよな。

上げて落とすって神様のやることじゃねぇよ。

で、それがどうした？」

「残酷・・・

そこまで言うつもりはなかったんだけど、僕が言いたかったのは君にとってベニーの言葉が、目の前に現れた救いの糸だったんだろう

なってこと。
それならその言葉の影響を受けないわけがない。
だけどね、それだけじゃ駄目なんだ。」

「何がだよ?」

言いたいことがよくわからなかった。
現に俺とベニーはその言葉を根底において生活し、不自由はしていない。

「春、人間って何だと思う?」

突然問いかけられる質問に唖然としながら簡単だとその答えを述べた。

「簡単。
サルから進化した、言葉を放つこの世で一番汚ねぇ生き物だろ。」

そう言って答えを述べ、煙を吐いた。
そして床に灰を落とし、こちらも問いかけた。

「なんだよ急に。
変な質問して。」

逆に俺が質問しなおすと、ロックも煙を吐き、同様に灰を落として俺の質問に答えた。

「う〜ん・・・
それは正解であるんだけど、これは別の話。
人間が人間たりえるものは何か。

人間を人間たらしめるものは教育であり、言語であり、道具であり、そして愛である。
だけど君は一度その愛に捨てられ、愛を忘れた。
ゆえに人間ではない。」

そういわれたとき、俺を生んだ奴らに捨てられたという現実を思い出し、息が苦しくなる。

そんな俺の背中をさすり、呼吸が整うのを待ってくれるロック。

そして呼吸が落ち着いたときに話の続きを始める。

「難儀だね。
だから君にとって『他人』は自分を傷つけるもので、『安心』は常に不安が付きまとい、『あたたかい』という言葉は君の心に冷たく響く。」

そういうロックの顔は一瞬だが何故か少し悲しそうで、自分のことでないのに泣きそうな顔をしていた。

「ロッ・・・」

言葉をかけようとしたとき、ロックが言葉を先に口にした。

「春、僕が君に魔法をかけてあげよう。」

そういう顔はさっき見せた表情とは違ういつもどおりのもの。
そっと手を俺のほうに出して、言葉を口にする。

「いつか、この手のひらが君にとって温もりだと感じられる瞬間が訪れるかもしれない。
君の胸を満たす何かを見つけられるかもしれない。
そのとき君は、とても幸福な人間になる。」

「何言ってんだよ。
その年で魔法って。
手のひらって、さっき俺の背中触ってた手も暖かかったっての。」

俺は言われた言葉を馬鹿にするようにロックに返答する。
そんな俺の言葉を聞いてロックは軽く笑い、

「まぁ、手って言うのは例えのようなものだから、それだけとは限らないさ。」

「は？」

何言ってるんだ？
と思ったがロックは言葉を続ける。

「それにぬくもりが届いて欲しい場所はもっと別の場所だから。
届くそれが君にとって何かはわからないけどね。
だから、一つだけ覚えておいて。
人はね、ずっと一人だと乾いてしまうんだ。
そして、その乾きを癒してくれるのは君やベニーが必要としていない『他人』だけなんだ。
春もいつか、そんな人に出会えるといいんだけどね。」

「しらねぇよ、そんな奴のことなんか。」

そう言ってロックの言葉を否定し、俺は部屋に戻ろうと扉の前に立つ。

なんだよいきなり、わけわかんねぇ事いいやがって。

そんな事を考えて扉が開き、その中に戻ろうとしたとき、最後に言葉が聞こえた。

【その人のそばにいられるだけでいいやって人に出会えるといいね】

その言葉を聞いたときに扉は閉まり、どういうことだと聞き返そうと再び廊下に出たときそこにロックの姿はなかった。

めんどくせぇ明日出発する前に聞けばいいや。

そう思い一人でゲームを何とかクリアしたベニーに散々小言を言われ、次のクエストに挑み日付が変わるころに眠りについた。

翌日、目が覚め訓練に行く前にロックの部屋に行ったがそこにすでにロックの姿はなく、すでに出発した後だった。

結局、最後に聞いた言葉の意味がよくわからない釈然とした気分だったので、休憩のときに電話で聞けばいいやと、その足でそのままドームに向かった。

しかし、そのままあの言葉の意味を聞くことはできなかった。

不満

ロックが出張に出て十日がたった。

面白くないことに、いくら電話をかけてもいっこうに電話が繋がらなかった。

出張先を聞いていなかったので時差のことを考えたりもしたが、ロックの性格なら着信履歴があったらかけなおしてくるに決まってる。

それなのに何の連絡もないことが面白くなかったので訓練も適当にやって他の研究員達を困らせて憂さ晴らしをしていた。

そういえばここ数日、結構な人数が日替わりで休んでるような・・・

ドームや研究所内で人を見かけることが少なかった。

外泊申請が重なったのか？

そんな事を考えながら今日の憂さ晴らしが終わったので部屋に戻って酒を飲もうとしていたとき、ベニーに呼び止められた。

「ダッチ、ちょっといいかい？」

そう言って俺を呼ぶベニーの格好は・・・

「何だよベニー、いつものアロハはどうした？
スーツなんて、明日に雪でも降らせたいのか？」

そう言ってベニーを笑った。

その格好は、黒のスーツに白いシャツ。

初めてサンダルじゃない靴を見たがスーツに合わせて黒の革靴。

そして首元には黒いネクタイが締められている。

「特別に外出許可が出たんだ。
そこにはドレスコードがあってね。
最低これぐらいの格好をしてないといけないんだ。
君の分も用意してあるからすぐに着替えてくれ。」

そう言って俺にスーツ一式を渡してきた。

「おいおい、急だな・・・
何でまた・・・
マジか？
キートンのスーツじゃねぇか！
成長期の俺に着せる服のブランドじゃねぇだろ？
すぐサイズ合わなくなるぞ？」

そんな事を言いながらドームで高級スーツに意気揚々と袖を通していく。
周りの研究員達の目など気にせずパンツ姿も披露した。
そして研究員達の視線などお構い無しに着替え、後はネクタイを残すのみとなり、

「どう結ぶんだよこれ・・・
ちょ、ロック、これ結んで・・・」

そう言って後ろを振り返るが当然その名前の人物はいなかった。

若干恥ずかしくなり、ネクタイをくしゃくしゃにするが、近くにいた研究員が俺に近づいてきてネクタイを結んでくれた。

珍しいこともあるもんだ。

いつもならこんなこと絶対してくれないのに。

明日はやっぱり雪なんじゃねぇの？

そんな事を考えながら着替えが終わったのでベニーに、

「準備できたぞ。

でもよぉ、こんな高級なもん着ていく所って一体どんなとこなんだよ。」

そう言ってベニーと並んで歩き始めた俺の後姿を、ドームに残った研究員達が言葉表せないような表情で見ていたことに、スーツの興奮で全く知るよしもなかった。

旭日重工が用意してくれたのであろう高級車の後部座席に座り、いつものようにタバコを口にする。

「いや～、珍しいこともあるもんだな。

今日何かの記念日か？

パーティーとか？

そんなところに俺呼んで大丈夫なのか？」

そんな質問をベニーに投げかけると、

「主催者がぜひ君に来て欲しいそうなんだ。」

それだけ言って窓の外を眺めている。

「ふ～ん・・・
でも、俺を呼ぶって事は旭日重工の関係者だよな・・・
俺なんかしたか？」

起動実験や稼動テストの結果は思わしいものではないし、生活態度も褒められたものではない。
なのになんで俺が呼ばれるんだ？

謎が解けることはなく、特にすることがなかったのでタバコを吸い終わるとベニーと同じように俺も窓の外を眺めることにした。

一時間ぐらい車に揺られただろうか。
周りの景色は都会的な印象から、緑が多くなってきた。

「なぁ、これどこ向かってんの？」

さすがに不自然なこの光景にベニーに質問を投げかけると、

「もう少しでパーティー会場に到着するよ。」

それだけ言って相変わらず窓の外の景色を眺めている。

そうか、別荘とかでの屋外パーティーか！

それなら緑が多いのも納得だ。

謎が少し解けてもう少しの辛抱だと後わずかな時間この退屈な空気を我慢することにした。

それから五分ほどすると車は目的地に着いたらしい。

運転手が降りてきて扉を開けてくれた。

「至れり尽くせりだな。

で、会場は・・・」

そう言って周りを見渡すが見えるのは山の景色。

「こっちだよ。」

そう言って俺を先導して歩くベニーが行く道は石畳でできたような道だ。
その両脇は草が生い茂り、石畳の隙間からも草が顔を出す。

「なぁ、もう少しマシな道あったんじゃないのか？」

そう言って歩く俺たちの前から人が数人やってきた。

全員黒一色。
怪しい集団以外の何者でもない。

だがベニーはお構い無しといった様子でその集団とすれ違う。

パーティーとは関係ないのか・・・
そう思いながら、その人たちと俺もすれ違ったとき、何か嗅いだことのある匂いがした。

なんだっけ、どこかで嗅いだことある気が・・・？

そんな事を思いながら道を行くと、答えが俺の視界に現れた。

そこに広がっていたのはいくつもの四角い石の柱。
そこには数々の名前が刻まれていた。

「おい、ベニー。
ちょっと悪趣味じゃねぇか。
パーティーじゃなかったのかよ？」

若干不機嫌になりながらベニーを問い詰めるが、ベニーはお構い無しに柄杓と水を入れた手桶を用意し始める。

「・・・なんだよ。
黙るなよ！
説明しろよ！！！」

そう言って問い詰める俺を無視して先をいくベニー。

クソッ！
面白くねぇ・・・
一体誰の墓参りに同伴させられてるんだ、俺は？

しばらく考えても答えが出ず、苛立ちだけが高ぶっていく。
そして出た答えが、

上等じゃねぇか！
そいつの墓に最悪（さいこう）のお参りをしてやろう。

そんなことを思いながらベニーの後についていく。

そしてベニーが足を止め、黙って手を合わせた。

そうか、そこがそいつの墓かっ！

そう思い俺もその墓の前まで足を進める。

そして、どこのどいつがこんなとこまで俺を呼びつけたのか確認しようとその墓石の名前を見たとき、俺の体はこの一帯にある石柱と同じように物言わぬ柱になった。

そこにあったのは知った苗字。

だが、ここにいるはずがない。

まだ若いし、病気じゃなかったし、最後に顔見たときも元気で、俺に余計なことだけ言っていなくなったその男の苗字がその石柱には刻まれていた。

呆然とする中で、ベニーがゆっくりと口を開いた。

「空港から出張先に行こうとして乗ったタクシーが事故に合ったそうだ。

重傷者が4名出て、死者は1人だけ。

タクシーに過失はなかったらしい。

ぶつかってきた方も、飛び出してきた子供を避けたせいでそうなったらしい。

この二つは目撃者がいるから間違いない、正確な情報だ。

誰のせいでもない。

ただ運が悪かっただけ。

それだけだ・・・」

そう言って石柱に柄杓で水をかけるベニー。

線香に火をつけ、手で仰ぐようにして消し、静かに立て、手を合わせる。

その姿を見ていることしかできなかった。

運が、悪かった・・・

それだけ、それだけで1人の人間がいなくなってしまった。

もし、俺が普通に研究所で過ごせていたなら出張があの日になることはなかったんじゃないか？

もし、俺の親が俺の受け取りを拒否しなければ俺は普通でいられたんじゃないのか？

もし、ＩＳを動かすことなんかできなければ、こんなことにならなかったんじゃないのか？

もし・・・

いくら考えても今更どうすることもできないのに、それでも考えてしまう。

そして、頭が処理しきれない情報を処理しようとすれば、もちろんストレスはそれ相応に感じ、

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

ハッ

呼吸がどんどん短くなる。

息が苦しい。

手足の痺れを感じる。

頭が廻らない。

これは・・・

本格的な症状を前に俺は何もすることができず、ただその場で意識を失った。

逃避

倒れてから一週間が過ぎた。
大事にならないようにと、一週間の休みがもらえたがそれも昨日で終了だ。
今日からまたいつもの訓練が始まる。

あっさりとノルマをこなしたので今日の訓練の終了時刻はいつもよりだいぶ早い。
やることもなく、一人部屋でボーっとして過ごす。
それしかやることが思いつかなかった。

そんな日常がしばらく続き、一月とちょっと。

ベニーが俺に声をかけてきた。

「ダッチ、ちょっと・・・」

久しぶりに声をかけられたような気がした。
何だと思いその話を聞く。

「なんだよ・・・」

あまり気分が乗らないがその話を聞くため耳を貸す。

「この前は君に事実を知らせるためにわざわざあの形をとったけど、あそこにロックはいなかったんだ。
君をロックの家に連れて行く上手い言い訳も思いつかなかったしね。
だけど、四十九日も終わって、納骨もすんだ。
今度こそ彼はあそこにいるけど、行くかい？」

そう言って俺に声をかけてきた。

俺は・・・

「・・・いかねぇ。」

それだけ言うとベニーもあっさり、

「そうか。
じゃあいいんだ。
僕の用事はそれだけ。
また明日の訓練で。」

そう言って離れていった。

一人部屋に戻り酒を飲む。

行けるわけがない。

俺のせいであんなことになった奴の墓に。

何をしたって償えるものじゃない。

俺は逃げた。

それしかできなかったから。

できることが思いつかなかったから。

これ以上こんな思いをするのはごめんだ。

踏み込むから、近くにいるからどちらかが傷付くんだ。

なら、最初から触れ合わなければいい。

最初にベニーに言われた、『他人を払いのけるぐらい』その部分を

より重く認識し、それを心の底に置き直し、俺の日常は加速する。

自分が誰かに傷つけられることが怖かった。

それは最も親しかった、親しいであろう筈の人に拒絶されたから。

自分が誰かを傷つけるのが怖かった。

それは親しかった人間を傷つけてしまったから。

でも、そんな自分を癒してくれるのもまた、傷つけ、傷つけられるかもしれない誰かでしかないのだ。

逃避（後書き）

普通の少年、そこがポイントだったはずなのに春の人嫌いの理由を考えてたらどんどん重たくなってしまいました・・・
どうにかでき・・・ないか・・・
それでも話は続きます。
ですが、私の掲げる理想は、
普通万歳！！！

障害

年度末が近づき、世間では例年道理の特集を組んでお送りしてくれた。

受験シーズン。

その言葉が意味するものは１５歳、１８歳なら言わずもがな。
そして、１８歳以上の一部の人物にとっても、まさに人生がかかった大勝負である。

そんなニュースをソファーで横になりながら眺める１５歳の俺。

「みんな大変だな・・・
ベニー、受験ってどう？
大変？」

公立中学出身の俺にはまだ経験したことのないことを、俺のベットの上で携帯用ゲーム機を持って体を揺らしながらゲームをする男はゲームをしながらこういった。

「ハハハッ！
ダッチ、君このクエストが終わったら僕が直接触ってやろう。
初めてだろう？
初めてだから精一杯の力を込めてあげるから喜ぶといい！」

そう言いながら体を揺らしている。

その言葉を聞いて答えが導き出せた。

大変らしい。

その大変な行事も俺には関係ないもので、中学卒業の手続きが終わり次第、ここ旭日重工に就職決定の俺には世間の話題など関係ないと、テレビを消して俺もゲームを起動した。

数日後、俺が訓練しているドームに仰々しい男達がやってきた。

「吉田春さん、ですね。」

ＩＳを身に纏い、ダッチと今の稼動がどうだったのかの話をしているところに、突然割り込んできた男達は全員が黒スーツにサングラスと、怪しさ満点だった。

「・・・はいいえ。」

「どっちですか?」

俺のとっさの答えに一瞬戸惑ったようだが、全員が全員そうではなく、冷静に俺の身柄を確保するために動く黒服たち。

「役員達がお呼びです。
一緒に来ていただけますか？」

そういわれる俺の姿は、すでに周りを囲まれ、ドームの全ての出入り口に同じ格好の男達がいる状態。

どう応えたって過程が違うだけで結果は一緒だろう。

抵抗する気もうせたので大人しくＩＳをはずし地面に降りる。

「ご一緒しましょう。
その前に一服させてくれるなら。」

そう言ってジェスチャーでタバコを吸うさまを見せ付ける。

俺に話しかけてきた黒服は、腕時計を確認し、

「・・・今から5分後に移動を開始します。」

そう言って俺の行動を黙認した。

抵抗したら一服の時間もなかったらしい。
その場でベニーのタバコを借りて一服を始めた。

通されたのは扉の上に絶対関わりたくないであろう、『第一会議室』と書かれた部屋だった。

何？
俺会議出る必要ないでしょ？
って言うか、長い話聞きたくないんだけど。

そんな事を考えているとでかい部屋の先のほうに見える、何人もいるえらそうなオッサンの一人が話し始めた。

「やぁ、吉田君。
君の活躍は聞いているよ。」

そう言って俺の労をねぎらう言葉をかけてくるオッサン。

「どうも。
先日も地面にＩＳ叩きつけて、とんでもない修理費を経費として使うことになった俺に、感謝の言葉が聞けるとは光栄です。
俺にかかる経費上乗せして、酒の席でも設けることができましたか？」

嫌味を言ってやるとそのオッサンは黙った。

「・・・君と世間話は不毛のようだ。
本題に入っても？」

別のオッサンが話し始める。
こっちのほうがまだ好感が持てるな。
太ってない、細身のオッサンだ。

「えぇ、もちろんです。
こちらも、くだらない世間話するために呼ばれたなんて思ってないですよ。」

そう言って目の前にあった椅子に座った。
何人かのオッサンは舌打ちをしている。

どうした？
俺の自由時間を奪った分の嫌味はまだまだこれからだ。

臨戦態勢に入るため、ベニーから借りてきたタバコに火をつける。

その光景に誰も口を出さないまま、本題に入った。

「君はこのニュースを知っているかな？」

そう言って役員達の後ろの巨大モニターにニュースの特集映像が流れ始める。

その映像の最初にはこんな言葉が綴られていた。

【特集！！！

世界で最初にＩＳを動かした男、織斑一夏の全て！！！】

・・・誰？

状況が理解できないままその映像の続きを見せられることになる。

そこには俺と同い年ぐらいの男が制服姿や体操服で動き回る、男にとっては、失礼。

一般的性的趣向を持った男にとっては退屈極まりない映像が約３０分に亘り映し出された。

その間に何度あくびをし、頬杖をついて眠っている状態から頭が滑ったかわからなかった。

映像が終わり、俺に向かって言葉を発してくる役員達。

「理解していただけたかな？」

そういわれても、うたた寝していたので全くわからなかった俺は、

「あなたたちの趣味が俺とは違うってことだけは。」

その言葉を口にした瞬間俺の顔の若干上空を役員達の方向から灰皿が飛んできた。

「貴様、誰に向かってそんな口を利いているんだ!!!」

大変ご立腹な豚野郎。

豚？

体格的には熊が近いか？

そんな事を思っていると他の役員になだめられ、何とか席に着いた森の熊さん。

からかうならあの辺が狙い目か。

そんな事を思っていると、

「君は今、我社に籍を置いているという現状を知っているかな？」

さっき俺に話し始めた細身のオッサンが俺に話し始める。

「えぇ。

おかげでこんなに大きくなりました。」

そう言ってタバコの灰を落とし、足を机の上に組んであげる。

さぁ、どう出る？

挑発してみたが、そのオッサンの言動に俺は肩透かしを食らった。

「そうか。
では君に読んでもらいたいものがあるんだ。」

そう言って席を離れ、俺に向かってくるオッサン。

・・・何だよ?

近寄ってくるオッサンを不審者以外の何者でもないと全身を舐めるように眺めていると、俺のそばにやってきたとき、胸元から一つの封筒を取り出した。

「開けたまえ。」

そう言って俺に渡そうとするが、

「机の上においてくれたら。」

そう言って直接受け取ることを拒否した。

ため息をつきながら机の上に封筒を置き、自分の席に戻るため歩くオッサン。

充分に俺との距離が開いたところで、タバコを口にくわえたまま封筒の封を開けた。

そこには一枚の紙が。

そしてそこには最初に重苦しい文字が書いてあった。

【辞令】

どうがんばって誤変換しようと読んでも『じれい』、『ジレイ』としか読めなかった。
そしてその先を読んでいくと、そこにはうんざりしたくなるようなことが書いてあった。

下記の者、来年度の四月より、下記の場所での職務を任ずる。
敵、下記の場所に所属できなかった場合、我社との契約は満了したものとし、以後の契約を一切認めないものとする。

そう書かれていた。

ちょい、ちょいちょいちょい・・・

正直動揺しないはずがない。

この流れはまずいだろ。

確実に下記の者は俺だろう。
じゃぁ、下記の場所は？

恐る恐る視線を下に下げる。
そこに書いてあった言葉は。

吉田春。
来年度の四月よりＩＳ学園での情報収集、および実地訓練の命を下す。

との文字。

いったん紙を置き天井を見上げ目頭を押さえる。

・・・うん？

見間違いだと思い、再び紙を眺める。

だがそこには一語一句さっきと同じ言葉が書かれていた。

状況を整理しよう。

そう思い状況を整理しようとしていた俺の元にとどめの一言が飛んできた。

「では、吉田君。
春からＩＳ学園で他国のＩＳ、特に第三世代ＩＳの情報収集、および学園内での授業一環を受けることを命じます。
敵、書いてあったとおり、ＩＳ学園に入学できなかった場合、我社との契約は満了となるのでそのつもりで。
授業と一緒に一般常識を習ってくるといい。
目上の者に対する言葉遣いと言うものを。」

そう言ってオッサンたちは席を立った。

冗談じゃない。
俺がここで学んだことは飛び級して大人の時間のつぶし方と娯楽だけ。
基礎学力は中学生レベルで止まってるんだ。
そんな事を考えていると、役員の一人が振り返って話し始めた。

「今日から受験日まで、起動および稼動実験は全て中止だ。
その代わり起きている時間以外は全て学業に費やしてもらうつもりだからよろしく。」

そう言って役員の全てがいなくなった。

ヤッベ・・・
予想していなかった事態にしない事態に、大至急ベニーに連絡を取る。

「どうだった?順調に話は進んだかい?」

当然ながら俺の置かれている事態を知らないこの男に俺は泣きつくしかなかった。

「ベニー・・・」

「なんだい?」

お互いにしばらくの沈黙があったあと、俺は恥ずかしい気持ちを抑えながらこういった。

「日給一万で俺に勉強教えてくれ!」

この発言により、俺は起動訓練そっちのけで、受験勉強にいそしむことになる。

受験日までは後一月。
間に合うかどうかはまさに神のみぞ知るところである。

受験

受験当日がやってきた。

運がよければ受かるであろうと言うレベルにはなれた。
普通レベルの公立高校なら合格できるだろうというレベルに。
当初の『全くお話になりません』レベルに比べたら飛躍的な躍進だろう。

ベニーに頼んだ勉強は一日で終了した。

忘れていたんだ。

あいつが、あんな変人でも『天才』の分類に入っていることを・・・

「なぁ、ベニー、ちょっとわからないんだけどさ・・・」

そう言って問題をベニーに見せる。

「何？
どこが？」

そう言って問題を見せて、わからない部分を指差すと、

「あぁ、そこの答えはｘ＝２／３」

そう言って答えをすぐに導き出してくれた。

「そうか、じゃぁ、それはどんな式を使って解くんだ？」

そう聞いたのが食い違いの始まりだ。

「式？
何言ってるんだ、ダッチ？」

そう言って唖然とするベニー。

「何って、この答えを出す式だよ。
途中式無いとわかんないだろ？」

そういうと、ベニーは言った。

「問題です。
１＋１＝？」

そういわれたので、

「２」

「途中式は？」

「・・・ないだろう。」

「そういうことさ。」

そう言って勉強机に向かっている俺から離れていくベニー。

・・・あれ？

あいつ、この前受験は大変みたいなリアクションとらなかったか？
新たな疑問に頭を悩ませていた俺には答えが出せなかった。

ベニーにとって大変だったのは答えを出すことではなく、途中式を書くということ。

答えだけならすぐに導き出せても、それを導き出す過程が無ければ点数が貰えないということが多々ある。

ベニーが受験を嫌っていた理由はそれだった。

彼にはその途中なんてものが無く、すぐに答えが浮かぶのだから。

感じ方はまさに人それぞれである。

そんな天才の教え方では、頭は凡人の俺は理解できるはずもなく、仕方ないので他の研究員達に下げたくない頭を下げ、勉強を見てもらった。

基礎教科のテストが終わり、次のテストはＩＳの基礎知識のテスト。
これは問題なかった。
伊達に一年以上研究所で稼動実験をやってたわけじゃない。
基礎はできていたので、何の問題もなくそのテストは終えることができた。

そしておそらくここでしか行われないであろうテストが行われた。

実践テスト。

教師を相手にＩＳでの対戦を行うというもの。

俺の実力は一年以上動かしてきたが亀の歩みのような進歩しか見られていない。

大丈夫かよ・・・

そんなことを思いながらテストが始まる。

3分後。

そのテストはあっさり終了した。

俺の惨めな惨敗という形で。

本来の受験日が過ぎたというのに俺一人の為に入学試験をやってくれたあたりは、旭日重工の力の大きさを感じた。

だが、受かるかどうかは俺次第か・・・

全てのテストを終えたので帰り支度をし、さっさと帰ろうと待っていた車に乗ろうとしたとき、突然呼び止められ、試験官をしていた女性に大き目の封筒を渡された。

「何です、これ？」

そう言ってそれを受け取る。

「確認してください。」

そう言われたので封筒を開ける。

そこにはあっさりとこう書かれていた。

【合格通知】

それを見た瞬間その試験官を見た。

「さっき終わったばっかりですよね？
もう結果が出るんですか？」

そう聞くと、

「あなたのような特異ケースをいくつもの団体が取り合うという形を回避するためです。
本校の生徒は在学中、いかなる組織、団体、国家、に本人の同意無く帰属しません。
まぁ、あなたの場合はすでに属している団体があるようですが、あなたの存在が世に知れれば他の団体もあなたや、もう一つの特異ケースを狙って動く団体同士の、無益な抗争が起きる場合が想定されます。
それを避けるためのものだとお考えください。
あなたたちの意思を尊重するための権利だと。」

確かに、その権利があるなら俺がＮｏといえばそこで旭日重工との付き合いもおしまいにできるわけだが・・・
それは無いだろうな・・・
今から再就職先探すのも面倒だ・・・

そんな事を考えていると、試験官の女性は背中を向けて去っていった。

それにしても、意思の尊重ね・・・

そんなの今更どうでもいいんだけどな・・・

そんな事を思いながらも、とりあえず今後も旭日重工から給料がもらえることにホッとして研究所に戻る車に乗った。

卒業

三月の頭、俺はある場所に向かう車に揺られている。

高級車で、何と後部座席は向かい合っているというセレブ使用。

ただ面白くないことがあるとしたら向かい合っている面々が、俺のSPだと言うことぐらいだろう。

そんな文句を言う俺の格好は新調したキートンのスーツにサングラス。

そして頭には金髪のズラ。

俺はいつからこんな怪しい格好をしないといけなくなったんだろうか。

そんな事を思いながら、楽しくない車内でタバコを口にしながら目的地に向かって揺られてゆく。

目的地に到着したのは9時半を廻っていた。
すでに目的地ではあることが行われていた。
その目的地と、あることとは・・・

『では次に、来賓の方々から祝辞を・・・』

目的地に静かに入り、そんな言葉を耳にする。
そんな言葉を吐く名前も覚えていないような人物がいた。
誰だっけあれ？
そんな事を思いながら体育館の壁にもたれかかった。

俺の目的地は一年半程過ごした中学校。
今日はその卒業式だ。
俺はあれ以降転校と言うことで処理された。

あの場にいた面子には、

『国の重要物品にあのような暴挙をしたんです。
これぐらいのことを黙っているだけで何のお咎め無しなんですから、
その辺理解していただけますよね？
もちろん、監督不行き届きの指導者の方々も？』

そういう大人の対応で沈黙させたらしい。

全く、大人ってのはみんな・・・

頭を抱えそんな昔のことを思い返していると、来賓のどうでもいい祝辞が終わり、いよいよ卒業証書授与の段階に入る。

一人、また一人と名前を呼ばれ、席を立つ。
全員が賞状を取りにいくのではなく、クラスの代表が形だけ受け取り、後でクラスで個別に配る形をとるらしく、名前を呼ばれてその場で立ち上がる同級生だった者達。

その中には何人か憶えのある名前ももちろん呼ばれた。

『・・・佐々原宗平・・・』

そう呼ばれ、

『ハイ』

その場を立ち上がるかつての友人。

妙な気分だった。

本来いるべき場所を眺めているというこの環境が。

全員の名前が呼ばれ、授与式は終了した。

もちろん、俺の名前が呼ばれることは無かった。

だが、それでもその場にいることで俺も何かを卒業した。

そんな気分だった。

式が終わり、俺は何故か校長室に招待された。

旭日重工からの事情を伝えられていたようだ。

もちろんＳＰ付きその招待を受けることに。

そして通された席にはもちろん校長がいて、

「ようこそ、いらっしゃいました。

ささ、どうぞ、吉田様。」

そう言って自分の１／４程度の年齢の俺に様なんて言葉を使ってくる。

こういうのが性にあわねぇんだよな・・・

そんな事を思いながら席に着いた。

それからは退屈なもの。

校長がただの何百人の内の一生徒のことを、さも私は君の事を知っていました、っと言った感じで話をすること３０分。

鬱陶しくなったので黙ってタバコを取り出し、火をつけた。

「～～～で、ですね・・・

あれ・・・？

吉田・・・さん？」

言葉に詰まる校長。
そりゃそうだろう。
教育者の立場にある人物だ。
未成年のこの光景を見たら注意と言う正常なリアクションをとるのかと思いきや、

「いや、さすが。
もうすでに立派な大人でいらっしゃる。」

その言葉に一気に苛立ちが限界を超えた。

黙って席を立ち、ＳＰに向かって一言。

「帰るぞ。
これ以上その親父を俺に近づけるな。」

「わかりました。」

そう言って俺は校長室を後にする。
その後ろでは何か言っている声が聞こえるが、無いものとしてそのまま帰ろうとしたが、トイレに行きたいと本能が叫んだ。

ＳＰ達は校長の足止めに忙しいだろうからと、黙ってトイレへ。

トイレの扉を開けたとき、そこには数人の生徒がいた。

胸には花が付けられ卒業生なのだろうとわかる。

そしてその中の一人に友人だった者がいた。

「ハハハッ、そんなわけ無いじゃんっ！」

そう言って笑っていた佐々原。

身長はあまり成長しなかったらしい。

俺のほうが大きい。

声は、ちょっと太くなったか？

顔は・・・変わらないな。

そんな事を思いながらその数人とすれ違い小便器へ。

生徒達が俺の格好を見て何か話している。

「マジかよ・・・

外人じゃねぇ？」

「何でこんなところに？」

そんな事を話している中、佐々原だけが黙って俺のほうを見ている。

気付くはずが無い。

身長も伸びて顔つきも変わった。

声も出していない俺のことなど。

だが、佐々原は何かを口にしようと、こっちに向かって言葉を吐いた。

「あの・・・」

そういった瞬間、

【卒業生の皆さんは正面玄関に集合してください。
繰り返します、～～～】

その放送がかかり、

「やっべ、行こうぜ。」

「そうだな。
ほら、ササヤン、行くぞ。」

そう言って同級生に連れられていく佐々原。

正直ホッとした。
あの場で何か言われても俺は何も言えなかっただろうから。

ゆっくりと手を洗い、廊下に出るとそこには何故かＳＰが待ち構えていた。

「お一人で行動なされないようにお願いします。」

そう釘を刺された。

「すいません・・・」

そう言って俺は来客用玄関に向かう。

その脇で大量の生徒達がはしゃいでいる姿をただ眺めるしかできなかった。

そしてそのまま車に乗り、研究所に帰ることに。

これで春からは高校生か・・・

節目の一つが終わったことに何故かホッとした。

ここに来て初めて学生らしい何かをした気がしたのかもしれない。

その日はそのまま眠りにつき、いつのもの日常を入学日まで繰り返すこととなる。

卒業（後書き）

やっと、一年半が終わります。
流れとしては一気に行き過ぎたように気がしますが、大丈夫だったでしょうか。
一年半の流れは終わりますが、もう少し、過去ではないですが、時間軸が動かない話が続きますがお付き合いください。

ここが最後の分水嶺

そこは、月明かりだけが照らす世界。

そこにあるものは壊れてしまった建物に車、おもちゃに破れた衣服等、まともなものなんて何もない世界。

そんな世界で俺は目を覚ました。

「何だよ、ここ・・・」

そんな言葉を口にしながら周りを見渡す。

人の気配は感じない。

ここがどこなのか、記憶をたどると不吉な言葉が思い浮かんだ。

「・・・なんだ、俺は死『んじゃいねぇよ。』」

ビクッ！

突然聞こえた声に、思いっきりビビッた。

その声が聞こえたほうを振り返ると、そこには人影が。

ゆっくりと俺に近づいてくる。

緩い月明かりに照らされ、俺に近寄ってくる人物は、衣服を身に着けず、全身は包帯でぐるぐる巻きで、腰には何丁もの拳銃をぶら下

げている。

逃げ・・・ても無駄そうだ。

相手の所持品から逃走意欲が失せたので相手が近づいてくるのをただじっと待った。

「なんだ、逃げねぇのか？」

そう言って声をかけてくるミイラ男。

「・・・」

沈黙で返事を返す。

「っち、面白くねぇなぁ・・・
この前まで逃げてばかりいたくせによぉ・・・」

そんな事を言いながら壊れた車のボンネットに腰を落とすミイラ男。

ちょっと前？
俺のことを知っている人物か？

ミイラ男の正体を考えていると、

「そんな考えなくったっていいさ。
どうせ、すぐいなくなる。」

そう言ってどこから出したのか、酒瓶を口にする。

「飲めよ。」

自分が飲んだ酒瓶を俺に向かって突き出してくる。

とらないと・・・

視線がどうしても腰の拳銃に行ってしまう。

しぶしぶ受け取りその酒を口に入れる。

それが喉を通り過ぎ、体の中に入ってきた瞬間、

ッ！！！

「ゴホッ、ゴホッ・・・
ウゥエエエ・・・」

あまりの気持ち悪さに吐き出した。

「ハハハッ！
どうした？
そいつはつい最近までお前の中にあったもんだ。
不信感、恐怖、拒絶、嫉妬に嫌悪。
他にもいろんな物で熟成された、まだ若いがこれからビンテージものになろうって酒だぜ？
そいつを吐き出すなんて、勿体ねぇことするんじゃねぇよ。」

そう言って吐いている俺を見ながら嘲笑するミイラ男。

これが、俺の中に・・・？

言ってることがよくわからなかった。

何でそんなものがあるんだ？

牛乳を拭いた雑巾をうんと臭くしたような匂いの液体の入った瓶を見る。

そこには銘柄が書かれていた。

Ｓｅｒｉｏｕｓ　ｃｒｉｍｅ

【大罪】

と。

そして製造年月も書かれていた。

そこにあった数字は、まだ最近のもので、ここ数年のもの。

それを眺めている俺に向かって近づきながら話し始めるミイラ男。

「まだまだどんどん熟成されて、とんでもねぇ酒になってくれると思うぜ？

どう思うよ、生産者としてはよ。」

そう言って俺の肩に手を回す。

その手を払いのけ、ちょっと距離をとる。

「何だよ、邪険に扱うなよな・・・」

そう言って払われた手を軽く振って面白くないといった感じだろうか。

「・・・何がしてぇんだよ?」

「ハァ?」

ミイラ男に、銃をぶら下げているような奴に向かって雀の涙ほどの勇気を振り絞って声を上げる。

「何がしてぇんだよ!
俺にこんなまずいもん飲ませて、一体どうしようってんだ!?」

その一言を言うだけで、肩で息をし、足はがくがくと震える。

「・・・チャンスをやるよ。」

ミイラ男はそう言って左手を後ろに回すと、またしてもどこから取り出したのか、新しい酒瓶を取り出した。

「今その手に握ってるモンを飲めば昨日までと同じ特別だが、クソみたいな人生を。」

そう言ってさっき飲まされ、捨てようと思えばいくらでも捨てられたのに今でも俺の手にある酒瓶をさす。
そして今度は左手に握った酒瓶を振りながら俺に話す。

「こいつを飲めば、お前は特別じゃなくなる。
親にも受け入れてもらえるかも知れねぇし、同年代の友人なんてのも今からつくれるかもしれねぇ。」

今手に持っている酒瓶の効果を俺に説明するミイラ男。

「時間はそんなにあるわけじゃねぇから、すぐに決めてもらうぜ。どうする？
これがてめぇの今後の人生をてめぇで決められる、最初で最後の選択だ。」

そう言って俺に選択を迫るミイラ男。

ミイラ男の言葉の意味を理解したとき、俺はこの選択の重要性を理解した。

ＩＳを動かせるという特別でいるか。

ＩＳを動かせるという特別を捨てるか。

この『特別』をどうするかを選ぶことができる、最初で最後の選択であるのということに。

選択と日常と

選択

それはとてもたくさんあって、誰にでも、いつ、どこにいてもできる行為である。

大切な事は、その選択の中にある重要な選択を誤らないことである。

俺は今、とても重要な選択を迫られているのだろう。

今後の人生を大きく左右する選択。

その選択肢を聞いたとき、俺はすぐに行動に出る。

ミイラ男の持っている酒瓶に手を伸ばす。

「寄こせ。」

そう言って手を出した。

ミイラ男は少し間を空けて俺に酒瓶を渡す。

「後悔はしないか？」

右手に酒瓶を受け取った瞬間、そう問われた。

あるわけが無い。

とっくに俺の答えはとっくに決まっているのだから。

その問いに答えることなく俺は行動を起こす。

片手の酒瓶を思い切り地面に叩きつけ、残ったほうの酒瓶を口元に持っていき一気にのどに流し込み、意識がそこでぶっ飛んだ。

気が付くとそこはさっきまでと違い目が痛くなるような白色の部屋。

あまりの眩しさに目をつぶるだけではなく、手で光を遮ろうとするが腕がやけに重かった。

そりゃそうだ。

俺の腕には何か乗っていたのだから。

何が乗っているのかとまぶしくてろくに見えもしない瞳を俺の腕の上のものに向ける。

それは俺の腕を枕にし、

長い髪を束ね、

人の腕に顎鬚を押し付けて眠る、

変人だった。

「・・・キモチワリィ！」

そう言って腕を思いっきり引き抜いた。

その衝撃で変人は体制を崩し床に落ちた。

触れられていた腕をシーツでぐるぐる巻きにして変人に話しかけた。

「気持ち悪い事するなよ、ベニー。」

そう言って落下した変人の姿を覗き込むと、打ち所が悪かったのか、床の上で悶絶していた。

ご苦労なことだ。

変人も起き上がったところで用件を問いただす。

「で、何似合わない事してんだ？」

そういうと、ベニーは開口一番俺に文句を言ってきた。

「ダッチ、君僕のレヴィに何したの？」

そういうベニーは椅子にもたれかかり、腕を組んでやけに面白くない、といった顔をしている。

何をしたって・・・

あぁ・・・

「悪い、ロマン使ったときにぶっ壊れて・・・」

言い訳を言おうとした瞬間、

「そんなことじゃない！」

そう言って俺のベットを蹴って揺らした。

「僕が言っているのは、何でレヴィがコアに組み込まれているのか、って事！！！」

そう言って不機嫌さが増した。

・・・何のことだ？

「悪い、何言ってるのかさっぱりわかんねぇ。わかるように説明してくれねぇか？」

そう言って俺もベットに胡坐をかいて話を聞く。

トゥーハンドはロマンでぶっ壊れたらしい。
そりゃそうだろう。
機能が自爆だったのだから。

ただ、銀の福音はそれでも落ちなかったそうだ。
エネルギー状の翼が威力を落としてしまったらしい。
海に向かって落ちる俺を仕留めようと向かったときに、あの馬鹿が颯爽と現れて一撃で落としたらしい。

つくづくできすぎた話だ。
面白くなかったので胡坐に頬杖をつきながらその話を聞く。

本番はここからだ。

白人のときと同様、ＩＳ学園側には有無を言わさず、俺の身柄を拉致。

そのまま病院に搬送したらしい。
なんとヘリを使ったそうだ。
無駄遣いが好きな会社だ。

トゥーハンドはＩＳの外装がぶっ壊れても待機状態を維持していたらしく、それだけで役員達は充分だといった顔をしたらしい。

待機状態でいられるってことはコアが機能しているってことだ。
ただでさえ貴重なコアを、こんな出来損ないが道連れにするってのは面白くなかったんだろう。

他の研究員達もその報告を聞いたときはホッとしたらしい。
だが、ベニーは気が気じゃなかったらしい。
何でもベニーの可愛い作品、俺の足長おじさんであるレヴィが無事かどうかがわからなかったのだから。

レヴィにインストールしたといっても、外装がぶっ壊れたような状態では正常に動作するとは限らない。
何らかのバグが生じているかも。

それの確認をするために機材一式を手配して俺の病室に殴りこんできたらしい。

こいつらしい。
そんな事を思いながら話の続きを聞く。

検査の結果、装備一式が全滅。

それを知ったとき、少しへこんだらしい。

せっかくここまで成長したレヴィがイってしまったのだから。

だが、そのときＩＳコアに繋ぎっぱなしにしていた機材が驚きの文字を表示したらしい。

【コアのＶｅｒ，Ｕｐが完了しました。
Ｕｐ内容は以下の通りである
・インストールプログラム、レヴィをコアプログラムとして保存しました。】

とのことだ。

それだけのことを語るのに実に2時間。

こいつの話がどれだけ脱線し、よくわからないところで力説を始め、全て話してもらってやっと事態を理解した。

自分のプログラムを改変し、コアにプログラムを保存されたことが面白くなかったと。

・・・どぉ～～～～でもいいわ！

無言でベニーに枕を投げつける。

「何するんだよ、ダッチ！」

枕をどけて俺に文句を言うが、文句を言いたいのは俺のほうだ。

「うっせぇ。
俺がそんなの触れるわけねぇだろ！

俺の2時間返せ！！！」

そう言って俺は俺の日常に無事帰還した。

向き合う勇気

病室でしばらく無駄にしてしまった時間について議論した後、いくつか疑問に思っていたことを口にした。

「なぁ、アレからどれくらい経った？」

そういわれてベニーは少し考えてから思い出したかのように携帯電話を取り出した。

そしてカレンダーを俺に見せてくる。

「今日は確か・・・ここ。」

そう言って俺に見せた日付は八月の十三日だった。

・・・月が変わっている。

俺の額からは静かに脂汗が流れる。

決して勉強ができるわけではないのに一月以上も勉強が遅れていることに危機感を感じた。

「ベニー、俺の退院っていつだ？」

そう言って次の疑問を問いかけると、

「早ければ明日にでも。

でもダッチ、ここの治療費は君持ちって事になってるからね。」

そう言って俺に封筒を見せてきた。

クソッ、何で今回に限って。

そんな愚痴を心の中で言いながら封筒の封を破る。

一月ぐらいなら保険適用されて、せいぜい・・・

そう思い封筒の中の明細の金額を後ろから数えた。

・・・０００００００円也

うん？

しばらく目を閉じていたから視力がえらく落ちたようだ。

ゼロの数がぶれて見える。

目頭を押さえ、もう一度後ろからゼロの数を数えた。

・・・４０，０００，０００円也

その明細を眺め、しばらく呆然とした。

ありえねぇだろ！

「ベニー、俺に一体どんなが治療が施されたんだよ？
アレか？
俺は体のほとんどが機械に改造されたのか？
足の裏からジェット噴射で飛べるとか、膝からミサイルが出るとか・・・
奥歯を噛めばとんでもなく早く動けるとか、そんな治療をしたのか？」

金額の多さに同様を隠せなかった。

ありえない。
一月の入院、治療費じゃない。

慌てふためく俺に向かってベニーは冷静に言った。

「ダッチ、自分が最先端医療の恩恵を受けたって言うのに、それに文句を言っちゃいけないよ。」

そう言って俺をトイレまで引っ張っていくベニー。
別にトイレに行きたいなんていってないんだが。
流しの前まで行き俺の背中を押して鏡の前に立たせる。
そこにはいつもどおりの顔があった。
「・・・なんだよ。
俺の顔なんか見たって治療費は変わらないだろ?」
そう言って鏡越しにトイレの入り口にいるベニーに文句を言った。
「ダッチ、君自分が何をしてここに運ばれてきたか憶えてないの?」
軽くため息をついて俺にそう言って腕を組む。
俺も馬鹿じゃない。
そんなことは憶えてる。
自爆したから・・・
そう考えても答えが出なかった。
「・・・こんな高い治療金額を請求される覚えは無いな。」
そう言うとベニーは、
「君、?度の火傷だったんだよ?
感覚もあって傷跡が残らないように治療するのにどれだけお金がか

かるか知ってる？
普通の治療じゃ無理なんだから・・・」

そう言って深くため息をつくベニー。

よくわからなかったので後で調べよう。
とりあえず、ひどく金がかかっても仕方ないということだけはわかった。

「で、俺が金を払うものはこれだけか？
てっきりＩＳ（あれ）の修理代も一部負担かと思ったんだが？」

そうたずねると、

「そこはあの暴走を起こしたアメリカとイスラエルに請求するらしいよ。
世界で二人しかいない男のＩＳを破壊したってね。
それぐらい払えって会社が請求してるらしい。」

そうか。
それなら治療費も請求して欲しかった。

今から抗議したら一緒に請求してもらえるだろうか？

そんなことを考えながら自分の病室に戻る。

ベットに胡坐をかいて考えた。

俺がこんな目にあったのはあの馬鹿の騒ぎに巻き込まれたからだ。

御礼はしないとな・・・

機会があれば何か奴にしてやろうと思いながら、新たな疑問をベニーに問いかけた。

「なぁ、トゥーハンド直るのっていつだ?」

最近はいつも胸元にあったものが無いので少し物寂しい。

「夏休みが終わるころには直ってるはずだよ。
それまでは少し大人しくしていることだ。」

そう言って椅子にもたれかかるベニー。

まるで俺が何かしでかしたかのように言ってくれる。
失礼な、まだ大したことはやってない。

そんな事を考えながらため息をつく。

俺の選択は間違ってない。

そんな事を思いながら、飲んだ酒瓶の中身を思い出す。

俺が飲んだのは『特別』で居られる酒。

受け取った酒瓶は匂いも嗅がずに叩き割った。

今更そんな選択肢を与えられたことに腹が立ったからだ。

現状に不満は無い。

それどころか色んな物から開放された感じがして割りと好き勝手やっていられる今が楽だった。

唯一つ、胸に引っかかっているものがあるとしたら、『あいつ』のこと。

それだけが引っかかった。

言われたこと、俺がしてしまった事。

この二つがどうしても引っかかった。

だが、今なら・・・

そう思って思い返すのはこの病室に入ることになった原因の行動。

俺はあの時逃げようと思えばいくらでも逃げられた。

でも、

初めて、

自分の意思で、

あの場に留まり、

何とかしようと思えた。

俺はあの時、逃げなかったじゃないか。

そう、今なら・・・

引っかかるものを少しは軽くできるかもしれない。

そう思いベニーに頼みを持ちかける。

「ベニー、頼みがある。」

そう言うと、ベニーはいつの間にかゲームを始めている。

「ちょ、えっ、何？」

こいつのゲームをやりながら体を揺らす癖は相変わらずだ。

そんな事を思いながらゲーム機を取り上げた。

「何するんだよ、ダッチ！！！」

子供じゃないんだから、そんな事を重いながらベニーに頼みごとをする。

「頼みがあるんだ。」

「治療費の肩代わり以外なら。」

そう言って俺の取り上げたゲーム機に飛びついてくる。

それをかわして頼みごとを続けた。

「明日、俺退院するから、花を買ってきてくれないか？」

そう言うと、ベニーは俺を哀れそうに見る。

「ダッチ・・・
そんなに退院祝いが・・・
何がいい？
バラ？
チューリップ？
ハイビスカス？」

口元を手で押さえながら俺から視線を逸らす馬鹿野郎。

「菊がいい。」

そういった時、ベニーの体が止まった。
そのまま俺に向かって視線を向ける。

「ダッチ、君・・・」

そういうベニーにさらに頼み物を追加した。

「後、俺の部屋からスーツ一式。
後線香と、ライター。
あっ、ネクタイは黒で頼むぞ。」

そう言ってベニーに頼み事を追加した。

逃げまくったからな。

これからはちょっと正面から受けてみるか。

そう思い明日の退院後に行く場所のことについて考えた。

新たな一歩、それを追う影

車に揺られて二時間ほど。

どれだけ振りになるのか、再び緑に囲まれたこの道を歩こうとしている。

前回と違うことがあるとすれば、墓地に向かう石畳の道が少し整備されていた事と、俺の身長が伸びたこと。

更にあげるとしたら今回の同伴者がベニーではなく、ＳＰ４人だってことぐらいだろうか。

俺には茶髪の鬘とサングラスを用意され、口にタバコをくわえながら石畳の道を歩く。

すれ違う人達には怪しい一行にしか見えなかったことだろう。

墓地が近づくにつれ、足は自然と重たくなる。

それでも逃げずに、ちょっとだけ向き合ってみようと思ったから、足を止めずに歩いた。

途中で数組に抜かされながら、俺は二度目となる、石柱達の集合住宅にお邪魔した。

柄杓に手桶、花を持って目的地まで。

その目的地が見えたとき、思わず身を翻した。

俺以外の人達が、目的地で手を合わせていたからだ。

少し時間を空けるため少し離れた木の下で新しいタバコに火をつける。

黙って待っていたとき、同伴した団子四兄弟の一人の馬鹿がこう言った。

「強制退去させましょうか？」

そう俺の耳元に囁いてきた馬鹿。

その馬鹿の耳元に囁き返した。

「お前を強制退去させるぞ？」

そう言って、馬鹿に向かって親指で首を掻き切るジェスチャーを見せた。

「し、失礼しました。」

こんなところで非常識な発言はやめてほしい。

そんな事を思いながら先客を眺めている。

どういう関係の人達なんだろうな？

男女数人の集まりだったそれを見ながら、家族？

親戚か？

友達とか？

そんなことも考えたが、話しかけるだけの勇気は持ち合わせていなかったので、先客達のご帰宅を黙って待った。

１時間ほど経っただろうか。

墓の周りの掃除まで綺麗にやって、先客達は帰っていった。

それと入れ替わり、今度こそ目的地の前に立つ。

ＳＰは下がらせた。

さすがにちょっと居てほしくなかったから。

お参りの正しい作法なんて知らないから適当にやるしかなかった。

石柱に水をかけ、花を立てる。

線香に火をつけて黙って手を合わせた。

これだけのことをやるのに二年近くかかった。

とんだ臆病者だ。

手を合わせて何をすればいいのか考えた。

考えたが、なかなか思いつかなかった。

ゆっくりと頬を汗が流れる。

タバコを取り出して、黙って火をつけてしばらく石柱をしゃがみながら眺めていると、自然と口が開いた。

「別れ際に、あんな風に訳わかんねぇ事言って去るのって、死亡フラグって言うらしいな。」

もちろん返事なんかあるわけは無い。
それでも一人で話し続けた。

「愛だとか、他人がどうとか、魔法とか。
今聞いたら恥ずかしい事ばっかりだ。」

そう言って石柱に向かって微かに笑う。

煙を吸い込んで続きを話した。

「でもよ、最後に言われたことだけはちょっとだけわかった気がする。
『ロック』、俺・・・
好きな奴ができた。
まだ何もはじまっちゃいないけど。
それでも、今、そばにいたいと思える奴ができたってことだけは言っとく。」

どんな言葉を口にしてもそれはただの独り言にしか過ぎない。

石柱を眺めていると、あっという間にタバコが自らを燃やし短くなっていく。

頬を伝う汗の量も増えてきた。

ゆっくりと立ち上がり、石柱を見ながら心の中でこう言った。

『また、来るわ』

石柱に背を向けてゆっくりと歩く俺にＳＰ達が集まってきた。

俺と同じペースで歩くＳＰ達。

その中の一人が何かに気付いたのか、突然あるものを出してきた。

「これを・・・」

そう言って俺に差し出してきたものは、真っ白なハンカチだった。

それを渡されて気付いた。

頬を伝っていたのは汗ではなく、俺の涙だったという事に。

クソッ

黙って受け取り、さっきよりも早足で来た道を車に戻る。

そんな春の背中は小さかったが、ＩＳを動かせるようになってから、

それが一番大きな背中だった。

春が墓参りを終えてから一時間ほどした位だろうか。

ある男の姿が、春がお参りした場所の前に立つ。

「あれ？
遅かったかな？
あんどぉ～～さ～～ん～～
春居ないんだけど～～？」

そう言って、周りを見渡しながら来た道からやってくるもう一人の男を呼んだ。

その男が近づいてくるまでに、持ってきた箱からあるものを取り出し、口に運ぶ。

「知りませんよ。
あなたが、ドーナッツ食べたいって急に言わなければ会えたと思うんですがね？」

そう言って春が時間を潰していた木の下に、安藤と呼ばれた人が座り込んだ。

「そう言われても、初めて見たお店だったんで、つい寄ってもらいたく・・・」

そう言いながらドーナッツを口に運ぶ男。

「それでも２０個は買いすぎでしょ？」

そう言う安藤と呼ばれた男の手にはドーナッツのテイクアウトの箱が。

わがままを言った男の手にはすでに1つ、2つしか入ってないドーナッツの箱があった。

「えっ？
まさか、僕一人で食べるわけ無いじゃないですか？
お供え物ですよ。」

そう言って安藤の下へ向かい、そのままドーナッツの箱を持っていく。

そして向かう先はさっきまで自分が立っていた石柱の前。

「はい、どうぞ。
春がお世話になったお礼です。」

そう言って墓石の前にドーナッツの箱を置いた。

「もういいですかねぇ。
暑くてたまんないんですけど。」

そう言ってスーツの胸元を崩して手で顔を扇ぐ安藤。

「えぇ、もう行きましょうか。
春も居ないことだし。
じゃぁ、『岡島さん』。
今までお疲れ様でした。」

そう言って石柱に、まるで別れ際の友達に手を振るかのように手を振って離れていく男。

さぁ、これからどう遊んであげようかな♪

そんな事を考えながら自分が乗ってきた車に向かって歩いていく男。

その足取りは、家に帰って早くおもちゃで遊びたい子供と同じものだった。

新しい事は他にも

新学期が始まった。

あの墓参りの後、もしやと思って学園寮に戻ってみると部屋の机の上には案の定と言うべきか、とんでもない量の『夏の友』が置かれていた。

夏休みの残りは約三週間・・・

俺に夏休みは無かった。

旭日重工の起動実験をキャンセルしてもらい、俺は部屋にこもって一人夏の課題の処理に追われた。

新学期が始まり、教室に入った俺をクラスの全員が顔面蒼白で出迎えた。

完全に死者として扱われていたらしい。

後で調べたが、？度の火傷とは相当ひどいレベルのものだったらしい。

治療費で俺の貯金がほとんど吹っ飛んだのも仕方ないと涙を呑んで受け入れた。

もちろん治療費はアメリカ、イスラエルにＩＳの修理代と一緒に請求中である。

そんな顔色の悪いクラスの連中を無視して自分の机に座ったとき、あの美味しいとこ取りの熱血馬鹿がやってきた。

「吉田・・・
いや、春っ！」

わざわざ言い直して俺の机の前に立つ熱血馬鹿。

「・・・」

頬杖をついてその言葉を無視していると、俺の顔を無理やり自分のほうに向ける馬鹿野郎。

「これからは、お前がどんな風に居ようと俺は真正面からぶつかっていくからな！」

そう言って俺に言い放った。

俺の顔を掴んでそんな台詞を言うものだから・・・

「えっ！？
どういうこと？
織斑君・・・
そういうこと！？」

「誰かっ！
カメラ！！！」

「萌えっ・・・
いえ、燃えるわッ！！！」

ｅｔｃ・・・

と、大変騒がしい空間になってしまった。

その手を払いのけ、

「うぜぇよ・・・」

そう言って教室から出ようとしたとき、

「よし、全員、新学期の挨拶が始まるぞ！
馬鹿者以外は全員出席しろ。」

そう言って暴君の登場によって俺はその場から逃げられなくなった。

新学期の挨拶と言うのはどこも同じようなもの。
校長のクソ長い話で始まり、クソみたいな言葉で終わる。
それだけだと思っていた・・・
「では次に、生徒会長から、生徒の皆様への報告があります。」
そういわれたとき、頭に浮かんだのは？マーク。
何故このタイミングで？
そんな事を考えていると、
「えぇ～、始めてましての人も居ると思うんだけど、めんどくさい前置きは取っ払って本題へ。
今度の文化祭について、ひっ・・・・・・・・・・・・ぅじょうに、重要なお知らせがあります。
女生徒のみんな、耳の穴を急いで掃除しなさいっ！」
そう言って少し間をおく生徒会長。
見た目は綺麗だが、なんだろう・・・
俺が苦手な奴のにおいがする・・・
充分に生徒の注目を引き付けたところで、案の定と言うべきか、とんでもない爆弾を放り投げてきた。
「単刀直入にいいます。
今度の文化祭、一番になった出し物には、景品として、男子生徒を

プレゼント。
この意味、わかるわよね♪？」
そう言って無駄にウインクをかましてくれる生徒会長。
数秒の沈黙の後、全校集会の会場はアイドルのコンサートホール顔負けの熱気に包まれた。

「「「「「「「「「「ワァッァァァァッァァァァァァぁーーーーーーーーー」」」」」」」」」」
その光景をただの騒音と、黙って会場から退場しようとしたとき、
「そこの天然記念物君？
まだ話は終わってないわよ？」
そう言って俺のほうに向かって声を飛ばしてくる生徒会長。
決まりだ。
この女は暴君よりも厄介な存在。
マリーアントワネットだ。
誰かが革命を起こさないと、こいつをとめることはできないだろう。
本気でそんな事を本能が感じた。

利益と報復と

そのフランスの残念な王女はこう言った。

「せっかく男子が居るんだし、クラスだけでその存在を愛でるのは不公平でしょ？」

そう言って手に持っていた扇子を開いた。

そこには『人類皆平等』と書かれていた。

・・・バカバカしい。

その光景を無視し、俺はその場を跡にした。

教室に戻り、俺は窓の外を眺めているが、クラスの馬鹿達が文化祭について真剣に議論を繰り広げる。

「だから、そこは織斑君の魅力を生かした・・・」

「ちょっと待ってよっ！
吉田君だって・・・」

そんな事を繰りかえしていた。

授業はどうした？

そんな事を思っているとどこかの馬鹿がこういった。

「あの・・・
せっかく織斑君と、吉田君が居ることだし・・・
その・・・
二人に執事を・・・」

その一言にクラスの女子全員が食いついた。

全く話を聞いていなかったが、目の前にでかでかと『執事喫茶』と書かれればいやでも目に入る。

それを眺めること数十秒。

俺の頭に『金』とあの熱血馬鹿への『報復』と言う文字が浮かんだ。

クラスの女子達がいろいろ意見を出す中、俺の閃きが物申した。

「おい。」

そう言って黙って立ち上がる。

その光景に教室は静まり返る。

この男が動けば全てが無に帰す。

そんな感じがしたからだ。

だが、今回は違った。

「俺に考えがある。」

その一言に教室が唖然とした。

まさか、吉田春から否定以外の意見が出ると思わなかったからである。

「どうせやるなら、他のクラスにはできないことをやろう。

そう。

執事喫茶とメイド喫茶を合体させるんだ。」

そういったときクラスの時は止まった。

吉田にそんな趣味があるとは・・・

そう思ったからだ。

だが吉田からの言葉は続く。

「勘違いするなよ馬鹿ども。
メイドの格好をするのはお前らじゃない。」

クラスの面子を馬鹿呼ばわりしてさらに言葉を続ける。

「メインは執事喫茶だ。
もちろん給仕の姿は燕尾服。
だが、一人だけそれとは違う格好をしてもらう。
誰だかわかるか？」

クラスがざわつきだす。

誰が？

一人だけ執事ではなくメイドの姿をする人物が思い浮かばなかった。

「俺たちのクラスに入るだろう？
この学園で一番注目を集める人物が？」

そう言って熱血馬鹿に視線を向ける。

その視線の先にクラス全員が視線を集める。

「・・・えっ？」

その視線の先の人物は間抜けな声を上げて自分の置かれている状況を理解したようだ。

「あの織斑千冬の弟だ。
顔も似てないことは無い。
女装させればあの織斑先生のメイド姿に似せることが可能だとは思わないか？」

その言葉にクラスが沈黙する。

そしてざわつき始め、その後に起こる歓声。

「ちょっ、春っ・・・！」

馬鹿の言葉を無視して俺は言葉を続ける。

「そしてだ。
午前中は執事姿。
午後からはメイド姿。
その二つの旨みを混ぜ合わせるとどうなる？
この二つを楽しめるのはおそらくこのクラスだけだと思わないか？
入場の条件として、このクラスの出し物に投票する券を要求すれば、このクラスが一番になることは間違いないだろう。
さらに、入場者限定で後日、織斑の執事&メイド姿のピンナップ写真の販売。

もっと言えばバラの写真ではなく写真集の製作を新聞部と提携して作成。
これで間違いなくこのクラスが一番になれる。
さらにメリットを言うならお前達はここで働いている間ずっとあいつの執事&メイド姿を眺められるわけだ。
損はあるまい？」

その言葉にクラスが湧いた。

そのとき春の頭に浮かんだのは、

馬鹿ばっかりだな。

それと同時に浮かんだのは織斑に対する臨海学校での報復だ。

女装姿。
そんなめでたい格好は、人生でもそんなに経験する機会は無いだろう。
まさか、こんなに早く臨海学校での報復、その機会がやってくるとは・・・
そんな事を考えていると馬鹿が言葉を口にする。

「ちょっと待てよっ！
それなら春だって・・・」

そう言葉を口にする馬鹿に、

「心配するな。
お前は当日、『おはよう』から『おやすみ』までをフォーマルにサポートする執事。

俺は『おやすみ』から『おはよう』までをフォーマルにサポートする執事だ。
役割分担は完璧だ。」

そう馬鹿に言ってやった。

数秒、その言葉を聞いて馬鹿が言葉の意味を理解したらしい。

「それって、お前何もしないってこと・・・」

その言葉を最後まで述べさせず、俺は言葉を口にする。

「馬鹿言うな。
皆が前日安眠できるように目に見えない気配りをするのが俺の仕事だ。」

そう言って、ありもしない自分の仕事をでっち上げる。

あとするべきことは、自分の思うように事が進むよう、この場を収めること。

「どうだ?
これならお前達に損、いや、得しかないだろう?
他のクラス、部活にこいつを持っていかれてもいいのか?」

その言葉がとどめの一撃だった。

「「「「「賛せ〜〜〜〜〜いっ!!!」」」」」

馬鹿を御するのはたやすい。

もちろん写真集の売り上げは俺の懐に入るように新聞部と交渉する必要があるが、たいした問題はないだろう。
新聞部等は目の前のスクープ写真が取れれば満足するだろう。
利益はほとんど俺の懐に入る。

この学園の生徒からいくら巻き上げることができるか。
その時はそのことしか俺の頭には無かった。

釈迦の手の平

馬鹿達はこのクラス以外の連中もそうだったらしい。

俺が発案した意見をどこから聞きつけたのか、どのクラスも自分のクラスの出し物、部活動での出し物が適当なものになった。

焼きそばにたこ焼き、綿アメｅｔｃ・・・

どうやら全校生徒がこのクラスの出し物を見に来るようだ。

そう考えると笑いが止まらなかった。

いったいいくら稼げるだろう・・・

バラの写真、一枚５００円として、写真集は一万円として・・・

それに全校生徒の人数、＋αで教師が居るとなると・・・

もう笑いが止まらなかった。

どうしてくれようか。

ただそれだけが楽しみでしょうがなかった。

ただ、頭の片隅にわずかに過ぎるのは俺の格好。

この流れだ。

この流れのテンションなら俺の分の燕尾服も用意しかねない。

それだけが唯一の不安要素だった。

その発案をしてから数日。

各クラス、各部活動がそれぞれ文化祭の用意をする中、俺は自分の仕事を全くしないで他のクラスの様子を覗きに行った。

どこのクラスか？

そんなこと聞くまでも無い。

俺が好きな奴のクラスへ。

他の奴が何と言おうと知ったことではない。

自分の気持ちをそのまま伝えることにもはや抵抗は無いのだから、何の抵抗も無く他のクラスに入る。

「おい、警・・・
あいつはいるか？」

そう他のクラスの連中に尋ねる。

その言葉を聞いた生徒はそいつを呼び出した。

クラスの何人かが羨ましそうにその光景を眺めているが春にはどうでもいい。

「ちょっと、何よ！？」

そう言って自分の作業を中断されたことに不満をあらわにする。

「いや・・・
文化祭、空いた時間に一緒に見て廻らないかと・・・」

そういった瞬間、クラスからスピーカー、アンプからＭＡＸのボリュームで声が響き渡った。

「「「「「キャッァァァッァァァッァァァァァァァァァッァ！！！！！」」」」」

たかが学園祭。
されど学園祭

男子が二人しかいない学園でその言葉は勝者にしかかけられない言葉である。

その言葉を聞いた警報機は・・・

「・・・暇だったらいいわよ・・・」

そう返事をした。

以前なら絶対に聞けない言葉だっただろう。

だが、福音の事件以来、彼女も春のことを意識しないわけではなかった。

その言葉に、

「「「「「「うらやましいいいいーーーーーー」」」」」」

そう言って他のクラスの連中は自分達の製作していた衣装、備品を引き裂いた。

だが、俺にはその言葉で充分だった。

最初は全く勝ち目の無い勝負だったんだ。

それが、希望が見えなくも無い言葉を与えられた。

それだけで充分だった。

「じゃ、当日暇になったらまた来る。」

そう言ってそのクラスを後にした。

自分の目的を済ませ、いざ自分のクラスに戻ると、そこには自分で対処するのもめんどくさい光景が広がっていた。

「一夏さん！
さぁ、この服に袖を通してください。」

そう言って熱血馬鹿にメイド服を着せようとする白人。

「一夏、大丈夫だよ。
きっと似合うから！」

そう言って白人の後ろで一緒に走り回るデュノア。

「嫁よ。
私がタキシードを着てやるから。」

そう言って二人の後を追う独眼竜。

「そこまでにしろ。
一夏にこれ以上そんなに似合う服をを着せるな！」

そういう掃除用具。

このクラスに正常な頭の持ち主はいないのか・・・

いままであの熱血馬鹿に同情したことはないが今回だけは同情した。

そんなを考えていた。

～生徒会室～

「お嬢様。
例のクラスがこちら計画に支障をおよぼす恐れのある計画を立てているようですが・・・」

そう言って現代のマリーアントワネットに報告する女性。

「大丈夫よ。
どんなことがあろうと私の計画に狂いは無いわ。」

そう言って手に広げた扇子に『我の手の内』とかかれた文字があっ

た。

罪悪感、それに迫る闇（前書き）

お久しぶりでございます。
短いですが更新させていただきます。

それでは、どうぞ。

罪悪感、それに迫る闇

～？？？～

私はどうしてしまったのだろう・・・

私の好きな人は一夏のはず・・・

そう自分に言い聞かせる。

夏休みも一夏と何日かは一緒にいられたし、ちょっとは自分をアピールできたはずだ。

それなのに・・・

そう思うが、頭を過ぎるのは臨海学校での出来事。

あの衝撃をくらい、その場所を見たときに視界に入ってきたのは爆炎だった。

そこから落ちていくあいつを私は動くことすらできず眺めていることしかできなかった。

落ちていくあいつを追って翼を広げる福音を、突然現れた一夏が倒したかと思ったらそのまま落ちていくあいつを一夏が抱きかかえて旅館に戻って・・・

私たちはセシリア達と一緒に帰ったからちょっと遅れたけど、旅館に戻って目に入ったのは惨状でしかなかった。

それはかつて人だったものと思われる肉の塊。

皮膚は焼け爛れてほとんど無い。

頭に髪など生えておらず、全身が筋肉むき出しに出血が止まらない状態。

「春、オイッ！
死ぬんじゃねぇ！！！」

一夏はそう言ってずっとソレに向かって声をかけ続けていた。

自身がソレの血で汚れるのを厭わずに抱きかかえて声をかけ続けていた。

私たちはその光景をただ黙ってみていることしかできなかった。

もう、完全に諦めていた。

私のせいだ・・・

罪悪感が私の中に湧き出す。

私が、あの時あいつの言うことを聞いていたら・・・

その罪悪感だけが私を支配していた。

そのせいだろうか。

せっかくの夏休みのイベントも今ひとつ楽しいものではなかった。

そしてさっきの言葉。

絶対そのせいだ！

そう自分に言い聞かせる。

自分の行動がただ、罪悪感から来ているものとして処理しようと必死だった。

～ある戦場～

そこにはかつて地上を蹂躙した兵器、木々をその体で押し倒し、その砲塔から発射するもので多くの命を散らした体が無残にひっくり返っている。

そして空を支配していた兵器が無残な姿で地面に突き刺さっていた。

「ねぇ、姉様。
これでここの制圧は充分だと思うんだけど？」

そういう銀髪の少年の体には地球最強のパワードスーツ。
そしてその両手には少年が扱うのには不釣合いな斧が握られていた。

「あら、駄目よ姉様。
もっと徹底的にやらないと。」

そう言って返事を返す少女の体には少年と同じく地球最強のパワードスーツと、その体に不釣合いな巨大な銃が握られていた。

その周りは惨劇そのものだった。

かつて人だったもの。
そして、名前があったであろう金属の塊達がその原型を留めずその周りに散乱している地獄絵図だった。

「でも、もう相手がいないよ？」

そう問いかける少年に、

「そうね・・・
どうしようかしら・・・
あら？」

その後の行動を悩んでいた少女の表情が一変する。

「ねぇ姉様。
ちょっと面白い仕事がありそうよ？」

そう言って少年に話しかける少女。

「なんだい、姉様？」

そう言って少女の近くに身を寄せる少年。

「・・・！
へぇ・・・これは面白そうだね。」

そういう少年の顔は屈託の無い笑顔だ。

「でしょう？
この仕事、絶対面白くなると思うの。
受けてもいいかしら？」

そう言って少年に問いかけると、

「もちろんだよ。
でも、今から出発じゃちょっと早いよね・・・」

そう言って顎に手を当て考え込む少年と少女。

「くたばれ、悪魔っ！！！」

そう言って一人の兵士が二人に向かってロケットランチャーを打ち込んだ。

全く動くそぶりを見せない二人にそれは着弾し、爆炎に包まれる。

「・・・ハハハッ！
やった！
やってやったぞ！！！」

そう言ってその爆炎を手放しで喜ぶ兵士。

その爆炎から声が聞こえる。

「ねぇ、姉様、アレで遊んでから行くっていうのはどうかな？」

そう少女が問いかけると、少年は、

「賛成だよ、姉様。
どんな遊びをしようか？」

その声を聞いたとき兵士の時は凍りつく。

「そうね・・・
頭に釘を打つと死んでも脊髄反射で動くって話知ってるかしら？」

そう少年に問いかける。

「へぇ、それは初耳だよ。
ぜひ見てみたいね。」

そう少女に返答した。

そのやり取りを聞いた兵士の顔から血の気は引き、次の瞬間、その場から全力で離れることを選んだ。

「あれ？
逃げていくよ姉様？」

そう残念そうに言う少年に、

「じゃぁ、まずは追いかけっこから始めましょうか？」

そうたしなめる様に言う少女。

その顔は大変楽しそうな顔をしている。

「そうだね、姉様。
なら、アレで遊んでから行こうか。」

そう少女に問いかける少年。

「えぇ、姉様。
充分に嬲ってから行くことにしましょう。」

そういう二人の顔はとても無邪気な笑顔そのものだ。

二人が動いてすぐに聞こえる兵士の悲鳴を止めるものは誰も無く、
ただ二人の楽しそうな声がその戦場跡に木霊していた・・・

男のロマン、それは叶うことの無い理想である（前書き）

前回、更新したら何故か一気にお気に入り登録数が増え首を傾げていますU↓です。
そんなに長くはないですがどうぞ。

男のロマン、それは叶うことの無い理想である

～春～

今日も一日の馬鹿騒ぎが終わる。

自室に戻り、今日の分のストレスを飲み干すため自室に向かい扉を開ける。

「お帰りなさい。
私にします？私に・・・」

言葉を続ける奇怪な生き物を無視して冷蔵庫の扉を開ける。

よく冷えた酒に、よく冷えたグラスを取り出し、氷を入れて椅子に向かう。

「・・・ちょっと。
お姉さんを無視してあっさりと椅子に座るのは反則じゃない？」

そこには『羞恥プレイ』と書かれた扇子が。
その格好は【裸エプロン】だった。

その言葉を無視してグラスに酒を入れる。

ドルンッドルンッ・・・

酒瓶に勢いよく空気が入る音が響く。

グラスに入った酒を一口飲んで奇怪な生き物に向かってやっと口を開いた。

「そういうのは初心な童貞にしてやれ。
俺に効果は薄いぞ、わかったらとっとと出けいけ、このトンチキ女。」

そう言ってタバコに火をつける。

「あら、そうなの？
てっきりただの堅物を演じてるだけかと思ったんだけど・・・」

そういう口元には含み笑いが見える。

「これが演技だってんなら、俺はゴールデングローブ賞を受賞できるだろうな。
とっとと出ていけよ。」

そう言って煙をトンチキ女の方向に向けて吐いた。

「そう言わないでちょっと私の話を聞かない？」

「興味ないな。」

そう言って二口目を口にする。

「そう・・・
ＩＳの操縦技術の向上についてのお話なんだけど・・・」

そう言われて一瞬だが手が動く。

リアクションを隠せなかった。

暴君にさえこれ以上伸びないといわれていた操縦技術についての話だ。

平静を装うのに必死だった。

「・・・それがどうした？

今以上の向上が見えないのに訓練なんか必要ないが？」

そう言って残っていたグラスの中身を飲み干す。

「それが伸びるかもしれないって言ったら、どうする？」

そう言って俺の方を見るトンチキ女。

その口元には『破竹の勢い』と書かれた扇子があった。

それを見た瞬間、一瞬だが迷った。

あの暴君でさえ俺の今以上の向上がないといったというのに、それを覆そうというのだから。

その言葉を信じたいと思った。

だが・・・

「ボケるにはその年齢じゃ早いと思うぞ。
とっとと出て行け。

・・・付け加えよう。

着替えて出て行け。」

何故言葉を付け加えたのか。

あのトンチキ女はそのまま、つまり裸エプロン姿で俺の部屋から出て行こうとしたからだ。

そんな姿を誰かに見られたら・・・

一日で俺はイカレタ性癖の仲間入りだ。

その言葉を聞いたトンチキ女は、

「・・・残念♪」

そう言って浴室の扉を開けて着替えに入った。

それを見届けて二杯目を注ぐ。

今度は一気に飲み干し、天井を見上げて目頭を押さえた。

・・・ッソッ・・・

今更そんな事言われても信じられるわけが無い。

適性の進歩さえ見えないのに今以上に操縦技術の向上なんて・・・

どれだけそうしていたのかわからなかったが、物音がしなかったので新しくグラスに酒を注ごうとして視線を戻すと・・・

「だぁれだ？」

そう聞こえて視界が真っ暗になる。

・・・イラッ

黙って手に持っていたタバコをその視界を遮っているであろうものの近くに持っていく。

「ちょっとっ！」

そう言って視界が開けた。

そこにはさっきまでと全く変わらないものがあった。

「女の子の手に『根性焼き』って、私を傷物にする気かしら？」

後ろから聞こえる声に、

「これ以上いるなら実力行使だ。
とっとと出て行け。」

そう言ってＩＳを展開させる。

「・・・う～ん・・・
まぁ、今日のところは帰りましょう。
でも、気が変わったらいつでも来てね。
手取り足取りナニを取り、お姉さんが教えてあ・げ・る♪」

その言葉を聞いた瞬間、カトラスを抜いて後ろを振り返るがその姿は無かった。

「じゃぁ、続きはまた今度ね？」

そう扉のほうから声が聞こえた。

・・・ありえねぇ。

一瞬で移動しったっていうのか？

人間離れした行動にそのときはただ唖然とした。

さっきまでの苛立ちはその驚きにかき消されていた。

男のロマン、それは叶うことの無い理想である（後書き）

実際にやられたら正直リアクションに困ります。
というか、突っ込めません。

重なる姿

翌日

久しぶりに織斑のデータ収集に向かった。

準備がいろいろあるが、備品の調達は白人が。

衣装の調達は独眼竜がしてくれるということで俺たちのクラスが特にやることはなかった。

時間があればあの馬鹿はＩＳの訓練に時間を費やす。

戦法を変えなければ短時間でガス欠になるということにまだ気付かないあいつの姿を記録しにアリーナに向かった。

だがそこには俺の予想を覆すものがあった。

そこには第二形態移行してから初めて見る姿が。
初めて見たが、その姿に少しばかり驚いた。
結構姿、形が変わるモンなんだな・・・
そんな事を思いながらアリーナ席に座った。
その姿を見ながら思ったのは、まずあの馬鹿が手にもっているものについてだ。
いつもなら常に毒状態になるために展開していたあの剣が、通常状態の剣。
つまり鉄の塊としてその姿をなしていたのだ。
・・・あの馬鹿が自分で気付いたのか？
そう思った。
あいつの戦法は常に単一仕様能力を馬鹿みたいに使用して自分のエネルギーを削りながら相手のエネルギーをそぎ落として勝負を決める、短期決戦決着型だ。
それをしないためには簡単だ。
単一仕様能力をやめ、通常の物理剣で通常状態は戦闘を行い、相手の隙を一気に単一仕様能力で攻める。
そうするだけで一気に戦闘の幅は広がる。
暴君あたりがそろそろ教えるかと思ったんだが、自分で気付いたのなら、馬鹿と言う言葉は外してやろうか・・・
そんな事を考えていた。

その対戦相手は警報機だった。

若干イラつきはしたが、先日の言葉があったのでその席で大人しくその光景を眺めていた。

しばらく戦闘を行っていたが、警報機が織斑の隙を見つけたのか、両手の剣を一つにして投擲を行った。

「あまいぜっ！」

その攻撃を読んでいたと、体をひねりながらその攻撃をかわし、一瞬でその距離を詰める。

早いな・・・

以前より加速力が上がっている。

その光景を眺めながらそんな事を考えていると、織斑の剣が展開され、単一仕様能力が発動する。

「はぁぁぁぁっ！」

剣を一気に振りぬいたとき、警報機のエネルギーは尽きたのか地上に向かって落下を始める。

ガタッ！

体が反応するが今からではどう動いても間に合うものでもない。

落ちていくあいつを織斑が抱えて地面にゆっくりと降下していった。

～一夏～

「大丈夫か？」

そう鈴に言葉をかける。

「大丈夫よっ、いいから、さっさと下ろしなさいよ。」

そう言って俺の腕の中で暴れる鈴。

「わかった、わかったから叩くなよ。」

そう言って静かにその体を地面に下ろした。

「悔しいわ。
まさか、私が一夏に負けるなんて。
あんた、どんなイカサマしたのよ?」

そう言って俺に向かって指を刺してきた。

イカサマなんてしてないんだがな・・・

そんな事を思いながら、この勝負を始める前に言われたことを思い出したのでそれを伝えた。

「ただ、零落白夜を使うことをやめただけだぞ?」

それだけを伝えた。

「はぁ?
それだけであんたが私に勝てるわけ無いでしょうが!
他にはどんなイカサマしたのよ!」

そう言って俺に殴りかかってこようとする鈴の頭を抑えながら思考の迷路に迷い込んだ。

本当にそれだけしかしてないんだけどな・・・

そのとき、俺にその言葉をくれた本人がアリーナに現れた。

～春～

しばらくあいつらのやり取りを眺めていたが、イライラしたのでここからジルバを打ち込んでやろうかと本気で考えていたとき、トンチキ女の姿がアリーナに現れた。

しばらくの間その場から動かず、二人に向かい何かを話しているようだ。

その後ゆっくりと視線を動かしたかと思うと、こっちに向かってゆっくりと手を振って、扇子を広げた。

『論より証拠』

普通だったら見えないような文字の大きさだが、記録するため俺の視界とシンクロしたハイパーセンサーの力でその文字を読み取れた。

そしてそのまま俺に向かってウインクをした。

気にいらねぇ。

面白くなかったので記録をやめ、その場を後にする。

認めたくなかったのだ。

織斑の勝利があのトンチキ女の助言によってもたらされたのは明確だ。

それを証明し、その力を俺に見せ付けた。

その力は確かに証明され、確実なものとなったが、それでも気に入らなかった。

それは別にあのトンチキ女が悪いわけではない。

ただ、俺の知っている男に非常に似ている、他人を馬鹿にしたような言動が気に入らなかったから。

その男の姿が脳裏に浮かんだこともあり、その日は迷わず自分の部屋に戻りシャワーを浴びて酒を飲んだ。

・・・面白くねぇな・・・

そんな事を考えながら明日のことを考えた。

明日は休日だ。

旭日重工に足を運ばなければいけない日だ。

招待状、ベニーにでもくれてやるか・・・

そんな事を考えながら椅子に座りながら俺の意識は夜に解けていった・・・

重なる姿（後書き）

独自解釈が入った回になりました。
公式ではどうか詳しいことがよくわからなかったんですが、ウチの雪片は
展開した状態＝零落白夜
となっております。

いろいろ意見があるかもしれませんがご理解いただけると嬉しいです。
ではまた次の更新でお会いしましょう。

労働は尊い

～研究所～
～春～

アレから初めてまともにＩＳを起動させた。

ＩＳ訓練の授業もあったが、俺は暴君から「強制見学」という処分をくらったのでその身に纏ってすらいなかった。
何故そんな処分をくらったのかと、原因の説明を要求すると、事細かに、嫌味を説明され納得せざるをえなかった。

その原因は、入学からの数ヶ月の間で、
グランドに穴を開け、
アリーナ内の設備をぶっ壊し、
教師からの命令を無視、
極め付けには自爆。

と、行き過ぎた行動が蓄積した結果、一ヶ月間学校内でのＩＳの展開を禁止させられた。

あのトンチキ女の時に起動させたことはばれなかった。
じゃなかったら今頃は・・・

暴君の言葉を無視した俺の無残な姿が容易に想像できた。

「ダッチ、今日は訓練の前にちょっとやってもらいたいことがあるんだけど。」

そう言って俺の近くに寄ってくるベニー。

「何だよ？」

そう言うと、

「非常に不本意ながら、僕の、僕の『レヴィ』がコアに組み込まれてしまったから、ずいぶんと拡張領域に空きができてね。とりあえず実際に触ってもらって、気に入ったのがあったらそれをどんどんインストールしていってもらいたいんだけど、いいかな？」

そう言ってベニーが後ろを振り返ったと同時に格納庫の扉が開く。そこには大量の銃器、弾薬が並べられていた。

「・・・俺に危険物持たせて大丈夫なのか？」

その質問に、

「そこに関しては何のストップもかけられてないよ。ストップかかってるのは他企業からの申請のほうさ。新製品のテストしてもらいたいって言う他企業からの申請を断るのに大変らしい。自社の製品の充分なテストがやっとこれからできるっていうときにそんな申し出受けてる時間はないからってね。」

織斑のバックはあの暴君がいるから企業連中もあまり無茶なアピールはしてこないらしいが、俺の場合は旭日重工に取り入れればいくらでもデータが取れるから遠慮がないらしい。俺に関係ない奴がどれだけ苦労しようが知ったことではないが。

「で、とりあえず片っ端から撃っていけと？」

「そういうこと。
データはこっちで取るから、何も気にせずどんどんやってくれていいよ。」

そう言ってベニーはアリーナから離れていき、データを取るため機材が置かれている別の部屋まで向かっていく。

「片っ端からって・・・
適当でいいか。」

そう言って格納庫から目に付くものを両手に抱えてアリーナの中心まで数往復して運ぶ。

ある程度運び終えたので早速一つ手にとってみる。

今日の仕事の始まりだ。

データを取り終わるころにはすっかり夕方になっていた。

俺の体は非常に火薬くさい。

なんなら俺に火をつけたら爆発するんじゃないかってくらいに臭った。

【お疲れ様。
データは取れたからとりあえずシャワー浴びてきていいよ。
その間にデータを整理して『レヴィ』が気に入ったものを準備しとくから。】

ベニーの声がスピーカーから聞こえたのでその言葉の指示に従いシャワーを浴びにアリーナを後にした。

アリーナに戻るとそこにはいくつかの銃器が並べられていた。

「これが『レヴィ』が気に入った装備。
多分全部はいると思うからとりあえずインストールしといてくれる？」

「あぁ。」

そう言ってトゥーハンドを起動させ、それらのインストールを始める。

「でも、ホントに何で僕の『レヴィ』がコアに？
ダッチ、本当に心当たりないんだよね？」

そう言ってインストールしている俺に腕を組み、首をかしげながら質問を投げかけてきた。

「知るかよ。
ここに来るたびにいつも楽しそうに成長具合見てたじゃねぇか。
なら自爆する前の検査までは異常なかったんだからそこからなんかあったか、自爆に反応して奇跡が起こったとか？」

そう言って一つ目のインストールが終わったので新しいものに手を伸ばす。

「う～ん・・・
奇跡ねぇ・・・
そんな非科学的なものを信じる気は全くないんだけど、他に説明できる要因も今の所無いし・・・
でも、そんなもので納得するわけには・・・」

そう言ってブツブツ何か言葉を口にしている。

奇跡ねぇ。

そんなことが起こるならもっといいところで起きてくれよ。

そう思いながら二つ目のインストールが終わったので三つ目に手を伸ばす。

「・・・あっ！」

「うわっ、なんだい突然？」

俺の突然の声に少し驚いたのか、びっくりした顔で俺の方を見るベニー。

「あ、ワリィ。
一つ特別なことがあったの忘れてた。」

「特別なこと？」

「あぁ、それと今謝っとく。
ワリィ。
だからこの話聞いても怒るなよ？」

そう言って思い出したことをベニーに告げた。

それは海で出会った気○いについてだった。

労働は尊い（後書き）

と、レヴィのことについての説明でした。
まぁ、察しのいい方は気付いていたかもしれませんがそういうことです。

突然理由も無くそんなことが起こる。
まさしくご都合展開！
と言うのはできるだけ避けていきたいのでちゃんとここで説明できてよかったです。

では、また次の更新でお会いしましょう。

・・・と、あの奇天烈な生き物がＩＳを弄ったことを説明した。
その説明の間にインストールは全て終了した。

「ダッチ・・・
僕のトゥーハンドを・・・
見ず知らずの人間に触らせるなんて・・・」

地面に膝と両腕を立てて、マジ泣きするベニーを見て軽く引いてしまった。

「悪かったって言っといただろ。
それに、ワビの品だった用意してある。」

「・・・なに？」

鼻をすすりながら俺の方を見るベニー。
本当ならワビでもなんでもなく、ただ普通に渡すつもりだったがすぐに用意できるのがこれしかなかった為それを謝罪の品として提示した。

「来週、ＩＳ学園の学園祭があるんだけど、その入場チケットを・・・」

そう言うと、

「僕来週海外の支社にちょっと用事があるから一週間いないけど？」

「えっ・・・？」

その発言に硬直する。

「言ってなかったっけ？」

「初耳だ・・・」

その言葉を聞いたときの俺の時は止まっていた。

その様子を見てベニーは、

「心配しなくても、支社に専用機で直接入るから事故にはあわないよ。
って言うか、会社から出る時間が無いって言うか・・・」

そう言って遠い目をするベニー。
その言葉にホッとした。

「そ、そうか・・・
でも何で海外なんだ？」

質問を投げかけると、

「試作機のプログラムを組みに行くんだ。
ここは兵器の製造施設は充実してるけど、機体を組むのに適した施設じゃなくてね。
支社のほうがそういうのは充実してるんだ。
そして、データの流失を恐れて現地で直接プログラムを組んで入力

しろって事になったから一週間は支社に軟禁だよ・・・
生で見てみたかったな。
他国の第三世代ＩＳ・・・」

またしても遠くを見るベニー。
いや、学園祭ではＩＳの起動予定は無いぞ？
そんな事を思いながらもその言葉は言わずに留めた。

「そうか・・・
ならチケットいらないか・・・」

そう言うと、

「何言ってるんだい？
もらえるものはもらうよ？」

当然のような顔をして俺を見るベニー。

「ハァ？
これねぇならいらないだろ？」

「馬鹿なこと言わないでよ。
他の研究員を行かせればいいってだけだろ？
そいつにデータを取ってきてもらえばいいわけだし。」

「いや、この際だから言うけど、ＩＳの起動予定はどこにも無いぞ？」

「何言ってるんだい？
僕が言ってるデータは君のだよ。

学園で君がどんな風に過ごしているのかのデータが欲しいんだ。」

「俺のストーカーかよ。」

「男の尻追いかける趣味は無いよ。
ただ、面白いものが見つかればそれに越したことは無いだろ?」

「面白いことなんてなんもねぇよ。」

「君にとってはね。
ただ、僕にとっては面白いものかもしれないだろ?」

「知らねぇよ。
まぁいいや。
ならチケット後で渡すわ。」

「頼むよ。
ダッチ、僕がいないからって枕をぬらすんじゃないよ?」

「ベニー、尻の穴新しいの一つ開けてやろうか?」

トゥーハンドを起動させ、ベニーにカトラスを向ける。

「要らないよ。
ほら、もういい時間だからさっさと戻って部屋片付けてきてよ。
今日飲むの君の部屋だろ?」

「チッ・・・
その手の冗談はやめろ。
吐き気がする。

俺にその気はねぇぞ。」

そう言ってトゥーハンドを解除して自分の部屋に向かって足を進める。

研究所の俺の部屋は海の前に戻ってから一回も使ってないから掃除しないとちょっと汚そうだ。

自分の為に急いで掃除をしに部屋に戻った。

～ベニー～

できることなら日本で試作機を作りたかった。

それが正直なところだ。

だが、ここには設備が無かった。

ダッチが集めたデータを解析して、支社に送ってそこからＩＳの組み立てなんて手間のかかることをしていることが歯がゆかった。
解析したデータも流出を避けて毎回空輸と言う手間を考えたら苛立ちもする。

だけど、この試作機が完成すればうちでも第三世代の製作が成功したことになる。

データを集めて数ヶ月で試作機の完成までこぎつけられるというのは正直異例のことだ。
ダッチの集めたデータが七、八割。
あの残りはラグーンが記録していた戦闘データのおかげ、といったところだろうか。

あの後回収されたラグーンには六機の第三世代、第四世代のデータが記録されていた。
アメリカ軍より先に回収できたのはよかった。
もしも持っていかれたら取り返しようが無い。
それに機密事項を記録していたなんて事がばれたら国際問題だ。
それが避けられたのは大きかった。

回収したデータのうち、第四世代のデータは正直あまり役に立たなかった。
今のうちの技術じゃ無理だということが一目でわかったから。
そんなものに時間をかけるぐらいなら身近なものに時間をかける。
テストと一緒だ。
解けない問題に時間を費やすぐらいなら、簡単な問題から解いていく。
まぁ、解けない問題とめったに出会わないから、なかなか味わえな

い貴重な体験だったと思う。

今回の出張、一週間ぐらいで帰って着たいところだけど、ちょっと厳しいかも・・・

そんな事を考えながらタバコに火をつける。

煙を吐いて考えるのは別のこと。

『レヴィ』のことだ。

ダッチの話を聞いたときにすぐに誰がトゥーハンドに手を加えたのかがわかった。

今世紀最高の天才。

篠ノ之束。

おそらくその人だろう。

ＩＳの無力化、そして短時間でコアに介入できるような人物はこの天才をおいて他にいない。

煙を吸い込んで思うのは悔しさ。

自分が苦労して組んだプログラムをあれ以上の形で整形し、コアに組み込むなんて事は自分にはできない。

それを、ダッチから聞いた話だとほんの十数秒でやってのけたという、自分を超える天才にただ悔しさだけが湧き出した。

「上には上が・・・

切り替えよう。

自分に能力以上のことを期待するのは無駄なことだ・・・」

自分の上を行く天才に対抗しようとする考えを冷静に鎮め、また別のことを考える。

「誰に行ってもらおうかな・・・」

そう言って考えるはＩＳ学園に行ってもらう人物だった。

ちょっと考えたがめんどくさくなったのですれ違った人に適当に頼もう。

そう考えていたときある人物が声をかけてきた。

「ベニーさ～ん、ちょっとラグーンのことで相談が・・・」

そう言って僕の思考に介入してきた人物のほうを見る。

「・・・誰だっけ？」

見覚えの無いその人物に質問を投げかける。

面倒だ。

彼に任せよう。

「あ、どうもすいません。

自己紹介を。

オレ・・・」

自己紹介を始めようとするその先の言葉を奪う。

「ごめん、僕の頼みを聞いてくれるかい？」

相談を持ちかけてきた人物に頼み事と、ずれた事を平然とやってのけるのがこの天才だ。

「えっ、あぁ～・・・
まぁ、オレにできることなら・・・」

少し渋ったような顔でこっちの頼みを聞いてくれるという相談者。

「簡単なことだから安心していいよ。
来週のＩＳ学園の学園祭に行ってくれるだけでいいんだ。
そこでダッチのデータを取ってきてくれ。」

それを聞いたとき相談者の顔は一変する。

「それはもう、喜んで。」

快く快諾してくれた。

「そう、なら後で部屋にチケット取りに来てくれる？
それまでに相談したいことプリントにまとめといて。
それがこっちの頼みの報酬だから。」

そう言ってアリーナを後にする。

あれ？
名前聞いてなかったけど・・・
それに見覚えあるような顔して無かったかな・・・

そんな事を考えながら自分の部屋に向かう。

今日は一人の晩酌ではなく誰かと酌み交わす酒だ。
久しぶりに味わうそれが楽しみでしょうがなかった。

〜？？？〜

予想外のところで顔を合わせることができそうな事が楽しくてしょうがなかった。

「いったいどんな顔をするだろうね、春・・・」

そう言う顔はとても楽しそうな表情だった。

嫉妬と予期せぬ会合（後書き）

察しのいい方はこの??がどんな人物か予想がついてる人もいるかもしれません。
ですが名前や関係性が明らかになるのは学園祭中になると思います。
ではまた次回の更新でお会いしましょう。

罪と償い（前書き）

タイトルは仰々しいですが、内容はそんなことありません

罪と償い

～学園～
～春～

週が明け、学園祭の前日と言うこともあり、どのクラスもあわただしく廊下を走り回っている。

そんな光景は他人事と鞄に適当に荷物を詰め教室を後にしようとしたとき、

「「「届いたよー！」」」

そう言って数人の生徒が教室に突入して来た。
その手にはダンボールがある。
その周りに集まるほかの生徒達。
すぐにそのダンボールを開け、取り出すとそこには大量の衣類が。
独眼竜の頼んでいた備品らしい。

出ようと思った扉から乱入され、進路が塞がれたので、もう一つの入り口から出ようとしたとき、

「「「届いたよー！！！」」」

そう言って別の奴らが突入してきた。
再び出口がふさがれたので諦めて席に座りなおした。

後からやってきた連中の手にもダンボール。
白人が手配していたという備品が届いたらしい。

楽しそうにダンボールを開ける様子を眺めているとそこにはカップと、ポット。
他のダンボールにはコーヒーミルとミルクと砂糖
さらに他のダンボールには紅茶とコーヒーの缶と瓶が大量に入っていた。

ちょっと気になったのでどんなものがあるのかと覗きに行くとそこには目を疑いたくなるような銘柄が並べられていた。

『ウィッタード』『フォートナム&メイソン』『ディルマ』『W&M』と高級ブランドのものばかりが・・・

それが軽く十缶以上はある。
無駄遣い以外の何物でもない。
軽くめまいがしてきたところに別のものが飛び込んできた。

『コピ・ルアック』と書かれたラベルのパックが瓶に詰められている。

どうしてこう無駄に・・・

目に入ってきたものに愕然としたのでその場に座り込んでしまった。

『コピ・ルアック』最高級のコーヒーだ。
さすが貴族・・・
金の使いどころが一般人とずれている。

たかが学園祭にこんなものを取り寄せるなんて・・・
この備品にかかった経費は白人の自腹にしよう。

そんな事を思いながらカップとポット、コーヒーミルとコーヒーの入った瓶を一つ持ってコンロの前まで移動する。

正しいひき方や入れ方なんかわからないので適当に豆をひいてコーヒーを入れる。

お湯を入れた瞬間教室にコーヒーの香りが広がった。

嗅いだことのあるコーヒーの匂いではなかった。
今までとまるで違う匂いにそのまま口をつける。

・・・

今まで飲んだことのあるコーヒーとはまるで違うが好みの味じゃねぇな。
そう思いミルクと砂糖を適当に足した。
それを飲むとさっきよりもずっと飲みやすいものとなり、旨く感じられた。

「吉田君、ずるいっ！」

そう言われて気が付いた。
周りは囲まれ、逃げ場が無い状態。

「一人で飲むなんてずるいよっ！」

「準備が終わったらみんなで飲もうと思ってたのにっ！」

ｅｔｃ・・・

数々の罵声を浴びせられたところに厄介な奴が現れた。

「あら、この香りは・・・
!!!!
ちょっと、何故あなたがそれを飲んでいますの?」

そう言って白人が俺の目の前までやってくる。

その髪はわずかに重力に逆らっているようにすら感じられた。

「試飲だ。
ブラックよりミルクと砂糖を足したほうが俺の好みだな。」

「そんなことは聞いていません!
それは最初に一夏さんに飲んでいただくつもりでしたのにっ!」

そう言って詰め寄ってくる白人。

「うるせぇなぁ、もう淹れちまったモンはどうしようもねぇだろ。」

そう言ってカップを三度自分の口に運ぶ。

「勝手に飲まないでくださいっ!」

そう言って騒ぐ白人に一人の生徒が、

「セシリア、ちょっと・・・」

そう言って白人の動きを止める。

「何ですのっ？
私は今この無礼者と・・・」

「だから、ちょっと・・・」

そう言って白人を俺から引き離した。
それにつられて周りにいた壁がその話を聞くため同じように離れていく。

残りをゆっくり楽しもうと自分の席に座って高級品を楽しんだ。

～セシリア～

「何ですの？
あの無礼者に自分のした罪の重さを自覚させようと思いましたのに。
」

「まぁまぁ。
そう言わず。
この作戦がうまくいったらセシリアも多分満足するから。」

今にもブルーティアーズを起動させかねないセシリアをなだめ、話をするために集まった目的を話し始める。

「作戦？」

その言葉にセシリアだけでなく、周りに集まった他のメンバーもその先の言葉に興味があるようだ。

「私たちは吉田君が一人でコーヒーを飲んでしまったことが悔しい。
セシリアは吉田君が最初にコーヒーを飲んだことが悔しい。
吉田君はすでにこれだけの人数の恨みをかったことになるよね？」

そう楽しそうに言葉口にする女生徒。

「えぇ。
その償いをこれから・・・」

そう言って身を翻そうとするセシリアの腕を掴んでその場に留まら

せる。

「だから、その償いをしてもらおうよ。
それも、吉田君が嫌がる方法で。」

そう言う女生徒は非常に楽しそうな顔をしている。

「それは何ですの？」

「決まってるじゃない。
明日のイベントに協力してもらうのよ。
そうっ！
吉田君にも執事姿をしてもらうという償いを。」

その言葉を聞いて周りにいたセシリア以外の生徒達が湧いた。

「・・・それがあの無礼者が嫌がる方法ですの？」

その言葉を聞いても今一つのリアクションだ。

「決まってるじゃない！
最近はちょっと近づきやすくなったけど、最初はドライアイスなんて言われてたんだよ？
そんな吉田君が執事姿を好き好んでするとは思う？
否。
彼には暴力に訴えたり、言葉を並べるよりもおそらくこっちの方が効果があるはずよっ！」

そういう女生徒の手はものすごい力で握られている。

「・・・皆さんはそれでいいんですの？」

そう言って周りを見渡すと、

「「「「「それでいこう！！！」」」」」

多数決はとるまでも無いようだ。

「・・・わ、わかりました。

それが効果的だというのならそれでいきましょう。」

話がまとまったのでいざ、無礼者に償いをさせるべく後ろを振り返る。

「あなたに償いの機会を与えますわ。

私の寛大な処置に頭を垂れなさい。

～～～～～～・・・」

ビシッと、目を閉じ、胸に手を当てて盛大にポーズを決めて言葉を吐くその先は、主のいない席と空になったカップだけだった。

「「「「「「えっ？」」」」」」

その光景に周りの生徒はあわてて吉田春の姿を探す。

その様子に気付くことなく自分が思いつく限りの寛大な台詞を並べ続けて話し続けているセシリアに、

「ちょっ、セシリアいつまで話してんのっ？
吉田君いないってっ！！！」

そう言われて目を開くとそこには空のカップだけがあった。

「なっ・・・」

プルプルと体を震わせ、

「あの・・・
無礼者っ～～～～～！！！」

その声は一年生の階全体に響くほど大きな声だった。

罪と償い（後書き）

いかがだったでしょうか？

おそらく流れ的には春の執事姿の流れに・・・

させねぇよ?！

と、作者の独断で白人をさらし者にしました。

私、こういうの好きです（笑）

あ、後私事ではありますがご報告を。

両腕のギプスから開放されました。

後は足が完治するのを待つだけです。

しばらくほったらかしのときがあったりしましたが、これからは更新頻度もあげられる思います。

では、また次の更新でお会いしましょう。

嵐の前の・・・

～春～

コーヒーを飲み終えたので寮に戻ろうと階段を下りていると、

「あっ、吉田君？」

そう言って俺に声をかけてきた人物は、今回の小遣い稼ぎに必要な人物だった。

名前は・・・カメラ女で。

面倒だったので手に持っていたもので適当に呼び名を決める。

「明日のことで話しがあったんだけど、ちょっといい？」

「まぁ、長くなければ・・・
歩きながらでも？」

「全然ＯＫ。」

そう言われたので歩きながら話を聞くことにした。

「で、何です？」

用件を聞いて早く部屋に戻りたかったので単刀直入に聞くと、

「吉田君は執事姿披露しないの？」

その言葉に思わず肩が下がった。
そんなことかよ。
聞かれたことに当然の返答を返す。

「絶対に無い。
用件がそれだけならもう行っても？」

「あぁ、冗談、冗談。
本題は、明日織斑君を撮影する時間なんだけど・・・」

明日の撮影時間をどうするかの相談を３０分ほど聞かされやっと開放された。

「ＯＫ、ＯＫ。
じゃ、午前と午後それぞれ撮影に行くから、織斑君に伝えといてね？
じゃっ！」

そう言って離れていくカメラ女。
あの馬鹿に・・・
面倒だったのでやめようかとも思ったが、

伝えに行くか・・・

あの馬鹿は・・・
馬鹿に報告するために、帰宅の足をアリーナの方に向けて進めていった。

第三アリーナであの馬鹿の姿を確認したとき、会いたくない奴の姿も一緒に確認してしまった。

伝えたらすぐに帰ろう。
そんな事を思って足を進めた。

ピットで座り込んで休憩をしている馬鹿と、その正面に立っているトンチキ女。

「あれ、春。
珍しいな、どうしたんだ？」

視線をこっちに向けて用件を聞く。

俺から接点を持とうとうとしないのに訪ねてきたことが珍しいらしい。

「連絡しておくことがあったからそれだけ伝えに来た。
明日お前のおめでたい格好を撮影する時間は9時半と1時半だ。
その時間は絶対にクラスにいろよ。」

そう言って帰ろうとしたとき、

「・・・わかった、だがそれには条件がある。」

後ろからそんな言葉が聞こえてくる。

「・・・何だって?」

足を止め織斑の方を見る。

「俺と勝負しろ。
春が勝ったらその時間クラスにいる。
俺が勝ったら春、お前も執事姿になれ!」

そう言って指を俺に向かって指してきた。

「人を指で指すな。」

そう言うと気が付いたのか指を下ろした。

「別にやる必要なんて無い。
今からお前の写真が無いと知った生徒は悲しむだろうな・・・
お前はそんな思いをさせるのか?」

「うっ！」

そう言われてたじろいだ。
お人好しのこいつならこう言えばＮＯとは言えないだろう。
第二形態になってからのデータは確かに取りたいが、こんな賭けをしてまでとる必要は無いだろう。
チャンスは今日だけじゃないのだから。

「それと、俺は一ヶ月ＩＳの起動をボ・・・
織斑先生に禁じられているんでな。
それが解けてからなら勝負は受けてやるよ。」

そう言ってピットから出て行った。

そのまま寮に戻ろうとしたとき、後ろから声が聞こえた。

「あら～？
私には何も無いのかしら？」

その言葉に返事を返すと厄介事になると思ったので無視して足を進め、そのままアリーナから出ることができた。

ふぅ・・・

何かしらのアクションがあるんじゃないかと思ったがそのまま出ら

れたことに思わずため息が出る。

何でこんな緊張しねぇといけねぇんだ。

若干の苛立ちをトンチキ女に覚えながら寮に戻った。

部屋で一杯やろうと。

だが、忘れていたことが一つあった。

あの手のタイプは無視されることが一番嫌いなのだということを。

そして、無視されたことの仕返しがあるということを。

風速１ｍ（前書き）

お気に入りに登録してくださっている方が２００名に到達しました！（祝）

ありがたいことです。

楽しんで読んでいただけるようこれからもがんばらせていただきたいと思います。

では、今日の分をどうぞ。

風速１ｍ

寮に帰って酒を飲んでいた。

この時間だけが俺を癒してくれる。

そんな事を思いながら酒を飲み続け椅子に腰掛けたまま意識が酒に飲まれる。

その後に起こったことを俺は一切知らないまま朝を迎えることになる。

目が覚め、歯を磨いてシャワーを浴びる。

いつも通りの朝だ。

クローゼットを開け制服に袖をとうそうと思ったその時、俺の目に入ってきた衣服は制服ではなかった。

びっしりとクローゼットに入っていたのは、右から左まで全て制服ではなく、あの馬鹿に着せるはずの服が詰まっていた。

・・・

黙ってクローゼットを閉めた。

昨日はそんなに飲んでないはずだが・・・？

そんな事を思いもう一度クローゼットを開ける。

そこにはさっきと変わらない光景が。

目頭を押さえて状況を整理する。

着る物が無い。

なら、今日は自主休校と言うことで・・・

そのままベットに向かおうとした時俺の部屋の扉が開いた。

「おはよう♪
今日はいい朝ね。」

そう言って入ってきたトンチキ女。

「知らん。」

そう言って枕を投げつけるが、余裕でかわして俺の近くまでやってくる。

「今日は待ちに待った学園祭よ?
まさか、休むなんてことしないわよね?」

その顔は非常に楽しそうに笑っているが俺にとっては不愉快以外の何物でもない。

「残念ながら体調が悪いんで休む。
わかったらさっさと出て行け。」

そう言ってベットに入ろうとしたとき、

「あら?
今日休むとあの子と一緒に学園祭まわれないわよ?」

そう言われて体が反応した。

そうだった。

約束していたんだった・・・

そのまま言葉を続けられた。

「ドタキャンなんてされたら女の子はがっかりしちゃうと思うけど？
知ってる？
女の子って切り替え早いのよ？
せっかく約束できるまで進展したのに０にしたいのかしら？」

センスを口元に当てて楽しそうに笑うトンチキ女。

・・・

両者が静寂を生んで数秒。
先に動いたのはトンチキ女。

「さらに進展させたいのなら、いつもと違う一面を見せると言うのも一つの手じゃないかしら？」

その言葉に、

「余計なお世話だ。」

そういう春の体はいまだベットに入れずにいた。

「あら？
やってもいないのにそういうのは早いんじゃない？
やってみてからでも遅くないと思うけど？」

・・・

この流れはまずいな・・・

冷静に状況を整理すると確実にこの状況を生んだ人物が容易に連想できた。

こいつだ。

視線をトンチキ女に向ける。

完全に睨む形で。

「いつもと違う一面・・・

そうね。

たとえば執事なんてどう？

彼女に違う一面を見せられると思うけど？

・・・あら？」

そのままクローゼットに歩み寄り扉を開ける。

「偶然ね。

こんなところに執事服が。

どう？

これに袖を通してみたら？」

そう言って俺のベットの上に数点の衣服を投げてきた。

「これは私の勘なのだけれど、今日それを着たら制服も返ってくるんじゃないかしら？

逆を言えば、それを着るまで制服は返ってこない気がするわね。
新品もたまたま、ホントたまたまだけど、入荷がずいぶん先まで無い気がするわ。
まぁ、これは私の勘なんだけどね♪」

非常に楽しそうにそう告げた。

副音声なんてものを使わなくてもこいつの言いたいことは理解できた。

これを着て学園祭に出ろ。

ただそれだけのことにいったいどれだけの所に手を回して準備したというんだ・・・

無駄なやる気に呆れ、もう何も言うことは無い。

「着ればいいんだろ・・・
着れば・・・」

相手にするのが面倒になったのでここらで折れることにした。
これ以上粘ってもいいことはなさそうだ。
それどころか余計厄介なことになりそうな、そんな気がしたから。

「あら？
案外簡単に折れちゃった・・・」

その手にあった扇子を広げ、口元を隠す。
そこにはただ、『残念』とだけ書かれていた。

どうにも相性が悪い。
いや、こいつと相性がいい奴なんているのか？
そんな事を思いながら残念な一日の始まりを迎える。
そう、これはまだ今日という日の始まりに過ぎなかったのだ。

風速１ｍ（後書き）

今後どんどん荒れていく模様です。
お出かけの際には充分注意してください（笑）

と、結局こうなります。

まぁ、相手があの人だと多分誰でもこうなると思うんですけどね（笑）
では、次の更新で

風速３m

～織斑～

カフスボタンを留め、ジャケットを羽織る。

ネクタイを締め、最後に白い手袋に指を通す。

鏡が無いのでどんな感じかわからないが、これで大丈夫・・・か？

そんな事を思っていると、

「織斑く～ん、着替え終わった？」

と部屋の外で声が聞こえる。

「あぁ、今終わったぞ。」

そういった瞬間、教室にいっせいに人の波ができる。

「「「「「キャーーーーーーーーーーーー！！！！！」」」」」

クラスメイト達は朝から非常に元気なようだ。

悲鳴に近い歓声を耳を塞ぎながら聞いていると、

目の端に箒達が見えた。

「何だアレは・・・」

「非常にまずいですわね・・・」

「あれ、今以上に人の目にさらされるんだよね・・・」

「連れ去るなら今しか・・・」

四人で座り込んで固まって、何かぶつぶつ話している。

「どうしたんだ？」

固まっている四人に後ろから声をかけると、

「「「「な、なんでもない（ですわ）（よ）！！！」」」」

と力強く返事を返された。

みんな朝から元気だな。

朝食しっかりとったんだな。

いいなぁ、俺着替えの為にいつもより早かったから朝食食べてないんだよな・・・

ここで簡単に何か食べるか・・・

朝からケーキはちょっと重そうだが簡単に食べれて、高カロリーなものはこれだろうか・・・

今日はきっと大変な一日になる。

自然とそんな気がしたので準備されていたケーキを一つもらうことにした。

「織斑君、紅茶にする？

コーヒーにする？」

鷹月さんが飲み物を進めてくれた。

「えぇーと、じゃぁコーヒーで。」

「わかった。」

そう言ってコーヒーを淹れてくれた。

コーヒーや紅茶に詳しいわけじゃないが、いつも嗅いでいる匂いとはぜんぜん違うのがすぐわかった。

「いただきます。」

手を合わせてケーキとコーヒーを手早く食べ、食べ終わったので手を合わせ、

「ごち・・・」

感謝の言葉を述べようとしたとき、

「「「「「「「「「「キャーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」」」」」」」」」」

廊下から悲鳴が。

クラスのみんなも気付いたらしく廊下の方に身を乗り出す。

そして、

「「「「「「キャーーーーーーーー！！！！！」」」」」」

同じ悲鳴を上げて何人かが倒れた。

何だ？

ちょっと心配になったので廊下を見に行く。

そこで俺は予想していなかった姿を見ることになった。

～春～

部屋で着たくも無い物に袖を通す。

何でこんな・・・

自分の現状に不満をあらわにしながらそのまま服を着た。

後はネクタイを・・・

ネクタイに手を伸ばしたとき、それは横からさらわれた。

「お姉さんがしめてあげる♪」

そう言って俺の首にネクタイをかける。

「このシチュエーションって、漫画やドラマの新婚さんみたいじゃない？」

ぞくっとした。

勘弁してくれ。

このトンチキ女と夫婦？

悪寒が走ったので急いで離れようとしたが、首にかかっていたネクタイをしっかりと掴まれて離れられない。

「そんなに逃げなくてもいいのに・・・

それとも照れてるのかしら？」

冗談を。

「黙って巻け。」

「あら、せっかく和ませてあげようと・・・」

「いらん。」

「冗談の通じない子ね。」

そんなかる口を叩いている間にネクタイはしめられた。

「鏡見る？
こっちで・・・」

そう言ってトンチキ女は俺にその姿を見せようと、洗面所の扉を開け中に入っていった。

俺はそれについていかず、そのまま扉を閉めた。

【あら？】

扉の向こうから声が聞こえる。
その声がリアクションを起こす前にと、急いで部屋を出た。

朝から無駄な体力使わせやがって・・・

そんな事を思いながら肩で息をして寮から学園に向かって歩く。

その途中で、後ろから一人の生徒に声をかけられる。

「あ、織斑君。
おはよ・・・
えっ？」

途中で言葉が詰まった。
今日の出し物を知ってか、執事服の男子＝織斑と言う方程式がそいつの頭にはあったらしい。
だが俺は織斑じゃない。

「あぁ？」

睨む形で声をかけてきた奴を見る。
数秒固まっていたが、プルプルと体を震わせたかと思うと、

「キャーーーーーーーーーーーー！！！」

悲鳴を上げられた。

クソッ

朝からこんな格好を見られたことが憂鬱で、残り少ない体力で教室までの道のりを急いだ。

その悲鳴を聞き他の生徒が集まり、結局教室までその悲鳴がやむことが無かった。

ウゼェ・・・

教室に入って椅子に座って外を見る。

その光景を遠巻きにクラスの連中が見ている。
その視線がウザかった。

「えっ？
吉田君、今日は執事の格好しないって言ってなかった？」

「そのはずだけど・・・
ボーデヴィッヒさんに頼んだ衣装にも吉田君の分は無かったはず・・・」

「まさか、自前？
えっ、まさかねぇ・・・」

「そういう趣味が・・・
いいわ・・・」

ヒソヒソと密談をしている連中の視線はウザかったが面倒なので相手にしない。
朝なので軽く何か容れようと、コーヒーを淹れることとした。

そこにもう一人執事姿をした奴が近寄ってきた。

「春、結局着たんだな。
でも嫌がってなかったか？」

能天気なこいつの相手をしていると疲れる。
無視してコーヒーを淹れる。

「無視かよ・・・

あぁ、ついでに俺の分も入れてくれよ。」

そう言ってカップを出してきた。

そこにお湯を注いでやる。

カップの中身と俺の顔を交互に見て言葉を口にする。

「・・・

これじゃただのお湯だろ？」

「自分で淹れろ。

カップを暖めてもらえただけでも感謝しろ。」

そう言って自分の席に着いた。

これから長い一日の始まりか・・・

ため息をつきながら窓の外を見る。

しまった、わざわざ教室（ここ）に来る必要は無かった・・・

屋上でサボっていれば・・・

あのトンチキ女にはこれを着ろと言われただけだ。

行事に参加しろとは言われていない。

今からでも、とその行動に出ようとしたとき俺の前には昨日無視した白人が仁王立ちしていた。

「あら、吉田さん。

これから始まるというのにどちらへ？」

顔は笑顔だがその裏にはとんでもない怒りの炎が見える。

「ちょっと用事が・・・
心配するな。
お前達の手を煩わせるようなことはしない。」

そう言ってその横を通り過ぎようとしたが、腕を掴まれた。

「逃がしませんわよっ！
昨日だけでなく、今日も勝手に一夏さんのコーヒーを・・・」

言葉を口にしながら徐々に俺を掴む手の力が増していく。

「悪かった。
もう飲まないからその手をイテェ、イテェッ！」

すでに俺の我慢できるレベルの限界を超えた握力で腕を掴んでくる。

こいつはゴリラやオランウータンの類か？
そんな事を感じながら抵抗すると、

「セシリアがこのコーヒー用意してくれたんだって？
さっきも思ったけど、このコーヒー美味いな！」

その言葉を聞いた瞬間俺の腕を掴んでいた類人猿は一瞬でその姿をその声の主の横へ。

「そうですか？
よろしければ取り寄せいたしますが？」

「いいのか？
じゃあ頼む。」

「はいっ！♪
他にもいろいろあるんですのよ？
例えば・・・」

さっきまで人の腕を握りつぶそうとしていた奴と同一人物とは思えないような声で馬鹿と会話をしている。

その変貌振りに若干引きながらも腕をさすりながら屋上を目指そうとしたとき・・・

【これよりＩＳ学園文化祭を始めます。
皆さん楽しみましょう。】

と放送がかかった。
その瞬間、

ドドドドドドッ！！！

とんでもない音が廊下に響く。

『はーい、押さないでくださーい。
順番に並んで～。』

『サプライズで執事がもう一人増えましたんでお楽しみに～！』

『クールなあの御方が今日は皆さんに尽くしてくれますよ～。』

廊下からはもう不吉な言葉と気配しか感じ取ることができない。

駄目だ。

もう逃げ場は無い・・・

現実を受け入れるため、飲み残したコーヒーを飲み干して自分に最早逃れられない現実を受け入れさせた。

諦めろ、と。

風速３ｍ（後書き）

今後風速はさらに増す予定です。

風速１５ｍ

こうして学園祭は始まった。

始まってから十分ですでにクラスの前には長蛇の列が。

この学園にいる連中は馬鹿ばっかりか・・・

そんな事を思いながらコーヒーを飲む。

本日二杯目のコーヒーだ。

次は紅茶にしようか・・・

そんな事を思いながら二口目を口に入れる。

「春、そんなところで休んでないでお前も働けよ！」

馬鹿にそう言われた。

俺の今の光景を見ればそう言いたくなるのかも知れない。

教室の隅の席でコーヒーを飲み、新聞を広げている。

完全に休日の朝の過ごし方だ。

見ている場所は株式のコーナー。

あの治療費の額を見たら今ある蓄えでは今後何かあったときに対応しきれない事態があるかもしれないと思い、資産運用に手を出そうと思ったからである。

だが、知識が無いので下手に手を出すのは・・・

と真剣に悩んでいると、

「吉田君、指名だよ！」

デュノアに新聞を取り上げられ対応を迫られた。

この格好のせいで何故かクラスの出し物に強制参加させられた。

この光景をあのトンチキ女はどこかで笑っているのだろうか・・・

そう考えると苛立ちが膨らんだ。

しぶしぶそこの席に行くと、

「あ・・・

あの『執事のご褒美セット』で吉田君を・・・」

と注文した生徒が挙動不審で俺を待っていた。

「なんだそれは・・・

企画提案だけでなく、しっかりと内容も考えておくんだった・・・

で、何をするんだ？」

教室を慌しく動き回るクラスメイトを捕まえて声をかけると、

「えっ、あっ、う～ん・・・

特に決めてなかったんだよねぇ・・・

お嬢様にお任せするわ。

最初の注文だからこれが基準になるんじゃないかしら？

あっ、は～い、すぐに伺いま～す。

と、言うわけで何でもご注文くださいませ、お嬢様。」

そう言って俺ではなく注文した生徒に向かって頭を下げてその場を去っていったクラスメイト。

こっちに丸投げかよ・・・

無計画さに思わずため息が漏れる。

「えっと・・・
じゃぁ、吉田君にこれを・・・」

そう言って別で注文していたケーキを差し出してきた。

何だ？
俺に食べろと？
首をかしげながらケーキにフォークを入れる。

「食べさせてほしい・・・
です。」

その言葉に他の客が食いついてしまった。
一斉に視線が集まる。

「ハハハッ」

思わず笑ってしまった。

その後に出る言葉は、

「貴様はアホでございますか？」

と、自分でもおかしなことを口走っているとわかっていたがこの言葉が口から出た。

その言葉に落ち込む生徒。

その光景を見ていたクラスメイトが、

「かしこまりました、お嬢様。
それではお口をあけていただきますか？」

と突然数人がかりで俺の体を拘束し始めた。

「おい、ちょっ・・・
この手を放せ・・・」

拘束を解こうと暴れるがさすがに五、六人で体を抑えられてはいくら暴れてもその拘束が容易には解けなかった。

そのまま俺の手を注文を頼んだ客の口に運んでいく。

「ちょっ、放・・・」

俺の抵抗もむなしく、

「はい、あ～ん」

そう言って俺の手をそのまま口に入れた。

「いかがですが？
お嬢様？」

口に入れられたものを味わったのだろう。
ゆっくりと時間をかけて租借した後、笑顔でこういった。

「美味しかったです。」

「それはよかった。
では続きを・・・」

そう言って再び俺の手を勝手に口元に運んでいく。

「ちょっと待て・・・
わかった。
自分でやるから・・・
放、放せって。」

もう今日という日を諦めたんだ。
そこに無理やりなんて、ストレスのたまることをされてたまるか・・・
開放された手をしぶしぶ客の口に、自分の意思で運んだ。

何でこんな・・・

そんな不満を思いながら口の中にケーキを入れる。

「・・・美味しいですっ！」

さっきと同じ言葉を笑顔で俺に言ってくる客。

これが一日・・・

改めて今日という日の厄介さを理解した。

そしてその後、俺と馬鹿に『ご奉仕セット』の注文が殺到したのは言うまでも無い。

風速１５ｍ（後書き）

この後、さらに風速は上がる模様です

風速６０ｍ

時間はあっという間に過ぎ、例の時間がやってきた。

「はい、ど～も～！
新聞部のエース、黛薫子が本日の面白・・・
ゴホンッ、貴重な写真を撮りにうかがいました～！」

咳払い一つで本音を無かったことにし、この教室にやってきた。

もうそんな時間か・・・

そう思って時計を見ると撮影の時間きっかりだ。

「いや～、当日にサプライズなんて、吉田君はギャラリーのあおり方上手ね～。」

そう言って俺のそばに寄ってきてひじで俺の体をつつこうとするカメラ女。

半歩身を引いてそのアクションを避けた。

「あら？」

当たると思っていたものが空振りしたため予想外、といった声を上げる。
俺に余計なアクションを起こすのはトンチキ女だけで充分だと、余計なコミュニケーションを回避し本題に取り掛からせる。

「さっさとあいつの写真撮って帰ってもらえます？」

そう言って仕事に取り掛からせた。

「帰ってって、相変わらずのクールっぷりね・・・

そ、それじゃぁ織斑君、早速写真撮りましょうか。

自然でいいから。

カメラとか意識しないでいいからね～♪」

そう言ってカメラのシャッターを一気に押し始める。

その動きは機敏で軽快だ。

アレを気にするなって言うほうが無理だろ・・・

その光景に半ば呆れながら、指名された席に向かい、今日何度目かわからなくなった、鳥の雛への餌やりの業務を開始した。

その光景を逃さず、ひそかに撮影した新聞部のエースのガッツポーズに気付かず、その写真が春の知らないところで高値で取引されることになるとは考えもしなかった。

「ふぅ・・・
執事姿はこんなところかな？
じゃぁ、次はお昼に。
今日一番の面白・・・
ゴホンッ、貴重な写真を撮りに来るからまたヨロシク～！」

そう言ってカメラ女は去っていった。

「大丈夫？
一夏？」

デュノアに声をかけられている馬鹿は心なしかぐったりしたような表情をしている。

それもそうだ。

３０分間シャッターの音は鳴り止まず、それ＋生徒の視線にさらされたんだ。

馬鹿には少しきつかったことだろう。

充分働いた。
ちょっと休憩だ・・・

そう思い勝手に休憩を開始する。

今度は紅茶を飲むか・・・

違うものが飲みたくなったので、勝手に紅茶を淹れ、一服する。

これでタバコが吸えたら文句なしだな・・・

そう思いながらふっと窓の外に目をやる。

ずいぶんと賑やかだな・・・

いつもなら見かけないであろう企業関係者の姿や、私服姿の部外者の姿が見える。

その光景を眺めていると、

「ちょっと一夏っ！
何なのよこの行列はっ！
うちのクラスにお客が来ないんだからっ！
どうにかしなさいよっ！」

ブッ！

その声が聞こえた瞬間飲んでいた紅茶を噴出した。

ゲホッ、ゲホッ・・・！！！

予想外の来客に思わず咳き込んでしまい、

「ちょっ、大丈夫、吉田君?」

「どうしたの急に?」

クラスの連中が俺の周りで声をかける。

何しにきたんだよ?

むせながら考えるとそれはすぐにわかる問題だった。

チッ・・・

馬鹿の姿を見に来たのか・・・

面白くない。

そう思ったのでその来客の姿を見ることなく、気を紛らわせる為、

残りの紅茶を飲み干して、やけくそ気味に鳥の餌やり業務に戻った。

だが、そのやけくそ気分すら余裕で吹き飛ばす、とんでもない客が

颯爽と俺の指名客として現れた。

「お嬢様を待たせるなんて、ダメな執事ね♪
お仕置きしちゃうわよ？」

そう言って扇子を開く。
そこには『大人の？』
と書かれていた。

机の上にあったカップをお嬢様の頭上に上げ、迷うことなく上下を逆転させた。

バシャ！

液体は重力に従い椅子や床と感動の対面を果たすがそこにお嬢様の姿は無い。

「もう、濡れちゃうでしょ？
それとも、濡らしたかったのかしら？
いやん？」

その声はさっきまで座っていた椅子からではなく、俺の真横から聞こえた。
その姿を見ると、たたんだ扇子を口元に当て、楽しそうに笑っているトンチキ女。

「何しにきやがった？」

そう言ってもう一つの椅子に座った。

「あら、何しにって決まってるじゃない？
からかいに♪」

イラッ

完全に人をおちょくった態度に今日一番の苛立ちが。

「だって、散々私のこと邪険に扱ってたじゃない？
だ・か・ら、ちょっと意地悪したくって♪」

そう言って楽しくて仕方が無いといった笑みを俺に向ける。

「もう充分だろ？
とっとと帰れよ。」

手で払い、帰れというジェスチャーとセットで言葉をくれてやると、

「帰ってあげてもいいけど、その前に私にもケーキ、食べさせて頂戴♪」

さっきと変わらない笑顔でそう言ってきた。

チッ

確実に聞こえる舌打ちをして、さっさと済ませて帰らせようと思った。

「なら、さっさと座れよ・・・」

そう言って自分が座っていた椅子をトンチキ女に提供しようと、立

ち上がろうすると、

「いいわよ、そこに座ったままで。」

そう言われた。

こいつ、濡れた椅子に座りたいのか？

さっきひっくり返した紅茶で濡れた椅子に座りたいとは、変人の考えることは理解しかねる。

そんな事を考えていると、

「よいしょ、っと」

そう言ってトンチキ女は座った。

だがそれは椅子にではない。

俺の膝の上に・・・

「な『『『『『『キャーーー

「あら失礼な！
私はからかってるだけよ？
あなたと、周りのみんなをね♪」

そう言って余裕のウインク。

プチン・・・

「わかった・・・
食わせてやるから目を瞑って口あけろ・・・」

「あら？
ずいぶんと素直になっちゃって・・・
もう少し楽しませてくれるかと思ったんだけど・・・
仕方ないわね。
はい、あ～ん♪」

口を開け、ケーキが入ってくるのを待っている。

くれてやろう・・・

ケーキにフォークを入れる。
いや、入れるという言葉では正しくない。
ケーキにフォークを突き刺した。

そして、カットされたケーキ、丸々一つを雛鳥の口にそのまま突っ込んだ。

「！！！」

慌てて俺から離れたトンチキ女。

さすがに驚いたらしい。

しばらく口元を扇子で隠し、珍しくその目に余裕の笑みは無い。

「・・・はぁ、はぁ・・・
やってくれるじゃない・・・」

そう言って俺を見る顔は笑顔だが、さっきまでとは違い、間抜けにも顔にクリームを付けたままで、余裕を見せていた笑顔とは明らかに違った感情がこもった笑みだ。

「食わせてやっただろ?
だから帰れ。
すぐ帰れ、今すぐ消えろ。」

そう言って席を立ち、トンチキ女の横を通り過ぎる。

「乙女にこんなことしたんだから、責任は取ってもらうわよ・・・
私の企画でたっぷりとね・・・」

ゾクッ

寒気がし、トンチキ女を見るがそこにはすでにトンチキ女の姿は無かった。

今、すっげーヤバそうな台詞残していかなかったか?

その言葉の意味を考えようとしたとき、

ガスッ！

「ッテェ！
何だ、お・・・い・・・？」

後頭部を鈍器で殴られたような痛みで後ろを振り返ると、

「サボってないでさっさと掃除しろ！」

独眼竜が俺に銃を突きつけながら命令をしてきた。

俺の姿はホールドアップ状態。
目の前に拳銃が向けられていたら当然そうなる。

「掃除って、なんのだ・・・
ですか？」

思わず敬語で質問を投げかけた。

「決まっているだろう。
貴様が汚した床と椅子のだ。
さっさとやれ。
回転率が悪くなる！」

拳銃はさっきよりも俺より近い距離にある。

こんなに早く距離が縮まれば楽なんだけどな・・・

と、余計なことを考えながら返事を返す。

「・・・わかったよ・・・」

武力に屈服し、大人しくその命令を聞き入れる。

銃を突きつけられて掃除をさせられるといったシュールな光景に、そのときクラスにいた人達は笑いをこらえるのに必死だった。

余談

そのことを後から知った黛薫子はその光景を撮り逃したことを、血の涙を流して悔しがったという。

中継リポート

～春～

惨めな掃除が終わり、餌やり作業に戻る。

しばらくその作業をこなしていると、あることに気付いた。

馬鹿がいない・・・

クラスのどこを見渡しても、もう一人の餌やり係がいなかった。

俺の近くを通り過ぎようとする女執事に声をかける。

「おい、あの馬鹿はどこ行った？」

「えっ？
馬鹿って？」

誰のことかわからないらしい。

「織斑だ。
どこ行った？」

「あぁ、織斑君ならちょっと用があるからって抜けたけど？」

あいつ・・・

本日の苛立ちの最高値を更新することになったその言葉を聞いて、
今日だけでなくまた後日別の報復をしてやろうと思った。

目玉が抜けるなよ・・・

そんな事を思いながら餌やり作業を再開した。

一時間ぐらいが経過し、馬鹿が帰ってきた。

「悪かったな春、お前にまかせっきりで。」

そう言って俺に謝罪の言葉を述べる馬鹿。

「じゃァな。
俺は抜ける。
後は知るか。」

そう言って教室を出ようとしたとき腕を掴まれた。

「ちょっ、ちょっと待てって。」

そう言って俺を引き止めるのは馬鹿。

・・・これ以上俺を苛立たせたいのか？

これ以上俺の時間を割くようなことがあればぶん殴ってやろうかと思った矢先、

「お前に紹介したい人がいるんだ。」

真剣な顔でそんな言葉を口にする。

憂さ晴らしにからかってやろう。

「紹介？

何だ、結婚でもするのか？

俺はお前の親父じゃないぞ？」

こう言ってやれば、周りの反応は当然・・・

「一夏っ！

どういうことだ！？

そんな相手がいるというのか？」

「聞き捨てなりませんわ！

説明してください！」

「一夏・・・

ちょっといいかな・・・」

「そいつと同じ墓に入れると思うなよ・・・」

そう言って一瞬に馬鹿を取り囲むように四人の姿がそこにはあった。

「えっ？
ちょっ、どういう・・・
春、おいっ！
ちょっと・・・」

後ろで何か叫んでいるがその言葉を無視して廊下に出ると、そこには見慣れない男が立っていた。

「あっ、あの、その節はお世話になりましたっ！！！」

そう言って突然頭を下げられた。

勢いがよかったため、赤い色の長い髪が思い切り垂れ下がる。

その光景を廊下で順番待ちをしていた連中が驚いて眺める。

「えっ？
いきなり頭下げたけど、どういうこと？」

「知らないわよ。
でも、その節はってことは何かしら交流があったってことでしょ？」

「いきなり頭を下げさせるなんて・・・
やっぱり天性のＳ・・・」

状況が理解できないのでいろんな憶測が飛び交うが、状況を理解できないのは春も一緒だった。

「・・・誰？」

そう言うと、男は頭を上げ話し始めた。

「憶えてないですか？
レゾナンスで助けてもらったんですけど・・・」

そう言って説明されるが、

「悪いが憶えてねぇな。
さっきのはその礼か？」

「あ、そうです・・・」

俺の言葉を聞くと男は少し残念そうな顔をして言葉を返してきた。

「もういいぞ、ご苦労さん。」

それだけ言って足を進める。

律儀なことだ。

正直、興味が無かったのでさっさとこの場から離れようとしたとき、この後自分が楽をするための奇策が思い浮かび、足を止める。

「おい、礼と言ったな？」

突然声をかけられたことに驚いたのか、

「えっ？
はいっ、そうですっ！」

大きな声で返事を返してきた。
突然声をかけられいい具合に動揺しているようなので、一気に畳み掛けることにする。

「訂正しよう。
さっきの謝罪じゃ足りねぇ。
誠意は行動で示してもらえるか？」

「行動で、ですか？
えっと、何をしたら？」

どうしたらいいのかわからないといった感じだ。
冷静になられる前に上手く丸め込められれば・・・

「ちょっと来い。」

そう言って男の手を掴んで引っ張って歩いた。

「えっ？
ちょっと、あの・・・」

その光景を見ていた廊下の生徒達からは沸き立つ妄想から自然と悲鳴にも近い歓喜の声が漏れていた。

～？？？～

十分ほどして、一年一組の教室には二人の男の姿があった。

一人はこの学園の王子様、織斑一夏。

もう一人は、

テンパっているうちに何故か衣服を交換させられた織斑一夏の友人。

この俺、五反田弾の姿。

「なァ一夏・・・

何で俺が、お前と一緒に教室（ここ）でこんなことやってるんだ？」

まだ少し現状が理解できていないので一夏に質問を投げかける。

「俺が聞きたいって・・・

なんでお前がその格好してるんだ？」

その格好とは当然執事姿のことだ。

「いや、気付いたら服を交換することに・・・」

動揺しているうちに状況に流され、『ある一言』を言われて今に至るわけだが、

「普通、服の交換なんてしないぞ?」

多くの人が納得する言葉に、何も言い返せなかった。

『ある一言』によってその時は何の抵抗も無かったのだ。

その一言とは、

【この服を着てさっきのクラスに戻れ。
そうすればこの学園の女と仲良くなれるかもしれないぞ?】

と言う悪魔の囁きに流されたとは言えなかった。

仕方ないだろ?
男なんだから・・・

心の中で自分に言い訳をして、現実に肩を落とす。

うわぁ・・・
早まった・・・
もう帰りてぇ・・・

後悔の言葉しか浮かんでこなかったそんな時、

「ご指名でーす!」

執事姿の女の子に肩を叩かれ席へと案内された。

その席にはさっき正面ゲートで見かけた可愛かった眼鏡の女の人が・・・

さっきの無し！

訂正！

俺、この衣装着ててよかった！

心の中でガッツポーズをしてその席に腰を着けた。

嵐のせいで荒れ模様

～春～

完璧な身代わりを立て、交換した服を着て廊下を歩く。

サイズがそんなに違わなかったのはラッキーだったな・・・

そんな事を思いながら廊下を歩く。

頭を下げ、周りに気付かれないようにある教室に入った。

その教室に入ると、

「いらっしゃいませ～。」

そう言って俺を出迎えたのは中国伝統のスリットの入ったチャイナドレスを着た集団だった。

「えっ！？

吉田君？

どうしたの？

執事は？」

俺の来店に驚いているコスプレ集団。

俺の格好が執事姿でないことに、驚きとがっかりした様子でたずねてきた。

「生贄（だいやく）ができたんで終わりだ。
それより・・・」

そう言って教室内を確認すると、

「あっ！
ちょっと待ってね。」

そう言ってそいつを呼びに言ってくれた。

声は聞こえないが俺の姿を確認して、何故だか不機嫌そうな顔になる。

俺がいったい何をした？

そんな事を考えていると、そいつの背中を押しながら俺の前に連れてきてくれた。

「こいつちょっと借りてもいいか？」

そう言うと、

「はぁ？
私は暇だったらいいって言ったでしょ？
今忙しいんだけど！」

そう言って逃げようとするが、

「どうぞ、どうぞ。
一組にお客さん持っていかれて暇だから。」

そう言われたので、

「じゃァ借りてくから。」

そう言って手をとって教室を出る。

「ちょっと、離しなさいよ・・・」

そんな言葉を発しているが無視して廊下を歩き始めた。

その光景は何人かの目に留まったが、吉田春は今日は執事姿というイメージがすでに出来上がっていたため、人違いだと思われそれほど騒がれることは無かった。

人気の少ない屋外に出た所で足を緩め、振り返って言葉をかける。

「何か見たいものはあるか？」

そう尋ねると、

「・・・」

黙秘を決め込まれた。

その表情は完全に不満一杯といった表情だ。

「・・・今日は怒らせるようなことしてないだろ？」

そう尋ねても帰ってくるのは沈黙だけだった。

何に対して怒られているのかがわからなければ謝罪の仕様がない。

だが、それを聞いてさらに不機嫌になられても困るので何もできずに時間は過ぎた。

しばらく沈黙が続き、それに耐えられなかったので言葉を発した。

「・・・何怒ってんだよ?」

子供でもわかるようなその態度に質問を投げかける。

「・・・怒ってないわよ。」

その言葉を発する顔は相変わらずふてくされたような顔をしてる。

「今日はまだ癇に障るようなことをしてないと思うけどな?」

そう言うと、

「・・・・チャしてたくせに・・・」

聞き取りきれないような声で何か言葉を発してきた。

「何だって?」

耳を近づけて聞き返すと、

「・チャ・チャしてたくせに・・・」

どうにも完全には聞き取れないのでもう一度と、

「はぁ？」

そういった瞬間、耳をつかまれ、

「生徒会長とイチャイチャしてたくせに、平然と顔出してんじゃないわよ！！！」

そう怒鳴られた。

あまりのボリュームに頭を抑え、聴覚と脳は一時機能を停止した。

数十秒すると頭の中でエコーしていた声が引き、会話ができる状態まで回復する。

取り合えず謝った。

「悪かった。」

そう言うと、

「知らないわよ。
別にあんたが誰と仲良くしてようが私には関係ないしっ！」

不機嫌は治まる様子を見せない。

どうしたらいいんだよ・・・

空気は読めても、その状況を収められるほどのスキルは無かった為、
どうしたらいいのか、正直戸惑った。
状況を整理するため、一つ一つ確認することにした。

怒っている。
何故？

俺がトンチキ女と仲良くしていたから。
眼科に行け。

・・・違うな。

俺がトンチキ女と仲良くしていた様に見えたから。
じゃぁ、何故それで怒る。

数秒考え、ある言葉が頭に浮かぶがそんなはずは無い。
こいつが好きなのはあの馬鹿だ。
面白くないがな。

それ以外の候補が思い浮かばなかったので、

「俺が誰と一緒にいようが関係ないだろ。
俺が好きなのはおま・・・」

そのまま言葉を続けようとしたとき、俺の顔面に拳が入ってきた。

「関係ないって何よ、好きって言ったのはあんたでしょ？
それなのになんであんなことしてんのよっ！」

そう言って俺の腹に見事な蹴りを入れてきた。

「うっ！！！」

俺はその蹴りの重さにその場を動くことができず、

「・・・フンッ！」

鼻息荒くその場を去っていった。

悶絶している間、どうしてここまでされたのか、その原因を考える。

どれだけ考えても原因は一つしか思い浮かばなかったが、あいつの恋愛感情を考えるとその答えに自身が持てず、明確な答えが出ないままでいた。

さらに荒れ、風速８０ｍ

面白くないな・・・

トンチキ女の命令をきき、あんな格好までしたのにその報酬がこれかよ・・・

一人屋外のベンチで時間をつぶした。

どうしてこう、肝心なところで・・・

自分の運の無さを、もはや何度目になるかわからないが恨んだ。

そんな時、

『み～つけた。』

不吉な声が聞こえた。

言葉の感じはトンチキ女の様だが、声が違う。

女のように高い声でなく、だからと言って太すぎない声。

俺はこの知っている。

自然と頬を汗が伝う。

見たくはない。

見られたくもない。

頭ではそう思っても体が自然と視線を動かす。

俺がもう二度と会いたくないと思った人間の中の一人の姿がそこにはあった・・・

そこにはスーツを着た男が。
髪は男にしては少し長めで、体は細身。
その顔付きは見覚えのあるものだった。

「春、こんなところにいたんだ。
執事姿で辱められてると思って期待してたんだけど？」

そう言ってそいつは俺の近くに歩み寄ってくる。

寄るな、近づくな。

そんな事を思っても言葉が出なかった。

ベンチから立ち上がるころにはそいつは俺まで１ｍといった所まで距離を詰めていた。

「せっかくの学園祭を一人で過ごしているだなんて、本当に馬鹿だね。
楽しまないと損だろ？」

「うるせぇ！」

やっと言葉を出せた。

だがこんな言葉はこいつには効かない。

「全く・・・
大きな声で相手を威嚇するなんて、畜生と同じレベルだよ?
情けない・・・」

そう言って手を額に当てて嘆いているようなそぶりを見せる。
だが、そぶりだけだ。
こいつの行動に本音なんてものは見えない。
少なくとも俺には。

嘆いている様で俺をからかう。

あの時トンチキ女に感じたものは、間違いなくこいつと同じタイプだったからだろう。

「どうでもいいだろ!
そんなことより、てめぇが何でここに居るんだよ!」

そう言って睨むと、

「君のチケットで来たからじゃないか。
いや~、ホント偶然ってすごいね。」

そう言ってスーツの胸元からチケットを取り出した。
その紙を見て動揺は大きくなる。

「なっ！
俺のチケットはベニーに・・・」

楽しそうに、俺の言葉の先を奪う。

「そうだよ。
そのベニーさんからオレがもらったんだ。」

そう言ってチケットを口元に当て笑みを隠す。

「何でベニーのこと・・・」

俺の交友関係をこいつが知っていることに驚く。

だがその質問に、楽しそうな笑みを見せ付けるように言葉を口にする。

「当然知ってるさ。
だって、オレも旭日重工の研究員だからね。
それも君と同じ研究所で働いているわけだし。
さらに言うなら『ラグーン』を設計したのはオレだよ。」

そう言って俺に一歩近づく。

「どう？
研究所内でつまらない再会って言うのより、こういった所で劇的な再会って言うのも、面白かっただろ？」

そう言ってまたさらに一歩近づく。

「これからは君が研究所に戻ってきたら顔を見に行ってあげるよ。
これ週末が楽しみだね、春。」

そう言って俺の横を通り過ぎて行った。

そいつが通り過ぎるまで、まるで金縛りにあったかのように動かなかった体が、通り過ぎた瞬間、嘘のように軽くなった。

クソッたれ！

動くようになった体を翻し、そいつの背中に向かって言葉を撃ち出す。

「いったい、何しに来たんだよ、『優山（ゆうざん）』！！！」

その言葉を聞き、足を止めこちらを振り返る。

その顔はさっきまでのからかうことを楽しんでいた時と同じ表情。
そして俺の問いにその顔を崩すことなく答えた。

「へぇ、てっきり言われっぱなしで逃げるかと思ったんだけど、ちょっとは気合が入ったのかな？
まぁ、オレに言われっぱなしだったことを考えると、及第点はあげれないけどね。」

「さっさと答えろよ！
何しにきやがった！？」

再び大声を上げる俺に向かい、

「『弟』の様子を見に来るのに理由が必要かい？」

そう言って笑顔を見せる。

その言葉を聞いた瞬間、その場にいられなかった。

一目散に足をその場から遠くへ。

少しでもあの場所から、あの男から離れたかった。

『弟』

俺を捨てた奴らと一緒に過ごしていた奴の口からそんな言葉が出るとは思わなかったから。

『家族だった者』から聞く『弟』と言う言葉は、今の春には大きすぎる障害でしかなかった。

さらに荒れ、風速８０ｍ（後書き）

やっと名前がついての登場です。

墓参りの後に来たのも彼です。

プロフィールに書いてあった『兄』です。

両親に関しては書くことができましたが、やっと正式に登場させられてホッとしています。

では、また次の更新でお会いしましょう。

逃げ込んだのはわらの家

足を進め、やってきたのは寮の自室。

そのままベットに身を任せた。

変わろうと、そう思って行動しても、結果がついてきてくれない。
それどころか、状況は悪くなる一方、そんな気さえし始めた。

なんでだよ・・・

ベットでしばらく横になっていたが、気を紛らわせるためにグラスと酒瓶を並べ、タバコに火をつけ、それらを自らの体に流し込む。

今日はもう誰の顔も見たくなかったので扉に鍵をかけシャワーを浴びることにした。

汗とこの気分をわずかに流し、タオルを巻いて部屋に戻ると、

「先にシャワー浴びてるなんて、もう準備万端って事かしら?」

まさかの声に硬直した。

誰もいないはずの室内からの声だ。

だがその声の主はその姿を隠すことなく、俺のベットの上で横になっていた。

「次は私が浴びる番かしら?」

そう言ってこっちによってくるトンチキ女。

さすがに少しばかり驚いたが、もうこの女の行動に理屈を求めるのは無駄だろうと、その言動を無視してクローゼットを開け着替えをあさる。

「無視しないでよ~。
もうちょっとリアクションあってもいいと思うんだけど?」

そう言って俺の背中にもたれ掛かってくる。

それすらも無視し、払いのけ、着替えを身に纏い風呂上りの一杯をはじめる。

「・・・トコトン無視ってわけ。
わかったわ。
じゃぁ、こっちもあなたの意見を無視することにするわね♪」

その言葉に悪寒が走り、トンチキ女の方を見ようと視線を動かしたとき、俺の意識は無くなった。

気が付けばそこはどこかで見たことのある部屋。

はっきりとしない意識を覚醒させ、周りを見渡せば、そこはアリーナの更衣室だった。

とりあえず体を起こすが、あることに気が付いた。

ジャラ・・・

腕が手錠で拘束されている。

あいつか・・・

目頭を押さえ、現状に呆れながら考えをめぐらせる。

何でこんなところに？

状況把握が充分にできていない中、更衣室の扉が開いた。

「お目覚めですか？

手荒なことをして申し訳ありません。

ですが、これもお嬢様のご意思ですので。」

そう言って俺の近寄ってきたのは手にファイルを持ったメガネをかけた女だった。

「あんた誰だよ？」

自己紹介を求めると、

「失礼しました。

私、生徒会会計の布仏虚と申します。

お嬢様、いえ、生徒会長が実力行使という力に訴えて現在に至ること、お詫び申し上げます。

生徒会長からの指示で参りました。」

そう言って俺に近寄ってくる。

「詫びるんならまずこの手のものを取ってもらえねぇか？」

そう言って手を上げて手錠を見せるが、

「申し訳ありませんが、私は鍵を持っていないのでそれをとることはできません。
開錠するためには、あなたにこれからある事をやっていただく必要があります。
その説明に参りました。」

言葉遣いは丁寧だが、どうやら俺の味方、というわけではないらしい。

そうな事を考えていると、俺の前に立ち、その説明とやらを勝手に始める。

「あなたにはこれからアリーナであるイベントに参加していただきます。
そのイベントに参加していただけるという承諾がいただければピットにて手錠からの開放を。
そして、イベントに参加していただいた協力費としていくらかの謝礼をさせていただきます。
何か質問は？」

簡単な説明だけして答えを求められるが、

「まず、そのイベントって何だよ？」

「それはアリーナに出てもらえばわかります。

ここではお答えできません。」

「そんなのに参加しろってか・・・
それに参加しなかったら手錠は・・・」

「生徒会長が鍵を持っていらっしゃるはずですので、おそらく・・・
」

少し困った顔を見せる。
どうやらこの女もあの女には苦労しているようだ。

「取れないってか・・・
次だ。
謝礼って、どれくらいだ?」

「こちらになります。」

そう言って小切手を見せてきた。

そこには後ろから、

也円０００，０００，０１¥

と書かれていた。

「引き受けた。」

その金額に文句をつけるはずも無く即答した。

「えっ?

あ、はっはい。
ではピットに向かいましょう。」

小切手を見てからのリアクションの違いにわずかばかり驚いた姿を見せたが、すぐに冷静になり俺をピットまで案内する。

今日という日に起こったイベントで感覚が麻痺していたのも合ったが、あの金額を見せられたらいつもの状態であっても従っただろう。

ピットに着くとそこにはトンチキ女が待ち構えていた。

「思ったより早かったわね。
もっとごねるかと思ったんだけど?」

そう言って俺に近寄ってくる。

「あの金額なら普通大抵のやつらは引き受けるだろう？
俺もその一人だって事だ。
それより、さっさと手錠を外せ。」

「さっきは無視しっぱなしだったのに、こういう時は口を利いてくれるのね。
お姉さん、ちょっとショックよ・・・
私はあなたの財布なの？」

そう言ってハンカチを取り出して目に当てる。

「くだらねぇ芝居してねぇださっさと外せ。」

そう言うと、

「もう少し乗ってくれてもいいのに・・・
彼とはホントにタイプが違うわね。」

そんな言葉を口にしながら手錠を外した。

手首に手を当て、開放された感覚を確かめながら、嫌そうな顔をして問いかけた。

「で、俺に何をさせるんだ？」

その質問に、

「あなたにも利があることだから安心していいわ。
とりあえずここで待機していてくれるかしら？
こちらが指示を出したらそれに従ってくれればいいから。」

「それだけでいいんだな？」

「えぇ♪
その後はあなたの判断に任せるから、勝手にやってくれていいわよ。
じゃぁ、ちょっと待っててね。」

そう言ってトンチキ女と俺を連れて来た女は出て行った。

それだけでボーナスが入るなら楽なもんだ。

そのときはまだこの後のイベントと、その結果で訪れるものについてなど、想像もしていなかった。

別のお話

十分ほどピットで待っていると放送が入った。

「聞こえてるかしら？
こちらが合図したらＩＳで出撃してくれる？
あぁ、心配しないで。
織斑先生からの許可は取ってあるわ。
ＩＳスーツはもうその服の下に着せてあるから。
・・・あぁ、それとあなたが織斑君に望むことって何かあるかしら？」

突然質問され、何事かと思ったが答える義理は無いので適当に流すことに。

「特に何も。」

そう言うと、

「本音は人に言うのは恥ずかしいってところのかしら？」

その言葉を聞き、

「うるせぇぞ。」

文句を言うと、

「不器用な男の子なんだから。」

そう言って放送が切れた。

すき放題言ってくれたトンチキ女に対する評価はストップ安を記録したが、さっきの言葉を思い出し、とりあえず服の下を確認する。

本当に着せられている。
ホントにやりたい放題だな・・・

何をさせる気だ？

もはや呆れて文句を言う気もうせたが、これから何をさせられるのか。
それだけが気になった。

服を脱ぎ、ＩＳスーツ姿で待つことにした。

五分ほど待っているとＧＯサインがかかる。

「準備はよろしいでしょうか？」

トンチキ女ではない声に、

「いつでも。」

と、返事をしてトゥーハンドを展開させる。

「では、お願いします。」

その掛け声に従いアリーナに飛び出す。

金が絡まなければ絶対に従わないような言葉に従い、アリーナに出るとそこで俺を待っていたのは、とんでもない量の歓声と驚きの姿だった。

春の意識が途切れた瞬間に時間は巻き戻る

～楯無～

「よしっ、確保完了♪」

一瞬で首を絞め、意識を失わせたことを満足げに、額の汗を拭くような素振りをし、ぐったりとする春の姿を眺めていると、

「会長、お時間のほうが・・・」

そう言って部屋の中に入ってきた虚ちゃん。

「あらもうそんな時間かしら？
仕方ないわね。
本音ちゃんのほうは？」

「確保したとの連絡がありました。
計画を伝えたところ快諾してくれたそうです。」

「了解、了解♪
これで後は放送するだけね。」

そう言って扇子を開くとそこには『入荷完了』の文字が。

「準備は私がしておきますので、会長は放送のほうへ。
お嬢様からの呼びかけのほうが集客はいいと思いますので。」

「あら、虚ちゃん、男の人の体に興味があるお年頃だからって、寝込みを襲っちゃだめよ？」

「そんな事をなさるのはお嬢様だけです。
行ってください。」

「お嬢様はいやだって言ってるでしょ？」

頬を膨らませてそっぽを向くと、

「失礼しました。
ついクセで。
気をつけてはいるんですが。」

そう言ってこちらに足を近づけてくる虚ちゃん。

「仕方ないから許してあげるわ。
それじゃぁ、これ。
着替えさせたら付けといてくれる？」

そう言ってあるものを渡す。

ジャラ・・・

それは静かな部屋に音を立てて人の手をわたった。

「なんでしょう？」

そう言って受け取ったものを確認する虚ちゃんの目は少しばかり呆れているよう。

「ここまでする必要があるとは思えませんが？」

確実に呆れた口調で私に注意をしてくる。

「そこは、ただの嫌がらせだから、あまり気にしなくてもいいわ。じゃぁ、後ヨロシクね。」

そう言って私の次の仕事に足を進めた。

次の目的地は放送室である。

放送室のマイクをＯＮにして学園全域に言葉を届ける。

「ＩＳ学園の敷地にいらっしゃるご来賓の皆様。
私、ＩＳ学園生徒会長の更識楯無と申します。
本日はお越しいただきありがとうございます。
ここで、新たなイベントのご紹介をさせていただきます。
この後１６時より第４アリーナにて、生徒会主催のイベントを開催いたします。
この学園の二人の王子様が参加するイベントです。
ご来賓の方々には今日しか見れないイベントになるかもしれません

ので、ぜひ足をお運びください。
なお、入場にはある用紙にご記入していただく必要がありますが、
ご協力いただけますよう、お願いいたします。
そして、ＩＳ学園の生徒の皆さん、このイベントはあなたたちにと
っても今日しか見れないものかもしれないわよ？
気になるならすぐに第４アリーナにいらっしゃい。
観覧には当然来賓の方々と同様に、用紙に記入してもらうからヨロ
シクね。」

そう言ってマイクをＯＦＦにする。
あの二人がメインのイベントなら集客は充分取れる。

自分の計画を一切疑わず、その足をアリーナへと進めた。

開始３０分前だというのに会場の席は一杯。
立ち見の姿さえある。

満足のいく集客に、うなずきながらこのイベントの主役達の下へ足を進めた。

彼らへの簡単な説明も終わり、管制室に戻ると観客席の熱気はさっきよりも高まっていた。

彼らに追加の指示を与え、時計を確認する。
時間も迫ってきた。
そろそろこのイベントの内容を説明しないと。

そう思いアリーナのマイクをＯＮにする。
もちろんピットのマイクはＯＦＦのままで。

「ではこれより、今回のイベントの簡単なストーリを説明させてい

ただきますので、ご静聴お願いします。
・・・あるところにとても優しい男の子と、とても不器用な男の子がいました。」

その放送に観覧席から笑いが起こる。

「二人は口論したり、殴りあったりもしましたが、結局わかりあうことができません。
優しい男の子は悩みました。
どうしたら仲良くできるだろうと。
不器用な男の子は悩みました。
どうしたら自分を変えられるだろうと。
そんな時、それはそれは、強くて美しく、かわいい魔法使いが言いました。
『強いほうの望みをかなえてあげるわよ♪』と。
優しい男の子は不器用な男の子と仲良くなることを望み、不器用な男の子は自分が変わることを望みました。
そして今日、その互いの望みをかけた勝負が幕を開けます。
あなた達は運がいい！
世界初！
男対男のＩＳでの勝負を見ることができるのだから！
この歴史的瞬間を説くとその目に焼き付けなさい！！！」

その言葉を言った瞬間、世界に二人しか存在しない『彼ら』は姿を現した。

その姿が現れた瞬間、アリーナは割れんばかりの歓声に包まれた。

別のお話（後書き）

灰被り姫（シンデレラ）ではありません。

そして、やっとこの二人がやりあいます。

長かった・・・

ここまで来るのに９０話以上とは・・・

他の方々の話だと早々に勝負しちゃってるんですけど、仲良くないのに勝負って普通しないでしょ？

と言うことで、ここまできましたが、あの自由人のおかげでやっと舞台が整いました。

苦手な戦闘シーンです・・・

ダラダラしない程度にがんばりたいと思います。

追加紹介&追加武装

吉田優山

春の兄。
春が旭日重工に身を預けることになった時には大学四年で、すでに就職が内定していたが、その後に旭日重工に面接に行き合格。
就職先を旭日重工に決める。
最初の一年目は別の研究所にいたが、優秀と言うことで、同じく優秀なベニーと同じ研究所に配属される。
そこでラグーンの開発を始め、実用テストにまでいたる。

性格は基本的に優しい。
ただ身内には厳しい。

春のことは嫌いではないが、どうしてもからかうことが先走るため嫌われている。

容姿は美男子。
春よりも身長が高く、目つきが優しくなり、髪が長い。

追加武装

ジーザス×１

ゲパード、対物ライフルを元に設計。
威力が高く、弾速も早い。
後付武装の中でも最高クラスの威力をもち、トゥーハンドの決めの武装と言える。

タンゴ×２

アーエェン３７、回転式グレネードを元に設計。

連射型のグレネード。
威力はジルバには劣るが連射が可能なのが利点。
爆炎で視界を遮ることも可能。

クレイ

セムテックス、Ｃ４を応用、発展させたもの。
粘土状の高性能爆薬。
投げつけ、付着させることも、構造物に付着させ、トラップとしても使用することも可能。
起爆の信号はパイロットの脳はを受信して行われるため、これと言った装置は必要ない。
ただ、高速で動くＩＳ相手に付着させるには相当の技術か、ゼロ距離で直接取り付けるリスクが必要になる。

追加紹介&追加武装（後書き）

と、とりあえずはこんなところでしょうか。
一時間後に本編は更新させていただきます。

白い雪対鉄の炎

～織斑～

予想以上の歓声に驚きながら目の前にいる奴を見る。

「っんだよこれ・・・」

頭をかきながらこの状況を理解しようとしているあいつに、

「春！」

その言葉を向けた相手は面倒くさそうにこちらを見る。

「勝負だ。」

そう言って剣を向ける。

「知るか馬鹿。
お前の勝ちでいい。
俺はやらん。」

そう言ってピットに戻ろうと背中を向ける。

その背中を、

「逃げんなよ！」

その言葉で撃ち抜いた。

そして言葉を撃ち続けた。

「お前はいつも冷めた言葉を並べるけどよ、それはいつも自分に関係ないことだから言える言葉って事、わかってるか？
そりゃ、自分に関係なければどんな言葉だっていえるよな？
それが無神経で、他人を傷つけるものだとしても・・・
けどよ、その言葉を平気な顔して口にする限り、お前は変われねぇよ。」

自分で口にした言葉が胸に刺さる。
俺も同じだったから・・・

その言葉を聞いて俺の姿を確認する。

「おい・・・
もう一回言ってみろ・・・」

そう言って俺を睨むその目は、『怒り』と言う感情を表現するには充分なものだった。

「いくらでも言ってやるよ。
お前は変われねぇ！
変わりてぇなら、もっと本音でしゃべれよ！」

その言葉を聞いた瞬間、春の体が一瞬で動いた。

バァン！

一発の銃声がアリーナに響く。

「・・・どうした？
当てる度胸も無いか？」

撃たれた銃弾は俺の体の脇を通り抜け、当たりはしなかった。

「うるせぇぞ・・・
これ以上俺に向かってしゃべるんじゃねぇ・・・」

銃を持つ右手はわずかに振るえ、ある感情を抑えている。

「嫌だね。
俺がお前の言うことを聞く必要は無い。
いくらでも言ってやるよ。
お前は変われない。
人にちゃんと向き合わない奴が変われるもんか。
『怒り』さえもちゃんとぶつけられないチキン野郎が、どれだけ吠えようと怖くねぇ！」

そう言って春に向かって雪片を展開せず、刀の形態を維持したまま突進を開始する。

「・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・」

突進しながらモニターで確認する春の顔の口元がわずかに動いている。

何だ？

そんな事を思いながら距離を詰め、最初の一振りを叩き込もうとした瞬間、

「ぶっ飛ばす！
てめぇに何がわかるッってんだ！」

そう言って銃弾を撃ち込んできた。

その銃弾は突進していた俺の肩に当たり、その衝撃で軌道がずらされ、最初の一撃を先にくらうことになった。

～春～

どいつもこいつも、好き放題言いやがって・・・

てめぇらに俺の何がわかるッてんだ・・・

知りもしねぇのに好き勝手言ってんじゃねぇよ・・・

一日に受け入れられる暴言の容量がオーバーした春の頭が出した答えは、子供と同じで、シンプルに、それの発散行動に移させた。

「ぶっ飛ばす！
てめぇに何がわかるッってんだ！」

カトラスに掛けていた指を引いた。
その弾丸はレヴィのおかげで俺が狙わなくても的確に相手に命中し、俺の怒りの矛先に命中する。

「言いたいこと好き勝手に言いやがって・・・

もうデータだ、仕事だ、そんなことはどぉーでもいい！
とりあえず、まずはてめぇをぶっ飛ばす！
その次はあのトンチキ女だ。
最後にあのウナギ野郎をぶっ殺す！」

自分の中の苛立ちの原因を口に出して確認しながらカトラスのトリガーを引き続ける。

トンチキ女？
ウナギ野郎？

誰のことか、謎の言葉を考えている織斑に追撃の弾丸が襲いかかる。

「上等っ！
やれるもんならやってみろよ！」

そう言って銃弾を避けながら、春に向かって再び突撃してくる織斑の雪片が春の左肩に一撃を入れる。

「うぜぇえ！」

春はそのまま剣を掴み、右手に持っていたカトラスを手放してクレイを呼び出す。

粘土の塊であるそれを、切りかかってきた左手に貼り付ける。

「ちっ！」

剣を引き、距離をとる織斑に、

理解できないサプライズをくれてやる！

そう春が思った瞬間、織斑の左腕を中心に、その姿を爆炎が包んだ。

突然の爆発に反応が遅れる織斑。

ビーを呼び出し、そのまま爆炎に向かって攻撃を放つ。

数秒弾丸を撃ち続けると、その炎の中から飛び出してくるものが。

ビーを転送し、呼び出すのはタンゴ。

それを両手に呼び出し、二挺で追撃をかける。

頭にあるのは織斑をぶっ飛ばすこと。

それしか考えられなかった頭に戦略なんてものは無い。

【火力が全て！】

純粋に、ただそれだけで織斑に攻撃を続ける。

だが当たらない。

白式の左腕装甲が破損した状態だが、飛行には問題ないと、春の攻撃を余裕、とはいかないまでも避け続けてる。

基礎操作技術が向上していたのは春だけではない。

生徒会長の猛特訓の成果が織斑一夏の操作技術を向上させた。

その成果は避けることだけではない。

破損はしているが雪羅の稼動を試みる。

動作は遅いが望む形に姿を変えてくれた。

だが、ＩＳのモニターには警告の文字が表示される。

【動作に異常発生】

【暴発の危険有】

【使用は出力６０％で三回が限界です】

充分！

画面を確認し、雪羅の一発目を発射した。

その攻撃を余裕で避ける春。

だが、

「そう避けるよなぁ！」

その言葉を口にした時には既に、春の姿はすでに織斑の目の前に。

雪片を展開させ、零落白夜の一撃を振りぬく。

だが、

メキッ・・・

鈍い音を立て、その一撃を防ぐものが。

春が呼び出したジルバが織斑の雪片の一撃を遮る。

距離を詰めたことで、春の手には再びさっきの粘土、クレイが姿を現し、それをこちらに放り投げる。

「やっべっ！」

急いで距離をとろうとするが、

「はっ！」

鼻で笑うような声を上げ、春は自分と織斑の中間でクレイを爆破し、二人ともクレイの爆炎に包まれた。

白い雪対鉄の炎（後書き）

まだ戦闘は続きます。

慣れない戦闘描写・・・

自分のイメージが皆様に伝わっているか。

それが心配です。

勝負とは見苦しいものであれ

爆炎の中から一筋の光が姿を現し、一人がその空間からはじき出され、どちらが優勢だったのかを物語る。

弾き飛ばされたのは春で、その姿を見下ろしていたのは織斑だった。

クレイの爆発が回避できないと理解してから、その動きは回避から攻撃に向けられた。

爆弾に向かって突っ込んだ。

その衝撃を体に受けながら一気に距離を詰め、油断していた春の体に零落白夜の見事な一撃を叩き込んだ。

「っぜぇ！」

吹き飛ばされ、崩れた体制を治し、手にはビーとカトラスを握る。

銃口を向け、撃とうと思った時には織斑の姿は自分まで１０ｍと言う距離にまで迫って来ていた。

「ちっ！」

舌打ちをしながらカトラスで牽制。

ビーはすぐに収納し、呼び出したのはジルバ。

カトラスの銃弾をひるまず突っ込んできた織斑の剣を再びジルバで受け止める。

「どうした？

これ、多分俺のほうが押してるぜ？」

自分の優勢を春に告げる織斑。

事実、二人のエネルギー残量は織斑の方がわずかに多いが、当人達はそんな事を知るよしも無い。

「しらねぇよ、そんなことはよぉ！」

無理やり体を入れ替え春が上になり、織斑の体を蹴りで地面に向かって引き離す。

カトラスをホルスターに収納し、その手に呼び出したのはジーザス。

ジルバを投げ捨て、両手でしっかりと支える。

こいつの威力は試し撃ちで充分わかってる。

こいつはジルバのように対象を内部から破壊するような武器ではない。

ただ、純粋に撃ち抜く。

それだけならこいつは俺のどの武器よりも強力だ。

受ける衝撃は一発かするだけでも必ず体制が崩れる。

そこに連続して叩き込んでやる！

トリガーに指を掛け、最高の銃弾を撃ち出した。

「っのっ！」

織斑が体制を立て直すころには春の手にはさっきまでとはまた違った武器が握られている。

どうする？

避けるか？

突っ込むか？

その迷いが大きな代償を払った。

ズドンッ！

予期せぬ音と衝撃が体を襲う。

その音は春の銃から撃たれたもの。

その衝撃は自分のＩＳの右足の装甲を吹き飛ばしたものだと知るのは地面に墜落してからである。

「嘘だろ・・・ッ！」

自分の現状を理解しようとしているとき、顔の横の地面がえぐれる。

春の攻撃はまだ続いている。

それを理解し、とっさにとった行動は、雪羅を地面に向かって放つこと。

その威力が土を宙に飛ばし、土煙が織斑の姿を完全に隠してしまう。

だが春の攻撃はやむことは無い。

ジーザスでは無く、タンゴやジルバで追撃したかったところだが、どちらも今は地面にある。

タンゴはジルバをとっさに呼び出すのに収納ではなく投げ捨ててしまったため今は地面に転がっている。

ジルバは手元にあったとしても攻撃を防ぐのに使用したため銃身がいがんだため、すでに攻撃には使用できない。

マガジンの弾を撃ち尽くすまで攻撃を加え、ジーザスを収納。

ビーを両手に転送し、攻撃を仕掛けようとした瞬間、

「攻守交替だぁー！」

土煙から飛び出してきた織斑。

その姿は満身創痍で、四機のスラスターは左右が一つずつ壊れ、右足の装甲は吹き飛んでいる。

だが、その手にはまだ雪片が握られており、雪羅の損傷もさっきと同じまま。

まだ一発は撃てる状態である。

シールドエネルギーは残り三分の一。

充分とはいえない状況の中、織斑は動く。

まだ勝負はついていないと。

管制室のモニターで一人、二人の戦闘映像を口元に扇子を当てながら観戦している生徒会長に、声をかける人物がいた。

「あの馬鹿どもの勝負はどうだ？」

その声の主は今でも最強と呼ばれ、『ブリュンヒルデ』と称えられる人物である。

「どうもこうも・・・
まだまだですねぇ♪」

その顔は笑顔である。

「そうだな。
動きは硬いし、無駄が多い。
何より暑苦しい。
こんな勝負は現役時代にもそうはなかった。」

そう言って、生徒会長の隣に寄り、同じようにモニターを見る。

「でも、男の子って感じがしてよくないですか？」

「・・・まぁな。」

その口元はかすかに笑みを見せる。

「口元にやけてますよ？
弟さんの姿です？
それとも、もう一人のほうですか？
どちらにしても犯罪ですよ？」

そう言ってからかう扇子には【青少年育成保護条例】と力強く書かれている。

「・・・死ぬか？」

達人だけが放つその殺気に、

「も、もちろん冗談ですよっ！」

さすがの生徒会長も距離を取り身構える。

「・・・馬鹿なことを言ってないで大人しく見ていろ。

お前が言ったんだぞ？
貴重なものだと。」

殺気を収め、モニターを見るように促す。

いつでも回避できる状態を保ちながらモニターを見る。

そのモニターには満身創痍の織斑一夏と、それに比べれば余裕があるように見える吉田春の姿が。

「どちらが勝つと思います？」

そう尋ねると、

「下らんことを聞くな。
今あの二人の基礎能力にそれほど差は無い。
互角の者同士が戦えば、勝者になるのは最後まで勝つことを諦めない奴だ。
どちらが諦めが悪いかなど、聞くまでも無いだろう？」

そうモニターに視線を送ったまま答える。

「じゃぁ、弟さんが勝つと？」

「当然だ。」

本当に弟さんのことをよく見てるんですね。
なんて言葉を口から発しようものなら、おそらくこの管制室は血の海になるだろう。

思わず口走りかけた言葉を飲み込んでいると、

「お前はどちらが勝つと思う？」

そう質問を投げかけらる。

「そうですねぇ・・・

先生が弟さんなら、私は不器用な彼で。」

少し楽しそうな声で

「・・・賭けるか？」

と、立場的に相応しくない台詞を平然と口にする。

「・・・教育者の台詞じゃないですよ？」

「お前が一般常識を説くな。

どうする？」

「やめときます。

賭け事は弱いんで♪」

そう言って扇子で口元を隠しながらモニターを見る。

「つまらんな。」

そう言って、いつもの冷静な声と表情で不満を漏らす。

「ふてくされないでくださいよ・・・」

そう言って扇子で顔を扇ぎ、暫くモニターを二人で静観する。

そして、決着は訪れた。
そこに映っていたのは敗者が倒れている姿。
そして、もう一人が勝者として立っている姿だった。

アリーナは静かに、その決着を受け入れる。

その静寂を破り、主催者の声が響いた。

【勝者・・・】

勝負とは見苦しいものであれ（後書き）

次回でとりあえず戦闘終了です。

戦闘描写は苦手です・・・

醜くても、それが勝者の姿なり

飛び出した織斑を出迎えたのはビーの攻撃。

その銃弾は命中するが、それにひるむことなく雪片を剣の状態にして切りかかる。

「はぁぁっ！」

下段から振り上げるようにして放った攻撃は春の足元にあたり、わずかだがエネルギーを消耗させる。

「おぉぉぉぉ！」

そのまま攻撃の手をやめることなく剣を振り続ける。

その攻撃は接近戦を得意としない春には面白いように当たり、確実にエネルギーを削り続ける。

「叫ばねぇと攻撃できねぇのかよっ！
てめぇはぁ！」

春は右手のビーで攻撃を仕掛けつつ、左手にはすでに別のものを呼び出している。

今日三度目となるクレイの転送。

それを目視した瞬間、織斑の体は一気に春と離れた。

「さすがにもう通用しねぇか・・・」

呼び出したばかりのクレイを再び収納。

カトラスを抜き、距離をとる。

だが、クレイが無ければ織斑が距離をとる必要は無い。

ビーやカトラスの威力は受け続けなければそれほど強力なものではない。

エネルギー残量が少ない今、織斑が警戒しているのは勝負がつきかねない強力な一撃だ。

それ以外の攻撃を受けたのなら、それより1つでも多くやり返す。

単純な思考で攻撃を再開するため、再び距離を詰めるために動いた。

春は距離をとりながら考えていた。

どうしたら織斑を倒せるのかを。

外見的には春の優勢に見えるが、少しずつだが追い込まれていた。

ＩＳの状態は春が優勢。

エネルギーも春の方が多いだろう。

だが、攻撃方法がもうそれほど残されてはいなかったのだ。

距離をとるため移動行動をとっていたら、いつの間にか地上から６００ｍほどの空中。

タンゴは地面に横たわっている状態。

取りに行けば追われ、後から攻撃を受けることもありえる。

ビーは多用したため、弾は今銃身に付いているマガジンが最後。

カトラスの弾はあるが、それほど威力はないので残りの弾を全て当ててもエネルギーは０にできない。

クレイの爆発にはもう簡単に巻き込めないし、ジーザスは威力があ

る半面連射にそれほど優れてはいない。

ダメージを与え、充分な装備ではない織斑だが、避けられたら一気に距離を詰められ、さっきと同じ状態をループすることになる。

どうする？

限られた状況で、冷静な判断を下すということは、その状況を想定して訓練をしているようなプロや軍人にしかできない。

春には、この状況を打破するための手段が思いつかないでいた。

スラスターのエネルギーを確認する。

もう三分の一を切った状態。

瞬時加速は一回が限界か・・・

春までの距離は約１００ｍ。

瞬時加速を使用すれば詰められない距離じゃない。

だが、瞬時加速で詰めることを予測され、さっきの爆弾を使われたら加速の後だから回避が間に合わない。

そこに追撃を仕掛けられたら負ける・・・

最悪の状況を想定し、織斑もまたこの状況を別の手段で打破することを考えていた。

先に動いたのは春。

どう考えても今手元にある装備では織斑を倒すことができないと判断したため、リスクを承知で地面の武器を取りに行くことを選んだ。

織斑にしたら、春の突然の急降下。

一瞬だが反応が遅れる。

春の背中を追う中で、地面に見えたそれらの姿を見つけたことにより、春の目的に気が付いた。

まずいっ！

春の狙いを阻止しようにも、確実に春の方が先に地面に届き、目的の品を手にするだろう。

なら・・・

雪羅の出力を調整する。
その威力は２０％ほど。

雪羅を地面に向け、二発の閃光を撃ち込んだ。

タンゴまで後３０ｍ。
手を伸ばし、それを拾おうとしたとき、ＩＳに警告が表示される。

【後方よりエネルギー反応】

その表示を見た瞬間、急いで体をひねる。
その後をすぐにビームが通り過ぎる。

ドドォバァーーーン！

体制を崩し、地面に叩きつけられるよう形で着陸し、爆音を発した
本来の目的地を確認する。

そこにはさっきまで上がっていなかった黒煙が姿を見せる。

やっかいなことに、その黒煙は一本ではない。

もう一本、空に向かって揺れながら上がっている。

「これでやりたかったことは出来ねぇだろ？」

そう言って静かにＩＳの左脚をつける織斑。

春の行動をつぶせて満足と言った顔をしているが、その代償が無かったわけではない。

出力は抑えたが、一発が限界だった状態で二発の粒子砲を撃ったのだ。
雪羅はその姿を留めてはいなかった。

「ボロボロでえらそうにしゃべんじゃねぇよ。」

そう言う春の目には苛立ちが見える。

「なんとでも言えよ。
これでお前の装備は今あるだけだろ？」

織斑は春の行動から、そうせざるを得なかった理由までを見抜いた。

「どうだか・・・なぁっ！」

そう言って春は動いた。

織斑に向かって、最高速度で、一直線に。

突進しながら最後の掛けに出る為の物を呼び出す。

「なっ！」

予想していなかった行動に動揺する織斑。

さっきまで近づかれないようにしていた春が、急に距離を詰めてくるという選択を頭から消してしまっていたためだ。

その動揺が行動に遅れを生む。

織斑の体に抱きつき、手に持っていたものを織斑の体に貼り付け、地面に倒れこむ。

「っ、離れろよっ！」

雪片の柄頭で春を殴り、左足の膝を入れたりと、抵抗してその体を離そうとする。

だが、抵抗するにも密着している相手を手足それぞれ一つでは離すには力不足。

エネルギーもそれほど削れない中、春が言葉を口にする。

「エネルギーはどれだけ残ってるよ？」

ありえない質問が聞こえ、

「言うわけねぇだろ！」

そう言いながら抵抗を続ける織斑。

「なら結果の見えない賭けだ。
多かった方の勝ちってなぁ！」

その言葉を口にした瞬間、二人を爆発が覆い隠した。

観客席は動揺と混乱が混じった声が上がり、その中から見える結果を待っていた。

そして、煙が晴れ、火が点々と見える中、一人の姿が動く。

吉田春だ。

その姿はボロボロで、ＩＳもかろうじて稼動しているような状態だ。

それでもその姿を確認した瞬間、会場は歓声に包まれ、勝者を称えた。

その歓声を悪くない気分で浴びる春。

視線を地面に向け、敗者の姿を確認する。

どうだ、クソッたれ！

心の中でそう吐き捨て、小さくガッツポーズを作る。

最悪の一日の中、この瞬間だけが春にとっては救いの時間だった。

だが、まだ諦めていない男がいた。

ゆっくりと、その体を動かし、ふらつきながらも立ち上がる。

その姿は稼動しているのが異常なほど。
スラスターは左に一機、それも外装の一部が剥げているような状態。
体に纏っていた装甲はほとんど吹き飛び、まともにあるのは、右手とフレームが露になっている左脚のみ。

だが、それでも右手には決して離されることの無かった雪片が、気力だけで握られている。

何人かがその光景に気付き始め、会場の空気が徐々に変わる。

歓声は小さなものとなり、その光景に目を奪われる。

その異変は当然春も察し、鈍くなったＩＳをゆっくりと動かす。

そして、その目に入ってきた者にカトラスを抜き、銃口を向けた瞬間、織斑の姿は春の懐にあった。

すでに零落白夜を使用するだけのエネルギーは残ってはいない。

それでも、最後の最後まで諦めることの無かった男の攻撃は、春のシールドを斬りつけ、加速の威力でそのまま体当たりまでお見舞いした。

姿勢制御が取れず、互いが地面に叩きつけられる。

その光景に、さっきまで歓声で震えていたアリーナは、嘘のように静まり返る。

その静かなアリーナで必死に立とうとする男の姿。

既にほぼ生身で、その手に持ったものを杖のように使い、震える体が何度途中で崩れようと、決して諦めることなく、自分の足で勝者として立ち上がる。

その光景を会場は静かに見守り、その勝者の名前が告げられた。

【勝者　織斑一夏】

その声が会場に響いた瞬間、勝者はその場に崩れるようにして倒れ、勝者をたたえる歓声が再びアリーナに響き渡った。

醜くても、それが勝者の姿なり（後書き）

と、とりあえず勝負は終了です。

勝ち方や結果は予想できた方も多かったかもしれませんが、このＩＳと言う物語は基本なんだかんだで織斑が美味しいとこもって行ってしまうんですよね

（「◇」）；

春が輝く勝利を手にするのはいつになるのか・・・

それは著者にもわかりません（笑）

小悪魔

意識が戻り、目に入ってきたのは白いカーテン。
どこだ？
そんな事を思いながら体を起こすと、
「あら、もういいの？」
目覚めの第一声には聞きたくなかった声が聞こえた。
「何でてめぇがここに居る？」
視線を向けるとそこには椅子に腰掛け、本を膝の上に置いたトンチキ女の姿があった。
「何でって、倒れたあなたたちを保健室まで運んだのは私よ？お礼の言葉でも言ってくれるのかしら？」
扇子を広げ俺に文字を見せ付ける。
『随時募集』
見なかったことにしてゆっくりと立ち上がろうとすると、ふらつき、足がもつれ、倒れそうになる。
そこに体をいれ、支えに来たトンチキ女。

そのままベットに座らせ、カーテンの前に立つと、

「無茶したんだから、今日はここで一泊ですって。
よかったわね。
お隣さんも居るから寂しくないわよ？」

そう言ってカーテンを開けると馬鹿が眠っていた。

「帰る。」

立ち上がろうとしたが、一瞬で体がベットに叩きつけられた。

「ってぇっ！」

痛みを訴える俺を無視して話し始める。

「あなたたち、もうちょっと考えてやりあってくれないかしら？
学校のイベントでダメージがC以上って・・・
いろんなところに頭下げないといけないんだから・・・」

深くため息をついて、寝ている馬鹿と俺の頭を扇子で小突いた。

「ってことで、
『しばらくＩＳの起動は禁止だ。
もし破ったら自分の足で歩けなくなると思え。』
と言う織斑先生からのありがたいお言葉を、一夏君が起きたら伝えといて。
守る事と、伝える事。
両方守らないと、結局歩けなくなると思うから、その辺しっかり理解しといてね？」

と暴君の物真似を挟んで俺を伝言板としてベットに寝かせ保健室を出て行った。

なんだってこんな・・・

空が暗くなり、目を瞑って時間が過ぎるのを待つと、頭を過ぎるのは数時間前の戦闘だった。

最後にあの馬鹿に突っ込まれて、あの後どうなったんだっけ？

勝ったのか？

負けたのか？

思い出せず、そのまま眠りに落ちた。

眩しくなり、目を開けるとカーテンから光が透け、外はうっすらと明るい。

体を起こし、ゆっくりとカーテンを開ける。

まだうっすらとしか太陽が顔を覗かせていなかったがその光がやたらとまぶしく感じた。

腹減ったな・・・

食堂が空いている時間かと、時計を確認すると時間はまだ朝の六時前。

一服してから食堂行くか・・・

痛む体を起こし、保健室の扉を開け、寮に戻ろうと廊下を歩き始め

ると何かが聞こえたような気がした。

何だ？

足を止め、耳を澄ます。

・・・Ｌａａａａａ・・・・

歌だ。

どこから聞こえるかはわからなかったが歌が聞こえた。

綺麗な声で、そのときは感心したが自分の目的を思い出す。

こんな時間に歌っているとは、物好きなヤツがいるなと、そんな事を思いながら足を寮へと向けた。

廊下を歩いていると徐々に歌が大きく聞こえ始める。

どうやら近づいているらしい。

そんな事を思いながら足を進め、角を曲がった先にその歌姫の姿があった。

突然視界に入ってきた姿に、互いがその人物を確認する。

歌姫は真っ黒い服を着た、銀髪で長髪の少女と、同じく銀髪で短髪の少年。

顔は全く同じに見え、どうやら双子のようだ。

仲良く手をつないで廊下を歩いていたらしい。

驚いたのか、その口から聞こえていた歌は終了したようだ。

こいつらが・・・

上手かったな。

と感心していたが、あることに気付く。

学園の生徒には見えない。

ましてや教師なんて事はありえないであろう幼い容姿。

この二つの候補が外れだとしたら残る答えは何か。

部外者。

この言葉で片付けられるが、どこでもこの言葉はあまりいいことには使われない。

それはここも例外ではなく、部外者が居ていい場所ではない。

それなのにこんな場所に部外者が居る理由として考えられるのは、大抵が碌な事ではなく、法の中で治まるようなものでもないだろう。

その部外者が俺よりも年下に見えることが俺に恐怖を感じさせ、この空間が違和感に包まれているようにさえ思えた。

「あら？
まぁ、ちょうどよかった。
お兄さんを探していたのよ？」

長髪の女の子がそばによって来て俺の手を取る。

その手は暖かい。
俺が感じている違和感が嘘のようにさえ感じられるほどに。

だが、その口から発せられる言葉はその違和感を拭いきることができないものだった。

「もう一人のお兄さんと一緒に大人しく私たちと一緒に来てもらえるかしら？
できれば暴れずに。
でないと、ちょっと痛い思いをしてもらうことになるんだけれど・・・」

そういった瞬間、背後に居た少年ののシルエットが一瞬で変わった。

その体には見慣れた金属の装甲。

その手には不気味な大きさの斧が握られている。

「姉さま。
騒がれても面倒だからとりあえず喉だけでも潰しておかない？」

可愛いらしい容姿とは裏腹に、とんでもないことを口走る姿に脂汗が噴出した。

「ダメよ姉さま。
淑女（レディ）がそう簡単に力に訴えては。
まずは言葉で相手と意思の疎通を取らなくては、犬や猫と同じになってしまうわ。
もしそれでダメなら、そのときは足の一つでも落とせばいいのよ。
躾としてね。」

そう言って少年？少女？を嗜める少女。

何なんだこいつら・・・

姿を見て1分も経っていないが一つだけわかった。

こいつらはおかしい。

まともに見えるのは外見だけ。

中身はその外見に不釣合いなほどぶっ壊れている。

異様な空気を放つこいつらに、暴君の命令を無視する覚悟ができ、手を振り解いて距離をとる。

「あら？」

長髪の少女が振りほどかれた手を見てから俺を見る。

「どうしたの？
一緒に来てっていったでしょ？
来てもらえないなら朕が必要になるんだけど・・・」

そう言葉を口にし、体の周りには光の粒子が見える。

もう一人の方もその隣に並んで臨戦態勢が整っている様子。

「悪いが、知らねぇ奴について行く気はねぇ・・・」

こちらもＩＳを展開しようとするが、ダメージが残っているせいなのか、なかなか展開できない。

「そう・・・
残念だわ・・・
姉さま、逃げられても面倒だから足を落としましょう。
その後もう一人をゆっくり探せばいいわ。」

「わかったよ、姉さま。」

長髪の少女の体にもＩＳが展開され、いつでも俺に飛び掛ってくることのできる状態になる。

だが、こちらの準備はできていない。

やば過ぎだろ・・・

追い込まれた状況で、その声は響いた。

『私のおもちゃで勝手に遊ばないでくれるかしら？』

聞こえてきた言葉が若干気になったが、その声の主にそのときだけは言ってやろうと思った。

お礼の言葉を。

突然の言葉に、俺達の視線はその言葉が聞こえた俺の後ろに集中する。

そこに立っていたのは余裕の笑みを浮かべ、腕を組んで俺達を眺めるトンチキ女の姿だった。

「思ったより早くばれてしまったわ。
私たち何かへまをしたかしら？」

長髪の少女はトンチキ女に質問を問いかける。

「へまも何も、バレバレだったわよ？
堂々と正面から来る度胸と勇気は大したモノだけど、ちょっと考えが甘かったわね。
部外者が入ることのできる数少ない機会ですもの。
こういうことを想定してないはずないでしょ。
入場者と退場者の数をチェックするのは当たり前。
その数が合わなければ警戒レベルは下がらないし、今年は彼らみたいな目玉商品もあるわけだから、私みたいな可愛いＳＰをつけるぐらいするわよ。

無駄に一緒に居たわけじゃないのよ？」

そう言って俺に視線を向けるトンチキ女。

自分が俺や織斑をかまっていた理由をここで説明するが、もうちょっとやり方があったんじゃないかとも思う。

「そう・・・
それはこちらのミスね。
けれどごめんなさい、お姉さん。
私たち、どうしてもこのお兄さんともう一人に来てもらわないといけないの。
そのおもちゃ、譲っていただけないかしら？」

そう言いながら長髪の少女はその手に巨大な銃を呼び出す。

もう一人も斧を構え、完全に臨戦態勢だ。

「ダメよ、お嬢さんたち。
私もまだ満足するだけ遊んでないのに、手放すわけ無いじゃない。
残念だけど諦めて帰ってもらえる？
でないと、弱い者いじめすることになっちゃうから。」

そう言って双子たちの前に壁になるように立った。

俺の前を通り過ぎた顔に珍しくあのふざけた笑みは見えない。

「姉さま、お願いは聞いてもらえないようだから、あっちは殺そうよ。」

平然と危ない言葉を口にする短髪の少女。

「そうね。
お願いが聞いてもらえないなら仕方ないわ。
でも姉さま、間違っても彼は殺しちゃダメよ？」

「気をつけるよ、姉さま。
でも、手が滑って手や足が少し欠けるくらいは仕方ないよね？」

「そうね。
抵抗されての不可抗力ということにしましょう。」

物騒な相談をやたらと楽しそうに話す双子。

「帰ってはもらえないようね。」

双子の前で戦意を確認し、残念そうな声を上げる。

「えぇ、ごめんなさいね。
これもお仕事なの。
そっちのボルシチはメインディッシュ、最初はマカロニのあなたから。
さよなら、お姉さん。」

そう言って長髪の少女はその手に持った銃をトンチキ女に向ける。

ヤバイって！

そのアクションから、反射的に身を屈めるが、

「大丈夫よ。
お姉さんに任せなさい。」

そんな言葉が聞こえたような気がした瞬間、聞こえてきたのは銃声ではなく、別の轟音だった。

ドォン！

轟音が轟き、衝撃が廊下に響く。

衝撃が去った後、視線を三人に向けると、そこに人の姿は無く、壁がぶち破られ、壁の残骸が転がっている。

どうなってんだ？

状況が理解できる前に三人の居場所を知らせる音が聞こえた。

ドドドドドドドドンッ！

重く、骨にまで響きそうな音が外から聞こえる。

ぶっ壊された壁から外を覗くと、そこには三機のＩＳが空中戦を繰り広げていた。

その光景をただ眺めることしかできなかった。

レベルが違う。

三機の戦闘を見てわかったことはそれだけだった。

双子の動きは俺なんかと比較にならないほど高度な動き。

そこにコンビネーションを加えての戦術で攻撃を仕掛ける。

俺だったら3分ももたないようなの動きをしている。

「嘘だろ・・・」

その光景を見て口から唯一出た言葉はこれだけだった。

しかし、その言葉を向ける相手は双子ではなく、その双子と一人で戦っているあのトンチキ女に向けてのものだった。

相手の攻撃を避け、自分の攻撃を確実に当てる。

言葉にするのは簡単でも、実際にはとんでもない技術の集大成に、ただただ見惚れるしかなかった。

１０分もしないうちに決着がつき、敗者は校庭に叩きつけられた。

結末を最後まで見届けに校庭に足を進めると、横たわっているのはＩＳが解除された双子。

そしてそれを上から見下ろす、綺麗なＩＳを身に纏った、いつもふざけているあのトンチキ女の姿。

その光景に言葉がでず、その場に棒立ちしていると、

「あら、どうしたの？」

そう言うトンチキ女の顔はいつもとかわらない余裕のある笑み。

今まで自分を殺しに来た奴らと戦闘した後とは思えないものだ。

ＩＳを解除し、地面に足をつけ、こちらに歩み寄ってくる。

「どう？
私強いでしょ？」

そう言って扇子を広げるトンチキ女。

その扇子には『余裕綽々』とかかれている。

「あぁ・・・
すげぇ・・・」

上の空で返事を返すと、

「どうしたの？
いつもなら適当に返すか無視するのに、やけに素直に応えるじゃない。」

俺のリアクションが気に入らなかったらしい。

「いや・・・
さすがにこんなの見せられたらな・・・」

レベルの違いをまじまじと見せ付けられ、頭はあまり働いていない。

「これだけのことができるように努力しただけよ。
頑張れば誰にだってそれなりに結果はついてくる。

天才や才能って言葉、私嫌いなの。」

そう言って視線を双子に向ける。

まだ警戒を解いてはいないらしい。

「さぁ、とりあえずこの子達を運ぶから、手伝ってくれる？
この子達には聞かないといけないことがあるから。」

そう言ってトンチキ女が双子に向かって足を進めたとき、

ビュン！

一発の閃光がその進路を塞ぎ、土煙が視界を遮る。

ビビュン！

空気を裂き、新たに音が聞こえたかと思ったら、視界をさらに遮るかのように追加の土煙が舞い上がる。

「ちょっと・・・
せっかく決めたのにこれじゃ台無しじゃない・・・」

不満そうに言葉を口にするトンチキ女の声が聞こえる。

近くにいるらしい。

その声に少しだが安心した。

今だけはトンチキ女がとんでもなくご利益のあるお守りに思えて仕方がなかった。

少しずつ土煙が晴れ、視界が広がっていく。

そんな中トンチキ女が大声をあげた。

「見ちゃダメ！」

そう言って俺に向かって詰め寄ってくるが、俺の視界を遮るには間に合わなかった。

そこには体の司令塔の部分が吹き飛んだ、『人』だったモノが転がっている。

その後に鼻に入ってきた肉が焼ける匂い。

それは嗅ぎ慣れない、生き物が焼ける匂い。

視界と嗅覚。

二つの感覚から入ってきたモノに俺はその場で空っぽの胃から何かを吐き出した・・・

ふざけた最強と不気味な最凶（後書き）

・・・どうだったでしょうか？

やっちまったかんも少しありますが、物騒な世界のシビアな部分が表現できたかな？と勝手に思っていますが皆さんはどう思われまか？

キャラクターや名前をお借りしている作品ではとても人気のキャラクターを、名前も出さず、すぐ退場願う。

自分の中で、この小説で一番贅沢に使用させてもらったキャラクターだと思います。

皆さんがどう感じたのかが心配ですが次に続きます。

闇が居場所の者達

～？？？～

ＩＳ学園のはるか上空から双子と更識楯無の戦闘を見ている者がいた。

「・・・なるほど、国家代表の肩書きは伊達ではないか・・・」

その戦闘を狙撃用モニターで眺めていると通信が入った。

「どう？
彼女達は仕事をやり遂げられそうかしら？」

状況報告を求める質問に、

「難しいだろうな。
更識楯無との戦闘になった。」

「あら、ばれていたの？」

「そのようだ。」

「そう・・・
では、彼らの奪取はまた次の機会にしましょう。
エム、任務の追加よ。
彼女達が敗れた場合、余計な情報を漏らす前にしっかりと事後処理しておいて頂戴。」

「構わんが、コアはどうする？
アレが相手では回収後、痕跡を残さずに離脱というのは少し厳しいぞ。」

「もともと彼女達が所有していたもので、我々の保有数が減るというわけではないから今回は無視してかまわないわ。
勿体無いけど、情報が漏れるリスクを負う必要もないから。」

「私が負けるとでも？」

自分が更識楯無にやられかねないとも取れる言葉に、苛立ちが声に表れた。

「そうは言ってないわ。
そこで戦闘する時間があるのならあなた本来の任務に時間を掛けてもらいたいだけよ。」

「時間が勿体無いのなら、最初からアイツに任せればよかったじゃないか。」

「そう噛み付かないで、仲良くいきましょう。
本人は行きたがっていたけれど、今回はＩＳの調整で動けなかったからあなたにお願いするしかなかったの。
それに、あなたの『サイレント・ゼフィルス』なら長距離から事後処理することも可能でしょ？
今回はあなたの方が適任だったって事で許してくれないかしら？」

「・・・フンッ。」

通信をこちらから切り、モニターに集中する。

何故私がこんな雑務を・・・

ここまで来たなら、あの人に一目会っておきたいところだが・・・

私情を殺し、任務に集中する。

終わったか・・・

勝敗を確認し、事後処理をするため、スターブレイカーを構える。

この距離ならあの女の頭も吹き飛ばせるのではないか、そう思い狙いを定め、そのトリガーを引いた。

ビュン！

手ごたえを感じられる一発だったが、それはわずかに前方にそれ、仕留めることができなかった。

ちっ、やはりまだ調整不足か・・・

失敗したことにわずかに頬を歪め、誤差を修正する。

貴様は次の機会に仕留めてやる。

照準を処理する対象に向け、迷わずトリガーを引いた。

着弾を確認し、移動を開始する。
高速で飛行しながら通信を開いた。
「完了した。
次の任務は？」
簡潔に報告すると、
「ご苦労様。
次はアメリカに向かってもらいたいのだけれど、その前に調整しに一度こちらに戻って・・・」
その言葉を全て聞き終える前に、
「必要ない。
すぐに向かうから座標の転送を。」
「・・・わかったわ。
じゃぁ、よろしくね。」
そう言って通信は切れた。

命を摘んだことに対して、これといって思うことは何も無く、今頭にあるのは次の任務のことだけ。

次の任務は退屈でなければいいんだがな・・・

そんな事を思いながらその身をアメリカに向けた。

～？？？～

ふぅ・・・

通信を終え、ホテルの一室でため息をつきながら窓の外を眺める。
美しい夜景が夜を彩り、今のやり取りさえなければ、もう少し気分良く見えていたことだろう。

「性能が良くても、扱いづらい道具は困るわね・・・」

今、一番自分を悩ませている者の事が、ついつい口から漏れてしまう。

「スコール、あのガキがお前を困らせるんなら、私が片付けてきてやるぜ？」

そう言って私の後ろから温もりが抱き付いてきた。

「ありがとう、オータム。
でも、エムの力が今は必要なの。
私たちは大人なんだから、ちょっと大目に見てあげましょう。」

そう言って顔を抱きついている恋人に向け、こちらからも抱きしめた。

「あぁ・・・
わかったよ・・・」

腕の中で大人しく体を預けてくるオータムを心地よく感じながらしばらくそうしていると、

『お邪魔だったかな？』

その声にオータムが過剰に反応した。

「誰だっ！」

腰からナイフを抜き、声が聞こえた入り口に向かって、ナイフを構えながら声を荒げる。

「オータム、落ち着きなさい。
あなたの『アラクネ』を調整してもらうために、来てもらったのよ。」

「そういうこと。
だから、その物騒なものをしまってもらえるかな？」

そう言ってこちらに近づいてくる。

その姿を見てオータムが、

「こんなヤツが！？
・・・ちっ！
てめぇ、変な調整しやがったら手足？いでやるからなっ！」

「変な調整って、僕の仕事が完璧で、君がその性能を充分に発揮できなかった場合もそれに当たるのかい？」

「っんだと？」

ナイフを来客に向けて投げつけようとしたとき、

「やめなさい、オータム。
彼の腕は確かよ。
だから安心して調整をしてもらいなさい。」

「・・・わかった。」

オータムをなだめ、その場を収める。

どうしてこう、私の周りは穏便に事を運べる人間が少ないのかしら・・・

そんな事を考えながら調整の準備を始めた。

「それじゃぁ、お願いね。
何かいるものあるかしら？」

機材をアラクネに接続し始め、準備を行っている彼に質問すると、

「いや、特に何も。
調整といっても、僕が組んだプログラムを装甲脚の補助として組み込むだけだから、時間もかからないしすぐに終わるよ。」

「そう。
忙しいのに悪いわね。」

「そう思うなら特に時間の無いときに仕事の依頼はやめてもらえるかな？
大変なんだよ？
監視カメラの映像にハッキングしたり、セキュリティーを解除して会社から抜け出したりするの。」

文句を言いながらも作業の手は一切止まらず、表示されているモニターには大量のデータが映し出されている。

「あなたならその程度楽にこなせるでしょ？」

その質問に、

「ハッキングは簡単だよ。
でも、体を動かすのは得意なほうじゃないんだ。

抜け出すのは一苦労だよ。」

そんなやり取りをしながらアラクネの調整は行われた。

「・・・よし、終わったよ。」

まだ十分も経っていないのに作業が終わったと告げられた。

「おいおい、本気か？
つまんねぇ冗談で手足とさよならしたくねぇだろ？」

そう言ってアラクネで彼に迫るオータム。

「・・・オータム。
脚を動かして御覧なさい。」

「なんだよ、スコール。
こんな短時間で終わるわけ・・・」

「いいから、やりなさい。」

彼に迫るオータムに、いつもより強い口調で指示を出す。

「わかった・・・」

納得がいかないといった表情でアラクネの脚を稼動させる。

「・・・！

おい、スコール、こいつはっ！」

オータムが驚きの声を上げる。

「どう？

彼の手足の無事は約束してあげられそう？」

「あぁ！

こりゃいい、最高にご機嫌だ！」

ずいぶんと楽しそうにアラクネの脚を稼動させるオータム。

その姿は新しいおもちゃで遊ぶ子供のように無邪気な姿に見える。

「満足してもらえたのなら帰るよ。

戻って仕事しないといけないからね。」

そう言って扉に向かい歩いていく彼に、

「もう一度考え直さない？

私達と専属契約で働くって話。」

以前彼に持ちかけた話の返事を求める。
体の向きを変え、こちらを見て返事を返してきた。

「そんな話もあったね。
申し訳ないけど答えは変わらないよ。」

「以前の条件にプラス、ＩＳの調整を全てあなたにお願いするといってもダメかしら？
今、他国のＩＳの強奪に、部下が動いているの。
それなりに数や種類が揃うはず。
それをあなたの好きなように調整していいわ。
それでも答えは変わらないかしら？」

「悪いけど変わらないね。」

「・・・そう。」

「断った僕を殺すかい？」

その目は自分の返事がどういうリスクを背負っていたのかを知っている目だった。

「いいえ。
まだ仕事を頼みたいもの。
そんな勿体無いことはしないわ。」

「そうかい。
ならもうこの話はお終いだ。
正直、パンツの中にでかいヤツを生み出しかけてたんでね。

こんな思いはもうこりごりだ。」

「ごめんなさい。
でも、こんな綱渡りを続けていると、いつか本当に消されてしまうわよ?」

その質問に、彼は笑顔でこう答えた。

「その時はその時さ。
人間、次の瞬間には何が起こるかわからないからね。
なら、いつ死ぬかわからないその瞬間まで、面白おかしく生きれるように行動することにしたんだ。
そうやって動く今は悪くない気分だよ。」

それだけ言って彼は部屋から出て行った。

彼を見送り部屋に戻ると、中ではまだオータムが調整された脚を楽しそうに動かしていた。

「なァ、スコール。」

脚を動かしながら私に声をかけてきた。

「何？」

「なんでアイツ始末しなかったんだ？
いろんなこと知ってんだろ？」

事情を知らないオータムから質問され、その疑問を解消してあげることにする。

「ちゃんと対応済みだから安心なさい。
彼にもエムと同じ監視用のナノマシンを注入してあるわ。
それも特別製のナノマシンをね。
もし彼が私たちのことを口にすれば、ナノマシンが彼を殺す。
だから、別にすぐ始末する必要も無いし、私たちが直接手を下すまでも無いの。
必要なくなったら、こちらの意思で消えてもらうこともできるのだから。」

「スコール・・・
お前のそういう所、大好きだぜ。」

「ありがとう。
私もあなたが大好きよ。」
お互いを見つめあいながら、夜の闇は深まっていった。

大きな傷と小さな傷

寮の自室に四肢がかけることなく、椅子に腰掛ける春の姿があった。

すでに何杯目か忘れた酒をグラスに注ぐ。

灰皿も吸殻で一杯になっているが、そこに突っ込む新しいタバコに火をつける。

時間はすでに昼を過ぎ、午後の授業が始まろうという時間。

そんな時間になっても部屋から一歩も出る気は無く、戻ってきてからすでに４時間以上が経過していた。

どれだけ飲んでも頭を過ぎる朝の光景に、便器に顔を突っ込みに走り、そしてまた飲む、吸う、をずっと繰り返していた。

さらに時間は過ぎ、時間も夜になろうとしている頃、便器と今日何度目になるかわからない対面を済ませ、再び酒を流し込もうと、椅子に向かって体を進めると、さっきまで座っていた指定席の前に人影があった。

「・・・だれだよぉ・・・？」

グラスとトイレの往復をどれだけ繰り返しても着実にアルコールは体内に蓄積される。

飲み続けてすでに泥酔状態の春には、その人影が誰なのかさっぱりわからなかった。

「これ、今日一日で飲んだの？」

人影は呆れたような声で質問してくる。

「さぁ、どうだったか・・・
おぼえてねぇ・・・」

床に転がっている酒瓶の数は5本を越えたあたりから憶えていない。

足を進め、その人影の脇を通り椅子に座ってグラスを握る。

口に運ぼうとしたとき、

「やめときなさい。
どれだけ飲んだって目の前で起こったことを、無かったことにはできないわ。」

グラスを握っている手を掴み、その行動を止める。

「はなせよ・・・
おれのさけをどれだけのもうとおれのかってだろ・・・」

その手を振り解こうとして力を入れると、手がすべりグラスが机に落ち、割れた。

「あぁ～・・・」

「もうやめときなさい。」

そう言って机の上にあった酒瓶を持って離れていく人影。

「おいっ・・・
ちょっと・・・
なんなんだよ・・・
どいつもこいつも・・・」

タバコに火をつけ、煙をふかす。

「やめなさいって。」

そう言ってタバコも取り上げる人影。

「おれにかまうなよ・・・
かまったらしんじまうぞ・・・？
・・・そうだよ、しんじまうんだ・・・
おれにかかわるとしぬやつがでちまうんだよ・・・・」

自分が口にした言葉が、何かのスイッチを入れた。

「おれをかまってたせいでろっくはしんで・・・
そのつぎにがきがしんだ・・・
もうさんにんおれのせいでしんだんだ・・・
つぎはだれがしぬ？
・・・べにーか？
あいつか？
いや・・・
げんいんのおれか・・・？
おれがしんだらいいのか？」

小さな声でブツブツと言葉を口にする春に、机を片付けていた人影が、

「・・・じゃぁ、死んでみる？」

そう言って春の体を壁に叩きつけた。

「うっ・・・ゲホッ！」

壁に叩きつけた後、春の首を絞める人影。

「やけになるのは勝手だけど、軽々しく『死』なんて口にしないでくれるかしら？

そうならないために動いている人も居るっていうのに・・・」

そう言って首を絞める手を緩めることなくそのまま締め上げる。

「そうやって自分を責めれば誰かが同情してくれるとでも思った？
残念だけど、そんなに現実は優しくないのよ。
そんなに悲劇の主人公気取りたいなら、今このまま殺してあげるわ。
そうすれば、あなたの中では、自分が悲劇の主人公のまま人生を終わらせられる。
よかったわね、ヒーロー君。」

その手にかける力を増しながら言葉を春に向ける。

「・・だ・・・」

春の口からかすかに言葉が漏れる。

「何？
遺言なんて聞く気は無いから。」

力を緩めることなく、その首を絞め続ける。

「い・だ・・・
や・・・・・」

酸欠の脳から発せられる本能が、口を動かす。

「いやだ・・・
やめてくれ・・・」

その言葉を口にして、目から涙を流しながら懇願した。

「しにたく・・・ない・・・」

その言葉を聞いて、人影は手を放した。

「ゲホッ・・・」

膝をついて、涙を流しながら咳き込み、呼吸を整える春の姿を見下ろしながら、人影は言葉を口にする。

「まったく・・・」

そう言って春の体を引っ張ってベットに座らせる。

ボロボロと涙を流している春は抵抗することもなく、大人しい。

その正面に立ち、視線の高さを合わせ、口を開く。

「いい？
いろんな人の行動が、残念だけどあの結果になってしまった。
でもそれは、決してあなた一人だけのせいじゃないの。

だから、他の人の分まであなたが心を痛める必要は無いわ・・・
あの子達を倒すときにその後の事を考えられていたら、少しでも結果は変わっていたかもしれないんだもの・・・」

そう言って春を抱きしめる。

その人影の体はわずかだが震えていた。

人影から伝わる温もりに落ち着いたのか、疲れきった春の意識はすぐに眠りにつき、その体を人影に預けた。

春が眠りについたことに気付いた人影は、その身をゆっくりと動かし、春の体をベットに寝かせ物音を立てずに扉を開ける。

「・・・明日は今日みたいに優しくないんだから、ゆっくりと休んでおきなさい。
あなたにはまだイベントが残ってるんだから・・・」

聞こえているはずの無い言葉を口にして、その部屋を後にする。

その目はわずかだが紅い。

完璧超人と言われることさえあるその人影も、人であり、まだ十代の女の子。

その心は春よりも数倍強いかもしれないが、鋼でできているわけではない。

小さな傷が、彼女の心に確実に刻まれた。

今日、心に春と同じ傷を負った彼女の痛みを、理解し、癒してくれる人はいったいどこに居るのだろうか・・・

大きな傷と小さな傷（後書き）

いや～
ここ数日、割とグレーな感じでお送りしましたが、みなさま楽しんでいただけたでしょうか？

ブッコミすぎたかな？と思ったところもありましたが、人が目の前で死んでも平然としている事のできる人は、人間とは認めたくなかったものですから、申し訳ないですが傷を負ってもらいました。

次からはもう少し明るめの話で進められたらなと思います。
では、また次の更新でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9997t/

IS　インフィニットストラトス　現をいくもの

2011年12月13日07時09分発行